

蛇に花房、石に飴玉

鳥市

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

爆豪瞳巳ひとみです。個性は『メドウーサ』です。私の瞳を見た人を石にします。石になった人は二度と元に戻せません。どう頑張っても戻せませんでした。命を懸けて償いますので、A組の皆様よろしくお願ひします。

原作知識あり。連続殺人犯に惨殺され、転生したのは爆豪勝己と同じ年の従兄妹だった。

贖罪のためNO.1ヒーローを目指す少女がミッドナイトに憧れ、A組と共に悩み、ヴィランに揺さぶられ、答えを見つかるまでの成長物語です。

彼女は「走れ」と私の胸を突いた。だから私は立ち止まらない。Plus ultra!

※主人公の原作知識は32巻まで。誰が内通者か知りません。※キャラクターの過去を捏造しています。※ミッドナイトを救いたい、ミッドナイト大好きオリス。※発目明の姉妹（経営科）を、オリキラとして出しています。

・制服姿の瞳巳を描いていただきました！

（修羅イムさまより）

・幼少期瞳巳&姉を描いていただきました！

（苗字ちゃんさまより）

・爆豪瞳巳イメージ画像

(CHARAT GENESIS使用)

普段は黒の目隠しで両目を隠す、五条悟スタイル。

目次

【幼少期〜ミッドナイトとの生活】

1. 田園の幸福 | 1
2. スノードロップ | 11
3. ストレリチア | 16
4. リリウム | 24
5. マルベリー | 34
6. 爆豪瞳巳・オリジン | 45

【番外編】四季折々（猫）

58

【雄英入試〜個性把握テスト】

7. 爆豪瞳巳と雄英入試 | 61
8. 爆豪瞳巳は入学する | 71
9. 爆豪瞳巳は何も知らない | 80
10. 爆豪瞳巳と個性把握テスト | 88

【戦闘訓練〜USJ襲撃】

11. 爆豪瞳巳と雄英ご飯 | 104
12. 爆豪瞳巳と戦闘訓練 | 114

【番外編】四季折々（春）

137

13. 爆豪瞳巳と地獄の兎目姉妹 | 145
14. 爆豪瞳巳は唐揚げを食べたかった（USJ編①） | 170
15. 爆豪瞳巳は「なんだっけ？」（USJ編②） | 187
16. 爆豪瞳巳とSAN値、手遅れ（USJ編③） | 204

【幼少期〜ミッドナイトとの生活】

1. 田園の幸福

爆豪瞳^{ひとみ}は、その日を決して忘れない。

それは、理想的な春の日のことだった。

からりと晴れた空はどこまでも青く澄み渡り、遅咲きの桜が儂げに花卉を散らす。鶯の趣ある鳴き声が、高らかに歌う。

四月八日、早朝。私は緩みきった頬を隠しもせず、駅のホームに立っていた。今日は、これから通うことになる高校の入学式だった。

ずっと憧れてきた私立学校の洗練されたデザインの制服を見下ろし、「夢じゃないよね?」と改めて喜びに打ち震える。

「ねえ、制服似合ってる? リボン曲がってない? スカートの短すぎないかな?」

「ハイハイ、似合ってる似合ってる! もう、それ何回言うのよ? 次言ったら引つ叩くからね」

「親友に向かって酷すぎない?」

傍らには、同じ制服に身を包んだ少女が一人。彼女は中学からずっと同じクラスで、一番の親友だ。「受かる訳がない」と担任にも言われてきた難関校の辛い受験勉強も、彼女と一緒にだったからこそ堪えられた。

やがて時刻通り到着した電車に、二人仲良く乗り込む。山に囲まれたト田舎とはいえ、朝の車内は座席とつり革がちょうど埋まる程度には、混み合っていた。

高校の最寄り駅まで、あと三十分ほど。いよいよもう少しで、憧れの学校に到着する。

一年間、脇目も振らず机に向き合ってきた。その努力が、ようやく報われる。大好きな親友と共に、ずっと目指してきた高校に通えるのだ。

辛い努力が実を結んだ。一番の友人とあと三年間も一緒に居られる。こんな幸せが他にあるだろうか?

「いや、ない!」

「うるつき……」

私は甘えるように親友の肩に寄りかかり、改めて彼女への感謝を口にした。

「いつもありがと、——。ずうつとそばに居てね?」

「何よいきなり、気持ち悪い」

「ひどい!」

「……そんな当たり前のこと、わざわざ口にしないでよね」

「あたしたちにそんな約束、必要ないでしょ」と、彼女は耳まで赤く染め、もごもごと呟いた。私の親友が今日も可愛いすぎる。溢れる感情を抑えきれず、私は瞳を潤ませ、人目も憚らず彼女に飛び付いた。

「嬉しい! 大大大好きだよ!」

「こわ。特級過呪怨霊リカちゃんか」

「失礼な。純愛だよ」

「あんた本当、その漫画好きよね」

「うん。ヒロアカと同じくらい好き!」

「その新刊の発売日、今日だったわね」

「そうそう、待ちに待った三十三巻! いつもの本屋さん寄ろうね!」

「……仕方ないなあ」

じゃれ合う華の女子高生たちを、乗客が微笑ましげに、あるいは苦笑いで横目に見る。ありふれた、しかし幸せな時間だった。ローカル線の、どうということはない田園の幸福的一幕だった。

朝のニュース番組で見た”県内で逃亡を続ける連続殺人犯”のこなど、この場の誰の頭にもなかっただろう。

連日のニュースで放送される凄惨な殺人事件を見て、人々は悲痛に眉を寄せる。「可哀想に」「何て酷い事件だ」と、心を痛める。

けれど内心では、こうも思っているはずだ。

「殺人事件? 平凡に生きる自分には一生、関係ない世界だよ」「偶然通り魔に鉢合わせるなんて、あの人は運が悪いなあ」と。

他人の不幸なんて、そんなものだ。たとえ目の前で誰かが襲われていたって、「俺が、私が助けなきゃ!」と飛び出せる善良な人間が、世

界にどれだけいるだろうか。

現実には、物語のように美しく出来てはいない。

全ての悲劇は、遙か遠い他人事だ。私もそうだった。この平凡な世界に生まれて、十五年と少し。ニュースで見るとそれらは、全くの別世界の出来事だった。「かわいそう」と一瞬表情を曇らせるけれど、一時間後には忘れてしまう。私の穏やかな日常に、そんな悲惨な事件が起こるはずが無い。そう信じていた。

普通に高校に入学して、普通に部活をして、普通に恋愛をして。普通の家族に囲まれて、三年後は普通に高校を卒業して。そこには当然のように、大好きな親友がいる。私はきつと、しわくちやのお婆ちゃんになるまで平穩無事に生きていく。

そこに何の疑いもありはしなかった。

「……………っ！」

「んー？」

彼女が、声にならない悲鳴をあげた。冷静で頼りになる親友の温かな体温に身体を預けきっていた私は、「どうしたの？」と間延びした声をかける。

突然お腹でも痛くなつたのだろうか。勝手にそう推測した私は緩慢な動作で身を離し、彼女の薄い腹を見下ろし――。

「なに、それ」

親友は問いに答えず、私を突き飛ばした。

「にげて」

恐らく、そう言ったのだろう。しかし、声はなかった。いや、言葉を発することなど出来るはずもない。

彼女の腹には――血に濡れた鋭利な刃物が、深々と突き刺さっていたのだから。

静まり返っていたローカル線の車内に、嘘みみたいに赤い液体の粘着質な水音が響き渡る。通勤中の乗客はすぐに異常を察知した。悲鳴をあげ、我先にと縄れ合い、車両間のドアを押し開き逃げ惑う人々。

親友の背後には、明らかに正気とは思えない血走った双眼をした男

が立っていた。立ち込める生臭い鉄の匂いを楽しむように、不気味に笑っていた。

男が、少女の腹にうずめた刃物を引き抜く。真つ直ぐに私を見据えたまま、こちらに歩み寄る。彼女の傷口から滴る夥しい血液は、胸を突き飛ばされ数歩離れた私の足元に届く程、凄まじい量だった。現実味の欠けた光景に、唇を無意味に開閉させ、立ち尽くすことしか出来なかった。

男が、私の頭上に刃物を振りかざす。私はあまりの恐怖に瞳を閉じることしか出来ず、何の覚悟も出来ぬまま呆気なく死――、「はしって、」

微かに聞こえた不明瞭な絶叫に、閉じた目蓋を大きく見開く。

想像した痛みはやってこなかった。切っ先は、私のブレザーの肩を切り裂き、僅かに皮膚を撫でただけだった。

少女が、崩れ落ちた瀕死の彼女が、男の足にすがって狙いを逸らしていた。真新しいブレザーを、夥しい血液で汚して。彼女は歯を食い縛り、獣のような形相で、男に食らいついていた。私なんかを、救うために。

”狩り”を邪魔された男は、忌々しげに舌打ちをする。そして狙いを再び彼女に向けると、赤黒く濡れたそれを、何の躊躇いもなく振り下ろした。

彼女の心臓に、向けて。

中学の三年間、ずっと一緒にいた女の子。私なんかよりずっと頭がよくて、美人な女の子。辛い受験勉強も、一緒だったからこそ逃げずにいられた。憧れの高校に行くという夢を、叶えさせてくれた。彼女は、何の取り柄もない私の理想そのものだった。

ずっと一緒に居られると思っていた。三年間同じ高校に通い、もつともつと仲良くなれると思っていた。

きつと、自分達は大人になっても変わらないのだろう。月に一回は集まって、居酒屋にでも行って、仕事の愚痴を溢し合うのだろう。そして、お互いの結婚式には友人代表としてスピーチをして。もしもど

ちらかに子供が生まれたら、自分の子供同然に可愛がって。それで、それで――。

「あ、あ」

あれ？それで、なんだっけ？

何で私、こんな夢を見てるんだっけ？

目の前の男の人、誰だっけ。――はどうしてそんなところで目を開けたまま寝転がってるの？

視界が酷く霞んで、何も見えない。

誰かが、刃物を振りかざした。刹那、右の眼球に走る激痛。自らが発しているとは思えない、獣の咆哮。

真新しい白のワイシャツが、赤黒く染まっっていく。大好きな彼女とのお揃いが、無惨に切り裂かれていく。

こんなにも痛いのに、吐き出す血の塊で呼吸も出来ないのに、それでも、夢は覚めなかった。襲い来る激痛は無情にも、「これがお前の現実だ」と嘲笑うだけだった。

死の間際で異様に研ぎ澄まされた聴覚が、かすかな物音を拾う。倒れ伏した血の海から視線をあげ、残された左の眼球を彷徨わせる。

閉じられた車両間のドアから幾人もの傍観者の、目、眼、瞳。

「たすけて。わたしたちをみすてないで」

私は泥の中もがき、必死に手を伸ばす。彼らは扉を閉じたまま、痛ましげに目を逸らすだけだった。その一枚の扉を開けて無力な私たちを助けようとする英雄は、ひとりとして居なかった。

大好きな親友の絶望に見開かれた瞳を、左の目で見つめる。彼女を、私を救わない世界を呪った。血走った、化物の瞳でこの世のすべてを睨み上げた。

二人分の赤に濡れ光るリノリウムを蛇のように醜く這いずり、声なき絶叫を吼え立てる。

「死ね。みんな死ね」

こうして、私の平凡な生涯は幕を閉じた。

目映い光に意識が急浮上する。

幾人もの賑やかな談笑の声、陽気な音楽が流れている。まるで、昼間のバラエティ番組のような。

私はぼんやりと定まらない思考のなか、「あれ？」と首を傾げる。

私は今、たしかに死んだはずだ。というか右目に深々と刃物を刺され、全身を滅多切りにされ、死なない方がおかしい。

だというのに、私はこうして”私”として思考している。両目に感じる光が眩しい、と思うことができる。潰されたはずの右目にも、たしかな感覚がある。先程までの激痛は、体のどこにもない。

これは、もしかして。

「私たち、助かった……？」

乗客の誰かが助けてくれたのだろうか？

えくやだ、じゃあ「皆死ね」とか酷いこと言わなきゃよかった。怖い顔で睨んじやってごめんね。一番くじで当てたオールマイトフィギュアあげるから、許して。

高鳴る鼓動を抑え、瞳を開く。ここは病院だろうか？隣に親友はいらるだろうか？

しかし真つ先に視界に飛び込んで来たのは、鏡に映る幼い女の子の姿だった。

「え……？」

濡れたような長い黒髪に、異様な煌めきを放つ金色の瞳。明らかに異質な雰囲気を纏った幼女が、こちらを見つめていた。

その世にも美しい瞳をした幼女は、小さな唇をぽかんと開き、真つ直ぐに私を凝視している。

私は彼女に向かつて慌ててへらりと笑みを浮かべ、早口で自己紹介をした。世の中は世知辛い。状況はわからないものの、幼女に「このお姉ちゃんあたしのこと変な目で見てきた！不審者！」と叫ばれてはたまらない。社会的に死ぬ。せつかく生きていたのに。

「あー、お姉ちゃんはふしんしゃじゃないよ？ただ、目がさめたら君が目のままにいただけっていうか……？あれ、んん”っ、あれ？こえが、

たか、い……？」

明らかに普段のものより一オクターブ以上高い声に、舌足らずな発音だった。例えるならそう、未就学児のような。目の前で私と同じく首を傾げる幼女くらいの、澄んだソプラノだった。

あの男に刺された後遺症か何かだろうか。私は原因不明の不調に眉をしかめ、咳払いをし、喉をさする。鏡の中の幼女も、全く同じ動きをする。

……どうやら、私は夢を見ているようだ。頬をつねる。普通に痛い。

「ゆめ、だよね？」

「もう……さつきから何してるの？——ちゃん？」

「ヴあつ」

背後から聞こえる声に飛び上がり、椅子からずり落ちて尻餅をつく。お尻がとても痛い。首を捻って反射的に声の主を見上げると、三十代半ばから後半くらいだろうか。世にも美しい女性が、柔らかな笑みを湛えてこちらを見下ろしていた。

洒落た膝下のスカートに清潔感のあるブラウスとカーディガンを羽織った彼女に、見覚えはない。病院の看護師、ではなさそうだ。妙に視界が狭く、低くてよく見えないが——今いる部屋も、どこにもある普通のリビング、といった感じだ。

「ええと。あなただれ、ですか？……ここ、びょういんじゃないんですか？」

「ふふ。なあに、それ。新しいおままごと？ 『記憶喪失ごっこ』？」

「は？……いや、おままごとって……わっ！」

「よいしょ」

彼女が、尻餅をついたままの幼女を抱き上げる。人間にはあり得ない黄金の双眸が、いとおしげにこちらを見つめている。まじまじと視線を返すと、その涼し気な顔立ちや蛇のような瞳孔は、幼女にとってもよく似ていた。だがしかし。

「ええ……おやこでおそろいの金色カラコンとか……引くわあ……」

「え？……今なんて？」

「なにもいってないです」

「今日の——ちゃんは、なんだか変ねえ」

何とも現実感を伴った夢だった。

見知らぬ美女によると、今日は金色の目をした美少女（という設定の私）の誕生日らしい。今は真新しい桜色のワンピースに着替え終え、大きな姿見の前に座っていたところ……らしい。

お上品でお清楚なお顔をしてお少女におカラコンを入れる鬼畜ギャルママ（？）は再び私を椅子の上に下ろし、蛇のように黒々と艶やかな髪を櫛ですく。

「もうすぐ勝己くんが来るからね。可愛くして、驚かせてやりましようね」

「だから、だれえ……？」

「もう、その遊びまだ続けるの？爆豪勝己くんはパパのお兄さんの子供。あなたと同じ年のいとこじゃない」

「むすこにヒロアカキャラのなまえつけたの？やばいオタクじゃん」
私は戦慄した。夢の中とはいえ、そんなヤバめのオタママが存在するのか。そして私はその爆豪勝己（偽）の親戚という設定なのか。

清楚系ギャルママ（？）が髪を結び終わった直後、軽やかなチャイムの音が鳴った。どうやら爆豪親子（偽）が到着したらしい。

「はーい」と嬉しげに返事をし、彼女は私の手を引いて玄関に駆けていく。夢の中にも関わらず、繋いだ手は奇妙に生温かい。

「このゆめ、はやくさめないかなあ」

不気味なまでに五感が生きた夢を、気持ちが悪いと思った。何故だろう、先程から鳥肌が止まらない。

尻餅をついた時の痛みが、まだ残っている。私の母親、という設定らしい女性の石鹸の香りも、鼻腔に留まって消えてくれない。

見ず知らずの女性に手を引かれ、玄関に到着する。彼女が扉の施錠を解除し、押し開く。

「あ、あ」

金髪の、いかにも気が強そうな女性と、控えめな茶髪に眼鏡の、物腰の柔らかそうな男性。そして——金髪に赤い双眸の、不機嫌な少

年は。

「ばくごう、かつぎ」

頭が痛い。どうか夢であってくれと願った。

夫婦はあの漫画の狂信的なファンで、息子に好きなキャラクターと同じ名前をつけた。髪もブリーチして、赤のカラーコンを無理矢理入れた。彼らはそんな、世にも恐ろしい虐待親なのだ。

『ばくごうかつぎ』と呼ばれる目の前の彼は、『爆豪勝己』とは何の関係もない、普通の少年なのだ。

そうであってほしいと、思ったのに。

「あつてめエじろじろこつちみてんじゃねーよ！」

「ひ、」

少年のふくふくとした小さな掌から、音を立てて爆音と、白煙が上がる。

誰もその明らかに異常な光景に、何も言わない。”母という設定の誰か”は穏やかに「あらあら、そういうえば勝己くんの『個性』は『爆破』だったわね」と微笑むだけだ。

「たすけて」

私は堪えきれず、転げるように『爆豪勝己』を押し退け、飛び出した。愛らしいワンピースの裾を翻し、靴も履かず。息も絶え絶えに、真昼の車道に躍り出た。

おかしい。何もかもがおかしかった。

こんなに息を切らして走っているのに、どうして目覚められない？裸足で駆けるアスファルトはこんなにも痛いのに、どうして夢から覚めない？

「たすけて、——！」

親友の名を叫び、細い喉から血反吐を吐くように救いを求める。リボンをつけて完璧に結われた黒髪を振り乱し、狂ったように走り、叫ぶ私を、誰もが気味悪そうに見ていた。けれどそんなことはどうでもよかった。

私は絶望に狂乱し、とても正気ではいられなかった。

これは夢ではない。

本当はもう、わかっていた。私はたしかに生きている。でも、でも、でもそれは、身を挺して私を守ろうとしてくれたあの子と——大大大好きな親友と同じ世界では、ない。

この世の誰より英雄だったあの子は、死んだ。賢く美しかった彼女は、どこにもいない。

臆病で鈍くさくて何の取り柄もない私は、私が、私だけが——生きています！

「お願い帰して、元の世界に帰して！誰か、誰かたすけて！」

耳をつんざく警告音クラクションが鳴る。大型トラックが、一直線にこちらに向かって来ていた。

もう、何でもよかった。この悪夢も何もかも終わりにしたかった。親友に会いたかった。彼女に謝らなければならないことが、たくさんある。

若い少年が、燃える一等星の双眼に大粒の涙を浮かべ、必死にこちらに駆けてくる。今にも死にそうな酷い顔で、今まさに死にゆく私に手を伸ばす。

「瞳ひとみ——！！」

涙に揺蕩う陽炎かげろうの瞳があまりに美しいので、私は思わず声をあげて笑ってしまった。

馬鹿だな。どうして君がそんなに泣くの。

2. スノードロップ

「メドゥーサ」とは……ギリシア神話に登場する化物。ゴルゴン三姉妹の末娘。髪は無数の生きた蛇で、青銅の腕と猪の牙を持ち、下半身はとぐろを巻く巨大な毒蛇。その瞳を見たものは石化し、死に至る。元は人間であったが、呪いにより醜悪な姿に変えられた。

爆豪瞳巳ひとみは、史上最悪の悪サイランである。

私はこの世界に生きていた六歳の少女の人生を奪い、自我を殺し肉体に寄生する、化物以下の人殺しである。

そして元の世界の親友も。私なんかを庇わなければ、命を失わずに済んだ。彼女こそ、生き残るべき英雄だったのに。

「記憶喪失、ですね」

「そんな……！」

「治す方法はないのか!?金なら借金してでも工面する!どうかお願いします!お願いします……！」

「そう言われましても。娘さんのは、個性事故でもない原因不明の記憶喪失でして……」

トラックに引かれかけ、しかし偶然通りかかった女ヒーローによって奇跡的に生き残ってしまった私は、泣き崩れる”家族”をただ眺めていた。

両親は、「元の世界に帰して」と狂ったように泣き叫ぶ娘を、すぐさま病院に担ぎ込んだ。そこで頭にいくつもの電極をつけられ、よくわからない検査の数々を受けた末、首を捻った医者が出した結論が、こうだった。

「原因不明の記憶喪失」

無情な診断書を握り締め、愛娘を襲った突然の悲劇に絶望する”見知らぬ父母”と、”見知らぬ二人の姉”。病院からの帰り道の空気は、鬱々と沈みきっていた。

他人の家の匂いしかしない”自宅”まで付き添ってくれた女ヒーローが、私の頭を優しく撫でる。凜と背筋の伸びた、しなやかな女性

だった。彼女は地面に片膝をつき、私と視線を合わせた。

決して手の届かない宝石のような、目映い夏空のような。揺らがぬ意志を湛えた瞳だった。

「困ったことがあったら……ううん、何もなくても。いつでもここに電話しなさい」

「あと、これは元気の出るおまじないよ！」と片目を瞑っておどけた黒髪の女ヒーローは、私の前髪を一房掬い、花柄のピンでとめた。

何度も振り返り、気遣わしげに去っていく彼女の背中を見送り、私は手元に残された一枚の名刺を見下ろした。

【プロヒーロー・ミッドナイト】

「はは」

私は乾いた笑い声を漏らし、小さな紙片をポケットにしまい込んだ。

爆豪勝己が存在する。ミッドナイトが存在する。ここは、たしかに漫画の世界だ。大好きだった漫画の世界だ。

だがそれは、私に何の喜びももたらさなかった。私は元のあの世界で生きていたかった。個性なんか、いらなかった。大々大好きな親友と、平凡で退屈な高校生活を送りたかった。

異世界で幼女に転生した。

ファンタジー小説では、よくある設定だ。大抵の主人公は最初こそ戸惑うものの、「ま、仕方ないか。やれやれだぜ」と環境に順応し、新しい家族と生活し、仲間を作り、楽しく生きていく。帰る方法探しは早々に諦めて、それからは元の世界など思い出しもしない。

その場所で”生きていた”筈の幼女——元の身体の持ち主のことなんて、誰一人として気にもかけない。日常は、主人公を中心に都合良く回っていく。

けれど、現実には物語のように上手くは行かない。少なくとも、私はそうだった。

「ほら、瞳巳ちゃん。この前家族でピクニックに行った時の写真よ。何か思い出さない？」

「瞳巳。これはお前が勝己くんと出久くんと川遊びをしたときの――」

「瞳巳ちゃん！これはお姉ちゃんたちと三人でパパのお弁当を作ったときの――」

「瞳巳ちゃん、お願い思い出して――」

家族は愛娘を、可愛い妹を取り戻そうと必死だった。家中のアルバムを見せ、何かに憑かれたように思い出を語る家族に、私を追い詰めようという悪意など一切なかった。

しかし、彼らが”瞳巳”と名前を呼ぶ度に。これ以上俯けないくらい俯いて、「ごめんなさい、何も思い出せません」と頭を下げる度に。彼らの顔が絶望に歪む度に。私の精神は摩耗していった。

「あーごめん、思い出せないっていうか私は最初からあなた達の子供じゃないし。最初から他人なんだわ。ピクニック？川遊び？お弁当作り？思い出すも何も、私そんなことしてないって！ウケるわ。私の家族はあなた達みたいな金眼の美形じゃないし、第一私は今年高校生の十五歳なの！六歳児なんかじゃないの！この歳で幼稚園の制服とか、何の罰ゲーム？――に見られたら爆笑されちゃうんだけど」

真実を言えたら、どれだけ楽だっただろう。

「あなた方の大事な末娘は、もう居ません。異世界人の私が入ったので、多分死にました。記憶喪失？家族の絆パワーで思い出す？あ、そーゆーの無理です。だって、最初から別人です。六歳児？いや私十五歳の女子高生ですよ。サイン、コサイン、タンジェントの計算でもしてみせましょうか？」

言えるわけが、ない。

日々寝れ、鬱々と生気を失っていく両親。桜色の唇から血が滲むほど噛み締め、痛ましく目蓋を腫らす、年の離れた姉たち。

新築の一戸建てに広い庭、絵に描いたような幸福を体現していた家庭は、私の転生により失われた。この少女の肉体に寄生した、私という毒虫のせいだ。

だから十五歳の私は悲鳴を上げる本心を押し殺し、六歳児の無垢な笑顔で”瞳巳ちゃん”を演じる他なかった。

「パパ、ママ、おねえちゃん。だいじょうぶ、きおくがなくなつてあたしはみんなのこと、だいだいだーいすきだもん！」

「瞳巳ちゃん……！」

美しい顔をした他人たちが、感激の涙を浮かべて私を抱きしめる。六歳の私は、「きゃー」と愛らしいソプラノの歓声をあげ、はしゃいで見せる。

幼稚園では、同い年のお友だちとおままごとをして、泥団子をつくって、「ほめてほめて」と大人たちに見せびらかした。欲しくもないお人形を欲しいとねだり、あくびが出る程退屈な幼児向け番組に笑顔を作った。

私の努力は、すぐに形として表れた。家族に笑顔と活気が戻ってきたのだ。

「そっか。これが正解だったんだ」

私は、爆豪瞳巳にならなければならない。これは贖罪だ。

私の転生は、何の罪もない幸せな家庭を曇らせ、あわや崩壊させかけた。

家族とのピクニックを、幼なじみとの川遊びを、二人の姉とのお弁当作りを。日々のささやかな幸福を心から楽しんでいた女の子の、輝かしい未来を奪った。

故に、爆豪瞳巳は史上最悪の悪^{サイラン}である。

私はこの世界に転生してしまった。僅か六歳の女の子の人生を踏みにじり、理不尽に篡奪し、寄生し、殺し尽くし。

「逃げて」「走って」と胸を突き飛ばした親友の、決死の覚悟を無駄にし。ここで息をしている。

「そんなこと望んでいなかった！」なんて言い訳は、彼女たちの死体の前では通用しない。

「許さないでね。瞳巳ちゃん」

少女とその家族は、私という殺人者を決して許さないだろう。幼なじみだという爆豪勝己も、緑谷出久も。ヒーローになる運命を約束された彼らも、化物は救えない。

私は少女の部屋の勉強机に腰掛け、日記を開いた。そこには辛うじ

て判読できる拙いひらがなで、彼女の将来の夢が書かれていた。

『ちよーかつこいいひーろーになつて、こまつてるみんなをたすける
!』
オールマイトのような、沢山の人を救えるナンバーワンヒーローになること。それが彼女の夢だった。

幼い少女は時間をかけ、一生懸命に頭を悩ませたのであろう。ひらがなの傍らには、未来の自分が着る予定のヒーローコスチュームが描かれていた。

魔法少女の衣装のような、華やかなパーティドレスのような。何度も消しゴムをかけ、描き直した様子が窺える力作だった。

「ドレス、素敵だね。きつと着るよ、瞳巳ちゃん」

机の引き出しから、一枚の名刺を取り出す。私は心配性の両親から与えられた子供用携帯を開き、細く頼りない指先で、彼女へと繋がる数字を入力した。

『——もしもし、ミッドナイトよ。救助要請の方かしら？ウイルスに襲われたとか？今日はオフだけど、緊急ならすぐに駆け付けるわよ！』

数回の呼び出し音の後、彼女が凜と頼もしい口振りで電話口に出る。私は震える呼吸を落ち着かせ、唇を開いた。

「——私、ヒーローにならなくちゃいけないんです」

ミッドナイトさん。私を弟子にしてくれませんか。

この世界に生まれ落ちて、一年。爆豪瞳巳は今日、七歳の誕生日を迎えた。

3. ストレリチア

爆豪瞳巳は、夏の夜空を見上げた。ほんの少し、世界を好きになれそうな気がした。

「ファイト、ファイト〜！ Plus Ultra！」

「ひいっひいい」

「声が小さいわよ！ほら、復唱！」

「プル”ス”ウル”ト”ラ”アアアおえっ」

「ンン〜青春の叫びだわあ」

おかしい。私は色んな意味でハイセンスなヒーロー、ミッドナイトに弟子入りをしたはずだ。「ヒーローにならなくちゃいけないんです」とカツコいい感じで、キリツとバシツと宣言をしたはずだ。

それがどうしてこんな——昭和のスポコン漫画ばりの泥臭い修行を？

「ちがう……私が思うミッドナイトの弟子ってもっこう、効率のいいスマートなトレーニングをするはずで……期待してたのは頭を使う立ち回りの指南とかで……こんな亀仙人式昭和脳筋マラソンでは断じてなくて……！」

「ハーイ、ぶつぶつ文句言ってる余裕があるなら、あと一周追加ね」

「あ”あ” あああ」

いや。全身に重り背負って、夕日に向かってマラソンで。昭和の漫画でしか見たことないよ？ドラゴンボールか？私をスーパーサイヤ人に仕立て上げる計画か？純粋で優しい瞳巳ちゃんが、ミッドナイトへの強い怒りによって覚醒するの？

「おのれ鬼畜SM嬢、露出狂……！七歳の弟子にこんな仕打ちを……！」

「三周追加。あと、あなたを私の弟子にした覚えはないわ」

私が息も絶え絶えに走るそこは、だだっ広い空き地だった。昼は人が滅多に寄り付かない上、土地の所有者も曖昧なので、「これ幸い」と

近隣の住民が廃車や壊れた家電を夜な夜な廃棄していく。そんな場所だった。

ミッドナイト指導の元トレーニングをはじめ、三ヶ月。私は毎日学校が終わってすぐ、この寂れたゴミ山でひたすら筋トレをさせられている。

ミッドナイトに電話をしたあの日から、ずっと。一日二時間、打ち込んできたのは個性を伸ばす練習でも、ヒーローの心得の授業でもない。地獄のマラソン、そして筋トレだけだった。まさに脳筋。

空き地周回マラソンと地味な筋トレを終え、「思ってたのと違う……ミッドナイトのイメージと違う……」とぶつくさ呟きながらも頭を下げ、「今日もありがとうございました」とお礼を告げる。

彼女は汗だくの私の額と髪をふわふわのタオルで拭い、「よく出来ました」と満面の笑みを浮かべた。小学生にウエイトジャケットを着せて限界マラソンをさせたとは思えない、女神の微笑みだった。まさに飴と鞭。

「今日もよく頑張ったわね、瞳巳ちゃん。ご褒美の飴をあげましょうね」

「ちよつと。私、中身は十六歳って言ったじゃないですか。汗くらい自分で拭けるし、飴もいりません。子供扱いやめてくださうわ力強い」

「そうやって嫌がられると、私……燃えてきちゃうわ!」
「鎮火して!頭わしやわしやしないですえ!」

そう、私はミッドナイトにだけは、これまでの事情を洗いざらい吐いている。本当は隠し通したかったのだが、彼女はそこまで甘くなかった。電話をした当初、彼女は「ヒーローになる」と言ってきたかな私をやるわりと宥めるだけで、全く取り合ってくれなかった。

この世界の七歳の子供は、誰もがヒーローを夢見る。私が電話をしたのも、そんなきらきらとした憧れからだと思っただけらしい。

しかし、違うのだ。私はヒーローになりたいのではない。ならなければいけない。いたいけな、生温い憧れなんかではない。

そんな事情を理解してもらうため、仕方なくこれまでの経緯を説明

した。私は前の世界で一度死んでいること。記憶喪失なんかではないこと。以前の世界に個性なんて超常現象は存在しなかったこと。……さすがに、「あなたたちは漫画の登場人物です」という事実を伏せておいたが。

電話では伝えきれないから、と訪ねた彼女の家で、ミッドナイトは終始黙って私の懺悔を聞き届けてくれた。荒唐無稽な私の話を信じてくれた。

彼女は艶やかなグロスの乗った唇を震わせ、言葉を紡いだ。

「……そう。わかったわ。でも、あなたを弟子にはしない。私が教えるのはこの世界において身を守る手段と、個性との向き合い方だけ。それでもいいと言うのなら、」

私はその時、ミッドナイトお気に入りソファアールにちょこんと腰掛けていた。私のために片膝をついて目線を合わせる彼女を、ただ見つめていた。

「今さらだけど、改めて自己紹介をしましょうか。私は香山ねむり。華の二十二才よ」

ミッドナイトは言葉と共に、私の目線に合わせて屈んでいた膝を真っ直ぐに伸ばし、立ち上がった。長身の彼女の背に、照明の逆光が降り注ぐ。遥か高みから、凜と言葉が降りてくる。

「あなたのお名前は？あなたの声で、ちゃんときかせて」

私は眩しさに俯きたくなる気持ちを必死に堪え、高みを見上げた。逆光に色彩を深める夏空の瞳は、自信に満ちた星々の煌めきに溢れていた。

彼女は、プロヒーロー・ミッドナイトとは名乗らなかつた。"香山睡"と、一人の人間の名を告げた。

漫画の登場人物は、ここに生きる生身の人間だった。私に手を差し伸べる、あたたかい、一人の女性だった。

「……私は爆豪瞳めです。"ちょーかつこいいヒーロー"を目指します」

伸ばされた手を取ると、香山睡は私の小さな掌を握り、力強く引いた。ソファアールに座っていた私は、よろめきながらも反射的に一歩踏み

出し、立ち上がる。

俯きがちな幼い背中を叱るように撫で、彼女は言った。

「堂々と立ちなさい。笑いなさい。そしていつか、あなたは——」
続くその言葉の意味を、十年が経った今も見つけられずにいる。

ご褒美の飴を無理やりランドセルに突っ込まれたり、もみくちやになるまで散々撫で回されたあと。私は彼女曰く「小さなヒーロー」たちと共に、家路を歩いていった。

私の両親と高校生の姉二人は、記憶喪失になった挙げ句トラックに突っ込むというトンデモ経歴を持つ末娘をひどく心配している。ミッドナイトとの修行が終わった夕方、爆豪勝己、緑谷出久が私を迎えに来るのは、家族たつての依頼があつたからだ。

「ね、ねえ！ミッドナイトって、さいきんにんきのヒーローなんだよね？お母さんがニュースでみたっていつてたよ！そんな人に弟子入りできるなんて……瞳巳ちゃんすごいよ！」

「いやあ、まあ……弟子って訳じゃないんだけどね。それに毎日筋トレだけだし、たまにお人形みたいに着せ替えられるし……出久くんが羨ましがるといふもんじゃないよ」

ヒーロー大好きな出久が、芽吹く新緑の大きな両目を輝かせて早口で語る。私はそんな彼に苦笑し、日頃の苦労を話してみせる。けれど小学生からすれば、プロヒーローと知り合い、というだけで憧れの対象となるようだ。

出久はしきりに「いいなあ」を連呼し、本物のヒーローからどんな教えを受けているのかを聞きたがった。

素直な幼馴染みは小学一年生という幼さも相まって、とてもかわいらしい。思わず表情筋が溶け、好き勝手に跳ねたふわふわの髪を撫で回したくなってしまう。

「いいなあ、僕もいつかオールマイトの弟子に……！」

「うんうん。なれるよ、出久くんなら。あたしが保証する。……だって主人公だし」

「ほんとう？あ、ありがとう瞳巳ちゃ、」

「バーカ。むこせいのデクにはむりだろ」

「勝己くん……」

もう一人のご近所さん、爆豪勝己は、自らの個性をアピールするよう
に掌から火花を散らした。勝己は出久を睨み、次に私を見据えた。
つり上がった大きな赤い双眼は、小学生を怯えさせるには十分な迫
力だろう。か弱い美少女の瞳己も、昔は蛇に睨まれた蛙のようにこの
眼力を恐れていたのかもしれない。無条件で言うことを聞いていた
のかも知れない。

しかし残念。今の私の中身は十六歳なのだ。小学一年生の威嚇な
んで、「微笑ましいなあ」としか思えない。そんな態度に苛立ったの
か、勝己は攻撃の矛先を出久から私へと変えた。

「瞳己もニヤついてんじゃねえ。てめエのこせいなんか、”睨んだ相
手を一瞬びっくりさせる”だけのクソザコだろ？モブこせいのくせ
に、なにヒーローなんかめざしちやっつてんだよ！トラックにひかれか
けるのろまなアホのくせに！」

「うんうん分かるよ。勝己くんはあたしがヒーローデビューしてテレ
ビに映ってモテモテになるのが怖いんだよね？瞳己ちゃん、髪サラサ
ラだしおめめもキラキラだし、ちよーカワイイもんね〜」

「ぶっ……！」

ふあっさあ……とシャンプーのCMさながらに黒髪をかきあげる
私に出久が吹き出し、「てめエら笑ってんじゃねえ！」と勝己が苛立ち
に掌から爆炎を発生させる。

「きゃー！ヴィランが怒ったあ！出久くん逃げよ！」

「あはは！まってよ瞳己ちゃん！」

「だれがヴィランだザコども！じごくのそこまで追いつめてひねりつ
ぶしてやつからなあ！」

「そーゆーとこだよカツキーヌ」

「そのふぎけたよびかたヤメロ！」

私たちは空き地からの家路を、沢山のがらくたが詰まったランドセ
ルを弾ませ、じゃれあいながら駆け抜ける。

遠くの十字路に大型のトラックが見えた。途端に勝己が血相を変

えて追い付き、私の腕を掴む。

「瞳己」

「どうやら私は、彼の心にも深い傷を負わせていたようだ。まあ普通そうなるか、と苦笑する。」

従兄妹が、幼馴染が、目の前でトラックに轢かれそうになったのだ。しかもなぜか満面の笑みで、自らの目をはつきりと見据えながら。そんな恐怖体験、トラウマにならない方がおかしい。むしろよく私の送迎なんて出来るな、と遥か歳下ながら感心してしまう。

「瞳己、かつてに走るなよ」

——爆豪勝己は、無個性の出久を虐げる屑だ。

はつきり言って、中学までの彼の行動は最低最悪だ。高校に入ってから、たくさんの人を言葉で、行動で傷付ける。たとえ彼が遠い未来、出久に頭を下げたとしても。誰も彼の罪を拭い去れない。

けれど彼も最早、漫画のキャラクターではない。彼には、人間の心がある。私と親友を救わなかった、傍観者たちとは違う。勝己は、私を諦めないでいてくれた。

勝己はあの日、幼馴染みの少女を助けようと走った。自らが轢かれる危険もかえりみず、両親の制止を振りきって。一心にこちらに手を伸ばす、涙に揺らめく陽炎を憶えている。

以前、私は彼に問うた。「なぜ私を助けようと走ったのか」と。勝己は「今さらそんなこと」と至極面倒くさそうに頭をかきながら、呟いた。

「しらねえ。からだがかつてにうごいてた」

私は思考を現在に戻し、痛いくらいの強さで腕を掴む勝己の指先を、一つひとつ丁寧にほどいていった。

「ありがとう。」あたしはもう大丈夫だよ、勝己くん」

「……てめエがケガしたら、俺がおばさんにしかられるだろ」

いつのまにかたどり着いていた自宅前で、心配性の姉二人がこちらに手を振っている。母や私とよく似た、長い黒髪に金色の双眼の、美しい双子の姉妹だった。彼女たちは、日本初の双子ヒーローになるこ

とを夢見ている。

「瞳曰ちゃんおつかえりー！今日はカレーよ！」

「イズクくんとカツキくんも食べてくでしょー？」

「「カレー……!!!」」

私たちは顔を見合わせ、弾けるような歓声をあげた。競うように靴を脱ぎ、リビングへと走った。毎週金曜日は娘の送迎のお礼も兼ねて、うちで二人分の夕食を用意すること。それが緑谷家、爆豪家の新しい約束ごとだった。

「あら二人とも、いらつしやい」

「ちゃんと手を洗えよ？あとうちの娘が可愛いからってちよつかい出すなよ？」

「やめてよパパ……！」

温かな家庭だった。

姉二人は雄英の普通科に通いつつヒーロー科への編入、ひいては双子ヒーローデビューを目指している。私は、プロヒーローに目をかけてもらっている。

誰もが羨む、仲の良い家庭だった。私も違和感はまだあるものの、最近では自然にパパ、ママ、お姉ちゃんと呼べるようになった。

私の個性は、”睨んだ相手を一瞬だけびつくりさせる”という、何とも華のないものだった。勝己が言ったとおり、プロヒーローを目指すにはあまりに弱すぎる。

だが、私には希望があった。私にはあのミッドナイトがついている。家族や出久の応援がある。瞳曰ちゃんが思い描いたあの衣装を、きつと身に纏える。その頃には雄英で成長した勝己も、ヒーローになる私を祝福してくれる。多くの人を救い、犯した罪を償える。

私は大好きなカレーを平らげ、大盛りのおかわりをよそった。この幸せを分かちあいたくて、頬にご飯粒を付けながら、出久と勝己に満面の笑みで語りかける。

「勝己くん出久くん！うちのママとお姉ちゃんの料理おいしいでしょー！」

「うん、おいひいー！おかわりー！」

「別にフツー。……………おかわり」

家族五人と、頬にご飯粒をつけた幼馴染み二人。最後の晚餐は賑やかに、駆け足で過ぎ去っていく。

その日の就寝前、私は部屋の窓から夏の夜空を見上げた。睡さんの、自信に満ちた煌めきを思った。彼女がくれた花モチーフのヘアピンを指でなぞり、眦を緩めた。

私は、優しい人間に恵まれている。もう、彼らを”漫画のキャラクター”だとはとも思えない。勇気を振り絞って彼女に電話をかけたから、三ヶ月が経っていた。

最近の私はほんのすこしだけ、世界を好きになれた気がする。

4. リリウム

爆豪瞳巳は、あの日の中辛カレーを二度と食べられない。ママとお姉ちゃんにレシピを訊いておけばよかったなあ。

金曜恒例のカレーを食べた、翌日のことだった。夏休みを明後日に控えた七月二十日、私たち幼馴染みは自宅近くの公園で、ヒーローごっこをして遊んでいた。

もつとも、勝己の取り巻きを交え無個性の出久を一方的に追い回すそれは、ヒーローの行いとは程遠いものであったが。

「や、やめてよかつちゃん！ほんもののヒーローはこんなことしないよ……！」

「ほんもののヒーロー？むこせいのデクがかたつてんじゃねーよ！」

勝己が鼻で笑うと、ツバサくんたち取り巻きも調子を合わせ、大袈裟に腹を抱えて嘲笑する。原作漫画の冒頭で見たものと酷似した光景だった。

私は少し離れたブランコに腰掛け、頬杖をつきながらそれを傍観していた。

「すごい。真剣ゼミで見たところだ。見たくなかつたけど」

「しんけん？せみ？瞳巳ちゃんなにいつてんの……？」

「なんでもないよ、ツバサくん」

独り言を聞き咎められた私は、赤い翼が生えた小太り気味の少年に向かつて、小首を傾げて微笑んでみせた。純情な小学生男子は途端に頬を紅潮させ、もじもじと俯く。チョロいですわよツバサさん。

瞳巳ちゃんは艶々の黒髪に金色の目の美少女だ。私だって未だに鏡を見て「可愛いなこの子」と真顔で呟いてしまうくらいだから、ツバサくんの反応はよくわかる。

私は乙女ちつくに恥じらうイガグリ坊主ヘアの彼を、その特徴的な個性をじっくりと観察した。

彼は、背中に生えた翼で自在に空を飛べる個性を持っていた。身の丈ほどある大きな羽根は、もしかしたら何人かの人を抱えて飛ぶこと

が可能かもしれない。力強く羽ばたいて風を起こし、攻撃手段としても使えるかもしれない。

たしかヒーロー殺し編で出久を拐おうとした脳無も、大きな翼を持っていた。私の個性があんなふうには自由に空を飛ぶものだったら、どれだけ良かっただろう。

ツバサくんの祖父が経営する病院によると、私の個性は”蛇にらみ”だそう。睨んだ相手を、ほんの一瞬驚かせるだけの能力。コミックス番外編で梅雨ちゃん友人として登場した、万偶数羽生子ちゃん『睨んだ相手の筋肉を三秒間弛緩させる』個性の劣化版である。

ステインのように動きを止めるでもなく、ただ単に「え、何すか？」と相手をびつくりさせるだけの、毒にも薬にもならない個性だ。華がないにも程がある。

普通、転生者つてもっと格好よくて強い、もしくはリカバリーガールのような唯一無二の能力を持っているものだと思っていた。しかし現実には、私というモブキャラに優しく出来ていない。

「ま、私は主人公じゃないもんね」と苦笑し、腰かけたブランコから、理不尽に虐げられる主人公を見つめる。見つめている、だけ。

彼らはこの幼い日の出来事があったからこそ、成長できた。出久には可哀想だが、原作の流れを邪魔してはいけない。第一、私の個性では勝己と取り巻きたちの華々しい能力に太刀打ちできない。

夏休み直前の、ことさらに強い陽射しが肌を焼く。少しでも風を感じようと、ブランコを漕いで生ぬるい空気に黒髪を泳がせた。両手に持った金具が熱いだけで、少しも涼は得られなかった。

すぐそばでは、勝己と取り巻きたちが飽きもせず無個性の出久を追い詰め、泣かせている。私は公園の木々にしがみついた蝉たちを睨み、心中で命じる。

蝉よ、もつと鳴け。その小さな胸を震わせるだけでは些かも足りない。もつと腹から声を出せ。幼馴染みの悲痛な泣き声を、それを笑うもう一人の幼馴染みの罵声を掻き消すほど、甲高く叫べ。

黙って二人の声を聞いていられず、かといってヒーロー気取りで間に割って入って、どちらかに嫌われる勇気もない。そんな私は努めて

明るい口調で、目の前の少年に尋ねた。

「ツバサくんも、ヒーローになりたいの？」

「うん！あ、あの瞳巳ちゃん。おとなになってぼくがヒーローになったらさ……お、およめさんになってくれる？」

「臨機応変かつ柔軟な思考で前向きに検討するね」

「う、うん……？」

美少女にのみ許された小首傾げスマイルで、ツバサくんの可愛らしい告白を煙に巻く。

会話を耳敏く聞き付けた勝己が、「てめエゴときが俺のかぞくになるとか、ぜってーゆるさねー！」と出久を放り出し、ツバサくんに殴りかかった。ツバサくんは犠牲になったのだ。

微笑ましい光景に笑みを浮かべつつ、私は内心でため息をつき、思考する。

彼ではなく、私にその個性があれば。出久を抱えていじめっ子の手が届かないところに逃がしてあげられるのに。私なら、その素晴らしい翼を下らないいじめなんかに使わない。親友とこの身体への贖罪のためにヴィランと戦い、人助けに奔走するだろう。

その強力な個性があれば、勝己を諭し、ぶつかり合い、対等にお話ができるのに。

「いいなあ、ツバサくんは」

立ち上がってブランコを漕いでも、夏の空は青く遠いだけだ。地を這う蛇に空は飛べない。

「おーい瞳巳！つぎはおにごっこやるぞー！」

「はーい、今行くよカツキーヌ、イズクヌス」

「ぶふっ……！」

「だれがカツキーヌだゴラア！デクもわらってんじやねー！」

空は飛べない。けれど私はミッドナイトに出会えた。勝己と出久という、大変面白、………大切な幼馴染みがいる。最近は、今の家族も悪くないと思い始めている。

ヴィラン。すなわち、善良なる市民の敵。人々の平和な生活を乱

す、社会の癌。

何度もテレビで、動画で、漫画で見たはずのそれを、私は本当の意味で知らなかった。個性という暴力を振りかざす怪物はいつだって、ニュースの向こう側の登場人物だった。この世界に生まれて一年と数カ月の私は初めてそれと対峙して、愕然とした。

つい先程まで頬を染めながら私を見つめていたツバサくんが、取り巻きたちが、目の前で仰向けに転がっている。頭や身体から止めどなく血を流す彼らは気を失い、痛みに呻きながら地面に四肢を投げ出している。

「ド雨雨、セ、死刑にナ、縛？なラ……もツ礮殺死タい、ナ……そ喉ホウウ蛾、才得惰よナ……肉生肉ダ、子奴モ、公園、才肉、？子コ供、柔楽回い縛ンンね！」

訳のわからない譫言を吐き散らすその巨大な怪物は、突如として現れた。

全長五メートルはあろうかというそれは、公園の蛇口から水音を滴らせて出現した。夕暮れの閑静な住宅街の平和を打ち壊し、たちまちのうちにその場を恐怖で支配した。

「此個コドも。肉食いタ矣懸？痿？云いイ原ヘツタクウウコsろ吸うヲ雨死？四の失肢。挽い縛肉殺多ソ圧そね」

「に、にげ、て瞳巳、ちゃん……！」
「にげ、ろ……！瞳巳」

巨大な水の怪物に捕らえられた幼馴染みたちは、恐怖に顔中をくしゃくしゃに歪め、それでも叫んだ。私の胸を強く突き飛ばして、瞳巳を庇った。

「にげて」

私の大切な親友。あの子と同じことを言った。

「おい、ヴィランだ！」「誰かヒーローに通報したか!？」「子供が襲われてるぞ!ど、どうすれば」「誰か助けなきゃ」「馬鹿言え、あんな巨大なヴィランだぞ!俺たち一般人にはどうしようも」「かわいいそうに。こんなときオールマイイトがいれば」

「にげて」

「にげろ」

せめて幼馴染みの女の子を逃がそうと、二人は懸命の抵抗を続けた。公園の入り口前には、安全圏から事態を見守る数人の一般人がいる。

彼らは、哀れな子供たちを助けようとしなかった。やがてヴィランに口を塞がれた二人が白目を剥いて意識を失おうが、動き出す者は誰もいなかった。

どうせすぐにヒーローが来てくれる。どうせ個性をもて余しただけのヴィランだ、命まではとられまい。あの子たちには可哀想だが、一般人の自分たちにはどうしようもない。そう思っていたのだろう。彼らは点滅するスマホをこちらに向け、私たちの姿を録画せんと天高く掲げた。明日には“哀れな子供たちを襲った悲劇”は、YouTubeかネットニュースにでも取り上げられるだろう。そしてありふれた不幸として忘れ去られていくのだろう。

無力な子供たちを助けようとする英雄は、一人としていなかった。「ていうか、私また死ぬの？嘘でしょ？爆豪勝己と緑谷出久はどうなの？漫画にこんな過去回想あった？ないよね？」

「柔イ肉可哀愛、イ川安和イ纏な！子供ヲ肉、子供三びキ！首臓、腸切断、キ潰挽四肢レレ切テ、つテ食煮よう雨、ね！」

「ねー、ないよね！ほんと……はは、ほんつと……こんなのって……こんな……おかしいよ」

まだたった三ヶ月だけれど、ミッドナイトの辛い修行を堪えた。毎日たくさん走って、六年生にだって負けないほど早く動けるようになった。全身に重りを着けて、腕立てや腹筋だつて頑張った。

あんなのろまなヴィランから幼馴染みを奪い返すくらい、簡単に出るはずなのに。ヴィランに出会ってしまった時の護身術だつて、叩き込まれたはずなのに。

「なんで……動いてくれないの!？」

私の足は震えるだけで、前にも後ろにも進めなかった。毎日散々繰り返した訓練は、何の意味もなさなかった。

私に、親友のような心の強さはない。自らの危険も厭わず手を伸ば

した勝己の勇氣もない。ミッドナイトのような強い個性もない。居ても居なくても変わらない、村人Cだ。

ヴィランは気を失った勝己と出久を軽々と両手に握り、絶望に歪む私の顔色を楽しむよう舌なめずりをした。

私はその顔を知っている。己以外の人間を人間だと認識していない、異常者の笑みだ。ゲームみたいに、朝食のついでみたいに人を殺せる人種だ。

それはあの日の再演だった。弱者をいたぶることではか悦びを感じられない、どこまでも閉じて閉じて濁りきった盲目の怪物。公園の敷地外から私たちを覗く傍観者の目、眼、瞳。

だから私は、瞳を開くしかなかった。

「そんな目で、私を見るな」

すべてを呪い、世界を睨み下ろした。

たちまちのうちに時を止め、声もなく石化していく怪物。異常者は恐怖に歪んだ目を見開いて、物言わぬ石像と化した。私はその末路を当然のように見届けて、嗤っていた。

もつと苦しめてやればよかった。そんな一抹の悔恨すら脳裏をよぎる。

——ここは、私の家のすぐ側の公園だった。末娘を迎えに夕方ごろ、過保護な姉たちは頻繁にこの場所に来てくれた。ヒーロー志望の、正義感の強い姉たちだった。

息を切らした黒髪の少女二人が、人混みをかき分けて走ってくる。

私はそれを、見下ろしていた。

「大きなヴィランが二体見えたから、すぐ駆けつけられたよ！……イズクくん、カツキくん！今助けるからね！」

「こ、このヴィランめっちゃデカイよ……！蛇？猪？キメラ？十メートルはあるんじゃないの!?!」

颯爽と駆けつけた姉二人は高校の帰りらしく、英雄の制服を身に付けていた。普通科であっても救助の授業はあるのか、長女は石化したヴィランの腕から勝己と出久を素早く保護し、次女は倒れ込むツバサくんたちの無事を確かめた。

「お姉ちゃん！」

お姉ちゃん褒めてよ！私もヴィランをやつつけられたよ。なんか知らないけど、目を合わせたら勝手に石化してくれたんだよ！ところでヴィランが二体って何？どこどこ？やばくない？通報した方が良くない？

私は「頼りになる姉が来てくれた」という安堵に息をつき、身振り手振りを交えて言い募った。

「ヴォオオ！ギギユオガ、ア？」

けれど発した音声は何故か、人間のものとは思えない、不明瞭な鳴き声となって反響した。いつものソプラノとは程遠い、聞くに堪えない地響きのような酷いだみ声だった。

そういえば、姉たちの姿が不自然に小さく見える。石化した水のヴィランだつて、五メートルはある巨体だったはずだ。私は何故、彼のつむじを見下ろせている？

例によって美少女にのみ許された可愛らしい動作で首を傾げ、目をこする。私の小さな身じろぎと連動するように公園のブランコが大きく揺れ、回転ジャングルジムの錆びた金属が悲鳴をあげたのが不思議だった。周囲の木々がざわめき、遠くの山へカラスが飛び立っていく様子も、鮮明に確認できた。

「ねえお姉ちゃん。あたし、何かおかしい？なんか声も低いし視界が妙に高いっていうか——」

「ひっ……コイツ、私たちのほう見てるよ！」

「ヒーローが到着するまで、た、戦うしか……！」

私はいつものように、幼女特有の大袈裟な身振り手振りで姉たちに話しかける。

彼女たちは途端に怯えを滲ませ、緊張感漂う面持ちでこちらを睨んだ。そして互いに頷き合うと、臨戦体勢で距離を詰め、私の胴体目掛けて跳躍する。

「バケモノ……！」

姉妹は両腕を伸縮する蛇に変化させ、”妹”に飛びかかってきた。蛇と化した長女の右腕が私の胴体に巻き付き、窒息させんと締め上げ

る。次女の左腕の蛇が私の腹を食い破り、容赦なく毒液を流し込む。ええ？いた、痛い、痛いって！ちよつと待つてよお姉ちゃん。どうして私を噛むの？どうしてそんな目で私を見るの？まるで、ヴィランを見るみたいな目で。

「待つてよお姉ちゃん。どうして攻撃するの？私、あたしは瞳巳だよ！二人の妹だよ！冗談ならもうやめて！」

見たこともない真剣な顔をする姉たちが怖かった。だから必死に、細く小さな腕と”尾”を動かす。空中を飛ぶ蚊を追い飛ばすようにがむしやらに暴れる。

尾が何か生温かいものを掠める未知の感触が、脳に伝わった。

「が、ベツ」

いつの間にか、二人の姉は視界から消えていた。いや——地面に崩れ落ち、腹を押さえて血を吐きながら咳き込んでいる。

そんな光景を見て、心配しないはずがない。私は咄嗟に、彼女たちに手を差し伸べていた。

「お姉ちゃん!?だいじよ……痛っ」

双子の姉が妹を守るよう個性を使い、伸ばした私の指先を噛んだ。

「私の妹に触るな、バケモノ！」

「なに……?さつきから何言つてんの、お姉ちゃん」

「妹に触るな」？私は、三姉妹の末娘だ。年の離れた妹として、本当に可愛がられていた。それなのに、彼女たちは先程から何を言っている？

何一つとしてわからない。早く家に帰りたいかった。「お姉ちゃんにいじめられた」と、優しいママとパパに言いつけてやろうと思った。

私はとうとう大粒の涙を流し、しゃくりあげて泣いた。それでも、誰も駆け寄っては来なかった。「……おぞましい」と呟く誰かの声が聞こえた気がする。

「皆さん下がってください！ヴィランが何か唸り声をあげています！危険です！」

「私たちは、ヒーローが来るまでどうにかアイツをここに食い止めます！そこのおじさん達は、子供たちを安全なところまで運んで下さい

「おばさん達は、近隣の方に避難を呼び掛けて！」

「もう一人のヴィランはどこ？ どうして誰も私を保護してくれないの？ 私、被害者なのに」

「動画撮ろうと思ったけど……な、なんかヤバそうじゃね？」

「さっきまで小さな女の子がいたわよね？ 突然雷みたいな光がさして、目を開けたらいなかったけど……」

「アレが食っちゃまったに決まってる。あんなぎらついた牙ぶら下げてるんだから」

「そうだよ。あんなのヴィランどころか人間でもねえって。なんていうか……」

「バケモノ、って感じ……？」

人々が、泣きじやくる私を見上げて後ずさりをする。彼らの原因不明の怯えが、優しい姉たちの豹変が、心底恐ろしかった。姉たちの言うヴィランがどこにいるのか全くわからず、震えることしかできなかった。

私は涙を滲ませながら、姉たちの美しい金色の瞳を順繰りに見つめた。

私の身体を蹴り、殴り、噛み、ちくちくと攻撃を繰り返す姉妹。その黄金の双眸に映るそれはあまりに巨大すぎて、断片しか見えない。それでもなお、醜悪としか言いようがなかった。

「メドゥーサ」

そんな空想上の怪物が脳裏をよぎった。

無数の蛇がうねる頭髮。憎悪に染まった醜い老婆の顔。青銅の腕と爪に、異様に突き出た猪の牙。二階建ての屋根までの高さはあろうかという、とぐろを巻く毒蛇の胴体。

死を撒き散らす異形の名に相応しい、おぞましい姿だった。

「私たち双子ヒーローが相手だよ、バケモノ」

「家で待ってるあの子が避難を終えるまで。お前を絶対にここから進ませない」

「私たちの可愛い妹は」

「私たちが守る」

姉たちが、恐怖に震える声音で吼える。けれど、「バケモノ」という罵倒以外は何を言っているのかわからなかった。ここに近づくサイレンの音がうるさくて、何もきこえない。

バケモノなんてそんな酷いことを言わないでよ。いつもみたいだに「瞳〇ちゃんは世界で一番可愛い！」って笑ってよ。「私たちは日本初の双子ヒーローになるの」って、きらきらした目で夢を語ってよ。金曜日はカレーを作って、おうちで待っててよ。ちゃんと目を見てお話ししようよ。

「ねえ、お姉ちゃん」

——そんな目で私を見ないで。

見開かれた四粒の尊い黄金が、永遠に失われる。灰色に覆われ、三、二、一で見えなくなる。

死を悟った麗しの姉妹の——驚愕、恐慌、絶叫、後、のち静寂。化物から人々を救おうとした英雄の、美しい石像が完成した。

両の手をすり抜け、黄金は零れ落ちた。自身と姉の血溜まりを産湯に、メドゥーサは誕生した。ひどく空虚で、空腹だった。

公園前の通り、すぐそこにある私たちの家の、白い屋根をぼんやりと見据えた。今日の晩ご飯は、何だろう。昨日のカレーは、おいしかったな。

5. マルベリー

静まり返った病室に、賑やかなテレビCMが場違いに響き渡る。

『——今では私がヒーロー！子供たちにあげるのは、もちろんんヴェリタースオリジナル！こんな素晴らしいキャンペーンを貰える君は、誰がなんと言おうと特別な存在だ！数量限定のオマケに、私のステッカーが来た！』

爆豪瞳巳は、

「……わかっているだろうが、今回の件はくれぐれも内密に。頼んだぞ、ミッドナイト」

隔離病棟に、男の冷淡な声だけが反響する。妙に落ち着き払った心持ちで、私は彼らの話を聞いていた。

私たちを襲ったヴィランは、死刑囚だったらしい。男は過去、”四人の子供を殺害し肉を食らう”という残虐極まりない所業で捕まり、ついに今日、極刑を宣告された。

事が起こったのは夕方である。ヴィランによる上告を棄却し、死刑判決を言い渡した裁判所からタルタロスへの帰り道、許されざる失態が起きた。世間を混乱に陥れた凶悪犯の護送ということで、No. 2 ヒーロー・エンデヴアーとその他ヒーロー数名を配置するなど、警備は万全を期したはずだった。

しかし狡猾な男は僅かな隙を見計らい自身を液体化し、道端のマンホールに逃げ込んだ。そのまま水路を伝い、遠くに逃げ続け——そして私たちが遊ぶ公園の蛇口から姿を現し、「どうせ死刑になるなら」と最後の凶行に走った。

警察上層部の人間だろうか。仕立ての良い背広を着込んだ壮年の男たちは額に深い皺を刻み、難しい顔で話し合っている。白いベッドに横たわる少女たちから可能な限り距離をとり、一瞥もせず。

「あれだけのヒーローが居ながら死刑囚を取り逃がすなど、あつてはならぬ大失態。こんなことが報道されれば、せっかく公安の会長とし

て積み上げてきた私のキャリアがどうなるか」

「幸い、事態を知るのは身内である警察やヒーローのみ。逃がしたヴィランを見た一般人は近隣の十数人です。金を握らせてなかったことにしましょう、委員長」

委員長、と呼ばれた眼鏡の男が、深々とため息をついて警察上層部らしき男を見やる。彼らが国の中央に座る権力者であることは、すぐにわかった。

仕立ての良いスーツも曇り一つなく艶めく革靴も、地方都市のくたびれたサラリーマンとはまるで違う。人の上に立ち、悲劇を俯瞰することに慣れきった、死魚の双眸をしていた。

公安の長は、淡々と言葉を重ねる。

「動画を撮った者に関してはデータを回収し、念の為にレディ・ナガンに監視させ、必要なら」いつものように”処理すれば良い。しかしヴィランと共に石になった、二人の女子高生はどうする？”

「同日に近隣で逮捕した殺人犯の仕業……ということにしましょう。石化ではありませんがちょうど石に関する能力ですし、うってつけです。そいつは抗議するでしょうが、問題ありません。どうせ誰もヴィランの言うことなど、信じませんから」

「なるほど。メドゥーサの娘はこちらで確保できたし、両親はあの通り正気を失ってしまったのだから、都合だな。万一回のことが公になれば、ヒーロー社会を揺るがす大事だよ。”No. 2ヒーローが殺人犯を取り逃がし、あまつさえ更なる犠牲者を出しかけた。結果、年端もいかない少女が個性を暴走させ三人を殺した”など……」

「まったく、ヒーロー連中には感謝して欲しいものですよね。我々裏方がいるからこそ彼らは大手を振って、全てを救ってきた、なんて顔で堂々と歩けるんですから」

「まあ、丸く収まってよかった」と息をついた背広姿の壮年は、胸にたくさんの勲章をつけた警察上層部らしき男から視線を外し、ふと横目で私を見やった。

一瞬、私とその男の視線が交わる。一体、私はどんな目で彼らを見ていたのだろう。たったそれだけで男の肩はびくりと跳ね上がり、頭

ごと大袈裟なくらい目を逸らした。ずり落ちた眼鏡を直す手が、震えていた。

「……で、では。爆豪瞳巳の二つ目の個性『メドウーサ』については公安が秘匿する。今後の生活についてはミッドナイトとレディ・ナガン監視のもと、暴発する危険性がないよう保護観察処分……ということにしよう」

「そうですね。十メートル以上の異形化に石化の瞳なんて、暴発すれば歩く災害でしかない」

男たちは「今回のことは誰にも漏らすな」と釘を刺し、早足で病室を出ていった。

「ヒーロー・ミッドナイト。その化物をしつかり監視しておけよ。国家権力を敵に回したくはないだろう？」と、ヴィラン顔負けの捨て台詞を吐いて。

私が姉を石化させてから、数時間が経っていた。私は今、病室の天井を眺め、ただ息をしている。

あの時真つ先に助けに来たのは、近隣に住むミッドナイトだった。彼女はおぞましい化物と化していた私を眠り香で強制的に眠らせた。

ヴィランだと思い込んでいた化物が小さくなり、見知った少女の形をとるのを、彼女はどんな気持ちで見ているのだろう。ミッドナイトは混乱しながらも私を抱え、病院に駆け込んでくれた。

姉たちに噛まれた腹と指先から少し血が出ているだけで、私に怪我はほとんどない。だからベッド脇のパイプ椅子に腰かけるミッドナイトに、二人の見舞いに行きたいと願い出た。

「ミッドナイトさん。私、お姉ちゃんたちに謝りに行かなくちゃ。よくわかんないけど、私の個性？が解除されたなら、お姉ちゃんたちの石化も治ってるよね？」

「それは……」

珍しくミッドナイトが口ごもり、視線を逸らす。先程から、病室が騒がしい。ジャングルの何かよくわからないヤバイ猛獣みたいな鳴き声が、ひっきりなしに聞こえる。うるさくて堪らない。病室に動物を連れ込むとか、信じられない。そんな非常識なことをする奴の、親

の顔が見てみたい。

「お姉ちゃんたち、もう目が覚めたかな？何号室にいるのかな？」

「……瞳巳、それは」

「一時的とはいえ石にするなんて、酷いことしちゃったなあ。なんて謝ろう？ねえ、ミッドナイトさんはどう謝れば許してくれると思います？」

「瞳巳、落ち着いて——いいえ、落ち着かなくていいから聞いて。あなたのお姉さんは、ご両親はもう、」

「え？ごめんなさい、聞こえませんでした。なんかさつきから病室うるさくないですか？」

「瞳巳、おねがい、話を聞いて。ちゃんとこつちを見て。私がついてるから。あなたまで正気を失っては駄目……！」

「聞いてるし、見てますよ。ただ、部屋がうるさくて。いつそお姉ちゃんたちの病室に移れないかな？そうしたらパパもママも、一度にお見舞いに来られるのに。そういえば、パパもママも遅いな。もう何時間も経ってるのに、どうして来てくれないんだろ」

「瞳巳」

ついに掌で顔を覆ったミッドナイトが、椅子の上で泣き崩れた。原作での強気な彼女しか知らない私は驚いて、家族でお揃いの金色を見開いた。けれど漫画より幼さが残るミッドナイトの輪郭を眺め、「そっか」と納得する。

今は、原作のおよそ九年前だ。二十二歳の彼女は独立したばかりの新人ヒーローで、教職にも就いていない。だから”ミッドナイト”としてまだ不完全で、感情を制御しきれず冷静さを欠くこともあるのだろう。両の掌で受け止めきれなかった涙が、病院の無機質な床に滴り落ちる。

睡ねむりさんは、優しい人だ。

「泣かないで、睡さん。あたしは大丈夫だから」

私はベッドから上半身を起こし、顔を伏せ肩を震わせるミッドナイトの黒髪を撫でた。私を抱えて必死に走り、ずっと側についてくれたのだろう。いつも完璧に整えられている長い髪は所々乱れ、砂埃

がついていた。

「ごめんね」と口にするべきか迷い、唇をほんの少し開いた。しかし身を起こしてはつきりと見えた光景に、すべての言葉を打ち消し、押し黙る他なかった。

「!!!」

一組の夫婦が獣のように吼え、床に這いつくばって慟哭している。正気を失った両の眼だけを爛々と鈍く光らせ、流れ出る涎もそのままに、喉を枯らして叫んでいる。夫婦はベッドに横たわる美しい姉妹の、温度を失った灰色の脚や腕にすがり付いていた。

「うるさいなあ。早くお姉ちゃんの部屋に行きたいな。パパとママ、迎えに来ないかな」

一年と少し前の春、この病院で記憶喪失と診断された時のことを思い出す。あの頃は、誰も彼も見知らぬ他人だった。家族だなんて、信じたくもなかった。白い屋根の自宅は他人の家の匂いがして、落ち着かなかった。帰宅する度憂鬱で、ドアノブは冷たく、重くて仕方がなかった。けれど今は。

「パパ、ママ、お姉ちゃん。帰ろうよ」

一度に娘二人を失った両親に、私の言葉は届かなかった。姉妹の彫像は何も言わず、白いシーツに転がっている。

病院でのさまざまな検査やカウンセリングを終えたのは、八月半ばのことだった。

『双子の愛娘が死んだ』『殺したのは、実の末娘』

到底受け入れられない現実には、両親は狂った。壊れてしまった彼らはもう、私の姿や声すら認識できない。両親は精神病棟に隔離され、毎日娘たちの名を呼び続けているという。

私はミッドナイトの家に移り住むことを命じられた。本来なら親戚である爆豪家に引き取られるのが普通だが、権力者から指図され、叶わなかった。

なぜ、彼女が名指しされたのか。それは以前から互いに面識があったから、ではない。ミッドナイトが、『メドゥーサ』に対処できる稀有

な個性を持っているからだ。

ミッドナイトの個性は、『眠り香』。自らの肌の香りを口、鼻から吸い込んだ者を強制的に眠らせるものだ。対して私は、瞳を開かなければ発動しない個性。

つまり、万が一私の個性が暴走し、巨大化もしくはメドゥーサ状態になっても。無理矢理意識を奪い、目蓋を閉じさせてしまえば元の姿に戻れるし、周囲を石化させる心配もない。

加えて彼女は人間としての性格、ヒーローとしての評判も良好だ。私と同居し監視する者として、これ以上うってつけの人物はいない。

退院し、ミッドナイトの家に引き取られ、二週間が経った。もうすぐ夏休みが終わり、二学期が始まる。

同級生たちが旅行に遊びに忙しいなか、私は一度も外に出ず、室内でのトレーニングと勉強に日々を費やしていた。

ミッドナイトは私に気を遣い、「人気のない夜でいいから、近所のスーパーまで歩かない？」など提案してくれた。勝己や出久の家まで車を出すと行ってくれた。

だが、それら全てを断った。眠る間を惜しんでの鍛練に幼い身体中が悲鳴を上げ、毎日気絶するように硬い床で眠る。それでよかった。

そして、二学期が始まる。ミッドナイトは公安の上層部に転校や休学の措置を取るよう訴えたが、無意味だった。権力者たちは「あの事件の渦中にいた者がそんな行動を取っては、マスコミに勘ぐられるだろう」「あなた達だって、あの醜い姿が知れ渡るのは本意ではないはずです」と、私たちに普段通りの生活を強要した。

公安の命令にミッドナイトは端正な顔立ちを歪め、机に拳を叩きつけ、怒りを露にした。

「ふぎ、けるな……！瞳己はなにも悪くないでしょう……！！」

「いいんだよ、ミッドナイトさん。私が全部悪いんだから」

「違う！そんなわけない！私が救うべきだった……！あの時、あんなに近くにいたのに！！」

憤ってくれるミッドナイトには悪いが、彼らの命令は私にとって都合だった。

以前の快活さを失った表情。目元を覆い隠すほど長く伸びきり、ぼさぼさで、蛇の如く意志を持つてうねる黒髪。痩せこけた青白い頬の、死者のような不気味さ。夏休み前からうって変わった性格。

無邪気な小学一年生は初めのうち、様子のおかしい同級生を心配し、声をかけた。それがからかいになり、やがて虐めに繋がるのに、そう時間はかからなかった。

「みんな、嫌なことは全部私に押し付けてね。掃除でも宿題でも、なんでもするよ。苛々したら、殴っても蹴ってもいいよ」

私は当然のように虐めを享受した。その不気味さに、異物を排除しようといよいよ虐めがエスカレートする。

けれどこの程度の痛みでは、まるで足りない。石になった姉たちや喪失に発狂した両親は、もつと辛かっただろう。苦しかっただろう。

せめて今は、身の回りのみんなの苦しみの受け皿になろうと思つた。そして大人になったら瞳巳ちゃん、お姉ちゃんたちの夢を叶える。親友を救えなかった罪を償い、『ちよーかっこいいヒーロー』になる。

朝と昼は苛烈な虐めを受け、夕方から深夜までは例のゴミ山、もしくはミッドナイトの家で特訓と個性についての勉強をした。

今までが、甘すぎたのだ。「ヒーローになる」なんて言ったくせに、全く覚悟が足りていなかった。たった数時間走ったりトレーニングをしただけで、音を上げていた。ミッドナイトに見守られ、勝ちと出久と過ごす日常を呑気に楽しんでいた。

自らが罪人であるという自覚が、足りなかった。人生をなげうって罪を償う覚悟がなかった。喪失から何も学べない、馬鹿で間抜けで能天気で無価値な人間だった。

これからは違う。私は周囲の全てを幸せにする。しなければならぬ。甘ったれた泣き言を吐く暇はない。

「見ててね、——、瞳巳ちゃん、お姉ちゃん、パパ、ママ。あたしヒーローになるよ」

爆豪瞳巳は、盲目に罰を願う。

隣人のための笑顔を絶やすな。しかし、決して楽しむな。極限の苦

痛のなか、他人を救う為だけに生き、死ね。

今日は、教室のロッカーにしまっていたはずのランドセルがなくなっていた。周囲の子どもたちの囁きに耳を澄ますと、体育の授業で着替えている間に、誰かが近くの川に投げ捨てたらしい。

パパとママが買ってくれたランドセルがなくなるのは、困る。それに、こういうものは高価だ。もし駄目になってしまったら、ミッドナイトに迷惑がかかる。ただでさえ不気味な化物なんかと同居させてしまっているのだ。これ以上の迷惑はかけられない。

幸運なことにランドセルは川沿いの木片に引っ掛かり、流されてはいなかった。私は膝丈のスカートを水に浸し、水流によろけながらもなんとかそれを取り返した。

「見ろよアイツ、あんなドブ川で遊んでるぜ！」

「きったねー！」

「くせーからあがつてくんよ、へび女！」

私は泥にまみれながら彼らを見上げ、鏡の前で幾度も練習した顔でへらりと笑う。ヒーローは常に笑顔でないといけないと、姉たちが言っていた。瞳巳ちゃんがノートに描いた理想のヒーローも、笑顔だった。

私の笑みに、高学年の少年たちは不気味なものを見る目で一步後ずさる。

「な、なんだよコイツ……おかしいんじゃないの」

「——おかしいのはてめエらだ!!」

刺々しく逆立った金髪が閃光のように躍り出て、体格のいい上級生に殴りかかった。

「お、おぼえてろよー！」

「おぼえるワケねーだろ、クソモブども！」

一対三の、しかも上級生との殴りあい、なんと勝己は勝ってしまった。

ただ、取っ組み合いでいじめっ子共々川に転落し、小さな身体中傷だらけだった。お世辞にも綺麗とは言えない川に浸り、私たちは全身ずぶ濡れだった。

勝己は、こんななぼろぼろになってまで私を助けてくれた。何か言わなければ。謝らなければ。私は無理矢理唇をひきつらせ、唇を三日月に持ち上げた。途端、見開かれる陽炎の双眸。

ああそうだった、と思い返す。私のこの笑みは、彼の傷そのものだった。

一番はじめにつけた傷は、トラックに飛び込み自殺を謀った時のもの。あの時、彼の手は届かなかった。もしもミッドナイトが通りかからなければ、私は勝己の目の前でぐちゃぐちゃの肉塊になっていた。最悪の場面を想像してしまった彼は、どれだけ怖い思いをしただろう。

次に、水のヴィランに遭遇した夏休み前。「逃げろ」と叫んだ彼はヴィランに囚われながらも個性を使い、必死で私を救おうと足掻いた。だが、体を締め付けられ意識を失い、何も出来なかった。

目が覚めたら私は別人になり、おいしいカレーを作ってくれた親戚の家庭は無惨に崩壊していた。勝己はきつと、私を助けられなかった責任を感じている。

彼にとつて、私は“爆豪勝己の無力の象徴”だった。忌まわしい傷跡そのものだった。

私は勝己から目を逸らし、切り裂かれたランドセルを抱き締め、分厚く長い前髪で瞳を隠した。

先程の喧嘩で出来たのだろう。伏せた視界に傷だらけの彼の脛や膝小僧が見え、呼吸が震えた。

「ごめん。私と居ると、嫌なことばかりだね。……たすけられなくて、ごめんなさい」

「……………」

勝己が息を飲み、私は失敗を悟る。

苛立たせてしまった。プライドの高い彼には謝罪は逆効果だと、少し考えればわかったはずなのに。

でも、じゃあ、私はどうすればよかったのだろうか？——わからな
い。何ひとつとしてわからない。頭が働かない。最近はずっと、最低
限の食事しかとっていなかったから。

私は浅い川に膝をつき、立ち竦む彼を仰ぎ見た。勝己の傷に触れぬ
よう精一杯の可愛らしい笑顔を浮かべ、視線が合わないよう細心の注
意を払い、目映い金の髪を見つめた。

瞬間、私の頭をあつい掌が容赦なく叩く。

「痛い」

「あたりまえだろ。いたくしたんだから」

「そっか」

「そうだよバカ。おなじバクゴウのくせに、そんなのもわかんねーの
かよ」

「そのキモい顔、やめろ」と彼は苛立たしげな早口で言った。目を見る
のが怖くて、彼がどんな表情をしていたかはわからない。

「たてよ。はやく帰んぞ」

「立てないよ」

伸ばされた温かな手を掴む資格は、なかった。だから私は再び俯い
て、夏の終わりの生温い水に浸ったままだった。

一向に手を伸ばさない私に、短気な彼はいよいよ本気で我慢ならな
くなくなったようだ。

「瞳己なんか、もうしらねー！かってにカゼひいてろ！」

癩癩を起こした勝己に加減せず頭を殴られ、よろめく。水浸しの全
身が重くて、立ち上がれない。いつそこで死にたいと、以前の私な
らそう思っただろう。だが、今は出来ない。

もつと苦しんで苦しんで苦しみ抜かなければならない。たくさん
の人々を救い、ヒーローになる夢を叶えなければならぬ。ヴィラン
と戦い、その末にたったひとりで惨めに死ぬ。それでもしなければ、
罰にならない。

それからというものの、私へのいじめは劇的に減った。理由はわかっ
ている。勝己と出久が、守ってくれているからだ。

少しも嬉しくはなかった。いつそ見離して幼馴染みの、家族の縁を

切ってくれたほうが楽だった。

ぼろぼろの彼らを見る度、その傷をつけた上級生たちを殺してやりたくなった。両眼が熱を持ち、鈍く輝き、内側から焼け焦げてしまっ
そうだった。

そんな自分の化物じみた本心を嫌悪し、瞳を抉り出したくなる。

季節は移り変わり、秋になった。相変わらず、私は得体の知れない嫌われものだった。

隠された教科書をやつのことで奪い返し、這いずるようにミッドナイトの家に戻ると、玄関に佇む影が見えた。前髪の間から目を凝らせば、それは家主である彼女だった。

「おかえりなさい、瞳巳ちゃん」

無言で頭を下げ、通りすぎるはずだった。いつもなら彼女は何か言いたげにしながらも、気を遣うようにこちらを見つめるだけだ。

しかし今日は、違っていた。彼女はいつもの緩いニットの部屋着ではなく運動着を身に纏って、私を待ち構えていた。彼女の横を通りすぎようとする私を制し、不器用に笑みを浮かべる。

「ねえ。私たち、そろそろ本気で向き合うべきじゃないかって思うのよ」

「……今、向き合ってます。ちゃんと個性の制御も勉強しています。生活も、何も支障はないはずですよ。あなたに迷惑はかけていません」
「可愛くないわね。でも問答無用。いつまでも『救けられなかった』ってうじうじするなんて、後輩に笑われちゃうわ。アイツならきつとこ
うやって、真正面から向き合う。どんな辛いことだって、笑って受け
て立つはずだから。だから……!」

喧嘩をしましょう、と彼女は言った。今にも泣き出しそうに唇を歪めて、私の前に立ち塞がった。

香山睡はまっすぐに私を見つめている。

6. 爆豪瞳巳・オリジン

爆豪瞳巳は、オリジン原点を見つける。

「喧嘩をしましょう」と、ミッドナイトは言った。私は彼女に促されるまま靴を脱ぎ、のろのろと廊下を歩いてトレーニングルームに向かう。

ヒーローは日々体を鍛える必要がある。多くの有力ヒーローがそうであるように、彼女もまた鍛練用の機器を揃えた部屋を持っていた。

手を引かれて大人しく室内に入るが、急によくわからないことを言われて私は困惑していた。普段面倒をかけているミッドナイトの言うことなら、極力従いたい。けれど朝昼の虐めと深夜までの自主特訓自訓で疲れきり、今は何の気力もわかない。

話なら、また今度にして欲しい。そう伝えようと、陰鬱に俯きながらもごもごと口を開きかけた時だった。

「い……っ!?!」

「ずうっと、こうしたかったのよね」

何が起きたか、わからなかった。——ミッドナイトが、私の頬を叩いた？秋の夕暮れの冷えきった床に転がり、信じられない思いで彼女を見上げる。

彼女は艶めく唇を冷淡に歪め、言った。「ずっとこうしたかった」と。「うじうじと俯くあなたが、大嫌いだ」と。

ああ、そうか。私は納得し、笑みを浮かべてよろめきながら立ち上がる。

私は、これからミッドナイトのサンドバッグになるのだろう。でも、これでいい。これが正しい。彼女はこんな陰気な化物相手に数カ月も温かい料理を作り、懸命に励まし、寄り添おうとしてくれた。彼女は誰より優しく、強い。

しかし彼女だって、人間だ。我慢の限界だったのだろう。だから今、こうして私でストレスを発散している。

「やつと、私もあなたの役に立てる！」

私は彼女に向かって両腕を開き、全てを受け入れる体制を取った。そんな私の頬を再び強く打ち付け、彼女は嘲笑した。

「不気味な笑みね。まるでヴィランだわ」

「はい。ごめんなさい」

「殴られて笑うなんて、おかしいんじゃないの？」

「そうだね。学校でも言われたよ」

「あんなに必死に鍛えたのに、無抵抗なの？ つまらないわね」

「うん。つまらなくて、ごめんなさい」

散々罵倒され、殴られた。これでいい。私はミッドナイトの役にたっている、幸福すら感じていた。

「私”は、最低の屑だ。殺人者だ。”私”をいくら罵倒されようが、構わない。瞳巳ちゃんや家族でないなら、私については何を言っただって——。」

「弱いわね。あなたの馬鹿な姉とそっくり」

——今、なんと言った？

床に叩きつけられた耳が、幻聴を拾い上げたのか？

「床にうずくまっちゃって、死にかけの蛇みたいね。惨めね。あなたの狂った両親とお揃いじゃない」

「……ねむり、さん？」

信じられない思いで彼女を見上げる。室内灯の逆行を背負い、ミッドナイトは端正な顔を加虐の喜びに染め、舌なめずりをしていた。放心する私に、彼女はなおも言い募る。

「弱いくせにしゃしゃり出て、ヒーローの真似事をして。あなたのお姉さんたち、馬鹿だったんじゃないの？ 最初からヒーローの素質、なかったんじゃない？」

「公安から映像を見せてもらったわ。妹は目の前に居るっていうのに、『すぐそばの家で待ってる妹には、指一本触れさせない！』なんて格好つけて！ つふふ、やだ、感動させないでよ！ 愚か過ぎて笑っちゃおう！」

「娘が娘なら、親も親ね。この程度で狂うなんて、弱い人たち！ ねえ見

たでしょう？あのケダモノみたいにうるさく吼える姿！気持ち悪かったわよねえ！今もあんなふうに精神病院で鳴いているのかしら！」

「そうだ、今度見に行ってみない？あなたの親族の……あなたを守れなかった弱虫の……ええと、なんだっけ？カツキくん？ともう一人の幼馴染も一緒に！きつと楽しいツアーになるわ！」

うるさい。うるさい、うるさい、うるさいうるさいうるさい。そんな汚い言葉で私の大切な家族を罵るな。お姉ちゃんたちを、パパを、ママを、幼馴染みを侮辱するな。はやくその口を閉じろ。閉じろ閉じろ閉じろ。はやくしないと、私はまた——！

「お願い、黙って……！」

私はミッドナイトの薄い腹に、鋭く拳を打ち込んだ。これ以上、何も聞きたくなかった。家族でお揃いの金色が、たしかな殺意を持つてつり上がり、輝く。長い黒髪がうねり、踊り、無数の蛇の形を成す。撤回しろ。今すぐ、彼らに謝れ。ありったけの怒りを込めて、一撃で彼女の意識を奪うつもりで殴り付けた。

だが長身の彼女は呻き声ひとつ漏らさない。私の肩を平然と掴み上げ、投げ飛ばし、床に叩きつけた。痩せ細り浮き出た背骨が悲鳴を上げ、痛みを訴える。呼吸がつかえて、喉を押さえて咳き込む。

「……っはあ、あつ、ぐ」

「ほら、やっぱり弱い。あなた、本当にお姉さんに似てる」

「!!……ああああああ!!」

姉への侮辱に痛みも忘れて立ち上がり、また殴りかかる。それを真正面から受け止め、「弱い」と嘲笑うミッドナイト。

何度も殴られ、蹴り飛ばされ、転がされた。その度に彼女は吐き捨てる。両親や姉たち、幼馴染みの尊厳を奪う言葉を、私に浴びせかける。

「やめて」

何回、何十回、そんな暴力の応酬を繰り返しただろう。やがて私は温度のない床にうずくまり、両手で強く耳を塞いだ。彼女に背を向け、痛む膝を折り畳み、これ以上ないくらい小さくなった。けれどそ

れでは足りないように思えて、更にぎゅうつと力を込め、私は私の存在を小さくする。

「そんなふうには縮こまったって、何の意味もないわよ。そんなうじうじした態度だから、虐められる。こうやって虐げられる」

彼女は傷付き無抵抗になった私の背を、一切の容赦なく蹴り飛ばした。踏み潰した。

「俯いてばかりの奴を見ると、蹴り飛ばしたくなる。口を開くたび謝る奴を見ると、苛々して頬を殴りつけて黙らせたくなる。他人の顔色ばかり窺って怯えた目をした奴は、もつと追い詰めてやりたくなる。それが人間よ」

「それでいいの。放っておいて。これは私の罰なの」

「なんて素敵な精神！で、その罰とやらを受けたら、許されるの？両親は正気に戻るの？お姉さんは帰ってくるの？怖い思いをした幼馴染みは、あの体験を忘れられるの？」

「……うるさい」

「結局、それはあなたの自己満足」

彼女はうつ伏せに倒れる私の背に素足を乗せ、力を込め、女王の如く踏みつける。胃袋を圧迫される気持ちの悪さに、呻き声をあげて吐瀉物を吐き散らした。

昼に何も食べていなかったたので、不快な酸味のある胃液しか出て来なかった。給食はいつも、クラスの子にすべて取り上げられていた。当然の罰として受け入れていた。

ミッドナイトはなおも言い募る。彼女は、最前線で活躍するヒーローだ。凶悪なヴァイラン相手に、命をかけて戦う人だ。

そんな彼女を相手に、少し鍛えただけの小学一年生が勝てる道理はない。背を踏みつけられた私に、最早抵抗手段はない。

だが、一刻も早く彼女の言葉を奪わなければ。私の家族への暴言を、止めなければ。耳を塞いでも聞こえる姉たちの絶叫を、両親の慟哭を、止めなければ。

嵐のような声に黒髪をざわめかせ、瞳を閉じた。今、目を合わせれば、私はミッドナイトも殺してしまう。だから私は――。

うねる黒髪を彼女の素足に絡み付かせ、払いのける。体勢を崩した彼女の一瞬の隙を突き、鳩尾目掛けて全体重を乗せた体当たりを食らわせる。

ミッドナイトの胴体に馬乗りになった私は、髪から伸びる黒い蛇と共に彼女を見下ろした。両目を固く閉じながら、無数の蛇の瞳を通して見下ろした。

「謝れ。あたしの、私の家族に謝れ」

「ふーん、夜中にこそそトレーニングしてると思ったら……髪を蛇にして、腕や目の代わりにする、か。そんなことも出来るようになってたのね。まあ、見たところ完璧に制御できるとは思えないけど」

「話を逸らすな。私はいつでもあなたを殺せる」

「へえ、出来るの？弱い姉そつくりなあなたが。意気地無しのお母さんに似、」

ミッドナイトは、人殺しに命を握られているとは思えない冷静さでまっすぐに私の閉じた目蓋を見つめていた。私はそれを、金色の目を睨かせた蛇ごしに見た。

続く彼女の言葉を拒絶したくて、私は再び両手で耳を塞いだ。抑えきれない怒りは髪を大きく波立たせ、彼女の細く生白い首筋にどす黒く絡み付く。

「え？」

違う。殺したいなんて思っていない。ただ、侮辱した大切な人たちに謝ってほしいだけだ。それだけなのに、どうして。

ずるり、ずるりと髪から伸びた蛇たちが、彼女の体を拘束する。容赦なく巻き付き、首を締めていく。制御しきれない新たな個性に戸惑い、「やめて」と自分自身に何度も懇願する。

「あ、ああ、違う。やめて。私は、ただ謝って欲しいだけ。やめ、やめてよ。殺さないで」

あの夏の悲劇の後発現した、新しい能力。目蓋を開かなくても、蛇の形をとって私の目となり周囲を見渡せる髪。自らの腕のように自在に動かせる、黒髪の蛇。

姉たちと同じく、体の一部を蛇にし、操る個性だった。姉妹の死後

備わった、新しい個性。こんなもの、いらなかった。私はずっと、瞳を閉じて生きていたかった。それなのに、目を閉じていても視えてしまう。首を絞められ苦悶に歪むミッドナイトの、宝石の瞳が見えてしまう。

「いやだ。もう殺したくないの」

制御できない個性を呪い、必死で自らの髪を引きちぎろうともがいた。しかし、蛇は嘲笑うようにぬるりと手のひらをすり抜け、何もできない。

姉たちの、死を悟り恐怖に歪む双眸を思い返す。両親の、輝きを失った盲目を思う。

ミッドナイトの、苦痛のなかでも凜と澄みきった青を見つめる。その瞳がもう二度と見えなくなる。私は今度こそ、化物になってしま

「——たすけて、睡さん」

馬鹿だ。

何を言っているんだろう。

今まさに彼女の首を絞めている私が、彼女に助けを求め、すすり泣く。なんて滑稽な。なんて救いようのない。それでも。

「ええ。絶対、た、すける、わ」

それでもミッドナイトは救ってしま

彼女は素肌から『眠り香』を放ち、私の髪から伸びた蛇を眠らせた。黒蛇はだらりと力を失い、ただの髪束に戻っていく。

消えていく蛇の視界を通し、彼女の首筋に赤紫の痛々しい痣が見えた。あと数秒遅ければ窒息し、死んでいたかもしれない。私の蛇が首を絞め、骨を折って殺していたかもしれない。

ミッドナイトは、強い。その気になれば体を拘束する蛇ごと幼い私を振り払い、抵抗できたはずだ。今のようには『眠り香』を放ち無力化

することは、もっと容易かったはずだ。

でも、それをしなかった。私が「たすけて」と叫ぶまで、呼吸ができないという極限の苦痛を堪え忍んだ。

「ひどいよ」「どうして？」

私は彼女が重症であることも忘れ、馬乗りになって身体中を殴り付けた。

何が「ひどい」のか、何に対しての「どうして」なのか。何もわからず、怒りをぶつけた。渾身の力で彼女の体に拳をうずめる度、涙が溢れた。姉の死にも流せなかった涙が、壊れた蛇口のようにとめどなく零れ落ちる。

熱くなる眼窩に堪えきれず、私は閉じていた目蓋を開いた。久方ぶりの光と熱で視界が霞み、何も見えない。

「ひどい、ひどい。死なないですよ。殺させないですよ。もうひとりぼっちにしないでよ」

「どうしてあんなひどいこと言ったの？」

「どうして」

どうして私ばかり！

私は誰にも言えなかった、化物には言う資格のなかった言葉を吼え立てる。

「死にたい。生きたい」

「ええ、そうね」

「でも、怖い。夢にみんなが出てきて、石になってしまうの。お前は化け物だって、私を責めるの。眠るのが怖い。起きているのも怖い。悲鳴が焼き付いて離れないの」

「大丈夫。私がいる」

「何もわからないくせに」

「わからないわ。だから教えて」

「やだ。やだ。やだよお……！」

「大丈夫。ここにいろわ、瞳巳」

何も見えず、闇雲に彼女の顔面を殴る。こんな醜い私を見ないでくれと、祈りを込めて拳を振り下ろし続ける。

ミッドナイトは一切の抵抗をしなかった。うわごとのように「大丈夫よ」と繰り返すだけだった。涙で曇る視界では、何も見えない。しかし私の怒りを受け止めるように、彼女が腫れ上がった唇で微笑んだ、気がする。

「どうして？ どうしてそんなに私に構うの？ どうして私を捨てないの？」

「……あなたに、救われたから」

「そんなの嘘だよ。だって私、あなたに迷惑しかかけてない」

「嘘じゃない。あのとき、私は……！」

香山睡は語る。とある春の日、私が彼女の名刺を頼りに会いに来た時のことを。

「あなたに出会う前、本当に駆け出しのヒーローだった去年。ヴィランに襲われた幼い女の子を助けられなかった。あの生温かい血は、遺族が私を睨むあの目は、今でも憶えてる。……もし、私の個性が『抹消』だったら。『空中を自在に移動できる』ものだったら。『遠くまで響く声』だったら。もしもそうならきつと救えたのに。……馬鹿よね。今さら、そんな十代の学生みたいなことを思った。ヒーローの資格がないんじゃないかって、引退まで考えてた。けど、そんな時あなたが電話をかけてきた。今年の春のことよ。なんだか、ずっと昔のことにも思えるわね」

ぼやけた視界に、ミッドナイトの戦慄く唇が映る。彼女の声は震えていた。きつと脳裏に焼き付いた少女の叫びに、苛まれていた。

『私、ヒーローにならなくちゃいけないんです』って。あなたは可愛らしい声で言ったわね。どんなに他のヒーローを薦めても、『師匠にするならミッドナイトがいいです。あなたは私を助けてくれたヒーローだから』って譲らなかつたわよね。それだけと言えば、それだけのこと。でも、でも……！ そんなたつた一言が、どんなに私を」

続く言葉は形にならなかつた。ミッドナイトは、声を詰まらせて唇を噛んだ。切り傷と痣で腫れ上がった無惨な顔は、それでも凜と美しかった。

ミッドナイトは、何度も謝った。私の感情を引き出すため、家族を

侮辱してしまつてごめんなさいと謝つてくれた。彼女の体の上に馬乗りになつて放心する私を、痛いくらいに抱き締めてくれた。

こんなに温かいのは、本当に久しぶりだった。だから私は彼女の背中に爪を立て、思い切り泣き叫び、哀しみに怒り狂うことしか出来なかつた。

彼女は言葉を紡ぐ。自分の涙は気にしなくせに、私の涙だけを指先で柔らかかに拭う。私の開かれた金色の瞳をまっすぐに見つめて、青痣だらけの頬で不器用に笑う。

「瞳曰、こつちを見て。元気が出るおまじないをしてあげる。大丈夫、私は絶対に死なない。あなたを独りぼちになんて、させないわ。あなたは」

香山睡は私の長い前髪をすくい、花の髪留めを差した。あの蒸し暑い夏の日、なくしたと思つていた宝物だった。彼女はその花を丁寧に拾い上げ、ずっと大切に持つていてくれた。

「あなたは、化物なんかじゃない。だつてこんなに綺麗な瞳をしてる！」

「次は、ありませんからね」

「次にこんなことがあれば、瞳曰ちゃんは僕たち一家が預かります」
静寂を裂く乾いた音に、目を覚ます。

あの後二人揃つて深夜の病院に向かい、治療を受けた。深夜の急患だというのに妙に手際のいい対応。多忙なはずのリカバリーガールが待機していた、小さな地方病院。

何かおかしいな、と首を傾げながら治療を受ける私に、リカバリーガールが呆れのため息をつく。

「ミッドナイトははじめからあんたと喧嘩をする予定だったんだよ。だからあらかじめ病院に連絡してたのさ。わざわざ私まで呼んで、全

く器用なんだか不器用なんだか……」

打撲と青アザだらけの私たちに治療を施し、ヒーローに護衛され、雄英の屋台骨たる老女は去っていった。

そしてミッドナイトに抱き締められてベッドで微睡んでいる間に、破裂音。驚いて飛び上がる私の隣に、彼女はいなかった。

彼女は室内の入り口あたりに立ち、誰かと向き合っていた。

「次に何かあれば、瞳巳ちゃんはこちらで引き取ります。どんな手を使っても。肝に銘じてください」

「……返す言葉もございません。申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げたミッドナイトの横顔は、治療を施した後だということに赤く腫れ上がっていた。驚愕に薄く口を開くと、彼女の向かい側には、見知った金髪の女性と茶髪の男性が立っていた。揃って拳を握っていたその夫婦は、私の視線に気が付くと険しい表情を和らげ、笑みを浮かべて駆け寄ってきた。

「あら、気がついたのね瞳巳ちゃん！」

「瞳巳ちゃん！もう痛くないかい？」

彼ら——爆豪夫妻はミッドナイトを雑に押し退けてベッド脇に近付き、労るように私の頭を撫でた。

久しぶりに会う彼らに、私は目を白黒させた。今は早朝だし、彼らに私が入院したことはしらせていないはずだ。

「おじさん、おばさん、どうしてここに？」

「ミッドナイトさんから連絡があつたのよ。プロヒーローに暴力を振るわれるなんて、怖かったわねえ瞳巳ちゃん」

「ええっと……ミッドナイトさんの家が嫌になつたら、いつでも僕らの家に来ていいからね。僕たちは家族なんだから」

私の髪を優しく撫で、爆豪夫妻は気遣うように言った。ふと、視線を感じて彼らの背後、病室の入り口を見やる。

「勝口くん」

爆豪勝己が幼い目を赤く腫らして、こちらを睨んでいる。

「私たちはまだミッドナイトさんと」お話 があるから！」と額に青筋を立てた爆豪夫妻が、ミッドナイトを連れて病室を出ていく。

彼女はまだ傷の残る体だったので心配だったが、「これも覚悟の上で呼んだのは私よ」と苦笑して、後についていった。

「……………」

残された私と勝己は、川で話した時以来久しく言葉を交わしていない。

勝己は私を見据えながら、だまつてベッド脇に立っている。気まぐさに堪え兼ね、口を開いたのは私のほうだった。

「あの、カツキーン？折り畳みの椅子あるけど、座る？」

「いい」

「あ、そう……えっとカツチャマン、喉渇かない？水とか飲む？」

「いい」

「あ、そう……」

いつもは瞬間湯沸し器のように怒るあだ名にも、何の反応も示さない。何を言ってもろくに反応しない。

気まぐさが頂点に達し、「ちよつとミッドナイトのところ用事が」と言い訳をしてベッドから立ち上がろうとした。途端、背骨が鈍い音を立てて軋み、私はシートの上で痛みに悶える。手術着の広い袖口が捲れ上がり、今日出来た痣と、虐めによつてついた無数の傷跡が晒される。

私は彼の顔を見ず、俯いていた。しかしその傷に勝己が目を見開き息を飲んだのが、気配でわかった。

「瞳己」

今までの無反応が嘘のように、勝己が声をあげた。顔中を歪め、ぼろぼろと大粒の涙を零し、しゃくりあげた。

「瞳己」

彼は嗚咽を漏らしながら、私の名を何度も呼んだ。オールマイトがプリントされたシャツをぐしゃぐしゃに握り締め、過呼吸みたいに肩を激しく上下させ、泣いた。

驚きのあまり、ベッドに上半身を起こしたまま声も出せなかった。

そんな私の間抜けに固まった膝上に、たくさんの金色が降り注ぐ。

勝己は膨らんだポケットから幾つもの個包装の飴玉を取り出した。彼は泣きじやくりながら、それを投げるように乱暴に押し付ける。金色の包み紙が彼の赤い陽炎の瞳に反射し、煌めいた。

「ヴェリタース・オリジナル……？」

つい最近オールマイトがイメージキャラクターになった、昔ながらの飴玉だった。

彼はCMでやっていたオールマイトの真似事をするように、私にその飴玉を差し出した。押し付けがましく手に握らせた。汗ばんだ、温かいてのひらだった。

横隔膜を痙攣させ、喉を詰まらせながら、勝己は懸命に言葉を紡ぐ。

「俺は、オールマイトよりずっと強いヒーローになる。お前の目なんか怖くねーよ」

飴玉を包む金の包装が、俯く私の瞳を映し出す。家族でお揃いの黄金が、私を見つめていた。

「お前はいつもみたいにヘラヘラ笑いながら、飴でも舐めときゃいいんだよ」

「俺はヒーローになる。『爆豪勝己の家族だ』って言っただけでヴィランが逃げ帰るような、超つえーヒーローになる」

「だからお前はもう、大丈夫だ」

命が燃える音を聞いた。

爆豪勝己の、ヒーローへの歩みを見届けたい。私の家族の挫折と成長を、隣で見たい。

香山睡を死の運命から救いたい。近くて遠い未来、私がヒーローになる瞬間を見ていて欲しい。

彼らが助けを求めたとき、笑って救える私でありたい。

もう二度と会えない私の親友、瞳巳ちゃん、お姉ちゃんたち。殺めてしまった、水の個性を持つ人。目を閉じてしまった優しいパパ、ママ。けれど私は彼らの手を取れない。私は、前に進みたい。

あの夏の終わりを告げる、遠雷が聞こえた。開け放った病室の窓を、そよ風がなぞる。白いカーテンが舞い、私の長い髪が揺れる。秋

の柔らかな朝焼けが射し込み、病室を照らした。

黒髪を飾る一輪の花に触れた。長い前髪を払い除け、明瞭になった視界で勝己を見つめた。陽炎かげろうの双眸がまっすぐに私を見据え、射抜く。彼はもうずっと、私を見ていたのだろう。

私の家族が、「怖くない」「大丈夫」と言ってくれたから。お節介で凶々しいヒーローたちが、私から目を逸らしてくれないから。だから爆豪瞳巳は――！

「ずっと見てるね。――カツキーン」

「て、ためエ……空気読めよ」

「えへへ」

「あっ！待てコラ瞳巳！」

「待たないよ〜！」

「待てや……って足はえーよ！」

「ふふん、当然！私だってちよーカツコいいヒーローになるんだから！」

病室から廊下へ飛び出してきた私を、驚いたように見つめるミッドナイトと爆豪夫妻。遅れてお見舞いに来てくれた、緑谷親子。眉を上げ私を追う勝己。

呆れたような見守るような、色彩に満ちたその目、眼、瞳！

だから爆豪瞳巳は、目を逸らさない！両腕いっぱい罪と花束を抱えて、生きていく！前を向いて、不格好に走る！

私は、あなたたちが大大大好きだ！

『爆豪瞳巳・オリジン』

【番外編】 四季折々（猫）

※本編番外編。香山家に住む二人と一匹のお話。瞳巳オリジンから数年後の出来事。

「……ただいま、睡さん」

ランドセルを背負ったまま病院から帰ってきた瞳巳は、今日も浮かない顔をしていた。理由は訊かずともわかっている。

今回も、姉たちを元に戻すことは叶わなかったのだろう。自身の血を垂らしても、もう一度両目で見つめても、彼女たちは硬く冷たい石のままだったのだろう。

私も時間の都合さえつけば、ヒーロー活動の合間に瞳巳とともに隔離病棟に赴き、「個性解除実験」に立ち会っていた。しかし古今東西の文献を漁り、いろいろな方法を試しても、彼女たちは石化から目覚めなかった。

彼女たちは、両親の精神安定剤として共に隔離病棟内に安置されている。職員は、まさかその二体の石像が「かつて爆豪三姉妹だったもの」とは夢にも思っていない。真実を知るのは公安と警察トップの僅か数人、レディ・ナガン、そしてエンデヴァーのみである。

事件当初、公安委員長は「ヒーロー社会の秩序を守るため」「死刑囚を取り逃がしたヒーロー達の失態を隠すため」と称して、姉妹の石像を埋葬し、荼毘に付そうとした。それに待ったをかけたのは、他でもない。事件当時現場に居た——轟炎司だった。

彼がどんな思いで自らの失態の証を残そうとしたのか。爆豪家両親のための病院を紹介し、一生分の入院費を支払うと申し出たのか。私には想像もつかない。ただ、このことは決して瞳巳には言うなど。それだけを念押しされている。

「おかえりなさい、瞳巳。お腹空いたでしょう？ 今日のおやつはマフィンを焼いたのよ」

「……うん。ありがとう」

月に一度の「個性解除実験」を行い、瞳巳は沈痛な面持ちで香山家に帰ってきた。私は余計な詮索はしない。「おかえりなさい」と声をかけ、高校時代からの愛猫、おすしと共に彼女を出迎えるだけに留めた。

靴を脱ぎ、焼き菓子の香りが漂うリビングに向かう瞳巳の足に、「にゃあん」と甘え鳴きをするおすしがまとわりつく。

「わ、おすし。……くすぐったいよ」

膝裏を掠めるふわふわの尻尾が、くすぐったかったのだろう。難しい思案顔だった彼女も眉間のしわを僅かに解きほぐし、甘えたなトラネコを抱き上げた。

「ふふ。この子も瞳巳に『おかえり』って言ってるのよ。お友達のあなたが出掛けちゃって、寂しかったって」

「……えへへ、そつかあ。ただいま、おすし」

瞳巳が、まだ十歳にもならない幼く細い両腕で猫を抱きしめ、柔らかな毛並みに鼻先をうずめる。元は痩せ細った捨て猫であつたおすしが、安心しきつた表情で喉を鳴らす。

一人と一匹のあまりの愛らしさに、私は思わず彼女らをまとめて抱きしめ、瞳巳の艶やかにうねる黒髪を撫でまわした。

「ね、睡さん！だから私は見た目どおりの子供なんかじゃないですってば！子供扱いしないで！」

「ふにゃあー！」

「あ〜可愛いわあ、たまないわあ！可愛い猫たちがみやあみやあ鳴いてるみたい！」

「私は蛇なんですけど!?!」

平均より「ちよつと」大きい私の胸に押し潰され、顔を真っ赤にして抗議する瞳巳はしかし、本気で抵抗をしなかつた。本当に嫌ならば髪の毛たちで私の両腕を振り払えるのに、そうはしない。

人肌が恋しくいせに、自分からは決して触れようともしない。子供のように甘えたいのに、まだまだ未成熟な子供のくせに、「私は大丈夫」と虚勢を張る。香山家のドアを開くとき、未だに一瞬だけ躊躇して、遠慮がちに「ただいま」を言う。私はそんな瞳巳の弱さを、ずつ

と見つめている。

けれどそういつた臆病ささえも、子猫のようでいとおしかった。可愛くて可愛くて、抱きしめずにはいられない。私は込み上げる愛に任せて彼女の髪をかき混ぜ、祈りのため息をついた。

「おかえりなさい、瞳巳。ここがあなたの帰る家になりますように」

小さな囁きは、未だにぶつくさと文句を言う彼女には聞こえなかったようだ。けれどおすしにだけは、聞こえていたのかもしれない。

かつて捨て猫だったそのトラネコは耳をぴくりと揺らし、私と瞳巳に抱きしめられた隙間から顔を上げた。私の言葉に同意を示すように、高く鳴いた。

少女の傷跡は癒えない。それでも、いつか爆豪瞳巳が満面の笑みで「ただいま」と私の両腕に飛び込んでくる未来を、夢みてやまない。

木漏れ日差すりビングには、少し冷めてしまったマフィンの、胸が苦しくなるほど柔らかなバターの香りが立ち込めていた。今日も香
山家は平和である。

【雄英入試〜個性把握テスト】

7. 爆豪瞳巳と雄英入試

少年少女の勇壮な雄叫び、爆発音、倒壊音。物を破壊するとき特有の、様々な轟音が耳を劈く。たくさん機械が砕け散り、形をなくしていく。名も知らぬ人々が、絶えず走り抜けていく。私はただそれを眺めていた。

「……痛い」

ここは雄英高校の入試会場F。足を負傷してしまった私は、迫り来る巨大な仮想敵を呆然と見つめ、座り込んでいた。

この数分間で、何体かの一ポイント敵は撃破した。隠密行動を得意とする私はロボットの背後に接近し、周囲に散らばっていた瓦礫や鉄の塊などを叩きつけ、何とか十二ポイント程は稼いだ。

だが、きつとそれでは足りない。雄英入学には、遠く及ばない。

見上げる人々の活躍に、恵まれた個性に目の前が暗くなる。あの人の個性、腕が四本もあるんだ。すごいなあ。その人の個性、電気を操れるんだ。いいなあ。向こうの人の個性、影を操れるんだ。強いなあ。

私は、自らの体を見下ろした。私の武器は、この透明な体ひとつしかない。人に気付かれず行動するくらいしか、活躍の方法がない。足を負傷してしまった私には、もう何も出来ない。

こちらに近づく巨大ロボットの地鳴りを感じながら、思う。

私みたいなただの女の子がヒーローを夢見たのは、間違いだったのだろうか。困っている人を助けたい、私にしか出来ないことがあるはず、とここに来てしまったのは、思い上がりだったのだろうか。

ゼロポイント。倒しても意味がない、巨大仮想敵の接近に、他の受験者たちは慌てて逃げ去っていった。透明な私は、ロボットに認識されていない。巨大な足が目前に迫っている。

「た、たすけて。誰か」

私のか細い声は周囲の喧騒に紛れ、誰にも届かなかった。

きっと私はこの無機質なロボットにすら存在を無視され、踏み潰されてしまう。今感じている足の痛みよりもっと酷い苦しみが、待ち受けている。

私は頭を庇うように抱え、固く目蓋を閉じた。

「大丈夫よ。ちゃんと見えてるわ」

低い体温が体に触れ、包む。

踏み潰されるまさに直前、私は誰かに抱え上げられたらしい。

薄く目蓋を開く。私を横抱きにするその少女と、視線が交わることはなかった。少女は両目を黒い布で覆い、目許を隠していた。布と同色の艶やかな長い髪が、蛇のように風に泳いでいた。

「ちよつと待っててね」

彼女はそう言つて私を物陰に下ろすと、負傷した他の二、三人の受験者たちを救助した。私にそうしたように、仮想敵から見えない位置に運び込んだ。

そして彼女は叫ぶ。逃げ惑う受験者たちに向け、まつすぐに言葉を突き立てる。

「この中に、本物のヒーローを目指す人が一人でもいるなら！ここに居る負傷者の痛みを、不安を、少しでも思うなら！」

あたしと一緒に、あのでつかいのと戦つて！これ以上あいつが暴れれば、動けない怪我人が危ないわ！

瓦礫だらけの戦場を駆け、負傷者を安全なところに運びながら。少女は喉を枯らして叫んだ。他人の口調を真似たような、どこかぎこちない言葉だった。

大半の受験者は、耳を貸さなかった。自分の夢が、人生がかかった大一番だ。他人を気にする余裕などないのだろう。

しかし彼女の声に冷静さを取り戻し、辺りを見回し、怪我人の多さに気が付く者もいた。彼女の熱量にあてられ、ゼロポイントの足止め賛同する者も数人いた。

「あー、うん、らしくなかったな。周りに惑わされて全然何もみえてなかった」

「俺もそうだ。……あのデカブツを倒しきるのは不可能だろうが……この通り、力には自信がある。足止め程度はできるだろう」

「うう……ま、マジであんなんと戦うのかよ」

「これもまた、我らに課された黒^{シユヴァルトツ・ヴァント}き受難であろう」

「拘束なら、お任せを。主に誓つて、哀れな負傷者^仔たちには一歩たりとも近寄らせません」

毛先がふさふさした大きな尻尾を持った、素朴な少年。先程見た四本腕、電気、影の個性の男子生徒たち。茨のような緑髪が特徴的な女子生徒。

数人の受験者が集まり、蛇の少女を中心に巨大敵に向き直る。

「……かくくしかじか！というこじやあ、今言つた作戦通り行きましょう」

「おうー！」
「はい」

作戦会議を終えた少女たちは私に背を向け、駆け出した。倒したところで一点の得にもならない障害物を、取り除くために。これ以上の負傷者を増やさないために。もう動けない、逃げることも出来ない私たちのために。

足が痛い。誰にも見えない傷が腫れ上がって、とても辛い。けれど。

「私、も……ヒーローに……なるんだから！」

痛む足を引きずり、立ち上がる。背後から彼らを狙う数体の小さな仮想敵に向かい、無我夢中で石を投げつける。ロボットの意識を、彼らに向けさせない。巨大な敵に立ち向かう彼らの邪魔は、させない。決定打を持たない私には、これくらいしかできない。だが、なにかをしていたかった。彼らの助けになりたかった。

「ありがとう、葉隠ちゃん！」

髪から伸ばした大蛇を敵の足に絡ませ、動きを封じながら、擦り傷まみれの少女が振り返った。目隠しをしているのにこちらの動きが見えているようで、不思議だ。こんな追い詰められた状況で微笑んでいるのも、とても不思議だった。

金髪の少年が背後からの電撃でゼロポイントを怯ませる。その隙に蛇の少女、茨の髪をした女子が右足、左足の動きを封じる。そして鳥の頭をした生徒が影を伸ばし、力自慢の四本腕と尻尾の少年を掴み、ゼロポイントの眼前まで勢いよく投げ飛ばす。

「いっけええええええ!!」

二人の全力を乗せた一撃に、顔面の装甲が崩れ去った。くらりと頭を揺らした敵はそのまま——轟音を立て、砂埃を撒き散らしながら地面に崩れ落ちた。

落下してくる二人を、長髪の少女二人がそれぞれ蛇と蔓で受け止める。

傍観していた受験者たちのどよめきと、喝采。彼らはたった数人で、しかも即席のチームで、ゼロポイントに立ち向かった。他の誰もが「敵わない」と背を向け逃げ出した相手を、足止めどころか完全に打ち倒してしまった。

電撃を放った金髪の少年が興奮したように叫び、即席のチーム全員とハイタッチを交わす。

「うエいうエうい! すげえ、すげえよ俺ら! 足止めどころか倒しちまった! マジでヒーローじゃん!」

「まあ、倒したところで俺たちに褒賞ポイントなどないがな」

「それでも負傷者たちを守れて良かった」

「無償の奉仕こそ、真の救世主ヒーローです……」

興奮冷めやらない金髪の男子に、鳥の少年と、四つ腕の長身、茨の少女が苦笑した。蛇の少女は倒れ伏した巨大ロボットを眺め、呟く。

「やったか……!?!」

「それフラグだからやめて?」

蛇の少女がB級映画並みのフラグを立て、尻尾の少年が突っ込みを入れた。心配せずとも、もう大丈夫だろう。だって——。

『Hey Hey Hey~~~~~y!! 試験終了だぜ!!』

長いようで短い試験が終わった。私は限界だった体の緊張を解き、座り込んだ。誰かがこちらに駆け寄ってくる。けれど私は誰にも見えない涙を零したまま、動けなかった。

何体かの仮想敵を倒したが、あれだけでは足りないだろう。どうせ私は不合格だ。

「さつきはありがとう！これからよろしくね、葉が……あつ、お名前訊いてなかったわよね？」

「……葉隠透。でもこれからなんて、ないよ」

「いいえ。あなたは絶対に合格できる。大丈夫よ」

力強く”大丈夫”を繰り返す誰かに、私は思わず顔を上げた。固く目隠しをした彼女と視線は合わない。代わりに、髪に咲いた蛇たちの目がこちらを見つめていた。

彼女は極めて女性らしい、しかし誰かを真似たような不慣れな口調で、少年じみた笑みを浮かべた。

「あたしは爆豪瞳巳。『ちょーカッコいいヒーロー』ミッドナイトみたいなになり来たの！」

治療を終えた会場からの帰り道、彼女はあの有名な金色の飴——
ヴェリタースオリジナルを一粒、手渡した。

彼女と別れ電車に乗り込み、私はそれを口に含んだ。

「……また会えるかなあ」

彼女の「大丈夫」という言葉を思い返し、私はまた目蓋を赤く腫らした。舌で転がす飴玉はどこまでも甘く優しい、キャラメルとバター
の味がした。

「ウワアアア葉隠ちゃん超絶可愛かったな〜！」

入試終了後の夕方。帰宅した私はシャワーを浴びて汗を流し、髪を乾かし、ベッドの上をごろんごろん転がって身悶えていた。

葉隠透。ヒーロー名は『インビジブル・ガール』。1-Aのムードメーカー役の、明るくお茶目な女子だ。元々好きだった登場人物に会えたことで、シャワーを浴びて頭を冷やす（物理）をしても興奮が冷めやらない。さらに、葉隠だけでなく他のA組、B組生徒とも知り合えてしまった。共闘なんてしてしまった。

「尾白くん普通に良い人だったな。障子くんは漫画よりムキムキだっ

たかも。常闇くんマジ中二語彙だった。上鳴くんの電池切れウェイ状態見たかったな。B組の塩崎さんはすごい美人だった……」

原作の登場人物との会話を思い返し、ベッドの上でにまにまとしてしまう。元々、私はヒロアカオタクだったのだ。以前の世界でも、新刊は毎回書店で予約していた。あの日だって、帰りに親友と共に書店に寄って、三十三巻を受けとる予定だった。

相変わらずごろごろしながら、誰にともなく呟く。

「葉隠ちゃんと喋ったよ！って言ったら、あの子驚くだろうな。……あーあ。どうせなら今日会ったみんなとLINE交換しとけばよかった」

誰もが生きたい心地がしない合否発表までの時間も、私は余裕そのものだった。私が試験に落ちることは、まずないと確信していた。

私は転生者で高校受験は二度目なので、筆記はかなり自信がある。そして何より、実技での採点方法を予め知っていた。

試験は原作通り、市街を模したA～Fの会場に分かれ、一、二、三の点の仮想敵を倒し、その点数を競うものだった。受験者は「多くの敵を倒せば合格できる」と認識し、撃破ポイントを稼ぐ。実際それも間違ではないし、学校側も他の加点方法は説明していない。だが、この試験には隠された加点項目が存在した。

『救助ポイント』。負傷した受験者をどれだけ助けたか、他の生徒のアシストをしたかを得点に換算するものだ。

転生して十年が経ったので、細かい数字の記憶が曖昧だが——原作で出久が獲得した点数は、撃破ポイントがゼロで、救助ポイントが五十か六十くらいだった気がする。

彼は巨大なゼロポイント敵から麗日お茶子を救い、一気に大量の点を稼いだ。出久はこの救助ポイントがあったからこそ、雄英に入学できた。

私は原作を知っている。突然巨大な敵が出現することもわかってきた。

私に必殺と言える強力な技はないし、装甲の硬い三ポイント敵を一撃で仕留めるのも難しい。腕力、機動力自慢の他の受験者と張り合っ

ては、負ける恐れがある。点数が足りず、合格できない可能性がある。だから、考えた。撃破数稼ぎはそこそこにして体力を温存し、来るべきゼロポイントに備えること。

あの巨大ロボットが出現すれば、必ず逃げ遅れる負傷者が出る。ならばその怪我人を助け、大量の救助ポイントを稼ごう。それが私の作戦だった。

本当は、あんなふう「一緒に戦おう！」と派手に呼び掛けをするつもりはなかった。だが、黒布で覆い隠した両眼の先。髪に咲かせたいくつもの蛇の目は、一方的に見知っていた葉隠透を捉えてしまった。

救えなければ、と思った。彼女はこんなところで脱落する人間ではない。彼女は物語に必要な少女だ。

それに——ミッドナイトなら、きっと真つ先に飛び込んでいく。救いを求める人を放置なんてしない。出会った春の日も、惨劇の夏もそうだった。誰より尊いあの人はいつだって、私の為に全力で走っていてくれた。

睡さんは、最高のヒーローだ。だから私は、ミッドナイトの真似事をしたに過ぎない。口調だってそうだ。私はあの人に少しでも近づきたくて、模倣を続けている。

別れ際、葉隠を慰めようと渡した飴も同じだ。あれだって、幼い日の勝己の真似事ではない。

そして、一人称も。自らを「あたし」と言っていた瞳巳ちゃんに倣い、そうしている。

大切な思い出を反芻し、決意を新たにす。私が生きる意味を。掴むべき未来を。

私は三十二巻までの原作を知っている。ミッドナイトの死を知っている。だが——内通者の正体を、知らない。

「暴いてみせる」

物語から察するに、内通者はA組、もしくは教師陣の中にいる。内通者さえわかれば、運命は変えられる。ミッドナイトの死は避けられる。未来の生死さえわからない勝己と出久を、この手で守れる。

一つ。 雄英に入り込み、内通者を暴き出すこと。
二つ。 ミッドナイトの運命を捻じ曲げ、勝己、出久を守ること。
三つ。 瞳巳ちゃんと姉たちの夢を継ぎ、両親に恥じない最高のヒーローになること。
それが、私が成すべき使命だ。

質素なアパートのベルが鳴る。 ミッドナイトと暮らした一軒家とは違う、未だに聞きなれない音だった。

モニターも見ず「はい」と玄関を開けると、思ったとおり、そこには不機嫌にポケットトに手をつ突っ込んだ勝己が仁王立ちしていた。

「てめエクソ蛇……モニターくらい確認しろっていつつも言ってるだろが！」

「だって気配でカツキーンってわかったんだもの。 別にいいじゃない」

「あの露出クソババアの喋り方やめろやボケ」

「はあい。 で、今日の夜ご飯はなあに？ おばさんの作るものは何でもおいしいけど……私、カツ丼食べたいな！合格しますようにつて験担ぎ！」

「落ちろ。 そして埋まれ」
「埋まれ!？」

私は公安やレディ・ナガンと”色々”あつて、一月ほど前から勝己の家の近くで一人暮らしをしていた。 そんな親戚を心配して、爆豪家は私のぶんの食事も作って、ご近所のことまで勝己に届けさせてくれる。

彼から手提げを受け取りお弁当箱を開いた私は、歓声をあげた。

「うわほんとにカツ丼だ！いつもありがとう、おばさん。 そして配達ありがとうUberカーツ」

「黙って食え。 一秒も静かにできねえのかクソ蛇」

冗談めかして希望を言ったが、今日は本当にカツ丼だった。 二人の合格を願うおばさんが、気を利かせてくれたのだろう。

テーブルを挟んで箸を動かす勝己はしきりに「落ちろ」「てめエみたいなザコにヒーローは向いてねえわ」と眦を吊り上げてぶつくさと呟いた。

「記念受験のつもりか？ 雄英だぞ？ てめエなんかどうせ、落ちるに決まってるんだろ」

「受かるよ。同じクラスになったらよろしくね」

「ハッ。あんな簡単な試験で傷作ってるようじゃ、不合格に決まってるわ馬鹿」

勝己が箸を置いて指さしたのは、向かい側に座る私の肘あたりだった。見下ろすと、ミミズ腫れのような小さな掠り傷がついている。

「あー、よく見つけたね。多分、走ってこけた時についたやつだ」

「何度も言わすなボケカス。お前はヒーローになれねえ。勝手に走んな」

「何度も言ってるけど、やだよ。傷一つなくヒーローになれるわけないじゃん」

「ウツツツゼエ！ 殴んぞ!!」

「痛い！ もう殴ってるよ!」

勝己はヒーローになりたいという私の願望に、事あるごとにけちをつける。「お前には無理だ」と決めつけ、鼻で笑う。人生二週目の私は、その意図がわからないほど馬鹿ではなかった。

だが、彼は私を強く否定できない。いつも出久にするように容赦なく痛めつけ、強制的にヒーローを諦めさせる事もできない。

私は、勝己にとつての古傷だ。無力の象徴だ。”死”のイメージそのものだ。故に彼は、私を強く攻撃できない。私を見る度、彼は自らの無力を思い出さざるを得ないのだ。

彼の眼前で、何度も死にかけた。彼が普段「無個性」と馬鹿にする出久と同様に、無力だった。爆豪勝己は、ちっぽけな少年でしかなかった。伸ばした手は私に届かなかった。私の存在は、勝己の矜持に敗北の文字を深く刻み込んだ。だからこそ、彼は私が”走る”ことを何より恐れている。

ヒーローとは、死と隣合わせの職業だ。そんな職業を、他ならぬ私

が本気で目指している。かつて守れなかった少女が、自らの意思で死地に飛び込もうとしている。あの夏の日に死んだ姉——勝己にとっては親戚の優しいお姉さんの遺志を継いで、修羅の道を進もうとしている。

勝己の心中は、想像するまでもないだろう。

私はその苦悩から、目を逸らし続けている。見えない振り続けている。

ネチネチと無駄に豊富な語彙力で文句を垂れる勝己をエンドレススルーし、夕食を食べ終えた。彼は怒りに任せて勢いよくわしと弁当箱を洗い、水気を拭き取ったそれを保温バッグに戻すと、すぐ近くの自宅に帰って行った。

ブチ切れながら洗い物をする姿は正直、動画に撮って出久に送りたくらい面白かった。次はやろうと思う。

苛々と肩を怒らせながら歩く後ろ姿を、見えなくなるまで見送った。いつもポケットに入れているヴェリタースオリジナルを口に含む。前髪を束ねる花のピンを留め直し、何かに挑むよう紫紺の星空を見上げる。

「絶対、死なせない」

ミッドナイトも、勝己も、出久も。正気を失ってしまった両親だつて、取り戻してみせる。爆豪瞳己は、ふざけた運命の横っ面を蹴り飛ばしてみせる。

言い忘れてたけど、これは私が最高のヒーローたちを守るための物語だ。

8. 爆豪瞳巳は入学する

「あんたはもう、自由だよ」

今から数年前、私がまだ小学生の頃だった。

たった一度だけ姿を現した彼女は疲れきり、やつれ果てた表情でそう言った。そのままゆらりと踵を返そうとした彼女はしかし、私を見て力なく唇の端をつり上げる。

いとけない子供が膝を擦りむいてしまった。それでも泣くのをこらえ、精一杯の笑顔で「大丈夫だよ」と虚勢を張っている。そんな、見ているこちらの胸が張り裂けてしまいそうな笑顔だった。

「ああ、でも。ヒーローを目指すのだけはやめておきなよ。あんたもきつと、向いてない」

あんたは——瞳巳は、一人で電車にも乗れない弱虫だしね。

レデイ・ナガンは一度も振り返らず、どこかへ去っていく。向かうあてがあるとは思えない、頼りない、迷子の少女のような足取りだった。

ロングスカートの裾は焼け焦げ、蒼白な頬は煤で薄く汚れていた。

「いつてきまーす」

インテリア雑貨の一つもない殺風景な玄関で、遠慮がちに呟く。もちろん、返事など返ってこない。逆に返って来たら怖すぎる。怖すぎて、犯人を引きずり出してコブラツイストをかけるしかない。私は少し前からここで一人暮らしをしているのだから。

一人暮らしを選んだ、というより選ばざるを得なかったのは、ミッドナイトが雄英の教師をしているからである。私がまだ小学生の頃、彼女は校長直々の依頼を受け、雄英で教鞭をとり始めた。

雄英関係者のミッドナイトと、そんな彼女と共に暮らす受験者の私。彼女は、身内だからと入試で私を贖済するような真似は決してしない。現に私が試験を受けた今年は根津校長に申告し、試験内容には一切触れず、審査員も辞退した。ミッドナイトは、そういう人だ。だが、彼女の人となりを知らない世間はそうは思わない。

もし、私が彼女と同居しながら試験を受け、合格したら。人々は「ミッドナイトが試験の課題を事前に教えたからだ！ 依怙鼻肩だ！」と言い、騒ぎになるだろう。

ヒロアカの民衆、割とそーゆーところあるから……頑張ってる人に石を投げるヤバい奴とか、割と普通に居ちゃうから……。用心に越したことはない。

世間の非難からミッドナイトを守るため、私は受験シーズンの前から勝己と出久の家の近くにアパートを借り、高校の三年間を一人で過ごすことにした。といつてもどうせ夏頃には寮が出来る予定なので、ごく短い期間の仮宿なのだ。

花の香りが漂うお洒落な香山家とは正反対の、よそよそしく無味無臭な201号室に鍵をかける。分厚い鋼板ドアが閉まる重苦しい音に、気分まで重くなった。

冷たい鍵を握りしめて、今までのあたたかな生活を思い出してしまふ。飼い猫のおすしちゃんのかな毛並みが、恋しくなってしまう。

およそ八年も暮らしたあの家と比べたって、仕方がない。ミッドナイト・ロスはまだ早すぎる。頭ではそうわかっていても、生まれて初めての一人暮らしは味気なく、心細いものだった。彼女との生活が楽しく、心地よかったからこそ、余計に。

雄英の制服———プリーツスカートを握りしめ、一つ呼吸をして心を落ち着かせる。

「……睡さんに甘えちゃダメ。あの人を助けるために離れたんだから」

たとえミッドナイトが作り置きしてくれる、おいしい朝食がなくなっても。私に作れる精一杯の朝食が、味気ないふりかけご飯かカップ麺だけだったとしても。私の生活能力が自分で思っていたより遥かにクソザコだったとしても。私は雄英に通い、大切な人々を救わなくてはならない。

金色の両目が五条悟スタイルで覆い隠されているのを確認し、てんてんとアパートの階段を降りて、バス停に向かう。

ミッドナイトに贈られたお気に入りのおハンカチは持ったし、携帯の充電もきちんとある。「目を隠してる黒い布、五条悟みたい！」とクラスで言われた場合に備え、彼の物真似だって練習した。忘れ物、準備不足で笑われることはないはずだ。

乗るべきバスが速度を落としつつ、近づいてくる。さすがに入学初日は一本早い時間のバスに乗ることにしていた。

もし私がA組なら、担任は相澤先生だ。彼の前で初日遅刻なんてやらかそうものなら、どうなるか。彼は何の迷いもなく「除籍処分」を宣告し、それは即日実行されるだろう。相澤消太ってそういう……そーゆーところあるから（後方腕組原作知識有転生者面）。

仮にB組だったとしても、まずいことに変わりはない。ブラドキング先生だって相当に厳しい人だし、何よりB組の面々が怖い。物間寧人は絶対、卒業まで遅刻ネタで馬鹿にしてくる。花京院の魂を賭けてもいい。

そしてせっかく入試でいい所を見せて好感度を稼いだ塩崎茨にも、失望されてしまう。美人の蔑み顔は、とても恐ろしい。それは避けたかった。

愛知県某駅——雄英の最寄り駅を目指すバスに揺られ、ミッドナイト・ロスの感傷的な気分のまま、過去に思いを馳せる。

そうだ、あの日もこんなふうなバスに揺られ、ミッドナイトと隣り合って座っていた。どこかひりついた空気の中、二人で東京の公安本部を目指し、何度もバスを乗り継いだ。

「電車ならもつと速く行けたのに、面倒をかけてごめんなさい」「私の心もつと強ければ」と、何度も彼女に謝りながら。

私は、電車に乗れない。

転生前の、ナイフで滅多刺しにされた記憶が網膜に焼き付いている。もう十年も前のことだというのに、あの日の何ひとつとして色褪せてはくれない。親友の頬のほくろの位置さえ、思い出すまでもなく目蓋の裏だ。

彼女と自分の血溜まりの匂いを思い返しては噎せかえり、どうして

も吐いてしまう。情けないことに、ただホームに立つことさえ苦痛だった。

雄英への道のみでは電車と地下鉄で約四十分と、比較的通いやすい。対してバスのみでの通学となるとその倍以上はかかり、大きな時間の無駄になる。第一、「電車にも乗れないヒーロー」など、情けなくて瞳巳ちゃんに顔向けできない。

ミッドナイトに心配をかけないためにも克服しなければいけない課題だと、何度も挑戦した。小学生の頃、電車に乗る訓練を何度もした。

しかし、駄目だった。ある時は有りもしない親友の姿を幻視して、ホームに胃の中身を全部ぶちまけた。またある時はあろうことか、偶然駅で鉢合わせた出久に彼女を投影して、泣いてすがって狂乱した。

そんなことを何度か繰り返すと、駅員に「要注意人物」とみなされ、やんわりと乗車を断られるようになった。吐いたり叫んだり色々と迷惑をかけたので、当然だと思う。

幸い出久には一度しか遭遇しなかったのでよかったが、気持ちの悪いところを見せてしまったと、心から謝った。

「出久、ごめんね。ところで私、「静岡某駅のヤベー奴」として都市伝説になってるんだって。同じクラスの子が言ってた。ウケるね」

「……全然笑えないよ、瞳巳ちゃん。なんだよ、それ。誰が言ってたの？ やつと君への虐めがなくなったと思ったのに、そんなの」

一切の表情を消した幼馴染みが、私を見つめる。自分がいくら虐められようと仕返しの一つもしない出久が、拳を握りしめ、肩を震わせ怒っていた。

冗談だよ、と軽薄に言っただけで肩を叩いてみせても、彼の怒りは煮えたぎったまま治まらなかった。この世界の主人公は原作通りとても優しく育ってくれたようで、安心した。

「冗談だよ出久」

「……ごめん」

「どうして謝るの？」

「だって……僕には結局何もできないから。かつちゃんの言う通り、

無個性
「デク」だから、

「っ出久!!」

互いに怒り合う光景を、馬鹿みたいだと思った。

その日、私は電車に乗ることを諦めた。都市伝説の噂は、静かに廃れていった。正体が私であることは、ばれていない。

まあ、そんなことはどうでもいい。とにかくそういった事情で、電車に乗れない私とミッドナイトは最寄りのバス停まで歩き、何度もバスを乗り継ぎ、公安本部を目指した。電車と新幹線で行けば一時間ちよつとで行ける場所だというのに、随分と長い回り道をしてしまった。

今日は、私の雄英高校ヒーロー科受験の許可を得に来ていた。私はまだ小学校六年生で受験までは何年もあったが、「あいつらは些細なことでもうるさいから。早く伝えるに越したことはないわ」と言うミッドナイトに従い、公安委員長の指示を仰ぐことにした。

だが、やつとたどり着いた公安本部で耳にした言葉は、信じ難いものだった。

「爆豪、瞳巳……？七歳の頃の個性暴発事件……？データにないですね」

「ない？そんなはずないわ。上層部ならきつと知っているはずですよ。二年前までは、ここで私と瞳巳の名前を言うだけで通じていましたし」

「いえ……二年前までの上層部と公安委員長は、その……人事異動や……火事などの事件に巻き込まれて、あの……」

受付の女性が、声を潜めて言い淀む。彼女の言葉に、私は二年前の記憶を呼び覚ましていた。

レディ・ナガン。ヒーロー社会の裏側に堪えられなくなってしまった、強く優しい女性。個性による殺人を犯した私を監視していたヒーロー。

二年前にほんの一瞬だけ報道された、公安本部での大火事。何者かによって執拗に燃やし尽くされたという、機密情報が詰まった委員長

室。何者かによって汚職を暴かれ任を解かれた、数人の上層部。原作通りの公安委員長殺害と、その事実すら隠蔽する国家権力。

「あんたはもう、自由だよ」

二年前、初めて姿を現した彼女はそう言った。ロングスカートの裾は焼け焦げ、蒼白な頬は灰色の煤にまみれていた。

私は二年越しに、真実を知った。レディ・ナガンは私の過去を燃やし、未来を切り拓いた。最早あの事件の詳細を知る者は、現委員長とエンデヴァーのみである。もしもメドゥーサの個性に関する記録が残っていたら、雄英への入学——ヒーローを目指すなど、決して許されなかっただろう。

彼女がなぜ、私のために動いたのか。ただの監視対象に過ぎない私に、何を思ったのか。一切は謎のままだ。

現公安委員長の女性と面会をしたところ、私の雄英受験とヒーロー志望は、拍子抜けするほど簡単に許可された。数年間個性の暴発がなかったため、条件付きではあるが一人暮らしも認められた。これについては、私の個性を制御し、教指導してくれたミッドナイトの功績が大きいだろう。

そしてどうやら新委員長は、以前の委員長とは全く異なる方針を持っているらしい。人材を使い捨て、都合が悪い者は即刻「処分」していた彼とは違い、新委員長は徹底した情報把握と諜報活動による「犯罪の未然防止」に努めていた。

それを可能にしているのは彼女の懐刀、ホークスの尽力によるものだろう。原作でも活躍していた彼が近くに居ないかと、覚えただばかりの『赤外線探知』（蛇のピット器官による索敵）で探るが、気配は拾えなかった。

メインキャラに会えるかとわくわくウネウネしていた髪が、急速に萎んでいく。「よしよし」と蛇くんたちの額を撫でていると、厳格な表情の新委員長が口を開いた。

「前任が命じていたあなたの行動制限は、一部解除します。ヒーロー志望も認めましょう。ただし、監視は継続します。一人暮らしをする

なら、ミッドナイトの管轄地域にすること。その目の制御が出来るようになったからといっても、あなたの個性の危険性は、依然として変わらない」

決して真つ白な善人ではない。ただ、前任のような深い闇色でもない。新委員長は目隠しで覆われた私の両目を無感動に見据え、静かに言葉を紡いだ。

「瞳を見つめれば、問答無用で即死。二階建ての民家以上にも及ぶ異形化。尾の一振り、爪の一突きで致命傷をもたらす、全身凶器。神話のメドゥーサさながらのその「力」は、非常に暴力的です。ヒーローではなく、ヴィラン向きと言えるでしょう」

「……っ！お言葉ですが、その言い方は……！」

「落ち着いて、ミッドナイト」

委員長の言葉に憤り、机に掌をついて立ち上がりかけるミッドナイト。私は彼女の拳に手を添え、再びソファアームに座らせた。

対岸の委員長はそんな私たちなど意にも介さず、無機質に続ける。

「あなたは、非常に厄介な個性を持って生まれました。———どうか過去に囚われ、ヴィランに堕ちることなきよう」

窓の外を眺めながら昔を思い出していると、いつの間にかバスは終点、雄英最寄り駅に着いていた。バスを下りると、真新しい雄英の制服を着た新入生たちが、はしやぎ合いながら学校への道のりを歩いている。

その集団の中に、一際目立つ茨の冠の少女を見つけた。一周まわって逆に目立つ、透明な少女を見つけた。

「おはよう塩崎さん！葉隠さん！」

「おや、あなたは……楽園エデンの蛇」

「あーっ！あなたは飴の人々！」

「ちよ、変なあだ名ついてるし」

「また会えたあ〜！」と感激して抱きついてくる葉隠透の背中を宥めるように撫でる。ちなみに私は蛇の赤外線感知能力を通じて、葉隠の姿が見えている。誰も知らない可愛いお顔も、肩口で揺れるゆるふわ

ウェーブ髪も、しっかりばっちり見えている。可愛い。

そんな私たちのじやれ合いを静かな瞳で見つめる塩崎英が、唇を開いた。

「……歓談も良いですが。あまりふざけていると入学式に遅刻してしまいます、楽園の蛇よ」

「あ、ごめんなさい塩崎さん。塩崎さんもぎゅーつとする？」

「いいえ、私は別に、」

困惑顔が可愛いので、問答無用でぎゅーつとした。抱擁はミッドナイト仕込みの社交術である。赤外線による体温感知で、塩崎さんの体温が急上昇したのがわかった。可愛い。

三人並んで、雄英高校の門をくぐる。

今日は四月八日。私は十年の時を経て、高校の制服を身にまとっていた。あの日を思い出す、遅咲きの桜が散っていた。どこか遠くで鶯が鳴き交わしていた。

けれど私は、無力だったあの時とは違う。人に助けを求め、目の前で親友を失った私ではない。もう、何一つとして失わない。理不尽に奪われない。

配られたA組のクラス名簿に、『口田甲司』の名前はなかった。見せてもらったB組のものにも、どこにもなかった。

もう二度と、理不尽に奪われない私になる。そう嘯いて私は、誰かの居場所を奪っていく。存在しないはずの、爆豪勝己の従兄妹が、物語を理不尽に歪めていく。

私はA組の扉を堂々と開き、大好きな物語に割って入った。〃一方的に見知った〃いくつもの顔が、私を見つめる。

——この中の誰か一人、もしくは教師陣は、裏切り者である。本心を許すな。常に疑え。「好きなキャラクターだから」という情は捨てる。

一瞬、覚悟が揺らぎ震えた私の手を、「大丈夫？」と葉隠透の透明な手が握る。

教室の奥、陽炎の瞳が見開かれ、私の隠れた両目と交差した。

「……何度も言ったよなア？入学は辞退しろって。てめエはヒーローになれねえって……！」

「……うん。でも来ちゃったよ、カツチャマン」

勝己の表情が、怒りと苦悩に歪んでいく。それでも見慣れた従兄妹の存在と葉隠の手に、不思議と全身の震えは収まっていた。

爆豪瞳己は口田甲司の夢を奪い、平然と席についた。勝己と出久に挟まれた座席、この場所が私のヒーローアカデミアだ。

9. 爆豪瞳己は何も知らない

爆豪瞳己は何も知らない。私は紙面の上で踊る彼らの過去、未来、秘めた内心を垣間見ただけの、路傍の石である。

香山睡、緑谷出久、爆豪勝己をどんな手を使ってでも守り抜く。――そんな決意を抱いた、取るに足らない毒蛇である。

入学式には数十分の余裕をもって到着したというのに、A組の顔ぶれは既に八割以上が揃っていた。さすがは国内随一のエリート校、根が真面目な生徒が多いのだろう。

従兄妹である勝己にわあわああと一方的に捲し立てられた私は、クラス中の気遣わしげな視線を集めながらも、素知らぬ顔で席についた。……私の二つ後ろの峰田実が尋常ではない眼力で見つめてくるのは、気付かない振りをした。

A組は名前順で机が決められているので、同じ爆豪姓をもつ私たちの座席は当然、前後に並んでいる。

私のすぐ目の前に柄悪く腰かけた勝己は、着席してもなお後ろを振り替えて「ネチネチ」と言い募っていた。

「そのゴミ個性はヒーロー向きじゃねえって何度も言つたらオが脳味噌まで蛇になったンかカスだいたいめエは元がアホなんだよ自分で自分の世話も出来てねえだろ三年前だって皿洗いで、」

「せんせ〜席替えを希望します」

「うっせーわ話聞け！あと教師はまだ来てねえだろうが目隠しブス！」

「瞳己ちゃんは今日も可愛いわ」

「あゝあゝあゝ!!!」

勝己はみみつつく過去の出来事まで掘り返して、私の机を叩きながら喧しく喚いていた。蛇の目を通して周囲を窺うと、すぐ右隣の瀬呂、その前後の耳郎、常闇が、「大丈夫かコイツら」と言わんばかりにこちらを見つめていた。轟はガイダンス資料に目を落としていた。

この程度の罵声と剣幕、私は家族として慣れきっている。だが、初

めてこんな光景を目にした彼らはそうでないだろう。初日から制服を着崩した男子に女子が一方的に怒鳴りつけられる状況に、困惑している。現に、A組ではどちらかというと普通の女の子よりの感性を持つ耳郎は、「助けるべきか」と迷いを帯びた双眸で私を見つめている。優しい子だ。そんな彼女や他の生徒に、不要な心配はかけられない。私は黒髪に二匹の蛇を咲かせ、脳内で命令を下した。

「クソ蛇女ア！無視してんじゃねえ話聞ヴあつ」

「♪坊や♪よい子だねんねしなく」

髪の黒蛇を伸ばして勝己の口元をぐるぐる巻きにする。さらに机に上体を縛り付け、手首を後ろで手錠のように拘束して、伸縮する髪を切り離した。

ミッドナイトとの特訓の末、私の蛇は塩崎茨のツルのように、切り離し自在になっている。伸縮・切り離し自在。目の代わりにもなるし、とても可愛い。一家に一台瞳巳ちゃんが必須になる日も、そう遠くないだろう。

勝己が窒息しないよう、さすがに鼻は塞がないでおいた。机に頬がめり込みそうなくらい頭ごと強めに縛ったが、彼なら大丈夫だろう。安全確認、ヨシ！

目を三角にするという物凄い顔芸を晒して暴れる勝己から視線を上げ、教室の掛け時計を確認する。原作で相澤先生が登場するのは、出久とお茶子が登校してきた直後だ。今の時刻は、入学式開始の数十分前。たしか出久は遅刻ギリギリで家を出た描写があったので、もうしばらくは落ち着いてクラスメイトと話ができるだろう。

改めて教室を見渡す。私に宛がわれた席は窓際の、前から二番目だった。窓際の生徒は先頭から順に、勝己、私、出久、峰田、八百万の並びだ。ヒーロー科の定員は、二十人。口田を押し退けて本来存在しないはずの私が入ったので、原作の並びとは一つずれている。

蛇のピット器官を通じて広範囲を赤外線探知したが、物語の主人公——慣れ親しんだ幼馴染みの気配は未だどこにもない。雄英の校舎にすら入っていないようだ。

近くに雑談できる生徒がいなかったかと探すが、周囲はなぜか困惑と驚

きの表情でこちらを見つめていて、話しかけにくい。五条悟のような、怪しげな目隠しをしているからだろうか。……ただし峰田は充血した目で私と蛇の拘束、胸や黒タイツ越しの脚を見ていた。

そんななか、席を立って遠慮がちに歩み寄ってきたのは葉隠と尾白、そして障子と上鳴、常闇。共に入試を戦い抜いた顔ぶれだった。すぐ側でもがく勝己を三度見、四度見しながらも、上鳴がへらりと笑って片手をあげた。

「よっ、瞳巳ちゃん久しぶりー！あ、俺のこと憶えてるよな!?俺、俺だよ俺！入試で大活躍した上鳴電気！まさか会場Fメンバーほぼ全員集まるとか、奇跡だよなあ」

屈託のない彼の言葉を皮切りに、会場Fメンバーが一斉に表情を和らげ、口を開いた。

「ね〜！また皆に会えて嬉しい〜！前も名乗ったけど、私は葉隠透だよ！好きに呼んでね！」

「えーと、爆豪さん、だよね？あのときは目を覚まさせてくれてありがとう。俺は尾白猿夫ましらお、個性は見ての通りの【尻尾】。これからよろしく」

「これも数奇なる『運命』か。……フツ、いいだろう。共に戦場を駆けたお前たちを、我が同胞として認める」

「以前も言ったが、改めて名乗ろう。俺は障子。こんなナリだが、気軽に話しかけてくれ。級友としてよろしく頼む」

「ほわぁ」

私は元々、ヒロアカファンである。小、中学生の少ないお小遣いをやりくりし、グッズを買い集めるほど大好きな漫画だった。そんなA組の、メインキャラクターたちに囲まれている。一部にはもう既に、苦難を乗り越えた仲間として認識されている。現実味を帯びない事実、圧倒された。

窓際席に座りながら、彼ら四人の顔を順繰りに見上げた。どの瞳も私を見つめ、一点の曇りなく煌めいている。

葉隠、尾白、上鳴、常闇、障子、塩崎。彼らは内通者でないと、確信していた。もし彼らのうち誰かがヴィラン側なら、限りある入試時

間を犠牲にしてまで負傷者の救助などしない。私の呼び掛けに応え、意味のないゼロポイント討伐などするはずがない。そんなことで時間を無駄にし、不合格のリスクを背負うはずがない。

彼らは、信頼できるクラスメイトだ。『始末すべき裏切り者』ではない。勝己や出久を何度も死の危険に晒し、ミッドナイトを死に追いやる一因を作った、汚らわしい屑ではない。ならばいざという時私の味方についてくれるよう、友好的に振る舞うべきだろう。「そういうえばあの時、クラスの○○が物陰に隠れて誰かと電話してたよ」だとか些細な情報も話してくれるよう、優しく善良な友人の素振りをしよう。

窓際の席を囲み、彼らと和やかに言葉を交わした。ミッドナイトを真似た笑みを浮かべ、凜と背筋を伸ばして佇んでいれば、誰もが爆豪瞳巳を信頼する。「君は素敵なヒーローになれる」と、誰もが私を認めてくれた。

内通者に、私の疑念を感じさせないように。裏切り者を炙り出そうと光らせる目を、気取られないように。完璧に振る舞う自信はあった。『瞳巳ちゃんの体』は、まだ十五歳の高校生だ。しかし私の中身は、彼らより十歳ほど上だ。裏切り者を見つけるまで、普通のクラスメイトとして、完璧に演じきってみせる。

「てか瞳巳ちゃん、LINEやつてるう？交換しない？」

「ふふ、そのナンパが通用するのは平成までよ、上鳴くん」

「瞳巳ちゃん瞳巳ちゃん！ね、最初は私と交換しよう？私が一番乗りがいいー！」

「ほわあ（仕方ないわね、葉隠ちゃんは）」

「爆豪さん溶けてる、顔面溶けてるよ！」

「大丈夫なのか漆黒の蛇!？」

「……葉隠の個性は、『人体を溶かす能力』なのか？」

「ちがうよ障子くん!?瞳巳ちゃん、元の顔に戻ってえ！」

か、完璧に演じきって……みせる！だがそれはそれとして、葉隠透が可愛すぎる。私は蛇の目を通して、原作三十二巻まで進んでなお不明だった葉隠の素顔が見えている。こんな美少女フェイスなんて、聞

いていない。

というか、全体的にA組女子の顔面偏差値が高すぎた。漫画でも、「A組もB組もみんな可愛いすぎ……顔採用か?」と思っていたが、実際に目になると、モブ生徒との差がすごい。作画の気合いが違う。先程まで一緒だったB組の塩崎茨も、息を飲むほどの美人だった。

「瞳巳ちゃん」も、艶やかに波打つ黒髪に黄金の双眼、日焼け知らずの白い肌をした可憐な美少女だ。ミッドナイトや出久の母、勝己の両親にも、散々猫可愛がりされてきた。しかしA組女子は、そんな私もびつくりするほど可愛い。スタイルがいい。

——閃いた。もういつそ、ヒーローじゃなくてアイドルを目指さないか? 歌って踊ってオールフオーワンおじさんを改心させて、ハッピーエンドでよくないか? 死柄木弔も憎しみなんて忘れて、A組箱推しドルオタになったらよくないか? A組の人数分、二十色のサイリウムを振らないか?

私が宇宙猫(蛇)状態になっていると、眼鏡をかけたいかにも生真面目そうな男子生徒が、きびきびとした動作で歩み寄ってきた。

学級委員長(になる予定)の、飯田天哉だ。すごい。先程から、原作キャラしか出てこない。ここはA組だから当然なのだが。

彼はロボットじみた足運びで私たちの前にぴたりと停止すると、厳めしく眉を寄せ、左手を胸に当て右手を謎に動かし、礼儀正しく自己紹介を始めた。その右手の謎ジェスチャーがどんな意味を持つのかは、わからない。

「歓談中、すまない。ぼ……俺は私立聡明中学出身の飯田天哉という者だ」

「あらはじめまして、飯田くんね。あたしは爆豪瞳巳、個性は「蛇」よ。これからよろしくね」

「あ、ああ個性紹介まで丁寧にありがとう。こちらこそよろしく。俺の個性は……、ではなく! さっきから気になっていたんだが、その彼は大丈夫なのか? 顔が物凄く……物凄いことになってるぞ!? ヒーロー志望として誰か助けてやろうとは思わないのか!?!」

「彼?」

「目の前の金髪男子生徒だよ！君、目隠しで目が見えていないのか？」
飯田は、独特のジェスチャーで私の向こうを指し示した。その先を
視線で辿ると――。

「ン、ン、ング~~~~!!!」

「うわ顔」

上半身を頭ごと机に縛り付けられ口を塞がれ手首を後ろで拘束さ
れながらも、個性の爆破を連発して怒りを表明する勝己の姿があっ
た。白目を剥いた目の形が三角になっている。A組と癒しのひとと
きを過ごしていたせいで、完全に忘れていた。

私は「君が……やったのか？」とドン引きする飯田に無害な少女ア
ピールをしようと、眉尻を下げて微笑んでみせた。

「彼は今喋れないみたいだから、代わりに紹介するわね飯田くん。こ
ちら、爆豪勝己。私の大切な家族よ」

「タイセツナカゾク、今まさに死にかけの魚みたいになっているが!」
「――見くびらないで。カチャトーラは、強い。そんな柔な人間
じゃないわ」

「え？そ、そう……なのか？」

「そうよ」

困惑する飯田に相槌を打ち、おろおろする葉隠、尾白たち五人に笑
いかけ、勝己の拘束を解く。時計を見ると、もうすぐ出久が登校し、相
澤先生が教室に入るであろう時刻だ。勝手に個性を使っているとこ
ろを見られたら、初日から睨まれてしまう。

最後に口の蛇を外すと、彼は人間とは思えない言葉を発して怒り
狂った。

「?!クソj△、・?○m) 蛇g j z # ~」

「痛い痛いカツキー又痛い抉れる」

!!!!!!!

立ち上がり、両掌を盛大に爆発させ、掴みかからん勢いで捲し立て
る従兄妹。というか実際掴んでいる。私の髪をわし掴んで引っぱり、
暴言を吐きながらアイアンクローで頭部とこめかみを圧迫している。
シンプルに痛い。どうしてそんな酷い事ができるのだろうか？

理由はどうあれ、聞くに堪えない暴言を吐きながら、男子が女子の

髪を強く引つ張りアイアンクローをキめている。そんな光景を見て何も思わない人間は、A組にはいなかった。

「おい、君！何の罪も……ない？女子生徒に向かって暴力なんて、本当にヒーロー志望なのか!？」

「そうだよ、まあ何の罪もないことはないけど……瞳巳ちゃんが痛がってるよ金髪くん！」

「うっせクソモブ眼鏡ども！最初に手出してきたのはこのブスだわ眼鏡買い換えろや！」

側の五人と飯田は、「いだだだ」と痛みに呻く私の頭を掴む勝己の手を払いのけ、助けだした。第三者に介入された彼は、ますます以て苛立ちの声をあげた。

その矛先は、喧嘩の邪魔をした挙げ句私と勝己の間に割って入った飯田に向かった。

「つーか誰だよてめエどこ中だよ端役がぶつ殺すぞゴミカス七三」

「なっ……ブツコロ……!?!」

「ヒュウ〜流れるような罵倒……」

「酷いな……」

「七三は悪口に入るの?」

私の席の周囲でいきさつを見ていた上鳴と尾白、葉隠が苦笑し、障子、常闇が呆れ顔で遠い目をする。

彼ら二人の口論を眺めていると、遠慮がちにA組の大きな扉が開かれた。物語の主人公が、やっと登場したのだ。

出久はそろりと教室に足を踏み入れ、真っ先に窓際席に目をやる。苦手意識を持つ飯田と勝己を認めた双眸が歪み、しかしその近くのもう一人の幼馴染みに気付き、僅かに顔の強ばりを和らげた。手を振って「出久の席はここ」と私のすぐ後ろの机を指差すと、どうしてか幼馴染みは感極まったような、泣きそうな表情で唇を噛み締めた。

「おや?君は入試の……!」

新たなクラスメイトの入室を察知した飯田が、早足で出久に歩み寄る。後ろからやってきた麗日お茶子が出久に声をかける。さらにその背後の廊下から相澤先生が寝袋姿で現れる。にこりともしない相

澤先生が、「早速だがこれを来てグラウンドに」と、困惑する生徒たちに体操着をばらまく。

原作をなぞる一連の流れを、私は他人事のように眺めていた。

「入学式は？なんでグラウンドに？……一体何をするのかな？」

ねえ瞳曰ちやん、という不安げな葉隠の声に、私は答えた。

「さあ？あたしは何も知らないわ」

雄英生活第一の関門、個性把握テスト。

相澤消太の目を欺き、私は何も知らない少女を演じる。爆豪瞳曰は

【蛇っぽいことが出来る】だけの、無害な十五歳である。

【次回予告】

「お前、手を抜いてるな？除籍処分」

「たすけて睡ねむりさん」

10. 爆豪瞳巳と個性把握テスト

「着替えてはきたけど……入学式も出ないで何するんだろうね、尾白くん？」

「うーん、わざわざ体操着に着替えさせたってことは、体を動かすオリエンテーション？ クラスの親睦会的なレク？ とか？」

「えっ楽しそうじゃん！」

「なるほど。しかしグラウンドにはA組以外いないようだが」

「……深遠なる謎、か。漆黒の蛇よ、お前は どう見る？」

「さあ？ あの相澤って先生、いまいち考えが読めないわ。一体何を始めるつもりかしら」

私たちA組は入学式開始の鐘を聞き流しながら、広大なグラウンドに向かっていた。更衣室を出て、葉隠、尾白、上鳴、障子、常闇と連れ立って、担任の指示通り名前順に整列する。

担任を名乗る男は、死んだ魚も黙って首を横に振る生気の欠落した目をしていた。

伸びっぱなしで、櫛も通らなそうなボサボサ髪。何日前に剃ったのか？ 毎朝鏡は見ているのか？ と心配になる、まばらな髭も生えている。第一印象をひとこと言うと、『ファミレスのバイトに応募したら履歴書写真の時点で名前すら読まれず落とされる』タイプの人。

原作での「小汚い」といった表現は些か言い過ぎだと思うが、天下の雄英教師としてこれはどうなのか。彼の活躍と、何だかんだ身を挺して教え子を守る勇姿を知る私ですらそう思うのだから、生徒の不安はもつともだろう。

1—A担任、抹消ヒーロー『レイザーヘッド』。本名は相澤消太。彼はメデイア嫌いのいわゆるアングラ系ヒーローで、あの出久ですらすぐには名前が出てこなかったようだ。

そんなくたびれた担任教師は、グラウンドに集まった生徒たちを無感情に見渡し、平坦な声色で告げる。

「これより、個性把握テストを始める」

唐突すぎる展開に、クラス中がどよめきの声をあげた。

「個性把握……テストオ!？」

「入学式は!? ガイダンスは!？」

「ヒーローになるなら、そんな悠長な行事出る時間ないよ」

麗日の問いを一蹴した相澤先生は、ふいに「爆豪①」と名字を呼ぶ。何の脈絡もなく名指しされた爆豪二人は声には出さず、互いに目配せをして意思疎通をはかった。目隠し越しに、黄金と陽炎の瞳が交差する。

『え、ばくごう……いち? 今呼ばれたのどっち? 勝己っぽい?』

『俺の方見て言ったんだから、そーだろ』

ポケットに手をつ突っ込みながら前に進み出た勝己に、相澤先生がボールを投げ渡した。

「爆豪①、中学のときソフトボール投げ何mだった」

「67m」

「じゃあ個性を使ってやってみろ。その円から出なきゃ何してもいい」

「はよろ」と顎で促され額に青筋を浮かべた勝己だったが、彼は変なところでみみっちい。初日から担任に噛み付くことはせず、大人しく従った。

「死ね!!」というあまりにもヴィランらしい掛け声と共に、勢いよくボールが投げられる。爆風によって砂埃が激しく舞った。ちやうど近くに居た耳郎が目を瞑り、腕で顔を庇う。可愛いお顔とお耳に傷がついたら大変なので、さりげなく彼女の前に移動し、風が当たらないようにした。あくまでも気取られないようスマートに、さり気なく。視野が広くて思慮深いミッドナイトなら、きつとそうするだろうか。

個性によって球威を増したそれは、光線のように一直線に飛び、肉眼では捉えきれない彼方に消えて行つた。

測定器を持った相澤先生が、淡々と数値を読み上げる。

「705.2m」

「マジかよ……!」

「個性思いつきり使えるんだ! さすがヒーロー科!」

「すごい面白そう！」

「面白そう、か……」

「アチャー」

「……瞳巳ちゃん？」

「何でもないわ」

誰かが発した「面白そう」発言は案の定、相澤先生の耳に拾われた。彼は原作通り「最下位の者は除籍処分」と宣告し、生徒たちを焚き付けた。

蛇の目を通して、出久の様子を窺う。幼なじみは大汗をかき、蒼白な表情で拳を握りしめていた。

出久は、年の離れた弟のようにかわいい存在だ。今すぐにも「大丈夫？」と駆け寄り、助けてやりたい。この後、彼はボール投げでワンプォーオールを使い、指の一本を骨折する。さらにその痛みを堪え、持久走や後半の種目をこなすことになる。そんな姿、とても直視できない。

だがこれは、緑谷出久が主役の物語だ。私は、彼の背中を見守ることしかできない。我が物顔で彼の前に飛び出し、原作のルールを逸脱し、先の見えない暗闇を歩むことはできない。内通者を炙り出し、皆さん、家族、勝己、出久を守りきるまで。私は台本を手放せない。

そうして、個性把握テストは始まった。項目は全部で八つ。

① 50 m 走

② 握力

③ 立ち幅跳び

④ 反復横跳び

⑤ ボール投げ

⑥ 持久走

⑦ 上体起こし

⑧ 長座体前屈

まず第一種目の50 m 走、続いて握力測定を軽くこなす。

50 m は個性を使わず普通に走って約7秒、握力は測定器に2匹の

蛇を巻き付けて締め上げ、60kgだった。本当はもつと多くの蛇を操れるが、それはもしもの為の保険として秘すことにした。周囲を観察し、「まあ、だいたいこの辺りがクラス平均でしょ」という数値を計算し、悪目立ちせず前半種目をやり過ぎす。

クラス3位以内など、上位に食い込み過ぎれば内通者に警戒されるおそれがある。かといってこの個性で19位でも、わざとらしい。今後の「爆豪瞳巳」の立ち位置として都合がいいのは、10〜15位くらいか。突出して強くも弱くもない、気のいいクラスメイト。それが当たり障りないポジションだろう。

「540kgで！あんたゴリラ!? タコ!? すごいな！」
「……………」

「よし、300kg。けつこういい線いったんじゃないかな」

「120kgか。良くやったぞダークシャドウ」

「褒メラレタ！フミカゲニ褒メラレター！」

「くっ、56kg……！このままじゃ最下位だ……！」

ふいに聞こえた瀬呂の歓声に、そちらへ視線をやる。すぐ近くでは障子、常闇、尾白、緑谷が握力を測定し、相澤先生に記録を申告していた。

正確な順位は憶えていないが、たしか障子と常闇、尾白は個性把握テストでも総合で好成绩を収めていた。尾白に至っては、USJでのヴィラン襲撃をたった一人で戦い抜くだけの安定した戦闘力がある。原作では勝己や出久、轟などの影に隠れがちだが、彼らの戦闘センスと実力はかなりのものだ。

入試の様子を観察した限り、会場Fに居た面々に内通者の疑いはない。おそらく、彼らから私への印象も悪くない。自らの点数よりも負傷者の救助等を優先する、「いかにもヒーロー向きのお人好し」だと思っっているだろう。

ならばこの実力者たちは、駒として抱えておくべきだ。不測の事態に備え、A組、もしくはB組の実力者の信頼を勝ち取り、恩を売り、私の味方としておく必要がある。いざという時に動かせる、都合のいい「お友だち」が必要だ。すべてはミッドナイト、そして大切な人たち

の未来の為に。

「その為にも。そこそこの成績はとっておかなくちゃね」

彼らから視線を外し、次の種目に臨む。私はいかにも「冴えない個性ですが、精一杯やっています」と言わんばかりに真剣な顔つきで、軽く息切れさえしてみせた。すぐ側に潜む内通者、そして相澤先生へのパフォーマンスは完璧のはずだった。

「おい、爆豪②。ふざけるのも大概にしろよ」

「……あたし……ですか？」

相澤先生に呼び止められたのは、第三種目の立ち幅跳びで15mの記録を出した直後だった。

……なぜ、呼び止められた？何かが不自然だったか？15mは、クラス平均より少し下くらいの記事だ。私は前方の砂場目掛けて踏み込む瞬間に髪を伸ばし、蛇に変化させた。その二匹の蛇を鞭状にしならせ、地面を打ち付け、その反動で跳躍した。何もおかしいことはない筈だ。

ちなみに、「あなたのその呼び名のほうがふざけてませんか？」という疑問は飲み込んだ。

A組に爆豪は二人いる。名字十①、②呼びはおそらく、一部の生徒を下の名前で呼ぶとPTAやらにセクハラ扱いされると案じてのとだろう。

私は内心の動揺と焦りを押し隠し、恐ろしい担任に声を掛けられ怯える生徒を装った。

「あ、あの、先生。あたしふざけてなんかいいです。これでも全力で頑張って、ます……」

「はは、『全力で頑張ってます』か。その舐め腐った態度で？余程、除籍処分に使いたいらしい」

「……そんな、あたしは本当に」

「では訊くが。お前今、飛ぶ瞬間に蛇を使ったな？髪から伸ばした蛇をしならせ、地面を叩きつけ、その力で飛んだ。人間一人の体重を高く浮かせ、尚且つ助走なく15m飛んだ。つまり一匹一匹の蛇に相当な力があるワケだ。そんな蛇たちを使った握力測定で、たったの60

kg?」息を切らす程全力でやって?……不自然なんだよ、お前の記録は。その個性ならそうだな、軽く200kgは狙えたはずだ」
「握力……ですか?あれは全力での50m走直後だったのと『除籍になったらどうしよう?』というプレッシャーで、うまく力が出せなかったのかもかもしれません。未熟者でお恥ずかしい限りです」

「どうやら私は予想以上に観察されていたようだ。彼の目は出久や、各種目最上位、もしくは最下位の生徒たちに集中して注がれていると思っていた。」

「覚悟してはいたが、彼の視野は非常に広く、厄介だ。その上、初見である私の個性への理解も速い。この個性で出来る限界値まで、素早く計算してきた。やはり相澤先生の前では、一瞬たりとも気が抜けない。」

「何とか平静を装ってそれらしい弁明を紡ぐ私に、「ほう」と黒目を剣呑にぎらつかせた相澤先生が畳みかける。やめてそっとしておいて、爆豪瞳巳は静かに裏切り者を探して始末したいだけの、普通の良い子なんです。信じて下さい。」

「50m走で疲れた、と言ったな?それがもう既におかしいんだよ。お前は髪の毛を伸ばして自在に操れる。さっきの立ち幅跳びでの跳躍速度は、相当な物だった。『本気』を出し、かつ素の身体能力を駆使すれば5秒台——飯田や爆豪①に次ぐ記録を出せたはずだ。だ」というのにお前は、個性を一切使わずに普通に走った。……舐められたもんだよ、英雄も」

「たしかにそんな風に蛇を使えば、わざわざ走らずに飛ぶように移動できますね。そんな活用方法、全く思いつきませんでした。でも、クラス上位なんてとても狙えません。相澤先生の買いかぶりですよ」

「こんな単純な個性の使い方を、思いつかなかっただど?プロヒーローの元で何年も指導を受けた、お前が?本気で言っているのか?」
「……ええ。あたしは素敵は得意ですが、戦闘は苦手でしたので。ですから今後は相澤先生に学ばせていただき、今以上に全力で——」

「光のない双眸で、淡々と責め立てる担任教師。対峙し、同じく淡々と弁明する私。次第に「何だ?」「どうしたの?」とクラス中の視線が

集まってくる。

出久の心配をしている場合ではなかった。今最も除籍に近いのは、他ならぬ私だ。「カツエモン助けて。ここ数分間の黒ずくめの男……もとい、相澤先生の記憶を爆破する道具出して」と視線だけを勝己に向けるが、彼はほくそ笑んで私の除籍危機一髪を楽しんでいた。

そうだ彼は私のヒーロー志望を認めていないのだった。明日カツオの上履きの中に大量のワサビを仕込んでおくので、覚悟の準備をしておいて下さい。

追求と言いつの応酬を二往復ほどした後。やがて彼は髪をくしやりと無造作にかき上げながら、とある言葉を口にした。

「はは。舐め腐った態度でヒーローを目指す上、口だけは達者と来た。教え子がこの有様とは、あの人——ミッドナイトも見る目がないな」

「……は？」

爆豪瞳己は激怒した。我ながら沸点が低い。

瞳己に内通者はわからぬ。瞳己は普通の転生者である。睡さんの手料理を食べて暮らし、時に吐くほど厳しい訓練をこなしながら生きてきた。しかし、何より大切な恩師に関しては人一倍敏感な蛇であった。瞳己は、必ずやこの邪智暴虐の教師を見返さねばならぬと決意した。上等よやったるわ万年ドライアイ野郎、爆豪の名にかけて。

「あたしが片手で数えられる順位になったら、その言葉撤回してください。あと、一週間語尾に“にゃん”を付けて喋ってください」

「いいだろう、やってみる。Plus Ultra」

啖呵を切って全種目をやり直す私を遠巻きに、クラスメイトたちは「怒った顔がああ金髪男子と似てる……?」「きょうだいかしら?」「にゃん……」と呟いた。

師であるミッドナイトと爆豪家の名誉にかけて、やり直した結果。

50m走は4秒台でクラス5位。3kmの持久走は4位。握力は

350kgでクラス3位。長座体前屈は蛙吹梅雨に次ぐ2位。他種目も好成績——など、おとな気なく真剣になり、晴れて私の総合順位は5位となった。

煽られてついうっかりやってしまったが、結果的にはどの種目でもトップはとらずに済んだ。3位の勝己より上に行つて睨まれ、ライバル視されることもなかった。

この程度なら原作の展開に大きな影響はない。薄ら寒いことに、私が何をしようがしまいが、全ての流れは台本通りに収束していく。その事實は、中学時代までに実証済みである。

現に出久は物語通り、オールマイトに出会つた。ボール投げで勝己の記録を超え、諍いを起こした。口田甲司不在、私という異物が介入した、原作とは全く違うこの世界で。

本来の流れは崩れなかった。ただ、今後の懸念はある。予想外にクラス上位に名を連ねたことで、内通者から私への警戒レベルは上がつてしまっただろう。

次の行事である戦闘訓練ではもう少し行動を慎み、【蛇っぽいことができる】だけの取るに足らない個性、素敵が取り柄の生徒として振舞おう。『明るくて裏表のない、無害なクラスメイト』を心掛けなければ。ミッドナイトのような、誰にでも好かれる人間にならなくては。

「除籍はウソ。君らの最大限を引き出すための合理的虚偽」などと言つて、出久に『保健室利用許可証』を手渡して去つていく相澤先生。

私は「これ以上の長居は時間のムダ」とばかりに去つていく彼の背を追い、二匹の黒蛇を鞭状にしならせて鋭く飛んだ。助走をつけて高く宙を舞い、その頭上を追い越した。相澤先生の真正面に躍り出た私は、これみよがしに五本の指を立てて『5位入賞アピール』を決め、唇を持ち上げた。

「なあにカツコよく退散しようとしてるんです？あたしが本当に5位になつちやつたからって、焦ってるんですか？」

「なるほど5位か。緑谷と同じく、『見込みゼロ』ではないな。ま、今

後はやれば出来るなら最初からやれ。時間の無駄、不合理の極みだ」
「ふふん。睡さ……ミッドナイトを崇め、褒め称える準備は出来てますか？これから一週間語尾に“にゃん”を付けて学校中の笑いものになる覚悟はOK？」

「褒め称えるかはともかく。あの人が凄いヒーローだったのは、もうずっと前から知ってるよ。……にしても、“片手で”数えられる順位、ねえ。おい爆豪②、根津校長の指は何本だと思う？」

「は？根津校長？話逸らさないでくださいよ。……ちよつと何ニヤついでるんですか？片手の、5本の指で数えられる順位になったら言うこと聞くて約束したじゃないですか！片手………アレ？」

唐突な話題転換に眉を寄せ、薄く唇を吊り上げる相澤先生に詰め寄ったが——はたと気付いた。

私、「5位以内に入ったら」なんて言ってない、気がする。たしか「片手で数えられる順位」って言った。いやだって、言う必要もないから。

“指が5本”なんて、当たり前前の常識だと思ったから。

「それは人間本意の、固定観念というヤツさ！」

「校長先生……!?!」

脳内の根津校長が、朗らかに笑みながら手を振る。幻覚のその指先を注視する。可愛らしい桃色の肉球がついたぷにぷにの指は、1、2、

3、——4本！

私の順位は、5位。校長基準で言うなら、“片手”で数えられる順位ではない。

「圧倒的屁理屈……！」

「失礼だな。ただの事実だよ」

『純愛だよ』みたいに言わないでください」

「わからん。何言ってるんだお前」

相澤先生は崩れ落ちる私を見下ろし、一呼吸置いた後、再び言葉を紡いだ。

「爆豪②、良いことを教えてやろう」

「いいです。教えなくていいです。大事なことは全部ミッドナイトから教わってますから」

「この超人社会に於いて、これこそが普通である」なんて古臭い固定観念は、早々に捨てたほうがいい。ヒーローとしても、人間としてもな。……その偏見はいずれ、お前自身をも苦しめる枷になるぞ」
「教えなくていいって言ったじゃないですか」

気を取り直して更衣室でブレザーに着替え、教室に戻る。そこでは高校生らしく賑やかに、LINEでの連絡先交換会が行われていた。私の姿を認めた葉隠が、輪の中心から両手を振る。

「瞳巳ちゃんおつかえり〜!」

「ただいま。なんだか楽しそうね」

「今ね、皆で順番に自己紹介しあってA組LINEグループ作ったところなの!瞳巳ちゃんもはやくはやく!」

「はわ(もう、仕方ないわね葉隠さんは)」

教壇近くの席には女子一同と、一部を除いた男子が集まっていた。葉隠の隣に並んで人の輪に加わると、鮮やかなピンク色の肌をした女の子、そして個性豊かな面々が矢継ぎ早に声をかけてきた。

「爆豪瞳巳ちゃんだよね?個握テスト、ちよー頑張ってたじゃん!

あつ、私は芦戸三奈。個性は【酸】だよ、カツコイイでしょ?……よし次、麗日行ってみよ!」

「えーっと、じゃあ時計周りで紹介してこか?えっとね、私は麗日お茶子。何でも好きに呼んでやってね!ハイ、お次は梅雨ちゃん!」

「ケロ。私は蛙水梅雨よ。カエルっぽいことなら大体できるわ。あなたを見たところ【蛇】っぽいことができる【個性】よね?何だか親近感が湧くわ。どうぞ気軽に梅雨ちゃんと呼んで。……次は耳郎ちゃんね」
「ん。ウチは耳郎響香。あー、もしかしてだけどボール投げで爆風が来たとき、前に出て庇ってくれた?だとしたらありがと。次は八百万、で合ってるよね?」

「ええ。ご紹介に預かりました、八百万百と申します。個性は【創造】。どうかよろしくお願いしますわ。お次は峰田さ……きやつ、」

「ハイハイハイ!オイラは峰田実!つーか黒の目隠しに蛇女ってエロ

過ぎだろオ！瀬呂もそう思——もがッ」

「ちよ、ストップ！初対面で攻めすぎだろお前……あ、俺は瀬呂範太。よろしくなく。次は砂藤か」

「おー、砂藤力道だ。個性は「シュガードープ」。えーと、趣味は実益も兼ねて菓子作り。こんなところか？……次は青山だな」

「ウイ☆僕は青山優雅さ。テストでの君、なかなかキラめいてたよ。まあ僕ほどじゃないけどね☆デル^最ニエ^後は……切島くんだね」

「おう！俺は切島鋭児郎。さっきのテスト、鬼気迫る感じであツかったぜ！」

「……本物のA組だ……」

「偽物のA組とは？」

「何かのテツガク？」

頬をおさえる私に、障子、常闇、上鳴らが苦笑する。時計回りに自己紹介を済ませ、ひととおり連絡先を交換していく。轟は個性把握テストが終わって帰宅許可が出るなり、すぐに教室を出たらしい。初期の轟にあるのはエンデヴァーへの対抗心だけで、クラスとの協調など頭の片隅にもないのだろう。

保健室に行った出久、帰宅した轟以外が揃う教室で、深呼吸をした。新鮮なA組の香りがする。一方的に見知ったキャラクターしかない空間に、いつまで経っても慣れる気がしない。私だけが彼らの辛い過去や葛藤、過酷な未来を知っているという事実、息を飲んだ。紙面の世界の彼らと言葉を交わす現実、携帯を操作する指先が震えた。

私はミッドナイトみたい、皆に好かれるよう振る舞えるだろうか？うまく「あ^瞳あ^目し^{ちゃん}」を演じきれるだろうか？

葉隠たちと笑い合いながらそんなことを考えていると、窓際席で爆発音が一つ鳴った。

「……うるっせエな。俺は今ガイダンスと入学資料読んでんだよ。キショい馴れ合いなら他所でやれや、気が散る」

「真面目だねカツエモン」

「新しいバリエーション増やすな、すり潰すぞ」

妙なところで真面目な従兄妹は、先生の指示に従ってガイダンスなどを隅から隅まで読み合わせていた。個性の【爆破】で威嚇する勝己に一瞬静まり返る教室だが、そこは天下の雄英生。臆することなく彼を囲み、遠慮なく質問攻めにする。

一番槍は、切島だった。

「ずっと訊こうと思ってたんだけどさ。お前も爆豪なんだよな？もしかして姉弟か何か？」

「それ、実は私も気になっていたのよ」

「相澤先生の爆豪①と爆豪②はウケたわ。雑かよ」

「姉弟？で雄英入学とは素晴らしいな。君たちの家も代々ヒーロー家系なのか？」

「でもどつちも爆豪だと、呼ぶ時不便かも？」

「だよなー。爆豪さんちの勝己くんと瞳巳ちゃんは、『こう呼ばれたい』とかある？」

「あゝ!?ピーチクパーチクうつせエんだよ！『飛沫感染』『エアロゾル感染』で言葉を知らねえのかボケ共！だいたいめエらみてーなザコ共が気安く」

私と勝己を囲み、口々に話す彼ら。せっかく友好的に声をかけてくれているのに、いちいち癩癩を起こされては話が進まない。私は蛇で再び彼の口を塞ぎ、改めて紹介をした。

「ええつとね。あたし——爆豪瞳巳と爆豪勝己は、きょうだいじゃなくて従兄妹同士よ。同じ爆豪で紛らわしいから、あたしのことは下の名前……瞳巳か、好きなあだ名とか名字にさん付けとか……あ、勝己のあだ名はカツキーマよ。そう呼ぶと喜ぶから、ぜひそうして」

「ン、ガンン——!!!」

「これ絶対嫌がつとるわあ……瞳巳ちゃんやりおる」

「それ程でもないわ、麗日さん」

「女子を名前で呼ぶのもなあ……俺はフツーに『爆豪』と『爆豪さん』で呼び分けるかな」

「フツーの男子って感じね、尾白くん」

「故郷では友人と言える存在がいなかったので、あだ名などは呼び慣

れない……瞳巳、爆豪呼びで問題ないか？」

「大歓迎よ障子くん」

「わ、私も……クラスの方と連絡先を交換したりは初めてですので、どうしましょう。爆豪さん、瞳巳さんで大丈夫かしら……？」

「可愛いわ八百万さん！」

「私は今まで通り瞳巳ちゃんです。瞳巳ちゃんも『透』呼びでいいからねー！」

「と、トオルチャン……！」

「僕は爆豪くん、ヒトミーヌかな☆フランスを感じる響きだよね」

「わあ、ありがとう青山くん！」

「なるほど、従兄妹同士だったのか。丁寧な説明をありがとう爆豪くん、瞳巳ちゃんくん！」

「なにそれ新しい」

入学初日は慌ただしく過ぎ去り、時刻は昼と夕暮れの境目に差し掛かった。

教室で黙々と資料を読んでいた勝己も賑やかなA組生徒もとうに家路につき、教室には私以外誰もいない。入学初日は部活もなく、食堂も開いていないため、誰もが早々に自宅に帰っていった。

「……つかれた、なあ」

蛇を解き、波打つ黒髪に戻す。今日はずっと個性を使い、気を張り続けていた。雄英という原作の舞台に緊張しきりで、個性での気配感知を絶えず続けていた。

だが、今日は。少なくとも今日はもう、その必要が無い。物語にとって重要なイベントはやり過ごし、主要人物はみな家族の元へ帰ったのだから。

私は口田甲司を蹴落として勝ち取った机に突っ伏し、行き場のない独白を零した。

「パパ、ママ、お姉ちゃん。私、雄英に来たよ。お姉ちゃんたちが憧れ

てた、あのヒーロー科だよ。……ねえ、制服似合ってるかな？お姉ちゃんたちみたいに可愛い？ママみたいに綺麗？パパみたいにすらつとして見える？」

答えは返らない。ここにあるのは窓から差す淡い西日と、耳をつんざく静寂だけだ。それでいい。この痛みこそが、私の背負うべき罰だ。

重苦しい目隠しを外し、両の目を開いた。プリーツスカートのポケットから、個包装の飴玉を取り出す。誰もいない教室でひとり口をつぐみ、金色の包みを夕陽に透かして眺めた。ちらりちらりと瞬く光が、あの尊い人のまなざしと重なった。青と金など似ても似つかない筈なのに、どうしてだろう。

「………睡さん」

呼応するように、教室の大きな扉が開いた。反射的に、目隠しもない両目でその人を見つめてしまう。

「………あ、」

「見つけた。やっぱりここに残って居たのね、瞳巳」

「久し振り、また大きくなつたかしら？友だちは出来た？」とミッドナイトが窓際に歩み寄り、私の髪を撫でる。本当に、久しぶりだった。それぞれに教師、生徒の立場で受験と入学準備に忙しく、三ヶ月は会えていなかった。教師としてひたむきに走る彼女の邪魔をしないよう、電話すらかけなかった。

「身内に試験内容を教えた」「不正だ」と彼女が責められないよう、自ら一人暮らしを選んだ。あのアパートでじつと日々をやり過ごした。

ミッドナイトは、私の頭の形ごと慈しむよう柔らかに髪をかきまげた。今までは、それが生活の一部だった。今はたったそれだけのことが、かけがえのない奇跡に思える。

瞼を閉じて温かなてのひらに擦り寄る私に、彼女がくすりと声を洩らした。

「もう、甘えん坊は相変わらずね。……さて、今日は私、もう定時なの。久し振りにあなたのパパとママ、お姉さんたちの病院に行つて、それから帰りましょうか。おやつには遅すぎるけど……久し振りに、マ

フィン作ってあげる。スーパーに寄って行かなくちゃね」

「……でも、知ってるでしょ？私、電車乗れない。バスで帰ると、二倍くらい時間かかっちゃうよ。睡さん忙しいのに、そんな無駄なこと……。あと、『教師が特定の生徒と仲良くした』とか言われちゃうかも」

「そのあたりに関しては、校長先生の許可済み。『保護者として、卒業まで義務を果たしなよ』ですって。だいたいもう受験はとづくに終わったし、私はあなたの担任でもない。雄英は身内贓罪や不正でやっていける程甘くないって、誰だって知ってるわ。言いたい奴には言わせておけばいいのよ。……全く、変なところで気を遣うのも相変わらずだわ。あなたとの時間を無駄だなんて思うわけないじゃない。瞳巳と一緒にバスに揺られるの、私は大好きよ。それとも、あなたは違うの？」

私の片想いだっかしたら？と彼女がわざとらしく頬に片手をあて、ため息をつく。嗚咽が喉に張りついて、何も言えない。私は「たくさん大好き」の代わりに、握りしめていた飴玉を差し出した。彼女はそれを受けとり、包みを剥がし、ころりと口のなかに放った。

ポケットの中身も鞆の中にもしまった飴も全部、ありつた金の色を彼女に差し出し、頭上に降らせてやりたい。「こんなに持ちきれないわ」と笑いながら、きらきらに囲まれて困り果ててしまえばいい。

そんなおかしなことを夢想しながら、私は自らの座席から立ち上がった。今日はこれから、私の家族が入院する病院に行く。そして姉たちの石化を解除するため、ありとあらゆる方法で『個性解除実験』を行う。一月に一度の、私の決まりごとだ。

自らの罪と向き合う時間の後には、睡さんの手作りマフィンが待っている。バスに揺られ睡さんの肩に凭れながら、たくさんお話をした。「あのね聞いて、今日はね…」と個性把握テストのことや、クラスメイトとのやり取りを話して聞かせた。眠り香ではない彼女自身の肌の香りは、私にとって安らぎの象徴だった。

私には、香山睡という『絶対的な味方』がいる。心優しい幼なじみがいる。私から目を逸らさないでいてくれる家族がいる。A組は、物

語で見たとおりの優しい人ばかりだった。

爆豪瞳巳は、柔らかな慈しみのなかにいる。時折、瞳の奥がひどく痛むくらいに。

最近、よく同じ夢を見る。誰かの心臓——得体の知れない異物が私の体に入り込み、やがてたしかかな意志を持って、不規則に胎動する。そんな奇妙な夢だ。

【戦闘訓練〜USJ襲撃】

11. 爆豪瞳巳と雄英ご飯

「——ヘイガイズ！んじゃ、次の英文のうち間違っているのは？その目隠し女子リスナー、答えてみな！」

「はい！関係詞の場所が違っているので、四番です！」

「ン〜正解！サンキューヘビガール！」

個性把握テストから、一夜が明けた。

A組の教室では昨日とは打って変わって、英語、歴史など、普通の授業が行われている。それに対し、一部の生徒たちは「なんか……普通だな」と拍子抜けした様子で呟きつつ、真面目にノートをとっていた。

私とはいえば、久しぶりにミッドナイトの手料理を食べ、精神的にも肉体的にも絶好調だった。気だるいはずの午前の授業も、髪の手先端に顔を出した蛇くんと共にゆらゆら揺れながらご機嫌に過ごした。心なしか、蛇くんたちの鱗も艶々だ。

「瞳巳ちゃん、機嫌いいね。何かいいことあった？」

「あー、やっぱり出久にはわかる？さすが幼なじみ、鋭いね」

「う、うーん、僕以外にも丸わかりだと思っただけど……」

休み時間になり、すぐ後ろの席の出久が声をかけてきた。彼は幼なじみなので、今さら格好つけて取り繕う必要はない。ミッドナイトを真似た口調や振る舞いをするつもりもない。

私は「実はね……」とだらしない顔もそのままに、昨日久しぶりにミッドナイトと話せたのだと報告した。出久は丸く大きな両目を細め、まるで我がことのように喜んでくれる。

「そっかあ！『ミッドナイトに迷惑かけないようにする！』って言うって、受験シーズン前からずっと会わずに我慢してたもんね」

「うん！でもこれからは時間さえ作れたら病院にも付き合ってくれらるって。あとね、『今度の日曜は一緒にドライブにいきましょう』って誘ってくれたの！出久も来る？」

「えっ僕!?!い、いやそんなの悪いって!せつかくの二人の時間なんだから僕が邪魔しちや、」

「俺は行かねえからな」

出久の言葉を遮り、前の席から柄悪く私たちを睨み付け、勝己は低く言った。なぜか自分が誘われること前提である。思春期特有のアレだろうか。「お母さ……ババアと出かけるとか、嫌に決まってんだろ!クラスで噂されんだろ!（本当は一緒に出掛けたい）（無理にでも誘ってほしいと思ってる）（でも恥ずかしくて自分から言い出せない）」的なアレだろうか。

二十数年を生き、どちらかといえば相澤先生ら教師陣のほうに年齢が近い私には、もはやよくわからない感覚だ。若干の哀愁を感じつつ、勝己のほうに体を向けた。

「えつと……カツキー又は誘ってない、よ?だつてミッドナイトのこど露出狂クソババアって呼び方するから。……も、もしかして本当はみんなで一緒にドライブに行きたかったのかな……?思春期だから素直に言えなかったのかな?大丈夫、素直なのはいいことだよ。恥ずかしくなんかないよ。お姉ちゃんと一緒に出掛けよう?クラスの皆には秘密にしてあげるから。ね?」

「あああ瞳巳ちゃん!またかつちゃんに油を注ぐようなことを……!」

怒りのあまり人語を失った勝己に頭をわし掴まれ、無言のチョーク・スリーパー・ホールドをお見舞いされたのは言うまでもない。

見かねた砂藤くん、障子くんら力自慢が引き離してくれなければ、危なかった。あとで相澤先生に言いつけてやろうと思う。

チャイムとともに午前の授業は終わりを告げ、時刻は12:30になった。これから13:20までのおおよそ一時間は、昼休みだ。

早足で廊下を歩いて食堂『LUNCH LUSHのメシ処』に行くど、そこはすでにたくさん生徒でごったがえしていた。雄英の食堂は有名シェフ『ランチラッシュ』が切り盛りしている。彼は一流料理

人として著名なだけでなくプロヒーローの免許も持つ、実は凄い人だ。

漫画でも、彼が作る定食はどれも美味しそうだった。入学してはじめての昼時を密かに楽しみにしていた私は、チャイムと共に早足で食堂へと向かった。いわゆる聖地巡礼である。

列にならび、注文を済ませ、目にも止まらぬ速さで調理をするランチラッシュから出来立ての料理が乗ったプレートを受けとる。しかし、私が注文を間違えてしまったのだろうか。頼んでいないはずの小さなアイスが可愛らしいガラス皿に盛られ、スープの隣にちよこんと乗っていた。

相変わらず忙しく働く彼に話しかけるのは忍びないが——「ラッキー！」とただでデザートを頂いてしまうのは、もっと申し訳ない。私はガラスの小皿をカウンターに戻し、調理場の彼に向かって声をあげた。

「あのー！このデザート、あたしのじゃないです。ここに返しておくので、」

「んー？……あつ、ごめんごめん言ってなかったね！それキミのだよ！」

「え？でもあたし、デザートなんて頼んでないわ」

「あはは、いいんだよ。それは一年生に向けた、僕なりのサービスだからね。『雄英にようこそ！』って感じのささやかなお祝いさ！遠慮せず食べなよー！」

「……っはい、ありがとうございます！大事にいただきます！」

カウンターに戻されたアイスを再び私に手渡し、彼は親しげに親指を立てる。顔全体を覆う大きな管で表情は見えないが、きつと見守るような、朗らかな笑みを浮かべていた。

私は一瞬にして、ランチラッシュの「^{フア}フォロワー」になった。一生食堂に通おうと決意した。ランチラッシュ、恐ろしいヒーローである。

深く頭を下げ、その場を後にする。

今日は素敵なヒーローと知り合えた。デザートをおまけしてもら

えた。午前の授業もうまくこなせた。そして何より昨日は、ミッドナイトと久しぶりに話が出来た。病院にも付き添ってもらえた。

昨日も今日も、いいこと尽くしだ。——今この瞬間も、そう。

「こんにちは、塩崎さん。この席、座ってもいいかしら？」

「楽園の蛇……」

「何度聞いてもすごいあだ名」

偶然出くわしたB組の塩崎茨の許可をとり、向かい側の席に腰を落ちつける。

ここは食堂のすぐ外にあるテラス席だ。真夏や真冬以外であれば、穏やかな木漏れ日のなか、庭の花々を楽しみながらゆったりと食事を摂ることができる。

私は【蛇】という特性上、【蛙】の個性をもつ梅雨ちゃんと同じく暖かな場所を好む。塩崎さんもまた、似たようなものらしい。食事前には手持ちのウェットシートで念入りに指を拭き取りながら、彼女は伏し目がちに言った。

「雄英にこのようなテラス席があるのは、幸運でした。……真昼の日光浴は、好きです。主の加護を強く感じられますし、何より私の髪——ツルは、日の光と水で再生しますから」

「そうなのね。あたしも日向ぼっこは好きよ。花とか、植物も好き」

「……そうですか」

「ええ」

「珍しい、ですね。多くの人は『日に焼ける』と言って、日差しを嫌いますから」

「ふふ、あたしは気にしないわ。爬虫類系個性だからかしら？少しくらい焼けちゃっても、皮膚の表面はすぐに生まれ変わるの」

塩崎さんが目蓋を閉じて祈りを捧げた後、私たちは同時に食事に手をつける。

食堂で生徒たちが食べる定食はどれも美味しそうだった。だがそれらを注文することはできないので、目で楽しむにとどめた。私の昼食はベーコンや野菜が入ったスープと、ランチラッシュがつけてくれた小さなアイスだ。

かつては、食べることが好きだった。母と姉たちが金曜日に作るカレーが、何よりの好物だった。しかし今の私の胃袋や味覚は、正常ではない。

「あの」七歳の夏から秋の終わりまで、ろくに固形物を食べていなかった。何とか咀嚼したとしても、すぐ吐き戻してしまっていた。ミッドナイトとの大喧嘩を経て生きる気力を取り戻し、どうにか人並みに食べようと試みたが——無理だった。

成長期に異常な頻度の吐き戻し、異常な精神的負荷を経験したことで、胃袋と腸は荒れきっていたらしい。味覚の機能も、その殆どがおかしくなった。今では、飴玉やマフィンなどの甘さを僅かに感じるのがやっとだ。

もつとも味覚の変調に関しては、誰にも知られないよう隠し通している。彼らにはこれ以上、要らぬ心配をかけられない。

他のクラスメイトのように、一人前の定食を平らげることが出来ない。調子が良くて三割、悪ければ二割も食べられない。ろくに味もしない固形物を咀嚼する虚しさに、時折何とも言いがたい薄ら寒さを覚えて箸を置いてしまう。「おいしい」という感覚を、そのよろこびを知っているからこそ、殊更に。

勝己やその母親の光己さん、ミッドナイトが作る料理なら、どんな食べ物も「あたたかい」と感じる。特に出来立ての料理は、好きだ。立ち上る香りを胸いっぱい吸い込んで、鈍い味覚を補える。舌を刺す熱で、「おいしい」という錯覚を味わえる。

だから私はよく、これでもかと沸騰させた湯を入れたミニカップラーメンを食べる。あるいは炊きたての、火傷しそうなほど熱い白米をほんの少しよそい、香料にまみれたふりかけをまぶす。

……決して、私が壊滅的料理下手なわけではない。これは「舌を刺激する熱・強い香りによって味を楽しもう」という合理的判断のもと選択した結果である。私だって頑張れば多分おそらく、お粥くらい作れる。ちなみに作ったことはない。どうせ細かい味はわからないので、作る意味もない。栄養素は……ウィダーとビタミン剤を飲んでるので大丈夫だと思う。それに、週に二度は勝己もしくは光己さんの

まともな手料理を食べさせていただいている。

「……あつい」

恐る恐る、スープを一掬い口元に運ぶ。舌に嬉しい温度と感触だ。これなら、少し無理をすればデザートまで食べられそう、と息をつく。せつかくのランチラッシュの優しさだ。無駄になんて、とてもできない。

潔癖な塩崎さんは、食事を前にして unnecessary な会話をしないタイプなのだろう。体が資本のヒーロー科としては異様に少ない目の前の昼食を見ても、何も言わなかった。

そして今は対岸の私の様子になど一瞥もくれず、淡々とナイフとフォークを動かし、白身魚のソテーを切り分けている。植物のように静かな呼吸に、私はほつと胸を撫で下ろした。

今日は、透ちやんと芦戸さんから「一緒にお昼を食べよう」と声をかけられていた。クラスメイトとして存在を認められているようで、嬉しかった。しかし、せつかくの誘いは断った。

彼女たちはきつと、私に気を遣ってしまう。時折箸を止めて固く目蓋を閉じる私を見て、「大丈夫？」と心配してしまう。私がある場には、せつかくの美味しいご飯も冷めきって、まずくなってしまう。それは、とても悲しいことだ。よくないことだ。

他者と賑やかに食卓を囲むのは、神経をつかう。かといってひとりきりの食事は心細く、いよいよ以て無味乾燥。本当に、弱く歪な化物だ。いつかまた大切な人を殺める可能性に怯えながら、孤独は堪えられない。こんな私を許し続けるミッドナイトが、時折ひどく憎らしくなる。

テラス席の賑やかな喧騒と、庭木にとまるヒヨドリのさえずりを聞きながら、頬を撫でる風に目蓋を閉じた。ろくに鳴らぬ心臓に手をあてた。

あの夏から、鼓動は年々弱まるばかりだった。これが私の罪への罰なら、両腕を広げて受けいれよう。

だが——私にはまだ、やるべきことがある。取り戻したい家族がいる。守りたい人がいる。何もかも放り出して息絶え、身勝手に楽に

なるのは、親友への侮辱だ。そんな結末では、命を賭して私を救おうとしたあの子が救われない。

「ごちそうさまでした」

「主よ、感謝のうちはこの食事を終わります。あなたのいつくしみを忘れず、すべての人の幸せを祈りながら」

時間をかけてスープとアイスを食べ終え、私は手を合わせる。塩崎さんは木漏れ日のなか、長い睫毛を伏せて目蓋を閉じ、いるかどうかもわからない誰かに祈りを捧げた。

緑谷出久の物語は、きつとあと一年もしないうちに幕を閉じる。せめてそれまでは生きて、ミッドナイトや出久、勝己の盾にならなくては。

爆豪瞳巳には、時間がない。

残り五分で、昼休みが終わる。私と塩崎さんはA組とB組の境目に立ち、「じゃあまた」とひらり手を振った。……真面目な彼女は手を振るなんてくれただけだった。……丁寧な会釈のみだったが。

「塩崎さん、今日はありがとう」

「……私の記憶では、お礼を言われるようなことは特に何もなかったと思うのですが」

「えあつうん、何もなかったといえばそうなんだけど。……えっと、でもあなたが一緒にいてくれたから普段より穏やかに食べられたっていうか……居心地がよかったっていうかあの……美人セラピー……？」

「何か物申したいことがあるなら、はっきりとした言葉で述べるべきです」

「蛇だから日本語わかんないわ！予鈴鳴ったからまた明日ね！」

「あ、」

にじり寄る塩崎さんの追求に背を向け、逃げるようにA組の開け放たれた扉を潜った。頬杖についてむくれ顔でこちらを見つめる透ちゃんからは、極力目を逸らした。ごめんなさい透ちゃん、でもあな

たには何の気兼ねもなく、お腹いっぱい食べてほしい。どうか私のことは気にせず、芦戸さんたちと楽しいお昼を過ごしてほしい。

クラス全員大人しく席について、『ヒーロー基礎学』の開始を待つ。はじめての実践的な授業、しかもあの憧れのヒーローが先生としてやってくるという。

「一体どんな授業になるんだろう？」とお隣の瀬呂くん、その前後の耳郎さん、常闇くんと噂話をする。

「オールマイトだろ？ やっぱこう……必殺のスマッシュとか近接戦闘とかそーゆーのを教えてくれるんじゃない？」

「ウチは……初回はヒーローの心構えとかの授業かなって。オールマイトなら為になる話とかいっぱい知ってるでしょ」

「偉大なる伝説、光臨の『刻』来たれり、か。……フツ」

「いずれにせよ、No. 1ヒーローの授業なんて贅沢よね。楽しみだわ！」

オールマイトに対しては、私も特別な思いを抱いている。何と云ったって、前の世界でも憧れのキャラクターだったのだ。神野編でのAFOとの対決は、何度読み返しても涙が溢れた。

「――、聞いて。私決めた。オールマイトみたいなアメコミ風おじさんを見つけて結婚する！」

「やめな」

「結婚式のスピーチはよろしくね！」

「わかった。結婚式に殴り込んででも阻止するわ」

親友と交わした会話を思い返し、思わず笑みが零れた。ちなみに、そんな親友はエンデヴァー派だった。息子が在籍する1-Aにいる以上、彼とも会う機会があるだろう。彼女はきつと大人びた頬を年相応に膨らませ、羨ましがるに違いない。

クラスのほぼ全員が緊張と期待にざわめく中、その人はやって来た。正しくは「数秒後にやってくる」か。

蛇に備わったピット器官――赤外線探知能力で彼の様子を探る。

中学時代の『ヘドロ事件』で会ったときも圧倒されたが、どこに在ってもわかりやすい鮮烈な赤色、桁外れの膨大な熱反応だ。

彼が小走りで……いやスキップしながら廊下を進み、やがてスライド式の扉に手をかける。そして。

「わーたーしーがー!!普通にドアから来た!!」

「オ、オールマイトだ……!すげえやホントに先生やってんだな!」

「銀時代のコスチューム!画風違いすぎて鳥肌が……」

たしかに一人だけ画風や作画が違いすぎる、とは漫画の時点で思っていた。だが驚いたことに、この現実世界でも彼はなんとというか……画風が違うとしか言いようがない。

「早速だが今日の授業はコレ!『戦闘訓練』!」

「おお……!」

「それから……」とオールマイトが窓際に体を向けると、意思を持ったようにひとりで壁が動きだす。先程までただの壁だったそこには、一から二十までの出席番号が刻まれた頑丈な衣装ケースが、ずらりと収納されていた。

中身は、それぞれの戦闘服。それも、体操着のような全学生共通のものではない。ひとつひとつが私たち“ヒーローの卵”の要望と個性情報に沿ってあつらえられた、完全オーダーメイドである。

配られた十七番のケースを開け、中身を確認する。……よかった。幼い瞳巳ちゃんが夢見て描いたヒーロー衣装は、ほとんど彼女のノートそのままのシルエツトだ。

ここまでずいぶんと遠かったけれど。やっと、瞳巳ちゃんの理想の“ドレス”を纏える。ほんの少しずつでも、彼女の自我を殺した罪を償っていかなければ。

「うん、可愛い。でもね」

実際着てみたら、思ったよりヒラツツヒラのフリルスカートだった。闇のプリキユア感すごい。これで……戦うの?今から?マ?

【次回：戦闘訓練】

「瞳巳ちゃんが爬虫類系美少女でよかった」

「完膚なきまでに惨敗しろ爬虫類系ブス。そして速やかに自主退学手続きをとれ」

「相澤センセ〜！爆豪①くんが②の髪を引っ張りました」

「うーん☆野蛮」

12. 爆豪瞳巳と戦闘訓練

私たちA組は、ヒーロースーツに着替えてグラウンド・βに集まった。

将来有望な金の卵とはいえ、まだ十五、六歳の高校一年生。彼らは初めて袖を通す戦闘服にはしゃぎ、互いにこだわりのデザインを見せあっている。

「このマントのキラめき、やばくない?」

「私のコスチュームの柄も見て見て〜!」

「へー、いいじゃん!俺のも黒地に稲妻柄でイケてるだろ?」

「子どもの頃からずっと温めていたデザインだから、なんだか感慨深いわ」

「私は手袋とブーツだけだから、ちよつと風が寒いなあ」

「!?は、葉隠さん!」

「詳しく、聞こうかア……」

透ちゃんの問題発言を受けて騒然となるA組を横目に、一呼吸遅れて走ってきた出久に「こっちこっち」と手を振る。

彼の衣装は、母である引子さんの手作りだ。彼女が基礎となるジャンプスーツを買い、出久の“ヒーローノート”を見て様々なパーツを縫い合わせ、息子の夢を再現したものだ。

敵意を隠すことなく出久を睨む勝己を、二匹の蛇越しに見やる。その戦闘服の素材や物々しい籠手は、いかにも最新鋭の装備だ。デザインや色合いも統一されていて、プロのデザイナーの手腕を感じさせる。見渡した他の生徒のものも、各自の個性に合わせた最良の戦闘服だった。

対する出久の戦闘服は所々、僅かな縫い目が見え隠れしている。普通の布より多少丈夫なだけの素材で、彼の個性を補助する機能など、何一つ付いていない。スポーツシューズやホームセンターで買い揃えた、最新鋭とは程遠い装備。どう考えたって、何もかもプロの技に劣る衣装だった。

それでも、彼は母の思いを選んだ。私はそんな幼なじみの強さを誇

りに思う。

「似合ってるよ出久。また後で、写真撮っておばさんに送ってあげようね」

「あ、ありがとう。瞳巳ちゃんのもすっごく似合ってる！かつちゃんのお父さんにデザインを見てもらったんだよね？」

私には、「これを着なければ」という明確な理想像があった。瞳巳ちゃん”が書き残した、出久のヒーローノートのようなものだ。その可愛らしいイラストを、勝己の父——私の伯父にあたる勝^{まき}さんに見せた。

デザイナー事務所に勤める彼は、“幼い子供の絵”を、“立体的で具体的な衣装設計図”として仕上げてくれた。勝さんは、闇のプリキュアやアイドルじみた瞳巳ちゃんの衣装を笑わなかった。「きつと似合うよ」と言つて、幼い頃にしていたように、私の髪を撫でてくれた。

思い返すその感触に目を細めながら、出久の言葉に相槌を打つ。

「……うん。勝おじさんがね、手伝ってくれたの。で、でもちよつとヒラヒラすぎたかな？色は落ち着いてると思うけど、ス」

「全然そんなことないよ！『ワイルド・ワイルド・プッシューキャッツ』が災害救助ヒーローとして初めて表彰された年に着てたコスチュームみたいな雰囲気がいいと思う！彼女たちの衣装も防御力や機能性が低そうに見えて実は（中略）——あつでもその黒を基調とした色とか足元なんかはスニーカーヒーロー『ウワバミ』っぽい雰囲気があるよね。同じ蛇系の個性として意識したのかな？でも瞳巳ちゃんと『ウバミ』の個性の方向性は——」

「出久、皆びつくりしちゃうから落ち着こう？麗日さんを見てうららかならろう？」

「え？麗日さ……うわああ!？」

「ふ、二人みたいに細かくデザイン考えれば良かったよ……パツパツスーツみたいで恥ずかしいわ……」

原作でも見慣れたあのヒーローコスチュームに身を包んだ麗日さんが、照れ笑いをする。漫画でも思ったが、A組女子、発育が良すぎ

る。普通の十五歳女子なら、耳郎さんくらいが平均だと思っただけだ。

彼女の全身を目にした瞬間、女子に耐性がない出久の体温が急上昇したのがピット器官越しに見えた。

麗日さんや八百万さんの胸、そして私の脚を舐めまわすよう凝視していた峰田くんがおもむろに出久に近付き、力強く親指を立てる。

「恥じらいながらのピチピチスーツ……説明不要のヤオヨロツパイ……ミニスカドスケベ目隠し蛇……ヒーロー科最高」

「理解る」

「瞳已ちゃん!？」

「君らにはこれからヴィラン組とヒーロー組に分かれ、二対二の屋内戦を行ってもらおう!」

オールマイトはカンペを見ながら、訓練のルールを説明した。

状況設定は、『ヴィランがアジトに核兵器を隠している』、『ヒーローはそれを処理しようと潜入する』という、ハリウッド映画にありがちなものだった。

勝敗の判定もわかりやすい。ヒーロー側の勝利条件は、制限時間内にヴィランを捕まえるか、核を回収すること。ヴィラン側は、ヒーローを捕まえるか、時間切れまで核を守りきること。

「コンビと対戦相手は、くじで決めるよ!」

「適当なのですか!？」

「プロは他事務所と急造チームアップすることが多いし……そういうことじゃないかな?」

「なるほど、先を見据えた計らい……!失礼しました!」

飯田くんがツッコミを入れ、出久がオールマイトをフォロウしつつ、名前順にくじ引きが始まった。私より先にくじを引いた勝己の手元を覗き込み、何を引いたか見せてもらう。

「カツノリは……Dチームだね。ほら、『僕と同じDの人はどこですか?力をあわせて頑張ろうね!』って爽やかに声かけていかなきゃ。頑張れキュアダイナマイト」

「だ ま れ 誰がするかポケカス浮かれ爬虫類！キツシヨイ戦闘服着やがって……てめエの精神年齢は五歳児か？あ？今すぐ自主退学しろそして幼稚園からやり直せやゴミ個性野郎」

「相澤センサー、爆豪①くんがスラム街のラッパーみたいな悪口を言いました」

「ハッ、あいつはここにいねーしてめエなんか助けねーよブス蛇！」

「大丈夫。手がかかる生徒ほど可愛いって言うでしょう？」

「てめエの場合手がかかり過ぎて腕ごとへし折れんだよ！」

「つーかマジなんだその服」とドン引きながら、勝己が私の特に何の機能性もない可愛さ全振りフリフリ衣装を指差す。

だがそう言う彼は彼で私とは真逆の、刺々しく威圧感のあるヴィラン風コスチュームを身に纏っていた。爆豪家のセンス、尖りすぎている。

全員がくじを引き終え、それぞれにペアを確認した。正直、私はAチームの出久、Dの勝己と同チームでなければ、誰とペアでも誰が相手でも構わなかった。

原作での戦闘訓練では出久VS勝己の構図に焦点が当たり、他の生徒たちの戦闘風景はほとんど描写されなかった。つまり、誰と当たっても原作に影響はないということだ。A組たちの初々しい戦闘模様をモニター観戦しつつ、気楽に臨める。

もしもミッドナイトがここに居たら、「初めての戦闘に緊張する、まっさらな原石ちゃん達……！いいわあ……！」と恍惚とした表情で身をくねらせていただろう。……ミッドナイトの口調などを模倣しているとはいえ、さすがにそこは真似ない。瞳巳ちゃんのキャラが濃すぎてしまう。

そんなことを考えつつ、同じアルファベットを持つ生徒を探す。

「えっと……Eの人は誰かしら？」

「ボクだよ。Eは・c l a tのE☆僕にぴったりだよね」

「えくら……？ってなに？」

「フランス語で『輝き』って意味さ」

「へえー、いいわね！チームエクラ、頑張りましょう！」

「ウイ☆」

くじ引きの結果、私のペアは青山くんで、役割はヴィランとなった。対するヒーロー役は、芦戸さん&砂藤くんのFチーム。

最初に対戦するのは出久&麗日さんのヒーローチームと、勝己&飯田くんのヴィランチームだ。私と青山くんの出番は一番最後なので、それまでクラスメイトの戦闘模様を観戦しながら、気楽に過ごすことが出来る。

A、Dチーム以外の生徒はビル地下にあるモニタールームに移動し、彼らの立ち回りを観察することになった。

ヴィランチームの勝己と飯田くんがまず屋内に入り、セッティングをする。その五分後、ヒーローチームが窓から潜入し、いよいよ戦闘訓練が始まった。

『クソナードがあ……！授業中断されねえ程度に——ブツ殺す!!』
『っ……！麗日さん、危ない!!』

周囲を警戒しつつ二人並んで一階を歩き、僅か数十秒。複雑に入り組んだ通路の脇道から、勝己が奇襲を仕掛けてきた。

だが、死角からの爆撃は回避されてしまう。出久は「かつちゃんなら、まず僕を殴りに来ると思った!」と、幼なじみの行動を予期していた。クラス内でも瞬発力に優れた芦戸さんをして「あの緑くんよく避けられたな!」と感嘆させる、読みの的確さだった。

『いつまでも雑魚で出来損ないの木偶じゃないぞ!僕は……頑張れ!』
『って感じのデクだ!!』

『ビビりながらよお……!てめエの、そういう、所が……!ムツカツクなああああ!!』

『もう君を……怖がるもんか!!』

出久は震えながらも拳を握りしめ、自らを鼓舞する。麗日さんに対し、「先に行け」と合図する。対する勝己は幼なじみを打ちのめしたい一心に囚われ、出久のみを狙い撃ち。戦線を離脱して先に進む麗日さんになど目もくれない。『状況は!?!』と尋ねる飯田くんの無線も、丸無視だった。

何度も爆破を喰らい、殴られ、投げ飛ばされる。確保テープを使う

暇などいくらでもあるのに、勝己はそうしない。

「こんな戦闘訓練じゃないって……イジメじゃん……」

繰り返される、ただ怒りを発散するような「暴力」に耳郎さんが眩く。梅雨ちゃんが、気遣わしげに口元に手を当てる。モニター越しでも伝わるヒステリックな叫びに、A組全員が眉をしかめた。

そんななか青山くんは涼しげに戦闘風景を眺めながら、私に問いを投げかけた。

「うーん、野蛮☆……ヒトミー又は二人の幼なじみだろうか？彼ら、昔からこうなのかい？」

「そうね。ここまで露骨な暴力はなかったけれど。カツチャマンはどこに出しても恥ずかしいヒステリック暴力野郎よ」

「ふーん。君はどっちの味方だったの？」

「ちよ、ちよつと青山くんそんな言い方は……」

「さすがに攻めすぎだぜ青山！」

透ちやんと切島くんが、彼の発言を咎めるようにあたふたと手を振る。私は「いいのよ」と苦笑しながら、隣の青山くんに視線をやった。「答えは『どちらでもない』よ。あたしはどっちにも味方しなかった。家族が幼なじみを虐めるのを見てただけ」

「どうして？君なら迷わずあの緑くんの味方をしそうだけど」

「それは」

いつの間にかオールマイトまでこちらの会話を気にしているのが、蛇越しに見えた。

私が出久と勝己の仲に介入しなかったのは、原作を変えたくなかったからだ。出久が自信のないいじめられっ子でなければ、彼はここまでするオールマイトに執着じみた憧れを抱かなかっただろう。

それに——ヒーロー気取りで割って入って、仲裁に失敗するのが怖かった。そうして二人ともに嫌われるのが怖かった。

勝己は幼少期から今まで、最低の屑だ。いくら家族でも擁護できないくらいの、最悪な人間だ。

中学の頃は出久に「ヒーローになりたきや、屋上から飛び降りて生まれ直せ」なんて暴言を越えた暴言を吐いた。あれは、絶対に許して

はならない。そして今だって、クラスメイトや他人を傷つける言葉を平気で言つてのける。

だが、私がこの世界に来てしまった日。彼はトラックに轢かれそうになった家族に手を伸ばした。オールマイトがプリントされたシャツを握りしめ、泣きじやくりながら、「俺が一番強くなる。だから瞳巳はもう大丈夫だ」と言つてくれた。あの日勝己が飴玉をくれたから、私は走り出すことができたのだ。

「睡さんと二人に嫌われたら、私にはもう本当に何も無いから。だからどっちの味方もしない」

答えにならない答えを返し、意味もなく花のピン留めに触れながら、モニターを見上げた。青山くんは何も言わなかった。おそらく何となく聞いてみただけで、そこまで興味があつたわけでもないのだろう。

画面には立ち尽くす勝己と、せつかくの戦闘服をぼろぼろに汚して倒れ伏す出久の姿が映っていた。幼なじみの全身は傷だらけで、右腕は痛ましく腫れ上がっていた。

その後は特に目立った怪我人もなく、訓練は順調に進み、私たちの最終組になった。気持ちを切り替えて臨まなくては。

「行きましょう『キュア☆トウインクリング』」

「相手は芦戸さんと砂藤くん。個性把握テストで観察した限り遠距離技はないけど、単純に接近戦が強いね☆作戦はどうする？」

ヴィラン組には、事前に五分のセッティング時間が与えられる。この時間を使って、「麗日さん対策」をした飯田くんのように椅子や机などの備品を動かすもよし。瀬呂くんのように自身の個性で核を保護し、ヒーローチームから守るもよし。

熟慮の末、私は――。

「よし。青山くん、そのマント貰……借りるね」

「!？」

ばくごう ひとみ は キラキラのマント を はぎとった !

1—A最後の戦闘訓練が始まった。オールマイトがヒーロー組に合図を出し、芦戸&砂藤ペアが動く。髪に咲かせた蛇のピット器官で探ったところ、二人は出久&麗日ペアに倣い、一階の窓からビル内に侵入したようだ。

彼らの熱を感知した瞳巳は無線を通じ、一階の青山に位置を伝える。

『さて。挨拶代わりに一発、行くわよ!……青山くんが!』

『おはよう!』どころか、『おやすみ』の挨拶になっちゃうかもね☆』
『なにそれカッコイイ!素敵!』

「……っ!!砂藤、危ない!!」

——ヒーローチームが窓から侵入した、まさにその瞬間。ひとつ瞬きの間も与えず、青の粒子を纏った光線が撃ち込まれる。

窓をよじ登り通路に両足を着けた、刹那の急襲。それはあの勝己より、誰より早い宣戦布告だった。

「つええええ!!襲撃はつや!」

「侵入して一秒も経ってねーぞ!?!初っぱなからフルスロットルかよ!」

それでも芦戸は持ち前の反射神経でレーザーを避け、砂藤はそんな彼女に腕を引かれる形で間一髪、ベルトに提げた“糖のストック”をいくつか吹き飛ばされる程度で済んだ。

入り組んだ狭い通路では、攻撃の主の姿は見えない。しかし少なくともどの方角に潜んでいるかはわかった。

「びっくりしたけど……!だいたい居場所は割れた!そっちがソックで終わらせる気なら、こっちだつて!」

芦戸はレーザーが飛んできた廊下の角を睨み、軸足に力を込めて一気に青山を追い詰めようとした。だが、そんな芦戸の肩を砂藤が掴み

制止する。

「待て芦戸、不用意に追うのは危険だ！罾かもしれないねえだろ！」

「そーだけど！二人でこんな狭い廊下に並んでちゃ、私たちがまとめて死角から狙い撃ちじゃん！特に砂藤は凶体がでつかくて動きもそんな速くないんだから、危ないよー！」

「うっ……俺の【シユガードープ】は身体能力は強化できっけど、反射神経は別モンだから……」

二人は周囲を警戒しつつ近くの部屋に滑り込み、手早く作戦会議を始めた。

ヒーロー組の勝利条件は、核を回収すること。もしくは貸し与えられたテープを巻き付け、二人のヴィランを確保すること。そのどちらかが達成された瞬間、芦戸たちの勝利となる。

だが、核がどの階のどの部屋にあるか、ヒーロー組にはわからない。索敵、探知能力に優れた生徒ならわかるだろうが、芦戸と砂藤はその術を持たない。

よつて、仮に“核を回収しての勝利”を目指すなら。地道に一から五階までを隈無く見てまわり、核を探さなければならぬ。けれどヴィラン組に妨害されながらのそれは、どう考えたって難しい。このビルには、死角になる太い柱や物陰が多すぎる。

与えられた時間はたったの十五分。ならば二手に別れ、効率よく探索するか？……否。この廊下は成人男性三人が肩を並べるだけでやっと、といった手狭さだ。加えて曲がり角が多く入り組んだ、奇襲に適した造り。

体格の良い砂藤が一人で動いては、今のように物陰から狙い撃ちされるのが目に見えている。反射神経の良い芦戸にサポートして貰わなければ、真正面から喰らって戦闘不能になってしまう。

「青山がいる限り、二手には別れられない。っーか索敵できる瞳巳がいる以上こっちの動きは丸わかりなんだから、単独行動は危ねーよな。一人になった瞬間、無線で情報共有して襲ってくるだろうし。近距離特化の俺たちだと、妨害されながら探索して核の回収は難しい。じゃあ、俺たちが勝つには」

「うーん。レーザーに狙われてちや、私はともかく砂藤は危ないよね。とりあえず、厄介な青山を真正面からぶっ飛ばす！ しかない？ さつきみたいにおへそレーザーが飛んできたらまず避けて、二人がかりで青山を確保する！ 『僕の個性は一秒以上射出できない』って、個握テストで言ってたもんね！」

「核探しは一旦捨てて、まずは力技で青山を崩すか。罨かもしれないが……疑いすぎて縮こまるだけじゃ、時間切れになるだけだ。俺たちは気配感知やら小細工が出来る個性じゃねーしな」

個性把握テストで見た限り、青山の素の身体能力はあまり高くなかった。レーザーの威力は直撃すれば即アウトだが、一秒の射出時間さえしのげば、二人がかりで無力化できる。瞳巳にしても、蛇を駆使した握力や跳躍力はあるものの、あの華奢な体躯で殴る蹴るの接近戦が得意とは思えない。コスチュームもなんか……魔法少女？ プリキュア？ つばいし。髪の毛に巻き付かれないよう注意すれば、さほどの脅威ではない。

彼女は、蛇の赤外線感知能力による探知が得意と言っていた。大方、索敵による青山の後方支援担当なのだろう。

主力の青山さえ早々に捕らえてしまえば、レーザーによる急襲を警戒する必要がなくなる。そうなればあとは二手に別れ、残る瞳巳を引きずり出し、得意の接近戦で下すだけだ。

幸い、青山&瞳巳ペアも短期決戦を望んでいるようだ。侵入した瞬間の攻撃からも、それが窺える。中・遠距離攻撃専門の彼らは、肉弾戦に優れたヒーローチームとの直接対決を避けたがっている。核に到達される前に、瞳巳の「目」と青山のネビルレーザーという連携、死角からの不意打ちで勝負を決めてしまいたいと見た。

ならば、青山はまたすぐにも襲撃してくるだろう。そこを二人がかりで確実に捕らえれば、勝機はある。仮に向こうも瞳巳と二人がかかりで襲ってきたところで、問題ない。芦戸と砂藤コンビなら、小手先の策など強引に振じ伏せてしまえる。

要するに、力こそパワー作戦。

「ツッシャー！ やったろーぜ芦戸！」

「おー！罨だろーが何だろーが、溶かしてぶっ飛ばしちやお！」

「とか、言ってるんだらうなあ」

ビルの最上階にて。青山くんのきらきらマントにリズミカルに釘を打ち込みながら、トンカチ片手に私は鼻歌を歌う。ところでこの素材、意外と硬い。必死で釘を打つ間に、薄ら汗ばんできた。

芦戸&砂藤ペア。どちらも真正面から戦いたくない個性の相手だったが、私たちにとって厄介なのは、芦戸さんのほうだった。なんと言っても彼女はクラス随一の身体能力を誇り、至近距離からでも青山くんのレーザーを避けられる。体育祭編ではそうやって、青山くんを完封して勝利していた。

【酸】という個性も、蛇を操り戦う私とは相性が悪い。蛇で体を拘束したところで、瞬時に溶かされて反撃されるだろう。彼女は、掌だけでなく全身から酸を生み出せるのだから。

核を守りきるにせよ、二人を倒すにせよ。私たちが勝利するにはまず、彼女の動きを制限する必要があった。その為に、侵入直後のレーザーによる“単独行動の阻止”が有効だと判断した。

死角だらけの狭い通路に加え、正確な位置を把握して襲い来る青山くんのネビルレーザー。対して、ボール投げや握力では記録を出したが、50m走で最下位だった砂藤くん。

彼は、反射神経の良い芦戸さんと共に行動しなければレーザーの速度に対応できない。だから二手には別れられない。芦戸さんの個性は、強力な酸。しかし近距離に人が居ては、液体が飛び散るなどの巻き込み事故を恐れてそう多くの量は出せなくなる。少なくとも、入学間も無く個性を使つての戦闘に不慣れな今は、その辺りの繊細な制御は不得意なはずだ。これで、彼女に足枷をつけることは出来た。

「では、ヒーロー^{自分}チームは^{たち}どうすれば勝利できる？」彼らは考える。「厄介な青山を倒さなければ、核探しも何も出来ない」「まずは青山から倒そう」と。次に彼が現れるまで慎重に探索し、襲ってきたら攻撃

を避け、一気に距離を詰めて二人で取り押さえよう。そう考えたはずだ。

彼らはこちらも思っているだろう。「爆豪瞳巳は、後方支援系の個性だ」「蛇にさえ気をつければ、ワンパンで片付けられる」と。

しかし。私は八年もの間プロヒーローから一対一の教えを受けていた。それも、普通のプロではない。天下の雄英、その校長直々に「教鞭を執ってほしい」と請われる程の実力派。『眠り香ヒーロー』ミッドナイトである。

世間では美人ヒーローというイメージしかないかもしれないが——彼女の近接戦闘技術は、並み居る格闘家を軽く負かす程だ。なんといつても、「一芸だけではヒーローは務まらない」と言った相澤先生も一目置く先輩だ。個性頼りの一芸ヒーローなわけではない。

彼女の【眠り香】は、少なくとも中距離まで接近する必要がある。呼吸をさせ、香りを吸い込ませる必要がある。その為に格闘術を修めたのだという。

そんなミッドナイトの教えを受けた「瞳巳ちゃん」の体も、特別である。爬虫類系個性を持つ優秀な両親から受け継いだ、恵まれた身体能力と個性。八年間の弛まぬ研鑽。元々は高校生であった中身。

この恵まれた血筋と環境で、まだ何の指導も受けていない十五歳の子供に負ける道理がない。……さすがに轟や勝己など、あまりにも強い個性や天性のセンスには勝てないが。

「私」は能無しで、弱い。けれど「あたし」は、『ちよーかつこいいヒーロー』になれる才能がある。姉たちだって、普通に生きていればきつと今頃「日本初の双子ヒーロー」として——。

とにかく、彼らは私とミッドナイトの関係を知らない。私がおよそ八年もの間死に物狂いでこなした、地獄の熱血特訓を知らない。あの青春（せいしゅん）フェチ（フェチ）によるギリギリ限界修行の日々を思い出し、口元に手をやる。

「う……今思い出しても吐きそう」

「ボクは新品のマントに釘を刺されて、今まさに吐きそうなんだけど☆」

「ご、ごめんなさい。でも、どうせならやれる事はやっておきたいじゃない?」

鮮烈すぎる思い出に蓋をし、気を取り直す。蛇くん達の目を通し、彼らが作戦会議を終え、部屋を出て一階を移動し始めたのがわかった。

私たちがいるのは、最上階である五階。核を安置した部屋の前には、不服そうに唇をきゅつとした青山くんもいる。その視線は、壁に固定され、開け放った窓からの風にそよぐマントを見つめている。彼には一階での襲撃後、すぐに五階まで戻ってきてもらったのだ。

「セツティングの五分間でやったことは、君の髪をちぎってそこら中に撒くことだけだったけど。あの蛇たちに襲わせて、彼らの足止めをするのかい? 時間切れ狙い?」

「いいえ? 時間切れを狙ってもいいけど、それだとあまり加点が貰えなそうだし。蛇くんたちは、ただの精神攻撃」

「精神攻撃☆」

「この蛇何!? ヴィランチームは何を考えているか分からない! 常に警戒してなきや!」ってプレッシャーを与えたいの。そうやって芦戸さんの思考を鈍らせ、視野を狭めて畏に飛びつかせる。砂藤くんには糖分のストックを絶えず使わせ、精神的に追い込む」

「エグい☆」

身体能力を五倍にする「シュガードープ」の持続時間は、三分。その時間を過ぎて次の糖を補給しなければ、彼の身体能力と脳機能は大きく落ちてしまう。

砂藤くんが持っていた糖分ストックは、最初の一撃でいくつか狙い撃てた。万全でない備えは、徐々に彼の不安を煽っていくことだろう。

砂藤くんも芦戸さんも、万全の状態であれば正面からは容易に突破できない強力な個性を持っている。しかしUSJ、期末試験編などを見た限り、彼らはイレギュラーに弱い。積極的に策を練るタイプではない。「どうすれば状況を打開出来るか」「自分の個性をどう応用するか」、今はまだ測りかねている印象だった。まあ、彼らが内通者だとし

たら、それも含めて演技かもしれないが。

青山くんの後方支援に徹し、手の内をなるべく見せないこと。二人がこの最終階に到達したら、手足のリストバンド（ドラゴンボールで悟空たちが付けていたような重り）（各3kg）（外したらゴトツ……なるやつ）（ミッドナイト監修）を付けつつ全力で戦うこと。

完璧すぎる勝ち方・もしくは個性把握テストの好成績に見合わない不自然な負け方をして目立たなければ、勝っても負けてもどちらでも構わなかった。だが。

「もし。どちらかが『そう』だとしたら？」

芦戸三奈、砂藤力道。どちらかが内通者であった時のために。私は彼らと一戦を交え、実力を知っておく必要がある。彼らを間近で観察する必要がある。

特に砂藤くん。彼は原作でも背景があまり描かれていないキャラクターなので、この機会に戦い、縁を作っておきたい。

「……さて、もうすぐヒーローチームが来るみたい。頑張りましょうね、青山くん」

「ウイ☆ボクに敗北なんて似合わないからね」

青山撃破を目指して慎重に、慎重に進み、ようやく五階に辿り着いた。その頃には、芦戸も砂藤もすっかり疲弊しきっていた。砂藤に至っては、たった今最後の角砂糖を口にした後である。初撃でいくつかのポーチを焼かれたのは、大きな痛手だった。

しかし、それよりも何よりもヒーロー組を焦らせている要因は。

「青山もー・瞳巳もー・なんつにもしてこなく〜い!!」

“一向に何も仕掛けてこない”もどかしさに、芦戸が叫ぶ。無言ではあるものの、砂藤も全く同じ思いだった。

そう、五階に至る現在まで、本当に何もなかった。怪我どころか、コスチュームへの汚れひとつない。ならばどうして、こんなにも疲れきっているのか。

「地味に歩きづらい！へびへびパニックだよ！」

「この金色の目、監視されてるみたいで……精神にくるな……」
「わかる。ガラガラって威嚇もゾワワってして嫌だよね……」

廊下や階段には、何匹もの蛇が無造作にばらまかれていた。全長三十センチ程のそれらは、艶々とした黒の鱗を照り光らせて蠢いている。間違いなく瞳巳のものだ。どうやら彼女は髪を切り離し、操ることもできるらしい。

別に、この蛇たち自体が強いわけではない。近くを通れば噛みつこうとしてくるが、芦戸の酸、もしくは砂藤の一蹴りで容易に動かなくなる程度だ。

しかし——絶えず周囲を見回しながらの探索。死角から襲い来るであろう青山への警戒。足元にばらまかれた不気味な蛇への注意も疎かにできない。加えて——制限時間も、刻一刻と迫ってきている。

相手は訓練開始一秒で攻撃を仕掛けてきた、好戦的なペアだ。瞳巳の索敵をもとに、またすぐ物陰から攻撃をしてくるに違いない。そう思って砂藤はこまめに糖を補給しシュガードープ発動状態ていたのだが、何も無い。あの最初の一撃以外、本当に何もしてこない。足音ひとつすら、しない。

ヴィランチームには、瞳巳がいる。ヒーローチームの動きなど筒抜けだろう。だというのに、ビル内は不気味なほど静まり返っている。足元の蛇が鳴らす不快な威嚇音だけが、反響している。

彼らの金の双眼と目が合う度、*「監視されている」* *「見透かされている」* という錯覚に目眩がした。その生き物はただそこにいるだけの筈なのに、古来より人間に備わった生理的嫌悪感を刺激する。毒々しくぬめる鱗に、背筋が粟立って仕方がない。

一向に現れない敵への苛立ち。前方、後方、足元にさえ絶えず緊張の糸を張り続ける、精神的負荷。無数に散らばる不気味な蛇の視線によるプレッシャー。無為に消費され、なくなっていく砂糖への不安。迫る時間切れへの焦燥。

芦戸も砂藤も、あれこれと策を弄する性質ではない。そんな二人に

とって、じわりじわりと思考を蝕むこの攻め口は、何よりの苦痛だった。

「あくもう！あと三分で時間切れだよ！どうしよう、私たちも尾白たちみたいがいいとこナシ!?」

「クソつ、あいつらまさかの時間切れ待ちか!? “戦闘” 訓練なんだから、戦えよなー!」

揃って頭を抱えた、その時だった。

通路の真正面。開け放たれた窓からの風に、煌めく外套が翻るのが僅かに見えた。芦戸の心臓が大きく鼓動する。

残された時間は少ない。これが、最後の好機かもしれない！疲弊した脳に、熟慮の余地はなかった。

「つやつと来たあ！砂藤!!左に避け——」

芦戸はレーザーの直撃を避けようと、砂藤の腕を引き素早く跳躍。左側の通路に飛び込んだ。しかし。

「残念、あれは罠。本物のボクはキラメキここさ☆」

「——は、」

逃げ込んだ小路。照射される直前、余裕を持って避けたはずの青白い燐光は今、芦戸の黒目を照り返し輝いている。

なぜ？通路正面にいたはずの彼が、なぜ逃げ込んだ先のここにいる？

高く跳躍し、宙を舞う芦戸の見開かれた双眸は、青山の姿を鮮やかに捉えた。

走馬燈じみたスローモーション。空中から見下ろす背に、あのきらびやかなマントは——ない。

ならばあれは、芦戸を確実にここへ誘導する為の。

「お、罠!ずるいよ〜!」

「B o n n e n u i t ☆」

一条の光線が天井を撃ち抜く。落ちる芦戸を、細かな瓦礫の群れが襲う。流星の如く降り注ぐ礫が、全身を打ちつける。青山が確保テープを取り出したのが、視界の隅に見えた。

「ヒーローチーム芦戸：確保?」

「芦戸……!」

コンクリート壁すら容易に破壊する光線は、轟音と共に天井に風穴を開けた。砂藤が声を張り上げるも、芦戸の返答はない。煙の向こう側は、どうなっているのか。チームメイトは、ヴィラン組に確保されてしまったのか。急いで瓦礫の山を退けようとするが、未だに崩落を続ける天井のせいで、近づくことも難しい。

個性の持続時間三分が、間近に迫っている。ストックも、既に使い切ってしまった。〃十五分間、いつ奇襲があるか分からない〃状態の中、途中で糖分を切らすわけにはいかなかった。

たちまち辺り一面を覆った砂埃に、砂藤は思わず咳き込み、反射的に固く目蓋を閉じようとした。だが、すんでのところでそれを堪える。

今、目を閉じてはならない。そんな直感があった。瞳に入る砂埃の痛みを無視し、睨むよう正面通路に目を凝らすと——風もないというのに、煌びやかな外套^{マント}が優雅に舞う。

目を奪うその輝きに視線を奪われた、刹那。煙のなか浮かび揺らめく影が、研ぎ澄まされた白刃の如く襲来した。

「ぐ、お……!?!お、重、い……っ!!」

「あら。女の子に対して、それはあんまりじゃない?」

咄嗟に両腕を交差させ受身をとれたのは、奇跡に近かった。

空を裂く飛び蹴り。重く速すぎる一撃を受け止めた腕が内側から痺れ、鈍く痛む。衝撃を殺しきれず、上半身が傾く。が、悲鳴をあげ軋む筋繊維を無視し、無理矢理に体勢を立て直す。

なぜ、このような華奢な少女にこんな膂力が?こんな魔法少女じみた衣装なのに、肉体派なのか?

「瞳已お前、プリキュアじゃなくて戦隊モノのヒーローかよ!」

「ただの爆豪瞳已よー。一年間よろしくね!」

砂藤の悪態めいた呟きに、少女が律儀に返す。

突っ込みたいことは数多あるが、これ以上の疑問を抱く間はない。

腕の痺れに呻く暇もない。すぐに第二波が襲い来るのはわかりきっていた。

「シユガードープ」の効果がほぼ切れかけとはいえ、この体格差があつてなお完全に受け流せなかつた。そんな蹴りを繰り出した少女が、生易しい追撃などするはずもない。

飛び蹴りの勢いもそのままに、華美な衣装を翻して第二波。間髪を入れず、髪に咲いた毒蛇による横一闪。鞭のようにしなるそれは砂藤の腹部を強かに打ち据え、頑丈なはずの戦闘服を切り裂いた。

続く攻撃でも彼女は地を這う蛇のように姿勢を低くし、隙を穿つ。受けるこちらは全身に糖を回し、目まぐるしい猛撃を両の腕で防ぐ。

「……っお前！その体のつ、どこ、にそんな、チカラあんだよ!!」

「ふふ！素敵な師匠がいるの、よー」

「そりや、会つてみてえ、つな……っ女子、だからって遠慮、しねえぞ!!」

「望むところー」

うねる黒蛇による刺突が、眼前に迫る。半身を捻り、寸前で回避。掠めた頬から一筋の血飛沫が舞いあがる。

並の人間なら、痛みに呻き一瞬の隙が出来ていたことだろう。だが砂藤が裂傷に怯むことはなかつた。むしろ歩を進め、瞳巳の薄い胴体目掛けて豪拳を撃ち込む！

瞳巳は寸でのところで二匹の蛇で防御。が、五倍に増幅された拳を受け流しきれず、一步後退。予想外の威力の反撃に圧倒され、少女の軽い体躯がよろめいた。砂藤は隙を見逃さず、細腕を掴み上げ、壁に向けて容赦なく背負い投げる！

「オラアアアッ!!」

「か、はっ……!!」

手加減はない。ヒーローを目指す同志として、少女と砂藤は全力で向き合っていた。彼とて、ヒーローを指して幼い頃から自主トレーニングに励んできた。目の前の少女も、相当な鍛錬を積んできたといえる。そんな彼女に手加減など、失礼に当たる。

したたかに壁に背を打ち付けた瞳巳はしかし取り乱さず、即座に体

勢を整えた。むしろ、投げられたことにより先程より開いた間合いを活かし、床に散らばる小蛇たちを動員して足元を崩す指令を下す。同時に、中距離から黒蛇を伸ばし、鞭のようにしならせ、変幻自在の攻撃を展開する。

足の腱に食らいつこうと飛びかかる無数の蛇を踏み潰す。飛び散った体液で、艶めくりノリウム張りの床が不快にぬめる。

下方、足元を掬わんとする蛇たち。上方、額を掠め振るわれる高速の鞭。踊るように大きく一步踏み込んで放たれる、鋭い足蹴り。

もう少し打ち合えば、動きのパターンが読めるかもしれない。だが。

「ぐっ……クソ、時間がねえ！」

歯を食い縛り、鞭打たれた肋骨の激痛に持っていかれそうな意識を誤魔化す。まずい。このまま防戦一方では、エネルギー消費が激しすぎる。糖分切れで確実にやられる。もしくは、オールマイトが「時間切れ」を告げるのが先か。

個性はまだどうにか生きている。思考能力が低下する前にどうかして一発でも叩き込めれば、勝機はある。

……一か八か。防御を捨てて一撃勝負に出るしかない。

「怪我しても、恨むなよ……！」

「……あら。じゃああたしも、本気で行くわ！」

静かな闘志を燃やし、拳を握りしめる。意図を察した目の少女も軸足に力を込め、小さな拳を握り込む。

互いに痣だらけの、満身創痍。それでも二人は笑っていた。ただ、全力での戦いが楽しかった。ヴィランチームだとかヒーローチームだとか、授業とか。そんなことを忘れるくらい、楽しかった。

「——『因縁の対決』も、いよいよ決着ね」

「——ああ。名残惜しいことにな」

「最期にひとつ、聞いてもいい？……あたしたち、ヴィランとヒーローでなければ理解^{わか}りあえたのかしら？」

「……いいんだ。これで良かったんだ」

これは二人の預かり知らぬことだが。モニター向こうのオールマ

イトが、「君たち昨日出会ったばかりだよね!？」と突っ込みを入れた。
「行くぞ!!『シユガーラツシュ』!!」
「……………!!!」

何十発もの拳に魂を乗せた、全力のラツシュ。永きに渡る（十五分
足らず）因縁の対決（ほぼ初対面）も、満を持して終幕。A組の面々
も、固唾を飲んで見守る。

瞬きの後、そこに立っていたのは。

「やったやったー! 私たちの逆転勝利! イエーイ、ハイタッチしよ!!」
「眠……………怠……………糖……………分……………」

「ヨダレ垂れてるよ☆ハンカチーフ持つてるかい?」

「うーん、ヴェリタースオリジナルで回復するかしら? あつ、二つある
から芦戸さんにもあげるね」

「わあ、懐かしい飴! ありがと瞳巳!」

「感……………謝……………」

戦闘訓練、最終組が終わり、オールマイトによる講評を終えて。勝
者は芦戸&砂藤のヒーローチームだった。時間切れまであと数秒と
いうところで、ヴィランチームは惜しくも敗れた。

飴を舐めて何とか持ち直した砂藤くんが、改めて芦戸さんとハイ
タッチを交わす。彼は快活に笑い、何故か敵チームであった私や青山
くんともハイタッチをした。

「索敵で俺らの侵入位置を把握しての奇襲に、焦りを見越しての罠。
お前らのコンビ、強かったぜ。瞳巳、今度組手しような! 青山も反射
神経鍛える特訓に付き合ってくれよ!」

「私は見らんなかったけど、瞳巳って意外と筋力すごいんだ? 今度私
とも自主トレしようねー! あ、青山はもうちよいフィジカル鍛えたほ
うがいいよー! 一緒にガンバロー!」

「……………光属性眩しいね、青山くん」

「……………キラめいてるね☆」

結局あの後、『シユガーラツシユ』の威力に押し負けた私は戦闘を続行できず降参。同じくらいふらふらの砂藤くんが倒れ伏す私に確保テープを巻き、その瞬間、十五分が終了した。

一方、瓦礫に埋もれ、青山くんによつて確保テープを巻かれたと思われていた芦戸さん。だが彼女は地面に向けて落下しつつ、全身から酸を分泌。瓦礫を強引に溶かし、衝撃による気絶を回避した。

そして彼女の意識がないものとすっかり油断し、煙の向こうから近付いてきた青山くんに対し、鮮やかな奇襲返し。持ち前の運動神経で彼を組み伏せ、ネビルレーザーすら打たせず確保テープを巻いて逆転勝利した、という顛末。

しかし「マントを囮にする」〴〵拙いながらも作戦を考え、索敵と攻撃の連携をした〴〵など、負けたヴィランチームへの加点も多かった。講評ではオールマイトと八百万さんに作戦の穴をいくつも指摘されたが——まあこんな所だろう。入学したてから子ども離れた完璧な立ち回りをしても、目立つばかりでいい事などない。

私は肩を落とし、悔しげに眉を寄せ、小蛇を生み出し過ぎてほんの少し短くなった髪を指で弄んだ。私の個性はレディ・ナガンのように髪を使うため、酷使すればする程短くなってしまふ。

「あーあ、私も青山くんももう少しだったのに。こんなに髪を使ったし、青山くんのマントだつて穴開けちやつたのに。全身から酸が出せるなんて、知らなかった！手からだけだと思つてたわ。芦戸さんの個性は壁を溶かして張り付いたり、色々と応用が利きそうよね」

「えへへ、ありがと！でも瞳巳だつて索敵以外にも色々出来るんじゃない。ヘビヘビパニックはびっくりしたけど！」

「ええ、自分でも何が出来るか模索中よ。……あ、びっくりしたといえは砂藤くんだわ！あんな必殺技初めて見た！」

「俺もプリキユアみたいな戦闘服でガチガチの肉弾戦するやつ、初めて見たぜ」

他のクラスメイトがグラウンドを後にしても、戦闘直後の私たちは興奮気味に感想を話し合つていた。

芦戸さん、砂藤くん、青山くん。無邪気な顔をした彼らのそれも、全

ては演技でしかないのかもしれない。だが。

「もし、泣いている子どもの所にあなた達みたいなヒーローが来てくれたら。きっとその子は『もう大丈夫だ』って安心できるのでしょね」

「え〜？子どもだったらプリキュアみたいな瞳巳が来た方が喜びそうだけどね」

「はは、確かに！お前みたいなヒーローが助けに来たら、安心するだろうな」

「……………え？」

「ンー、雑談もいいけどさ☆グラウンドにいるのもうボクらだけだよ？早く着替えなきや帰りのHRに間に合わなくない？ボク、相澤先生に怒られるの嫌なんだけど☆」

「…………アツ」

「死」

「は、走るわよー！」

グラウンド・βから校舎まで。血相を変えた私たちはぼろぼろのコースチュームを翻し、走っていく。満身創痕の身体を引きずって懸命に走る、四つの影が並ぶ。

蛇越しに俯瞰するその光景が、なぜだか堪らなくおかしい。

「つぶ、あはは……………」

気付けば私は、怪我で痛む腹を押さえ、小さく笑っていた。「何笑つてんの！」と肩を叩く彼らもまた、何故だか無邪気な口元に笑みを湛えていた。

グラウンドから校舎を見上げると、職員室から教室へ向かう途中なのだろう。ミッドナイトと相澤先生が、並んで廊下を歩いているのが見えた。

「ミッドナイトー!!相澤センサー!!」

理由のわからない感情の昂りのまま、二人の名を叫ぶ。大きく手を振る。彼らが驚いたように目を見開く。爆豪瞳巳は本当の十五歳の子どものように、校庭を駆けた。目隠し越しの目蓋に、柔らかな西日が射した。

【次回】

「見知らぬ、発目姉妹」

「葉隠透、アイドル化計画」

「あたしの代わりは、たくさんいるもの」

【番外編】 四季折々（春）

中学三年の、四月八日のことだった。

体育館で始業式と入学式を終えて教室に戻った僕らに、担任は『進路希望調査』と書かれた一枚のプリントを配った。第三志望まで記入し、下校時刻までに提出しろ、とのことだ。

「じゃあ先生は忘れ物取りに行くけど。真面目にやれよー」

「はあーい」

「忘れ物をした」と言い、先生が教室を出ていく。通常、二階の教室から一階の職員室への往復は、三分もかからない。しかし欠伸まじりにやる気なく出ていく姿を見るに、しばらくは戻って来ないだろう。

十数分頃にはきつと全身に缶コーヒーと煙草の臭気を纏い、気怠さを隠しもせず戻ってくる。そして教壇にだらしなく凭れながら、帰りのHRを適当に終わらせる。あの先生は、いつもそうだ。

担任不在の教室で、やんちゃ盛りの中学生在が大人しくしていられるはずもない。生徒たちは先生の足音が遠ざかるのを聞き届けると同時に、ある者は席を立ち、ある者はスマホを取り出してゲームを始めた。

華々しい個性を持つ生徒には、取り巻きが付き物だ。かつちゃん――

――爆豪勝己の周囲には何人かの男子が集まり、大袈裟な口調で彼を褒めそやしていた。

「カツキ、雄英志望!?マジかよー!」

「いやでも爆豪ならユウユーっしょー!」

かつちゃんはそんな賞賛に対し、「当然」と言わんばかりに鼻で笑った。彼の斜め後ろに座る僕は、なんとなく左腕でプリントを隠し、こそこそと進路希望を記入した。

第三志望までの高校名を書き終え、両腕を天井に向けて伸びをし、一息つく。その瞬間、開け放した窓から吹いてきた風が一枚の紙をさらっていく。

「あ」

慌てて席を立ちプリントを追いかけるも、間に合わなかった。風に

遊んだ紙は無情にも、かつちゃんの近くにいた取り巻きの足元にひらりと落ちた。

「ん？誰のだこれ？えーと……なんだ緑谷かよ」

「おい、見てみるよ！第一希望『英雄』だって！」

「うっわ、緑谷お前さあゝ中三にもなつて夢見んなつて。正直引くわ……」

「——無個性のてめエが！なあんで俺と同じ土俵に立てると思つてんだ!？」

聞こえる嘲笑は、取り巻きの数人だけではない。隣の女子も、後ろの席の男子も僕を笑った。やがてその「笑顔」の輪は、クラス中に広がっていく。

かつちゃんが僕の机の上に掌を叩きつけ、轟音を立てて爆破すると、いよいよ賑やかな笑聲が弾けた。僕はしどろもどろになりながら、両手を振って声を絞り出す。

「ち、違うよかつちゃん！別に同じ土俵とか……張り合おうとか……そういうんじゃないし……それにその、やってみないとわかんないし……」

「ああ、!?馬鹿かてめエ！やる前からわかりきつてんだろーがクソナード!!」

「……つ、と、とにかくプリント返してよ……」

「出来損ないのデクが、俺に指図か？……あー、そんなにヒーローになりえてえんなら、いい方法があるぜ」

幼なじみは人差し指で上を指し、言った。

「来世で個性が宿ると願つて——屋上からのワンチャンダイブ！」
何を言われたのか、一瞬、わからなかった。

数瞬後、その意味を理解し、はらわたが熱を持つ。目の前が白黒に点滅し、周囲のざわめきすら聞こえなく——、

「あたしも英雄志望よ、カツキーン」

視界の端で、黒が蠢いた。虚を突かれたように陽炎かげろうの赤を見開く彼を覗き込み、少女は唇を吊り上げた。

「あたしもヒーロー科に行く。可愛い従兄妹が同じ志望校で、嬉しい

でしょ？」

「……は？」

彼女——爆豪瞳巳の個性で生み出された髪が、放心するかつちやんの肩をぺちぺちと叩く。

はつと我に返り「聞いてねーぞクソ蛇！」と怒鳴る彼にも、瞳巳ちゃんはどこ吹く風。「サプライズ成功〜！」と、ところろ笑う彼女に、やがて取り巻きたちも堪えきれずに吹き出す。

「ぶっ……まあ瞳巳ちゃんなら雄英でも受かるかもな。ウチの中学が誇る才色兼備だし！」

「いいよなあカツキは。オレもこんな美人な親戚と高校通いたかったわ〜」

「ふふん。あたしのお姉ちゃん達も雄英生だったのよ。さらにあたしたちが受ければ、『爆豪家は超優秀！』って逸話が残せるわ。賢くて可愛い瞳巳ちゃんに感謝してね？」

「するわきやねーだろ脳ミソ腐ってんのか焼き蛇にすんぞクソブス！！」

「こわ。カチャトーラの個性は“目を三角にする”能力なのかしら？」

「表出ろやア……」

「寒いからイヤ」

注目的は、僕から瞳巳ちゃんへと移り変わった。もはや誰も僕のことなんて見ちゃいない。くしゃくしゃになったプリントは、彼の取り巻きからあっさり僕の手元に戻ってきた。

彼女はいつだって、輪の中心で華々しく微笑んでいる。借り物の口調で、憧れのあの人を模倣している。

担任によつて進路希望の紙は回収され、放課後になった。

始業式の今日は、部活や委員会の活動がない。生徒たちは足早に校門を出て、カラオケや近くのファミレスに向かった。

僕は幼なじみの手によつて二階の窓から放り投げられた『将来のためへのヒーロー分析ノート』を取り戻しに、鯉や亀たちが泳ぐ池に来て

いた。

薄緑に濁った池には、萎れた桜の花びらがいくつも浮かんでいる。必死に手を伸ばし、水面からそれを取り上げると、学ランの袖は濡れてしまっていた。

母のように「周囲の物を引き寄せる」個性があれば。今朝のシンリンカムイのような、「腕を木の枝のように伸ばせる」個性があれば。こんな風に必死に手を伸ばす必要なんてなかった。いやそもそも、幼なじみからこんな仕打ちを受けることはなかった。

もしも、僕が無個性でなければ。

そんな考えが脳裏をよぎったが、頭を振ってすぐに打ち消す。僕はこれでよかったんだ。優しい母に愛され、何不自由なく育った。それはどんな個性とも引き換えられない、幸せなことだ。

それに、無個性だからと最初から諦めていては、『超カツコイイヒーロー』なんて夢のまた夢だ。

「気にしない、気にしない……オールナイトならこんな逆境だって、笑って乗り越える……」

俯いてノートの水気を払い、それをタオルでくるんで通学鞆に仕舞った。

「出久、もう帰るのかしら?」

「トあああ!」

どうせこんな何も無いところに残っているのは、僕だけだとたかを括っていた。だから突然声をかけられ、飛び上がった池に頭から突っ込みそうになる。

目を固く瞑り、顔面を襲うであろう着水の衝撃に備える。だが、覚悟していた感触は一向に訪れない。「あれ?」と恐る恐る目蓋を開くと、上半身に巻き付く一匹の黒蛇。

艶々とした蛇の先を辿ると、そこには長い黒髪を揺らす、もう一人の幼なじみが立っていた。彼女が髪から蛇を伸ばし、体勢を崩した僕の上半身を固定してくれたのだろう。

「危なかったあ。突然声掛けてごめんなさいね出久」

「そ、そんなことないよ!ありがとう瞳巳ちゃん」

しかし何故、瞳巳ちゃんがこんなところにいるのだろうか。人気者の彼女はてつきり、友人たちとファミレスかどこかに遊びに行くものだと思っていたのに。

「どうして一人でこんな場所に？」と聞くと、彼女は「出久の後ろ姿が見えたからよ」とたおやかに微笑んだ。

目の前の少女は、物心ついた時から知る幼なじみだ。たとえ目隠しをしていても可憐だとわかる、美しい少女だ。その笑みは、誰もが好感を抱くであろう穏やかさを湛えている。大人びた振る舞いに、誰もが彼女を信頼する。

それなのに僕は——彼女の柔らかな笑みが、たおやかな仕草が、好きではなかった。目隠し越しの笑みに、思わず眉を寄せて呟いてしまふ。

「どうして、そんな風に笑うの？」

「……え？」

「っあ、違うよ!?そういう意味じゃなくて……でも何かさ、最近の瞳巳ちゃんは……前よりもっと“あの人”に近づこうとしてるみたいで……」

無理をしているような、気がした。

サイズがまるで合わないヒールの靴を履いて、細い綱の上を歩かされてるような。俯いて、決められた道筋を必死に辿っているような。

「前はもっとうこう……にかーって、さ。歯を見せて笑ってたよ。口調だって、そんな感じじゃなかったよ。……無個性の僕なんかこんなこと言われて、嫌かもしれない。でも、瞳巳ちゃんは時々」「たすけて」って顔、してるから。

瞳巳ちゃんは、僕の自慢の幼なじみだ。かつちゃんと共に、いつだって僕の前を走っていた。姉のように手を引いてくれる少女だった。

そんな彼女に僕が何かを言うのは、間違っているかもしれない。ただのお節介かもしれない。それでも、体は勝手に動いていた。僕は瞳巳ちゃんに向けて、右手を差し出していた。

気が付けば、爆豪瞳巳は——私は差し伸べられた出久の手に縋り、祈るよう両手で握りしめていた。

「ねえ出久。あたし——私と一緒に逃げようって言ったら、どうする？」

「……え？」

出久は困惑を隠しもせず、緑の双眼をまんまるに見開いた。それは当然だろう。幼なじみから突然こんなプロポーズ紛いの、意味のわからないことを言われたのだから。

言葉を探し、口を幾度も開閉させて戸惑う彼に、私は独白を連ねた。

「あのね。夢を見るの。睡さんが死んでしまう夢。出久と勝己が遠くに行ってしまう夢」

「夢のなかの私は本当に愚図で、それを見ているだけなの。出久はすごい力を手に入れて、オールマイイトみたいに活躍する。でも高校に入ってからずっと戦ってばかりで、何度も何度も酷い怪我をする。指も腕も足も何度も骨折して、すごく痛そうだった。それで最後はぼろぼろになつて、皆を守るためにひとりぼっちになっちゃう」

「私は、出久をそんな未来に連れていこうとしてる。今日これから起こる『あの事件』に、あなたを送り出そうとしてる。死ぬ程苦しいってわかつてる場所に、一歩間違えれば簡単に死んじゃうような危険な道に突き飛ばそうとしてる。出久は、あの夏もその後も、私を守ってくれたのに。なのに私は……!」

自らへの嫌悪に迫り上がる嘔吐感を堪える。浅くなった呼吸もそのままに、私は目隠しを解き、金の両目で彼を見つめた。

「ねえ。出久は、ヒーローになりたい？本当の本当に？いつか『出久が負けたら世界が終わっちゃう』って場面になつても怖くない？それでも超カッコイイヒーローになりたい？——今ならまだ間に合うよ」

私は出久の温かな右手に縋り、地を這いずるように喚いた。今この瞬間が最後の分岐点だった。

あの時間に、あの場所に行かなければいい。出久を誘って近くのファミレスに寄って、チーズインハンバーグやコーンポタージュをお腹いっぱい食べて、普通に家に帰ればいい。そうすれば、出久はヘドロのヴィランになんか狙われない。オールマイトにも出会わない。OFAはどこかの雄英生が継ぎ、どこかで勝手に戦ってくれるだろう。そうすれば緑谷出久は、何の苦痛もなく生きられる。

私はその「出久の代わり」の主人公とともに、ミッドナイトの運命を変える。泥に塗れるのは私だけでいい。

「僕は」

長い沈黙の後、出久が口を開いた。

「君はヒーローになれる」

緑谷出久は、爆豪瞳巳の手を取らなかった。彼はオールマイトに出会ってしまった。もう後戻りは出来ない。

「あーあ。結局こうなるんだね」

出久は、心優しい少年だ。強い子だ。無個性だというだけで酷い仕打ちを受けようが、人を憎まない。決して夢を諦めない。

彼はどんなに痛くても怖くても、逃げ出さない。「助けを求める人がいる」と、ただそれだけの理由でどこまでも走っていきける、本物のヒーローだ。

私にとっての彼は、もうずっと前から「漫画のキャラクター」ではない。弟のように可愛い、自慢の幼なじみだ。一人の人間だ。私は出久が大好きだ。

だからこそ——許せなかった。

死にゆく私と親友を救わなかった、前の世界の人々。七歳の夏、「誰かが助けるだろう」と三人の子供を見ているだけだった、この世界の人間たち。

そんな救う価値もないその他大勢のために、出久は悩み、幾度も傷を負う。命を懸けて戦う。

「大っ嫌いだよ」

大切な家族、睡さん、出久、勝己。私は、あなたたちだけのヒーローになりたい。それ以外の人間など、私の目には映らない。

いつそみんなでアメリカにでも逃げようか。テレビでAFOとオールマイトとの戦いを他人事みたいに眺めて、週末は楽しく海とか山にでも行こうか。

袋小路の夢を見ながら、私は今日も目蓋を閉ざした。

13. 爆豪瞳巳と地獄の兎日姉妹

昔々——という程でもない、十数年前。あるところに、とても仲睦まじい夫婦がいました。

夫婦は、人々に慕われる人格者でした。優れた個性を持ちながらそれを鼻にかけない、立派な人間でした。彼らは「無個性の人々に希望を」と呼び掛け、各地をまわって根気強く演説し、優しい世界を作ろうとします。二人は、有名な活動家でした。

夫婦は可愛い一人娘に説きます。「個性の有無なんかで人の価値は決まらないよ」「無個性だからって、差別してはいけないわ」と。

「お父さん、お母さん。わたし、この人と結婚するわ。もちろん許してくれるわよね？」

ある日娘が自宅に連れてきたのは、いかにも善良そうな、柔らかな桃色の髪が特徴的な若い男でした。明るいい性格で、好奇心が旺盛で、聡明な研究者。誰が見ても、素晴らしい若者でした。しかし、彼は——無個性でした。

心優しい夫婦はもちろん、彼との結婚を——認めませんでした。あれこれと理由をつけ、人を雇い、その仲を無理矢理に引き裂きました。

夫婦は、一人娘を深く愛していたのです。無個性の男と結ばれ、苦勞の多い人生を送ってほしくはなかったのです。「普通」の人と「普通」の人生を生き、「普通」の子どもを授かってほしかったのです。

けれど娘の腹には既に、双子の生命が宿っていました。夫婦が危惧したとおり。産み落とされた双子の片方には、個性が宿りませんでした。

無個性の人間は、世界総人口の二割と言われています。その事実だけを見れば、「無個性とは、それほど悲観することではないのでは？」と思うかもしれません。しかしそれは「全ての世代」を合わせた数字です。

第四、第五世代と呼ばれる「新しい世代」で、個性という名の異能

はより強力になりました。無個性の人間は伴侶を見つけられず、ほぼ淘汰されました。今では二つの学校をまわってやつと一人、いるかないかの割合です。

そんな可哀想な少数者が虐げられるのは、当然でした。だって彼らを貶めることで、誰もが簡単に「勝ち組」の気分を味わえます。【髪を一センチ伸ばせる】【指先から水を一滴出せる】程度の、毒にも薬にもならない個性の人々も。無個性を嘲笑することで、簡単に「気持ちよく」なれます。

可哀想な少数者を守るものが現れるのも、当然でした。だって彼らを守ることで、誰もが簡単に「善い人」の気分を味わえます。「無個性だって、君は素敵だよ」「無個性だって出来ることは沢山あるよ」と優しく声をかけるだけで。何の取り柄もない人々だって、簡単に「気持ちよく」なれます。

「どうして?」

娘は嘆きます。何故、わたしは愛しい人と引き離されなければならなかったのか。無個性とは、それほどの罪悪なのか。敬愛していた両親の言葉は、全て偽りだったのか。何故——こんなにも可愛い娘が!こんなにも懸命に生きる命が、「無個性」の一言で蔑まれ、石を投げられ、踏みにじられるのか!

「どうか答えを」

娘は、双子の姉妹に名前をつけました。分かちがたい、二つで一つの名前を贈りました。

「どうかお答えくださいーい!」

「一言でいいんでー!」

「キミ、ヒーロー科? 個性何? カワイイね、華があるよ! うちの局でヒーローの卵を集めた番組作るんだけど、興味ない?」

戦闘訓練の次の日。朝の雄英高校正門には、多くの報道陣が詰めかけていた。

彼らの目的はひとつ。「雄英の教師になる」と電撃発表したN.O.1ヒーロー・オールマイトが行う授業についての取材だった。

私は「そういえば原作にもこんな描写あつたな」と、生真面目にインタビューを受ける飯田くんを横目に、あくびをしながら校門をくぐろうとした。

した、のだが——ヒーロー科の私はあつという間に何人もの取材陣に囲まれ、マイクを向けられてしまった。

雄英の制服は、どの科も全く同じに見えて実は少しずつ違う。ヒーロー科は、ブレザーの胸元と袖に二本のラインが入っている。対してサポート科は、三本のライン。普通科と経営科にも、そのような違いがある。一目見ただけで、どこに所属する生徒か識別できるようになっていた。

記者たちは、道行く生徒の制服に注意深く目を光らせていたのだろう。素知らぬ顔で校門に向かう私を目敏く見つけ、「ヒーロー科だ!」「逃がすな!」と囲んだ。アマゾンで密猟される蛇の気持ちになった。記者の他に何人か居るテレビ局の人間は、私の顔と体を不躰に眺めまわすなり「今度の番組に出ない? ヒーロー科所属ってことは、有名になりたいんでしょ?」とにじり寄ってくる。

たしかに、瞳巳ちゃんは可愛い。両親も姉も揃って美形だし、スタイルだって良かった。家族らに似ている瞳巳ちゃんが可愛くないはずがない。

それに加え、私はミッドナイトの艶やかな唇やネイルに憧れ、少しでも近付こうと真似ている。彼女のように綺麗でいい香りがする黒髪になろうと、バスタイムの手入れも欠かさず行っている。

……彼女の愛用品は多くがブランド品でお小遣いでは手が届かないため、色つきリップクリームや雑貨屋で買える物での代用なのだが。

とにかく、そんなお洒落で可愛いくてスタイルが良くて成績優秀で天下の雄英生でしかもヒーロー科でさらに五条悟みたいなミステリアス目隠しであまつさえ性格すら爆発的にステキという究極生命体・爆豪瞳巳は、あつという間に記者たちの壁に行く手を阻まれてしまった。

「オールマイトの授業についてと、あなたの個性を教えてください!」

「名前と顔出して放送していい？ きつと君のファンができるよ！」

「ちよつと、彼女はうちの番組に出すんだよ！」

「カメラまわすから、その邪魔な目隠し取ってー！」

「……………」

四方から矢継ぎ早に話しかけられ、何も聞き取れない。しかも、許可も出していないのに何人かの記者は勝手に写真を撮っている。

私は「話にならない」と呆れ、逃げ道を探した。相手がヴィランや悪質なナンパなら、正当防衛としてこっそり個性を使うなど、いくらでも切り抜けようがある。

だが、海千山千の記者相手にそれはまずい。わざわざこの学校に正面切つて喧嘩を売る阿呆はいないと思うが、個性を使い彼らを強引に退かして、「黒髪に黒目隠しの雄英生に脅された」なんて大袈裟に書かれては、ミッドナイトや相澤先生にも迷惑がかかる。

さて、どうしようか。遅刻すれすれ覚悟で適当に応答し、解放してもらおうか。それとも、泣き真似でもして退き下がってもらおうか。

頬に手をあてながらそう思案した瞬間。私の体を新緑のツルが包み、軽々と持ち上げる。

「ワツ……ワアツ……！」

驚きすぎて、ちいさくてかわいい生き物のような声が出てしまった。

上空から、口を間抜けに半開きにした記者たちの顔を見下ろす。彼らの頭上を通り、ツルの主の元へと着地する。

「大丈夫ですか？ 楽園の蛇」

「塩崎さん……！」

髪から長いツルを伸ばした少女——塩崎茨がこちらを見つめ、静かに口を開く。後光の如く降り注ぐ朝陽を背景に若草色の髪を揺らす姿は、ステンドグラスに描かれた宗教画のような静謐を湛えている。

白百合の少女の登場に、先程まであんなにも騒がしかった取材陣が、水を打ったように静まり返った。

「行きましょう。遅刻してしまいます」

塩崎さんは彼らを気にも留めず、門に向かった。息を飲んだ記者たちが彼女のための通り道をあける光景は、さながら『モーセの海割り』だった。

記者たちから離れ、門をくぐる。意外にも強気な塩崎さんの姿に、胸がじんわりと熱を持つのがわかった。

「塩崎さんかつこよかった……！ 助けてくれてありがとう」

「いいえ。貴女には試験のときの大きな恩がありますもの」

「それはこちらと同じよ。……でも、堂々と個性使っちゃったわね。先生方には見られてなかったと思うけど」

「……お、大勢に囲まれた貴女が困っているのを見たら、つい……体が勝手に……」

「ン」

しゅんと俯く長身の彼女を、感情に任せて抱きしめてしまいたくなった。何かとボディタッチが多く、愛情表現がストレート。それがミッドナイト教育である。

しかし入学式の日のように飛び付いては驚かれてしまいそうだったので、髪に咲かせた蛇を伸ばし、隣を歩く塩崎さんの腕に控えめに絡めた。一匹の黒蛇が、心なしか嬉しそうに制服越しの腕にすり寄る。

「……少し、くすぐりたいです」

「あら。あなたのツタも柔らかくてくすぐったかったわ」

「まあ……」

にっと笑って覗き込むと、彼女は品良く指先を口元にあて、慈愛に満ちた双眸で微笑んだ。

「じゃあまたお昼にね」

「はい。午前の授業も励みましょう」

彼女とは廊下で別れ、A組の扉を開く。HRにはまだ時間があるが、教室にはすでにほとんどの生徒が揃い、いくつかのグループを作って談笑していた。

私の席は教室の一番奥だ。教室を横断し、全員に「おはよう！」とにこやかに挨拶をしてまわる。私は蛇という、人間が本能的に嫌悪する生き物”に関する個性だ。しかも目隠しで目を隠しているため、表情が伝わりにくい。だからこそこうして分かりやすく朗らかに振る舞い、ミッドナイトのような誰にでも好かれる人間になろうと努めている。

漫画を読んでわかってはいたが、この世界の民衆の差別意識は、はつきり言って酷い。『個性で性格を判断するのはやめよう！』なんてポスターが至る所にある時点で、実情はお察しである。

個性の内容で人となりを判断し差別する者が、少なからず存在してしまうから。だからこの手のポスターは、私が幼いころからいつまでも、どこにでも掲示されたままだ。

「爬虫類系個性は冷血で、人の心が無い」「蛇個性は縦に長い瞳孔が怖くて気持ち悪い」など、私たち家族も陰で散々言われてきた。

——その度に喧嘩っ早い父が飛び出して行って、「オレの宇宙一カワイイ妻と娘たちを侮辱すんじゃないやねエ蠅共が！」と爆豪家特有の導火線の短さで相手に殴りかかっては、慌てた母や姉に取り押さええられていた。「見た者を一瞬驚かせる」個性を持つ母に蛇睨みされ、「腕を蛇に変形させる」個性を持つ姉二人に、ぐるぐる巻きにされていた。ちなみに幼い私はその見事な連携プレーを見て爆笑していた。爆笑瞳巳である。

そんな父の兄である勝さんは、一見すると『爆豪』なんて物騒な苗字が似合わない大人しい人だ。だが、ヒーローを目指していた学生時代は今の勝己程でないにせよ、勝気だった……と、父から伝え聞いている。

「……………んふふ」

「おはよう瞳巳ちゃん！ なあんかご機嫌だね？ 朝からいいことあった？」

ぱたぱたと駆け寄ってくる透ちゃんに顔を向け、ゆるむ口元に片手を添えた。

「おはよう透ちゃん。……………ふふ、思い出し笑いしてただけよ」

今いる全員に挨拶をし、一番奥にある列の前から二番目、自分の席に座る。鞆を机に置きながら半身を捻り、後ろの出久に「腕はもう大丈夫？」と訊くと、前方を気にしたきこちない様子で「うん、ありがとう」と頷いた。

勝己は彼の小声に僅かに反応はしたものの、いつものように振り返って絡んできたりはしなかった。

戦闘訓練があつた昨日の放課後、出久は呆然自失で校舎を後にする勝己を追い、「これは人から授かつた個性なんだ」と打ち明けた。

見下していた幼なじみと正面きつて戦つての敗北、雄英で出会つた「敵わないかもしれない同級生」の存在に、彼の矜持は無惨に切り裂かれた。

私は原作に於いて重要な意味を持つその「イベント」が正しく行われるさまを、物陰から眺めていた。

『氷の奴見て、敵わねえんじやつて思つちまつた！ポニーテールの奴の言うことに納得しちまつた……！』

自分こそは選ばれた存在だ、ヒーローなんか簡単になれる。有象無象とは違う。弱いくせに何度叩いても立ち上がってくる、理解できない幼なじみ。そんな不気味なデクだって、遥か下層のモブでしかない。

そう信じきつていた十五歳の少年にあの授業が、敗北が、どれ程の苦痛をもたらしたか。現実を認められず歪み、悪に堕ちてもおかしくない出来事だろう。

それでも彼はまるで痛みを塗り替えるように、大粒の涙を流して吼えた。

『こっからだ！いいか！俺は……！俺はここで一番になってやる！！そんで……！これ以上、俺の家族を死なせねえ！！アイツを、瞳己を三度も死なせてたまるかよ……！！』

この「イベント」を、最後まで見届けたかった。けれどそれは出来なかった。涙に歪む陽炎かげろうの瞳があんまり幼いので、私は過ぎ去つた日々を思い返して俯いた。思い出の中の彼はいつも、泣いてばかりいる。

彼らが去った後も物陰に座り込んだままの私の頭上に、音もなく大きな影が差す。

「やあ、爆豪少女!」

「……オールマイト」

姿を隠していたというのに、No. 1ヒーローである彼には容易く見つかってしまった。彫りの深い顔立ちを見上げると、オールマイトは思慮深い眼差しでこちらを見つめていた。

「なんというか……君たち幼なじみは、複雑な関係なんだね」

「……大丈夫です。出久も勝己も泣き虫だけど、強いですから」

偉大な英雄の前に、いつまでも脱力して座り込んでいるわけにはいかない。膝に力を込めてゆらりと立ち上がると、スカートのポケットから金色がひとつ零れ落ちた。

「あつ」

一秒もかからず地面に落下すると思われたそれは、「おつと失礼!」という言葉と共に受け止められた。オールマイトが常人離れた反射神経で、地面に落ちる前の金色を拾い上げたのだ。瞬きの間の、驚異的な速度だった。

大きな掌にちよこんと乗る飴玉の包みを見て、彼は劇画調の顔を綻ばせる。

「あれ?この飴は……私がイメージキャラクターをしている『ヴェリタースオリジナル』じゃないか!これイイよね!バターとキャラメルの懐かしい味がしてさ!」

「あ……か、勝己が昔、『こんな素晴らしい飴を貰える君は、特別な存在だ!』っていうあなたのCMの真似をしてくれて……それ以来落ち着きたい時とか、舐めるのがくせになっちゃって……」

「あの爆豪少年が!?微笑ましい思い出だね」

「……んふふ。よかつたらそれ、お一つどうぞ。たくさん持つてるので」

昔の思い出を語ってしまい何となく気恥ずかしくて、髪をくるくると指に巻き付けながら言う。オールマイトは包みを開けてそれを口に入れ、「うん、変わらない味だ!」と嬉しげに口角を上げた。

「ひほは皆、はへかにとっての特別な存在はからね」
「なんて？」

オールマイトはもごもごと飴玉を転がしながら言葉を紡ぐと、細かな傷跡だらけの無骨な掌を私の頭に置いた。分厚く大きな手で撫でられ、まるで普通の子供に戻れたような——そんな錯覚を覚えた。

閉じていた目蓋を開き、目の前の背中を見つめる。

朝のHRまではまだ時間がある。私は普段より俯きがちに座る勝己の背に、指で文字を書いた。「触んなブス」と身をよじるので蛇で両腕ごと体を拘束し、素早くメツセージを書ききる。

『がんばれ泣き虫！』

勝己は怒り狂って暴れていたので何を書かれたか気付かなかっただろうが、それでいい。何があっても勝利を見据える彼に私がどれだけ救われているかなど、生涯知らなくていい。

そうこうしている内に相澤先生がやってきて、朝のHRが始まった。「急で悪いが、君たちにはこれから……学級委員長を決めてもらう！」という宣言に、A組は「学校っぱいの来たくく！」と歓声をあげた。

クラスのほぼ全員が学級委員になりたいと手を上げるが、私は挙手しなかった。どうせ最終的には出久が飯田くんを委員長を譲り、副委員長は八百万さんになる。ならば無駄な立候補はせず、出久に投票しよう。もう一人の幼なじみにもエールを送っておこう。そう思っていたのだが。

「なんで私に一票？」

私は立候補すらしていない。では一体誰が私の名を書いて投票を？ 匿名で白紙に名前を書くタイプの形式だったので、見当もつかない。輝かしい英雄精神を備えた者ばかりのこのクラスで、「委員長に相応しい」と思われるだけの行動をした憶えもない。

HRが終わって休み時間に入ったが、深く考え込む暇はなかった。

「失礼！ここに爆豪瞳巳さんはいらっしゃいますかいらっしゃいますよねアツいらっしやいましたね！」

突如として勢いよく開かれたA組の扉。ジヨジヨであれば『ドバアアアン』と大きく奇妙な文字で効果音がつきそうな、一切の遠慮のない、堂々たる入室だった。

「ダイナミック入室☆」

「びつつくりしたあ！えっ誰!?誰なの!?!」

「少しいいだろうか!?他クラスの者は、一度扉をノックしてから入室すべきだと思うのだが!」

「ブレないわね飯田ちゃん」

扉の近くにいた、名前順の早い数名が肩を揺らして声をあげる。しかしまるで聞こえていないとでもいうようにその全てを無視し、*「彼女」*は私の元へ一直線にやって来た。

桃色の、特徴的な癖っ毛。いかにも好奇心旺盛そうな、萌黄色の大きな両目。私は一方的に、彼女を見知っていた。

「発目明、さん……!?!」

驚愕のあまり思わず音を立てて席を立つ私に、彼女は虚を突かれたように動きを停止し、次の瞬間嬉しげに眦を弛めた。

「おや、メイを知っているのですか!?!フッフ、さすがは我が妹……!入学数日でもう既にヒーロー科にまでその名を轟かせているとは!やはりあの子は天才ですね!姉として誇らしいです!」

「ワツ……ワアツ……うそうそうそ、なんで発目さんが出久じやなくて私に会いに?いやそもそも発目さんに出会うのはまだ早すぎるはず……これは流石に原作に影響が……助けて睡さ、ん——ん?妹……?姉……?あれ、制服、ブレザー、サポート科じゃ、ない……?」
ぶつぶつと呟く私に、*「発目明によく似た彼女」*は胸を張り、高らかに名乗りを上げた。その目元には、発目明にはない黒縁メガネをかけている。

「お初にお目にかかります、経営科の発目解カイと申します!昨日の戦闘訓練の中継を授業で拝見して、あなたに一目惚れしました!」

「……だつてさ、出久」

「!?ぼ、僕じゃなくて明らかに瞳巳ちゃんのほう見てるけど……」

「……一目惚れだつてさ、良かったね瀬呂くん」

「キラークラスやめて？カワイイ子だと思うけど話聞いてくれなそうだから隣の上鳴にパース」

「俺え!?うーん、とりあえず一回デートしてから……かな!?木榔区のモールで映画とカフェとか、」

「あのですね!!」

「ウエ……」

「ブフツ」

スツ……と出久に話を回してスツ……と視線を逸らされ、仕方なくスツ……と隣の瀬呂くんに笑いかけるがはぐらかされ、最終的にスツ……と上鳴くんのところにお鉢が回ってきたところで、彼女———発目解が彼のデートの誘いを遮り、再び声をあげる。(耳郎さんは無視されて若干ウエイ状態になった上鳴くんを見て机に突っ伏した)

「爆豪瞳巳さん!私はあなたをプロデュースするんです!他の誰でもなく、あなたを!!なぜだかわかりますか!?!」

「アツワカラナイデス……蛇ダカラ日本語ワカラナイ……」

勢いに気圧される私の机に身を乗りだし、発目解は不敵に笑った。

「私は日本No.1企業の社長になって、妹のお財布にならなくてはいけないのです。その為に私は———あなたという勝ち馬に乗るのです」

「———……というわけで!ご覧の資料の通り、時代はミステリアスかつ理知的なヒーロー像を求めているわけです!統計的に見ても最近は秘密主義で頭脳派なヒーローが断然ウケるんです!エツジシヨット然りシンリンカムイ然り!地方ヒーローでありながらチャート上位のホークスなんて経歴も本名すら不明!ですが朗らかな態度と裏腹な徹底した秘密主義がむしろ人気の一因として成立している———ああ、ミステリアス以外の要素ではリユークユウのようなクールビューティもウケがいいですね!その点もあなたの近寄り難く涼しげな顔立ちと目を惹くスタイルは打ってつけです!デビューしたてのミッドナイトを思わせる美貌や上品な口調もポイン

ト高いですよ！さらに言えば蛇というモチーフはグッズ化にも向いています！あ、グッズ化といえばNo. 2でありながらグッズ売れ残り常連のエンデヴァーについてそのマーケティング戦略の敗因を考察したのですが——で、数年前まではCMやバラエティ番組に出るようなヒーローがランキング上位でしたが今は——私の分析では市場のこの流れが——の法則に則れば——」

発目解は休み時間の度に私の元を訪れ、「さあ私と専属契約を結んで、勝ち馬……もとい、稼げるヒーローを目指しましょう！」と粘った。彼女は私をウマ娘（蛇）か何かだと思っっているらしい。

どこか別室に逃れたくても、休み時間のチャイムとほぼ同時に飛んでくるのではどうしようもない。発目解は飯田くんと同じ個性を持っているのか？と疑ってしまいう程のスピードとスタミナで、私をしつこく追い回した。

私と彼女はA組全体を駆け回って、今日何度目かの追いかけてこを繰り返す。

「た、たしかにあたしは爬虫類系美少女だけど。五条悟みたいにクールな目隠しだけど。でも性格はミステリアスじゃないし無口でもないわよ！」

「イメージ戦略も経営科の仕事です！契約の暁にはその見た目に相応しい振る舞いを身につけてもらいます！理想的な受け答えも私が仕込みます！」

「あら、知っていて？蛇は人間に『慣れる』けど、『懐き』はしない高貴な生き物なのよ」

「冷たい表情に高飛車な口ぶり……素晴らしい！戦闘訓練のあの余裕たっぷりかつ堂々たる戦いは最高でしたよ！ぜひあの路線でがんばって行きましょう！」

「だからあ、イヤよ！」

戦闘訓練の生中継を見て私の『将来性に』惚れたという解は、契約書とプレゼン資料を片手にぐいぐい来る。……出久を前にした発目明さんとそっくりだ。違うところといえば、目の前の彼女は黒縁メガネをかけているという一点くらい。どうやら彼女たちは一卵性の双

子らしい。

「戦闘訓練であの巨体の男子生徒を相手に、強気に立ち向かった姿！煙の向こうから現れた、華やかな衣装のあなた！不敵な笑みと、十五歳とは思えない余裕！これこそ、次世代に求められるヒーロー像ですよ!!」

満面の笑みで語る解にはもはや、皮肉も文句も通用しない。私は半分冗談、半分本気でクラスメイトのプレゼンをすることにした。

話を通じない人を撃退するには、同じくらいマイペースに会話を吹っかけるのがいい。運が良ければ「爆豪瞳曰って思ってたよりアレでしたね……」とプロデュースを諦めてくれるかもしれない。次のウマ娘（もしくはウマ息子）を探してくれるかもしれない。

室内を走りながらぐると教室を見回した私と、心配げに見守る障子くんの視線が目隠し越しに交わる。彼に駆け寄った私はその大きな背に隠れながら、解に向かって言う。

「ミステリアスっていうなら、障子くんはどう？寡黙な仕事人だしクールかと思えば仲間思いだし、絶対人気出るわ!」

「え」

「ふむ、なるほど!しかしグッズ展開や各種コラボのしやすさ、若者ウケするビジュアル……即ちカネになるかどうかで言えば瞳曰さんですな!」

「……聞き捨てならないわ。A組イチの紳士・障子くんの魅力についてプレゼンしてあげる!」

「え」

「結構です!」

目を点にする障子くんの周りを、桃色と黒の髪を揺らした二人の少女がぐるぐると走り回る。クラスメイトが困っているが、相手がヒーロー科でもない普通の女子のため、どう助けたものかわからないのだろう。

おろおろと所在なく複製腕を動かす障子くんが可哀想なので、私はA組が誇る火薬庫に助けを求めた。

「助けてカツえもん……!」

「ハッ、ざまあねえな蛇女ア！」

勝己は腹をかかえて爆笑し、歯茎剥き出しスマイルをキめていた。目尻にはうつつすらと涙すら浮かんでいる。

こ、この泣き虫毛虫めが。さつきまで背中を丸めて落ち込んでいたくせに。私は後日、勝己の体操服の内側になるべく大きい毛虫をくつつけておいてやろうと固く誓った。

次なる救いを求めて、素早く教室を見渡す。そしてA組が誇るクルビューティーズに狙いを定めて走り、息を切らして舌を纏れに纏れさせ噛み噛みになりながら助けを求めた。

「や、やおよりよずさん、とろろろきくん！発目さん彼らはどう？絶対人気出るでしょう！勝ち馬じゃない？」

「うーん、半々の彼は父親の印象が強すぎるので却下！あと、さすがに表情筋が固すぎる！戦闘訓練でも何かこう……思い詰めている感がありましたよね。このままでは売れなそうです！」

「……？」

「低俗な会話ですこと……」

八百万さんが眉をしかめ、次の教科の予習をしていた轟くんがきよとんと瞬きをする。彼なら公式イケメンサラブレッドなので解さんも乗り換えてくれると思っただが、駄目だった。言い返せない正論を突きつけられてしまった。

たしかに初期の彼はエンデヴァーへの憎しみが大きすぎて、戦闘スタイルも表情も刺々しい。クラスメイトですら、世間話もままならない近寄り難さだ。

八百万さんは、「さすがに大企業社長令嬢をプロデュースするのは、ご両親の圧が気になる」と言われてしまった。かくなる上はと轟くんのすぐ後ろに座っていた透ちゃんの手を取り、訴える。

「彼女は葉隠透、個性は【透明化】と【カワイイ】こと！複数個性持ちなのよ、すごいでしょう可愛いでしょう？スタイルだっていいし、アイドル系ヒーローにうってつけよ！」

「……俺以外の同級生にも、複数個性持ちがいたんだな。しかもこんな近くに……」

「ち、違う！轟くん違うからね!？」

全力で否定する透ちゃんの後背に隠れ、ちらりと兎目解の反応を窺う。しかし彼女は「やれやれ」と首を振るだけだった。

「たしかに透明ボディも素敵な個性ですが……次の時代が求めるテーマであるクールさやミスティアスとは違いますし、素顔が可愛いかどうかもわかりませんか？」

「喧嘩売ってるの？透ちゃんはガワ、イイ！もつとちゃんと見てよ！」

「わく、そんなに見られると恥ずかしいな！」

「見えますん」

爆豪家特有の意志の強さで、葉隠透をおすすめする。きらきらした色んな衣装を着せてください、握手会には通うし写真集は毎日十冊買うから、と懇願する。むしろ私にプロデューサーさせてほしいと思っ

だが解も頑固なもので、「爆豪瞳巳と契約する」と言って引かない。

「ああそうだ、可愛いといえ。初めて見たときから思っていたのですが……瞳巳さんが付けている花のピン留め、デザインが幼いというか、古臭くて全然似合っていないですよ！あなたにはきらきらした宝石などが似合うはず。私と契約してあなたに相応しい、もつと綺麗な髪飾りを探しましょう！」

「……………」

休み時間が訪れる度に始まる追いかけること原作外の出来事で、ずっと前から脳は混乱していた。そこに追い討ちをかけるように、ミッドナイトから貰った大切な髪留めへの侮辱。

頭に血が上り判断力が鈍った私は、彼女に向けて毒の滴る牙を見せ、微笑んだ。

「あなた、本当に——全力で抱き“絞め”たくなるくらいしつこいわ。あなたの個性は【粘着質】なのかしら？妹さんとは随分違うのね？」

「いいえ。私はメイと違って無個性なので」

途端、騒がしかった教室が静まり返る。

わいわいと囃し立てていた男子は笑顔をなくして凍りつき、呆れ顔だった女子は唇を半開きにして絶句した。私を指差して爆笑していた勝己までもが、声を失った。出久は、鮮やかな緑の瞳を揺らして彼女を見つめた。

そして、私は。

「あ……ごめ、」

ごめんなさい、そんなこと知らなくてと謝ろうとして、その空虚さに愕然とした。

私はなぜ、何を、どう謝ろうとした？「雄英生は個性があるのが普通」という前提で話してごめんなさい？「無個性の持たざる者」への配慮がなくてごめんなさい？「可哀想なこと」を言っただけで「ごめんなさい」？

ヒーロー科に入れるほどの恵まれた個性持ちの私が何を言っても、彼女への侮辱にしかならない気がした。口にしかけた中身の無い謝罪は空をさまよい、続く音はなかった。

四限始業のチャイムがやけに大きく鳴り、A組のほとんどが肩を震わせた。

「また来ますー」と走り去る彼女と入れ替わりに

相澤先生が教室に入る。彼は凍りついた教室でただ一人立ち尽くす私に、訝しげに言葉を投げ掛けた。

「おい、爆豪②。顔色が優れないがどうした？」

「……嫌だわ、あたしは全然いつも通りですセンサー。ドライアイが進んだんじゃないかしら」

凍りついた教室での授業が終わり、昼時になった。彼女は先程までのように、チャイムと同時に飛んでは来なかった。

私はいつも増して湧かない食欲のまま、無理矢理に足を動かして食堂を目指した。

重い唇の端を持ち上げ、先に二人がけのテラス席に座って待っていた塩崎さんに笑いかける。優しい彼女はすぐに異変を察知し、心配そうに私の顔を覗き込んだ。

「顔色が悪いですが……大丈夫ですか？」

「……うん。あたしは大丈夫よ。でも」

発目解は、大丈夫ではないかもしれない。きっと、心ない言葉で傷付けてしまった。迫り方は強引だったにせよ、彼女は私を気に入ったと言ってくれたのに。

手付かずのスープを見つめて辿々しく言い淀む私の手を、柔らかな体温が包んだ。

「誰かに心ない言葉を言ってしまったなら、謝りましょう。そして心を込めて、寄り添いましょう。難しいことはありません」

塩崎さんは慈愛に満ちた微笑みを浮かべていた。自分に自信がない卑屈な私は、そんな綺麗な彼女に毒々しい返答しか返せない。

「もし、謝ること自体がその人を傷つけるとしたら？」

「それなら今私がしているように、何も言わず手をとればよいのです。想う気持ちはきつと伝わります。貴女なら大丈夫です」

「……どうして？受験の日と入学から何日かしか話したことないあなただが、どうして大丈夫だなんて言えるの？」

「……それは……話せば長くなるのですが……実は私は中学の頃、『雰囲気怖くて近寄り難い』と言われて遠ざけられ、友人が居らず、それで、」

「はあく!?塩崎さんみたいな聖女にそんな酷いこと許せない!それ言ったの誰!?こんな優しくして友達思いな塩崎さんに○×? 4 j t m 5 ?? a w が? ……!!」

「……ふふ。そういうところですよ。誰かの為に心を動かせる貴女だから、私は『大丈夫』と自信を持って言えるのです」

「そ、そんなの……!誰かの為なんて綺麗なものじゃなくて結局は自分の為で」

ごによごによと呟く私を見て微笑んだ塩崎さんは握っていた手のひらを離し、食前の祈りを始めた。

それが終わるのを待ってから、私もまたスープに手を付ける。ほとんど味がしない”という違和感を堪えて食事を終えた頃——その『イベント』は始まった。

『セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに避難してください』

けたたましく鳴り響く警報。我先にと狭い出入口に駆け出し、恐慌に陥る食堂。

「何でしょう、この警報……神聖な学舎まなびやに侵入者とは、なんと不届きな……」

訝しげに眉を潜めるが冷静に辺りを見回し、不用意に動かない塩崎さんが呟く。テラス席に座っていた数組は、「三年間でこんな初めでだ!」「君たちも早く逃げたほうがいい!」と言って、食べかけの食事を放り出して走っていった。

「どうします楽園の蛇、私たちもここから校庭へ避難しましょうか」

「……そう、ね」

原作では、警報が鳴ったのは『報道陣が侵入してきただけ』といち早く気付いた飯田くんが麗日さんと協力し、「ただのマスクミです!大丈夫!」と言って混乱を治めていた。人波に押し流されながらも、彼は誰よりヒーローらしく行動した。そんな行動を見た出久は、やはり彼こそがリーダーにふさわしいと委員長を譲る。

その場面を見届けられないのは残念だが、今立ち止まっていたは怪しまれてしまう。皆に倣い、塩崎さんと避難しよう。そう思っていた私の蛇越しの目に、よく似た「彼女ら」が映る。

「ごめん、塩崎さん。先に避難してて」

「あっ……楽園の蛇!危険です……!」

「大丈夫だよ!」

テラス席の開け放たれた窓から飛び込み、悲鳴飛び交う食堂に入る。窓のサッシを蹴り、勢いをつけて生徒たちの頭上を飛ぶ。

天井に張り巡らされた換気用のダクト管に掴まり、彼女ら——兇目姉妹の姿を見下ろした。二人はそれぞれ、食堂の中央と窓際にいる。距離からして、一緒に昼食をとっていたわけではないだろう。

今にも人混みに押し潰されそうな二人の少女目掛け、急いで髪から蛇を伸ばして胴体に巻き付け、天井へと掬い上げた。三人分の体重を支える両腕が、重い。細いダクト管が軋み、悲鳴を上げている。

「もう、何であたしがこんなこと……。早くしてよね飯田くん！」

「ぶはっ……！助かりました瞳巳さん！冷たい態度をとっても、最終的には助けてくれる……。フッフ、やはりあなたは理想のヒーロー、」

「カイ、姉さん……。？」

「……………え？」

宙に浮いた飯田くんが出入口の壁に激突しながら、「落ち着いてください！」と必死に叫ぶ。瓜二つの少女たちは、時が止まったように互いに見つめ合う。

解は、自身と同じ色をした妹の目を見て、首筋へと視線を落とした。発目明の健康的で滑らかな肌には、皮膚が裂けて引きつれたような、痛々しい傷跡があった。私は「あれ？」と首を傾げる。原作の彼女にこんな傷はなかったはずだ。

警報の原因は「ただの暴走したマスコミだった」とわかり、騒ぎは急速に収まった。天井のダクト管に掴まっていた私と蛇を巻き付けて浮かせていた姉妹は、すぐに食堂の床に足をつけた。

さすがに三人の体重を支えつつ細い管に掴まるのは、腕への負担が大きかった。ミッドナイトの肉体派教育がなければ、瞳巳ちゃんの細腕は儂く折れてしまっただろう。

……。などと、目の前の複雑骨折並みに複雑そうな姉妹の距離を見て、現実逃避をする。

「メイ……。あの、ひ、久しぶり。元気そうで安心しました。発明品のほうはどうですか？し、資金なら私がいくらでも、」

「その蛇の方！どこの誰かは存じ上げませんが、救助感謝します！では私はこれで！」

「あ、待ってメイ……。！」

私は一体何を見せられているのか。人様の家庭のセンシティブな場面を目の当たりにして、人は何を言うべきなのか。

「えっと、昼休みはまだあるし……。飲み物でも奢りましょうか？」

「……………」

妹に丸無視され、先程とは打って変わって無言になってしまった解に向き直り、私は自販機を指さした。

騒動がひと段落して、ほとんどの生徒は食堂から去っていった。きつと教室に帰り、「きつききはびっくりしたね」「三年間でこんな初めて」だとか、友人たちと話し込んでいるのだろう。

混乱から一転して静まり返った食堂の片隅に腰掛け、砂糖とミルクたっぷりのコーヒーを手に、彼女はぼつりぼつりと語った。

「実は、私の最愛の妹……メイとは色々あって。少し……ほんのちよつぱり、折り合いが悪いというか」

「うん、それは見たらわかるわ。存在ごと無視されるって相当なレベルよね」

「……………」

「あああごめんなさい！」

彼女は食堂のテーブル備え付けの角砂糖をこれでもかと紙コップのコーヒーに入れ、ヤケ酒のように一気に呷った。それ絶対砂糖が溶けきっていないし、すごくジャリジャリしてそうだと思った。

今にも泣き出しそうに瞳を潤ませた解が、言葉を紡ぐ。

「メイの首筋から鎖骨の傷、見ましたか？」

「ええ、見たわ。あんなに目立つのだから、嫌でも目に入るわ」

「あの傷は、生涯消えないと言われました。……私が、つけてしまったのです」

「……………」

「まだ小学生の頃です。私は無個性ということ、近所の子供から虐められていました。私とよく似ていたメイは、きつと間違えられたのでしょう。『ヒーローごっこ』をする男の子たちは、尖った石を妹に投げつけました」

「……………」

「家に帰ってきたメイは、顔も服も血塗れでした。メイは痛がって、泣きじゃくっていました。涙と血でぐちゃぐちゃになったあの子の姿は、生涯忘れられないでしょう。無個性の私のせいで、妹に辛い思いをさせてしまいました。無個性の私なんかとはまるで違う、才能溢れ

る可愛い妹に、消えない傷と恐怖を残してしまった。だから私も」

光を宿さない双眸で淡々と語る発目解。彼女は不自然に言葉を区切り、ネクタイを解き、制服のボタンを外した。晒された目の前のそれに私は声もなく、隠した両目を見開いた。

「だから私も、同じ痛みを味わったのです」

解の首筋から鎖骨には——妹と同じ、いや、もつと酷い裂傷が、生々しい肉の色を覗かせていた。

「なに、それ」

掠れ声で問う私に、彼女は事も無げに衣服を割り開く。姉妹でお揃いの萌黄色を真っ直ぐにこちらへ向け、「当然のことをしただけ」とばかりに、落ち着き払った無表情だった。そこに狂気や陶酔はない。

七色の絵の具で何度も乱雑に塗り潰したようなその瞳を、私はよく知っている。数年前の夏、毎日鏡の中で出会っていた。

「ええ。もちろん、この程度でメイに与えてしまった痛みや恐怖は拭えません。私は考えました。どうすれば妹への償いが出るか。無個性の私が、天才の妹に何をしてやれるか。その答えが、資金援助です。私はN.O. 1ヒーローを創り出し、お金を稼ぎ、N.O. 1企業の社長にならなくてはいけないのです。何より発目が大好きで、でも世渡りがどうしようもなく下手くそなあの子の幸せを、支えなくてはいけない」

「卑怯だわ。そういう言い方をされたら、協力しないあたしが冷血な非人間みたい」

「卑怯上等です。あの子の笑顔の為なら。私の無個性傷で他人の同情と協力を引き出せるなら、いくら石を投げられたって私は大丈夫なのです」

「あの子の大切な発明品ペイヒーを一番に見るのが私でなくても、構わない」「もう二度とあの子とじゃれ合つて、抱きしめ合えなくても構わない」
昼休みの終わりが迫り、殆ど誰も居なくなった食堂で、彼女はそう零した。

私は理解した。なぜまだ一年生である発目解が、起業だとか金銭に固執していたのか。なぜ、発目明が姉から目を逸らしたのか。

なんて悲しい少女たちだろうか。なんて――。

「なんてふぎけた姉妹」

はらわたの底から、燃えるような怒りが込み上げて止まらない。目蓋を強く閉じて感情を抑えようと努めても、蛇越しの視界いっぱい赤い光がちかちかかと明滅する。

『ムカつく。ぶん殴ってやりたい』

それが彼女らに思う全てだった。だって、発目姉妹は二人とも〃生きてゐる〃。まだ〃間に合う〃。すれ違っているのなら、「どうして」と問うことが出来る。どうしても譲れないことがあるなら、殴りあって喧嘩も出来る。いつだって手を取り合って、お互いに「ごめんなきい」と言える。これからの道筋なんて、仲直りの仕方なんて、二人でいくらでも解明していける。

それなのに、二人は互いから目を逸らして向き合おうともしない。首の傷？無個性？だから何だっていうんだ。私は――私たち三姉妹はもう、見つめ合うことすら出来ないというのに！

「ああ、うん。決めた」

「え？何を……」

肩を落とす解の前で頷いた私は、制服のポケットから四つ折りにして皺ができた一枚の紙を広げた。その紙の一番下に短い文を追加し、そして自らの鋭利な歯で親指の先を噛み、血を流した。

「な、あなた血が……！」

「うるさい」

「うるさい!?!」

「血が出てますよ!」と騒ぐ解を無視し、細かい文字が書かれた白い紙に親指で強く血判を押す。鮮やかな赤が滴るそれを、彼女の眼前に突き出す。

「ほら、契約書」

「え、え？ええ?」

「それしか言えないの？あたしのプロデューサーは九官鳥以下ね。今すぐこの紙を破いてやろうかしら」

「待……っってください!なん、何で急に?」

あんなに逃げ回っていたのに、と呟く彼女に、私は言った。

「決めたの。あなた達姉妹のふざけた関係をどうにかしてやろうって。仕方ないからあなたの計画に乗ってあげる。……だから、ねえ、約束して。私の心臓が——いいえ、次の春が来るまでに、妹さんと向き合うって」

「メイと、向き合う?……あの子は私を毛嫌いしています。今更どうにも」

「大丈夫でしょ。生きてるんだから、どうにでもなるわよ。どうとでも変わる。それに」

冷めきったコーヒーを見つめて俯く発目明そっくりの姉を覗き込み、私はとびきり嫌味な笑みを浮かべてみせた。

「私、最高のお姉ちゃんたち」を知っているから。そうなれるよう、プロデュースしてあげる。光栄に思いなさい?」

先ほど発目明を掬い上げた時、姉を両目に映した瞬間の、揺れる虹彩を思い返す。彼女はきつと、姉を嫌ってなんかいない。

妹のために生きる。解はただ一つの目的を叶えるために、この雄英にやって来た。この学校では誰もが持つ個性もなく、身一つで。誰もが持つ物が、自分にだけ備わっていない。周囲には、輝かしい個性にも家柄にも才能にも恵まれたクラスメイトがずらりと揃っている。

多感な時期の少女にとってそれがどんなに精神をすり減らす環境か、私には想像もつかない。そんな彼女が報われなければ、嘘だと思った。発目姉妹の結末に、たしかな愛があればいいと思った。

解は私の宣言に、呆けたように口を開いた。だが未来のN.O. 1企業社長は、差し伸べられた好機を見逃さない。次の瞬間、彼女は飲みかけのコーヒーの水面を揺らして立ち上がり、私の手を両手で強く握った。

「——……フ、フフ!やはりあなたはとんでもない勝ち馬のようです。……いいでしょう!あなたを使い、私はきつと頂点にのし上がってみせる。全てはメイの為に」

「契約成立です」と、私たちは食堂の大きなテーブルから身を乗り出し、固く手を握り合った。発目解は妹と同じ桃色の髪を揺らし、いか

にも計算高そうに黒縁メガネを指で押し上げ、不敵に唇を吊り上げた。その瞳には、ミッドナイトに似ているとはお世辞にも言えない表情で笑う毒蛇の顔が映っている。

彼女に手を差し出したのは、真つ白な善意からではなかった。取り戻せない過去に身を焼かれ、不器用に足掻いている。私はそんな姿を自分と重ね、身勝手に腹を立てている。全部ぶち壊して、その背中を蹴り飛ばしてやろうと思った。ただ、それだけのことだった。

『爆豪瞳巳』は 専属プロデューサー を 仲間に入れた ！』

【閑話^{無駄話}】

その日の放課後、私は再び食堂を訪れていた。

実は発目姉妹救助の際、三人分の体重で、掴まった天井のダクト管にヒビを入れてしまっていたのだ。ランチラッシュと相澤先生に報告をして、天井を見上げて破損具合を確認してもらい、私は頭を下げた。

罰則を覚悟し「ごめんなさい」と身を小さくして謝る私（と、同じようにしゅんと項垂れる蛇くん二匹）を相澤先生は読めない表情で一瞥し、「あの人にも報告しておくよ」と言う。その宣言に顔色は一気に青ざめていく。

「そ、それだけはやめてください。設備の弁償ならあたしがなんとかしますから……！ 睡さんにはどうかご内密に……！」

「何を誤解している？」

「え？」

『爆豪瞳巳は、人波に押し潰される友人二人を救った』そう報告するんだよ」

「お前と飯田、麗日がいたから被害が最小限で済んだ」「よくやった」彼はそう言った。ランチラッシュも、「カッコよかったよ！」と親指を立ててくれた。

「あたしは……別に、助けようとしたわけじゃないです。ただ、嫌なこと言っちゃったから、罪滅ぼしのつもりで……それに睡さんや、あたし」ならきつとこうするって思ってた……」

全然、格好よくなんかありません。

足元を見つめながら呟く私に、相澤先生は大きなため息をついた。

「お前の行動原理は知らん。だが、お前は結果的に二人を助けた。その事実は変わらない。卑屈になるのも大概にしとけよ。……非常事態に怯えた周囲が保身に走った行動をする中、爆豪②はその先を見据えていた。今日のお前の行動は、たしかにヒーローだったよ」

よくやった。先生はもう一度そう言ってくれた。

帰りのバスに揺られながら、過ぎ去っていく景色を眺める。『生きてさえいれば、どうとでも変わる』。勢いで口をついて出た言葉が、今になって私自身に問うていた。

「変わるかな。書き換えられるかな」

答えを数ヶ月未来の己に託し、私は暫しの微睡みに目蓋を閉じた。

「お前はたしかにヒーローだった」「あの子の幸せのために生きる」「誰かのために心を動かせる貴女だから」「人は皆、誰かにとっての特別な存在なんだよ」

幾度も脳裏を巡る言葉に、心臓は温かく脈打っている。

14. 爆豪瞳巳は唐揚げを食べたかった（USJ編

①）

少女に手を差し伸べたのは、無償の愛からではなかった。憐れみでも、英雄の奉仕精神でもない。そんな尊く美しいものではなかった。あの子が私をヒーローと呼んでくれたから。だから私はどこまでも走れると思った。ただそれだけのことだ。何ともくだらない、命を懸けるにはあまりにささやかな理由だった。

目蓋の裏ではいつだって、一輪の白い花が揺れている。

はじめに目を焼いたのは、大型トラックに飛び込む小さな背中だった。

けたたましく警告音クラクションを鳴らす車を背景に、桜色の晴れ着を乱した少女は笑っている。必死に手を伸ばし、絶叫する少年を見据え、場違いに柔らかく微笑んでいる。

私は——香山ねむり睡は、瞬き一つたりとも迷わなかった。緑色のネギが飛び出た買い物袋と洒落たロゴが刻まれた小箱を放り出し、少女の元へ駆けた。

アスファルトに叩きつけられる衝撃に、袋に詰めたパックの玉子が潰れる音がする。「デザートに」と洋菓子屋で買った Milfューユのクリームが飛び散り、甘ったるい香りが周囲に拡散する。

「怖かったわね。でももう大丈夫よ！」

「……………」

火花を散らしながら急ブレーキを踏むタイヤに滑り込み、すんでのところで棒立ちの少女を救出した。

救いだした少女は先程の穏やかな笑みから一転、一切の感情をなくした能面のような顔で私を見つめた。「なぜ死なせてくれなかった」と言わんばかりの、伽藍堂の金色だった。

愛娘の突然の豹変、自殺未遂に錯乱する彼女の姉たちと両親と共に、病院へと急ぐ。検査の結果、彼女は『原因不明の記憶喪失』との

診断を下された。

無情な診断書を握りしめ、家族は泣き崩れた。可愛い末娘の“死”とも言える現実には、双子の姉たちは抱き締めあつて幼児のように声を枯らして泣いた。

当人である少女は虚ろな目で、それを他人事のように見つめていた。……いや、何も見てはいなかった。泥に沈む彼女の金色には何も、誰も映ってはいなかった。

「瞳己ちゃん。これは元氣の出るおまじないよ！……うん！思った通り、とつても似合つてるわ」

私は病院の売店で、幼稚園児くらいの女の子が喜びそうな可愛らしい白い花のピン留めを買った。

脱け殻になつた少女の黒髪を一房すくい、「おまじない」なんて勿体ぶつた言葉をつけてそれを贈った。

苦し紛れの、薄っぺらい言葉と慰めだった。乾ききつた彼女の心には、雨粒一滴分も響かなかつただろう。

私は二十一歳で、まだまだ駆け出しのヒーローだった。おまけに、つい数日前は彼女と同じ年頃の少女を救えず、目の前で失つた。

何もかも上手くいかない日々だった。自分に自信がなかった。

学生の頃はあんなにも輝いて見えた『ヒーロー』という言葉も、今は鉛色に褪せて重苦しいだけだ。遺族の、世間の非難の眼差しが、網膜に焼き付いて消えてくれない。「一生懸命やりました。でも駄目でした」では許されない。それがヒーローの世界だった。

もし、自分に【抹消】の両目があつたら。大勢を圧倒する【声】があつたら。自在に【雲】を操り、しなやかに戦えたなら。きつと何も取り零さずに済んだ。

らしくもなくそんな馬鹿なことを考えるくらいには、疲弊しきつていた。頭の中で鳴り止まない少女の断末魔に、追いつめられていた。

「私は」

本当に、ヒーローを続けていけるだろうか。ヒーローを名乗ることは、許されるだろうか。

彼女と再会したのは、ちょうど一年ほど後だった。

「私を弟子にしてほしい」と、瞳巳は言った。どんなに他のヒーローをすすめても、彼女は頑として首を縦に振らなかった。

「師匠にするなら、ミッドナイトがいいです。あなたは私を助けてくれたヒーローだから」

少女は媚びるでもなく声を荒げるでもなく、「ただ事実を述べただけ」とばかりに言った。あなた「が」いいのだと、私を真っ直ぐに見据えた。

ただ、それだけ。だが、そのたったひとことがどんなに私を救ったか。嬉しかったか。凧いだ黄金の瞳に、どれ程心震えたか。彼女は知る由もないだろう。

「今さらだけど、改めて自己紹介をしましょうか。私は香山睡！華の二十二歳よ。これからよろしくね」

今にも俯いてしまいそうな背筋を無理矢理に伸ばし、胸を張り、高らかに言ってみせる。この少女の前では、自信に満ちた、輝かしいヒーローでありたかった。彼女は、私を選んでくれたのだから。

春から季節は移ろい、梅雨は早足で通り過ぎ、夏になった。

楽しい数ヶ月だった。「あなたを弟子にはしない。教えるのは護身術とこの世界での常識だけよ」と宣言し、瞳巳を鍛えた。放課後、ぶつくさ文句を言いつつトレーニングをこなす彼女は、素直で可愛らしかった。最近の瞳巳は出会った頃と比べると、見違える程に明るい。彼女の幼なじみと家族たちが見守り、支えてくれているお陰だろう。ずっとこんな日々が続いていくと思っていた。穏やかな暮らしのなか、瞳巳はやがて罪の意識を忘れて生きていく。「ヒーローにならなくては」という盲執——「瞳巳ちゃん」の夢も忘れ、幸せになれる。そう思っていた。

七月二十日、静岡某所で発生した事件からの帰り道、私は鼻歌を口ずさみながら家路を歩いた。夕食時の薄暗がり、風につつどこかから香ばしいカレーの匂いがする。そういえば、瞳巳が「うちのママとお姉ちゃんたちが作るカレーは銀河イチ！」と胸を張っていたのを思

い出した。

「……………」

彼女はきつと今ごろ、家族と賑やかな食卓を囲んでいる。……ああ、幼なじみと従兄妹も招き、賑やかを通り越してうるさい”くらいのひとつときを過ごしているのだろう。温かく幸せな光景を思い浮かべ、私は眈を緩めた。

瞳巳の家のそばを、ゆったりと機嫌よく歩く。通りかかった公園の前には、人だかりが出来ていた。

「あ、あ——!!あああ、ひと、み?瞳巳なの…………!?!」

“異形”となった瞳巳を眠らせ、元の姿に戻し、公園から病院へと走る。そうして彼女が病床で目覚めたとき、全ては失われていた。

姉たちは石になり、どの医者も「これはもう死んでいる」「心臓まで石化が及んでは、蘇生も何もない」と言った。公安は彼女を化物だと吐き捨て、監視対象とした。両親は“最愛の末娘が最愛の双子を殺めた”現実を受け止められなかった。

三姉妹の悲劇がヴィランによって齎されたものなら、そのヴィランを憎めばいい。そして残された瞳巳と共に悲しみを乗り越え、生きていけばいい。

だが、個性の暴走とはいえ——悲劇を引き起こしたのは、目に入っても痛くない末娘だった。両親は彼女の瞳を見る度思い出すだろう。「この目が二人を奪ったのか」と。毎日、毎日、その繰り返し。何度も生傷に爪を立てられ、喪失の痛みは永遠に癒えない。

瞳巳を心から愛している。だからこそ、憎みきれない。しかしこのままではいずれ、残された娘を嫌悪し、遠ざけ、傷付けてしまう。

では、この煮え滾る憎悪はどこにぶつければいい?胸を裂く悲しみは一体どこに?答えなどあるはずもない。

生きる気力を失った両親は精神病院で寝たきりになり、私と瞳巳のぎこちない二人暮らしが始まった。彼女は自分を痛めつけるように、

刑罰じみた自主訓練を始めた。

陰鬱な夏は終わり、十一月。私は震える足を叱咤し、身も心も衰弱しきった瞳巳とようやく向き合った。

「放っておいて。これは私への罰なんだから。化物の私が幸せになっ
ていいわけないんだから」

「なんて素敵な精神！で、その罰を受けたらあなたの両親は元に戻る
の？お姉さんたちは生き返るの？」

「……うるさい」

「結局、それはあなたの自己満足。現実と向き合えないあなたの弱さ
でしかない」

「黙って……!!」

彼女の髪から伸びた無数の蛇が牙を剥き出し、私の首に絡み付く。
瞳巳は制御の利かない新しい個性に錯乱し、「ち、違う、やめて！殺し
たくなんかない！もう殺さないで……！」と泣き叫んだ。そんな姿の
どこが「化物」だというのか。おかしくてたまらなかった。

喉を締め上げられ、声がでない。呼吸すらままならない。それでも
私は待った。朦朧とする意識のなか、彼女の本心からの叫びを待つ
た。

「——たすけて、睡さん」

ええ。絶対たすけるわ。あなたは私をヒーローと呼んでくれたか
ら。私を見つめてくれたから。

それからの数年、私は瞳巳を正式な弟子として育て上げた。姉と同
じく、爆豪瞳巳の身体能力は優れている。元々は高校生だったから
か、同年代より飲み込みも格段に速い。将来はきつといいヒーローに
なれるだろう。

だが私は瞳巳にヒーローになってほしくはなかった。いつまでも
白い花の髪飾りが似合う、可憐な女の子でいてほしかった。「睡さん
みたいになりたいの」なんて言葉、聞きたくなかった。

十年近く前のいかにも幼いデザインのピンを、瞳巳は今もずっと大
切に、誇らしげに髪に飾っている。寝る時はお守りみたいに枕元に置

いている。

そんな彼女をいとおしく思わない筈がなかった。

ヒーローはいつだって命懸けだ。私だっていつ死んでもおかしくない。私は彼女に何を遺してやれるだろうか。

瞳巳と暮らすこの家と、使い道がなく貯まるばかりだったお金。遺せるのはそれくらいだろうか。

改まってテーブルにつき、瞳巳と向き合って「私の死後」について話し合おうとした。けれど彼女は私の不慮の死を仮定することすら拒絶した。

「お金も家もいらぬ。私なんにもいらぬ。睡さんが生きてればなんにもいらぬ。睡さんがし……し、死んじやったら、家に火をつけて私もすぐ死んでやるから」

「ひとりにしないでよ」と、瞳巳は机に突つ伏して泣きじやくつた。いつものようにその艶やかな髪を撫でて慰めることはできなかった。

大喧嘩をしたあの日、「絶対に死なない」と約束した。その約束を自ら破る気は毛頭ない。だが私はヒーローだ。いつかヴィランと戦い、市民を守り、命を落とすかもしれない。そんなことはどうの昔に覚悟している。

それでも、瞳巳にだけは生きていてほしかった。私の死などに囚われず、少年みたいなああの無邪気な笑みで、どこまでもどこまでも生きてほしい。

「瞳巳。堂々と立ちなさい、笑いなさい。そしていつかあなたは、『あなた』のために走るのよ」

その日の休み時間、爆豪瞳巳はいつも増して念入りに身だしなみを整えていた。

「ネイル、キラキラ！唇、ツヤツヤ！蛇くん、テカテカ！よし！」

「瞳巳ちゃん、気合い入つとるねえ……」

「なになに、瞳巳も蛇くん達も嬉しそうじゃん！気になる人でも出来

た!?恋か?恋なの!?

「え〜っ誰?!ヒーロー科? 同い年? それともセンパイ!? ねえ瞳巳ちゃん、ねえってば〜!!」

女子トイレの大きな鏡を前に、自身の体をひとつひとつ指差し確認する。そんな私を鏡越しに覗き込み、麗日さん、芦戸さん、透ちゃん
の三人は鈴を転がすような声ではしゃいでいた。

A組女子は顔も良ければ声もいい。彼女らはアニメ通りの声——
つまり有名声優の声帯そのまま。録音して安眠用BGMにしたい
ほどの、耳に心地よい美声揃いだ。

「そんなに気合い入れてどうしたの?」「好きな人でも出来たの!？」と
いう彼女らの好奇の目を受け流し、私は抑えきれない楽しみに頬を緩
ませた。

「残念、好きな人なんかじゃないわ。大好きな人よ」

短い休み時間を終え、女子勢から質問攻めされつつ席につく。そう
して、楽しみにしていた『近代ヒーロー美術史』の初授業が始まった。
担当する教員は——ミッドナイト。そう、大好きな睡さんだ。プ
ロヒーロー、教師、ブランドアンバサダーとして多忙な彼女と合法的
(?) に会えるこの一時間は、非常に貴重だ。

ぼさぼさの髪で対面するなんて、あり得ない。唇がかさかさに荒れ
ているなんて、以ての他。憧れの人の前では、最高の姿でありたい。
満点をとって、質問には完璧に答えて、少しでも良いところを見せた
い。

私は飯田くん並みに背筋を真っ直ぐに伸ばし、「この問題わかる人
いるかしら?」というミッドナイトの問いに、音速で挙手した。あま
りの速度に、前に座る勝己の後ろ髪がぶわりと舞い上がった。

「ハイ! 設問①の答えは1987年に緩和された『ヒーローコス
チューム国際規格』です! これにより多くの芸術家がデザイナーや技
術者と協力して戦闘服製作に携われるようになりました!」

「正解! いい子ね爆豪さん。きちんと予習をしてきて偉いわ!」

「……………うん……………じゃない、ありがとうごさいます。これくらい答

えられて当然です」

前髪をささつと指で直しながら取り繕う私を見て、ミッドナイトは悪戯っぽく片目を瞑って微笑んでみせた。

目玉をカツとペルソナみたいに見開いた峰田くんは、「エロとエロ……黒髪巨乳の共鳴現象、だど……!?!」「ドスケベとドスケベは惹かれ合う運命……ってコト!?!」などと呟いて、ノートを涎まみれにしていた。

午後の授業は、相澤先生や13号先生による『人命救助訓練』だった。USJの、あの『イベント』だ。

委員長として張り切ってクラスメイトをバスに誘導する飯田くんに従い、車内に乗り込む。戦闘訓練でやり過ぎてクラスをドン引きさせた勝己の隣は、当然のように空いている。私がそこに座ると、勝己はこちらを一瞥し、ひとりごとじみた呟きを洩らした。

「今日、オールマイトも来るんか」

「うん、遅れて来るらしいね」

「……そーかよ」

勝己は窓枠に肘をつき、静かな横顔で考え込んでいる。意外にも繊細な彼のことだ。おそらく、先週の戦闘訓練で憧れの人に醜態を晒してしまったことを未だに引き摺っているのだろう。

なまじ賢いが故に、色々な『最悪』を想定できてしまう。そして人には理解し難い独自の理屈で苛立ち、包み隠さず他人にぶつけて遠ざけてしまうのだ。今だって小難しい理屈を捏ね回し、崩れかけのプライドと戦わせているのだろう。大乱闘SMASHバクゴーズなのだろう。プレイアブルキャラクターは幼少爆豪、中学生爆豪、現在の爆豪、未来のプロヒ爆豪。全員が小うるさいお小言を言っつきそうので、考えただけでノイローゼになりかけた。

「オールマイト、かあ……でも勝己が悩むほど、あの人は気にしてないと思うけどね。出久が考えてることだって、あと何ヶ月かしたら……」

「あ……?」

「何でもないよ。ねえそれよりさ、この訓練が終わったらまたあの唐揚げ作ってよ。あのアレ……レモン?のかかったやつ」

「……レモンだあ?全っ然違えわ、アレはすだちだボケ。頭だけじゃなく味覚まで狂ったンかクソ蛇」

「はいはい、じゃあ夕飯はそれでよろしく。あ、私寝るから着いたら起こして」

「はあ、あゝゝ!!?ふっぎけんなカス何でてめエのメシの世話までしなきゃなんねーんだクソ蛇!!オイ寝てんなやナマケモノか蛇かハツキリし\$§ヴぁ※k!!」

「ハウンド!ドッグ先生の物真似?」

わざとらしくかったかもしれないが——これでもう勝己の頭には、理不尽で我が儘ないとこへの怒りしかないはずだ。ついでにすだちの唐揚げのレシピと、帰りに買うべき材料も考えてくれているだろう。

少なくとも今だけは、余計なことを思い詰めずに済む。……作って貰ったところで味がよく分からないのは、申し訳ないけれど。

「……てめエマジでなんつもできねーな」と、騒ぎすぎて相澤先生に睨まれた勝己が小声で言う。最早怒りを通り越した呆れ顔だった。しかしその複雑につり上がった口の端は彼なりの「安堵」の発露だと、知っている。

何も知らない馬鹿だと、自分の遙か後方に行く存在だと思っただけでいい。無能な私を見下して爆豪勝己の崩れかけの矜持が保てるなら、それでいい。

「すっげ——!!USJかよ!?!」

「はい。あらゆる事故や災害を想定し、僕が作った演習場です。その名も……U（嘘の）S（災害や）J（事故ルーム）!」

「ホントにUSJだった……!」

施設に到着し、A組は揃ってバスを降りる。噴水広場前のゲートには既に、宇宙服のようなヘルメットと防護服を嚴重に着込んだ教師が待ち構えていた。

辺りをぐるりと見回すと、実際のUSJと同等の敷地面積なのでは？と面食らう程の、広大な施設だった。ここを隅まで駆けずりまわって、内通者——怪しい行動をとるクラスメイトを見つけるのは、相当地に骨が折れるだろう。

原作では、主人公の出久が飛ばされた『水難ゾーン』や脳無と交戦した目の前のセントラル広場が主に描かれていた。

出久と共に戦った梅雨ちゃんは積極的にヴィランを攻撃し、危うく死柄木に殺されかけもした。よって、彼女が内通者という線はまずあり得ない。一方峰田くんは結果的に活躍したものの、出久の作戦に従うがままだった。自発的にヴィランを妨害した……というわけではない。内通者の疑いはかなり薄い完全に白とは言いきれない、グレーゾーンだ。

どこで誰が、どんな敵と交戦したか。どんなふうに切り抜けたか。序盤のイベントということもあり、記憶が曖昧だ。

「あの子だったらきつと憶えてたのにな。あの子は私なんかよりずっと記憶力が良かったし」と思わず卑屈になりかけるが、かぶりを振って気持ちを切り替える。

13号先生の背後、広大な敷地を見渡した。USJには、大きくわけて六つの災害ゾーンがある。そのうち四つでは各生徒が団結して戦うシーンがあったが、『火災ゾーン』『暴風・大雨ゾーン』は、たしか……生徒たちがどんな風に戦ったかの描写がなかった、気がする。

裏切り者とは人目につかない場所に隠れ、密かに行動するものだ。ならば私が最優先で確認すべきは、原作でも謎だった『火災ゾーン』と『暴風・大雨ゾーン』だろう。『山岳ゾーン』『倒壊ゾーン』など他の場所も気になる点はあるが、まずはその二箇所を隈無く見てまわろう。各エリアで誰がどう動いたかは、内通者白判定（瞳巳ちゃん調べ）で信頼できる入試F組——葉隠、障子、常闇、尾白、上鳴に後で聞けばいい。

「えー、皆さん揃いましたね。では授業を始める前に、僕からお小言を一つ二つ……三つ……四つ……」
「増える……」

増えていく数字に、隣の透ちやんが唇を引き攣らせる。私は彼女の顔から下を絶対に見ないよう努めながら、「多いわね」ときこちなく同調した。

私は、蛇の視界を通して彼女の素顔や体をはつきりと視認できている。透ちやんには、戦闘服というものがない。基本、ブーツに手袋だけだ。ある意味、全裸よりアウトだ。マニアックすぎる。

同性といえど、そんな全裸より刺激的な格好をした彼女を直視する勇氣はない。だから私は今のところ、ヒーロースーツ（スーツ？）姿の透ちやんとは一定の距離を保ち、身体的な接触もなるべく避けている。そのせいか、透ちやんが何か言いたげなジト目でこちらを見つめてくる頻度が日に日に多くなってきている、気がする。

早急にサポート科に行き、着用しても透明でいられる戦闘服を開発してもらおうと決意した。

ずらりと並んだA組の二十人を前に、13号先生は自己紹介を始めた。

一人称が僕であることと身長で、私はてつきり“彼女”を男性だと思いついてみた。だが、蛇のピット器官——赤外線探知能力を介して見たヘルメットのガラスの内側には、丸みを帯びたショートヘアの美女がいる。英雄のメイン女性キャラクターとヒーロー科には、美女か美少女しか居ないのだろうか。やはり顔採用なのだろうか。

「僕の個性は、ご存知の通り「ブラックホール」です。どんなものでも吸い込んで、塵にしてしまいます」

「その個性でどんな災害からも人を救い上げるんですよね！」

彼女の大ファンを公言する麗日さんは、出久の言葉にヘドバン並みの激しさで何度も頷いた。13号先生がそれに小さく苦笑したのが、私にだけ見えた。

「ええ。しかし、裏を返せば僕の個性は簡単に——」

人を殺せる“力”です。

彼女は「皆の中にもそういう個性の人がいるでしょう」と静かな口調で言った。

ああそうか、この台詞は13号先生のものだったと思い出した。何

故だかその言葉は、ずっと昔から私の胸に印象深く刻まれていた。

「超人社会は個性の使用を資格制にし厳しく制限することで、一見成り立っているように見えます。しかし一歩間違えれば人を容易に殺められる個性を各々が持っている……ということを忘れないで下さい」

「相澤さんの体力テストで自身の秘めた『可能性』を知り、オールマイトの対人戦闘で、それを人に向ける『危うさ』を体験したかと思えます」

彼女は相澤先生に視線をやり、まだ到着していないオールマイトの影をなぞるよう、両目を細めた。

13号先生は、『人を殺せる個性』などの重い話題で神妙な面持ちになってしまった生徒たちをひとりひとり順番に見つめた。そして空気を変えるよう、笑みを含んだ明るい声音で私たちに語りかける。

「この授業では、心機一転！人命のために個性をどう活用するかを学んでいきましょう！……君たちの力は、人を傷つけるためにあるのではない。救けるためにあるんだと、心得て帰って下さいな！」

「以上、ご静聴ありがとうございます」と丁寧に腰を折り、13号先生は話を結んだ。

ファンの麗日さんはもちろん、飯田くんや切島くん、出久まで、声を揃えて「カッコいい！」「ブラボー！……おお、ブラボー！」と口々に言い、拍手喝采だった。

「13号先生、アツいね！テレビでたまに見るくらいだったけど、私ファンになっちゃったかも！」

「……あたしも！先生みたいにたくさんの人を助けられるヒーローになりたいわ」

「ねー！」

「ねー」

熱のこもった演説に興奮した様子の透ちゃんに、微笑み返す。

「個性は人を傷つけるためにあるのではない。人を救うために使え」と、13号先生が言った。彼女の個性は素晴らしい。災害救助の場で、彼女は一体どれ程の命を救い上げたのだろう。

私はこの場にいる十九名を見渡した。彼らの個性もまた、世のため人のために活かせる素敵なものばかりだ。将来はきつと、多くの人々を幸せにできるだろう。人を殺すしか能がない、不幸を撒き散らす呪われた瞳とはまるで違う。

「相澤センサー、13号先生、質問です。【化物】^{メドゥーサ}の個性は、どうやったら人を救えますか？何度も私から目を逸らした人間たちを、どうして救わなきゃいけないんですか？どうして睡さんと出久と勝己以外をたすけなくちゃいけないの？どうして？どうして？」

喉まで出かけた言葉を飲み込み、煌びやかな戦闘服のスカートを握りしめた。

いけない。ミッドナイトや出久、勝己はこんな酷いことを思わない。身も心も化物の「私」では、誰にも愛してもらえない。

そしていよいよ、その「イベント」は始まった。

「——初めまして、我々はヴィラン連合」

「^{オールマイト}平和の象徴、いないじゃん。……ああ、そうだ」

子どもを殺せば来るのかな？

掌に覆われた顔から、死柄木弔の濁りきった片目が覗いた。その血走った眼球は生徒全員を順繰りに舐めあげ、最後に私の隠された両目を見つめた。

破壊しか生まない私たちは、思わず笑みが零れてしまうほどよく似ていた。

「は？何にやけてんだコイツ、キモ……黒霧、コイツは一番過酷なエリアに飛ばせ。単独で」

「エ〜ッッ」

前言撤回、全然似ていない。出久アパート（OFA）の中にいる志村菜奈さん、見ていますか？あなたのお孫さんについてどう思いますか？

底冷えのする黒に飲み込まれる直前、何事かを叫ぶ勝己がこちらに手を伸ばすのが見えた。

彼はオールマイトの危機に駆けつけ、黒霧を拘束するという重要な役目を負っている。勝己がいなければ、オールマイトはあの場で本当に息絶えていた可能性すらある。

「大丈夫だよ、勝己！私は一人でも戦えるから！」

どうか「私が一足先に飛ばされた」程度のことで冷静さを失わないよう、原作の大幅な改編が起らないよう、暗く冷たい霧の底から祈った。

「クソッ、クソ!!クソがあああ!!」

あかい爆炎が網膜を焼く。最大火力を放出し続ける掌が、痙攣している。絶えず上げ続ける憤怒の咆哮で、己の鼓膜すら痛みを訴えている。

それでも、彼は敵の蹂躪をやめなかった。名前も記憶にない男子生徒の制止を振り切り、加減無し、見境無しの爆撃の手を休めない。

「は、話が違うぞ死柄木……!」

「こんなバケモノ生徒がいるなんて聞いてねえよ!」

「——黙れ。死ね」

十数人对二人。大人对十五歳の子ども。『倒壊ゾーン』の入り組んだ、死角を突きやすい造り。圧倒的に有利なのは、ヴィラン側の筈だった。こんな子どもたち数分もかからず地に這いつくばらせて、自分達も「平和の象徴殺し」を楽しむ筈だった。

だが、ヴィランの目論見は悉く外れた。この場で行われているのは、もはや戦いとも言えない。一人の少年による、一方的な蹂躪だった。

共に飛ばされたのが【硬化】の個性を持つ切島でなければ、見境ない攻撃の巻き添えを食らってただでは済まなかっただろう。

「オイ爆豪！待ってって！どこ行くんだよ!?!」

「どけ、邪魔だクソ髪！時間がねえんだよ……!!」

爆豪勝己は一瞬にして十数人ものヴィランを屠り、行動不能に追い

込んだ。

こういった非常事態、普段の彼であれば、思考を巡らせて「事態の元凶」を真つ先に叩こうと考える。今回の場合は黒霧を抑えて、敵の出入口を塞ごうと考える。実際、原作でも彼はそう行動してオールマイトたちの命を救った。

だが、顔面蒼白で唇を噛み締める今の勝己にそんな冷静さは微塵もない。出会って日が浅い切島ですら「普通ではない」とわかる、錯乱状態だった。

何も言わず倒壊ゾーンを飛び出そうとする勝己の肩を、切島が掴む。

「待て、一旦落ち着けて！ 周りよく見ろ！！ 外の……ほら、そのセントラル広場だって敵だらけだろ！！」

「ああああああ！ うるつせエ！！ 黙れ黙れ黙れ！！ 離せ！！ マジで半殺しにすんぞ！！ 早く、早くアイツを探さねえと……！！」

「さっきからそればっかじゃねーか！ 何をそんな焦って、」

言いかけて、地面に落ちた金色に目を奪われる。

散々暴れてぼろぼろになった彼の戦闘服から、金色の包み紙が零れ落ちていた。爆豪瞳己がよく持ち歩いている、ヴェリタースオリジンルだった。

ああ、そうか。瞳己と勝己は、一緒に育った家族だった。

「離せ、離せよ……いあのクソ共はアイツを単独で飛ばすとか抜かしやがった！ 早く見つけねえと、瞳己がまた死にまう……！！ アイツ電車も一人で乗れねえ弱虫だから、一人じゃなんも出来ねえ馬鹿だから……！！ あああクソクソクソが！！ なんで、なんつでいつもいつも！ 届かねえんだよ……！！」

枯れた喉で絶叫した勝己はとうとう個性を使って切島を思い切り殴り飛ばし、頑強な拘束を振りほどいた。彼は掌から爆風を生み出し、半ば飛ぶように駆けていく。

陽炎の虹彩は、今にも泣き出しそうに揺らめいていた。その横顔を彼の家族が見たら、「泣き虫」と言って少年のように笑うのだろう。

【閑話】

切島は殴打された頭を押さえ、硬化を解いて立ち上がる。遠ざかっていく背中を見つめる。

二人の過去に何があったか、切島にはわからない。訊いたところで、二人とも教えてはくれないだろう。

だが、これだけはわかる。「死んだら殺す」と今にも死にそうな顔で飛び出した少年を、たった一人でヴィランと戦っているであろう蛇の少女を、放っておいていいはずがない。そんなのは、自分が憧れたヒーローではない。

先程のバスでは彼らの席に近かったので、偶然会話が聞こえてしまっていた。

「今日の夕食は唐揚げが食べたい」と、瞳巳は言った。そんなささやかな希望が、永遠に叶えられなくなってしまったとしたら。

「他人のピンチに飛び出せもしねえ」「俺が行かなきゃって思うのに、震えて足も動かなかった」

中学の頃の、弱く惨めな自分を思う。ヘドロ事件で友を助けようと飛び出した、名もない少年のような漢になろうと決意した日を思い返す。

またあの頃のように立ち竦んで、芦戸——勇気ある誰かがどうかしてくれるのを待つのか？「どうせ自分の地味な個性なんかで人は助けられない」と、悟ったふりで俯いて目を逸らすのか？冷静さを欠いて飛び出したクラスメイトとその家族がヴィランにやられるのを、「俺にはどうしようもなかった」と後でみっともなく言い訳するのかわ？

「っ違え……！」「誰」かじゃねえ、「俺が」、今、救けなきやだろうが！！」

切島は、勝己の背を追って駆け出した。お節介でも大きなお世話でも、何だっがいい。また殴られたって構わない。

地味だって泥臭くたっていい。オールマイトのような、拳ひとつで

千人を助ける華々しいヒーローでなくていい。切島の始まりは、憧れは、何があるうと背中を見せない英雄——漢気ヒーロー・クリムゾンライオット紅頼雄斗だった。

切島鋭児郎は、目の前の人間を救えるヒーローになりたい。

「待ってる爆豪ズ！この戦いが終わったら、レモン？すだち？の唐揚げを腹いっぱい食えよ……！」

15. 爆豪瞳巳は「なんだっけ？」(USJ編②)

爆豪勝己は、爆豪瞳巳が大嫌いだった。春や夏に降る、生ぬるい雨も嫌いだ。梅雨特有の分厚い曇り空や、じつとりと陰鬱な空気が漂う七月という月も、全部まとめて気に食わなかった。

あれは小学校に上がったばかりの、七月十八日のことだ。あの記憶喪失騒動から一年と数カ月が経ち、瞳巳の家族もようやく平穏を取り戻せた、そんな時期。勝己たち幼なじみ三人は秘密基地に集まり、色鉛筆や自由帳が入った手提げ袋を持ち寄り、『将来着たいヒーロースーツ』について『秘密の定例会議』をしていた。

秘密基地といっても、何てことはない。いつも遊んでいる公園の近くの、誰も訪れない古びた神社の裏だ。それでも、幼い彼らにとつては自分たちだけの大切な居場所だった。

一度だけ、土地の管理者の男に「ここで勝手に遊ぶな」と怒られたことがある。しかし黄金の両目を潤ませた美少女の可愛らしい「お願い」で、あっさりと籠絡。今ではたまにお菓子をくれたり、「早く帰らないと日が暮れちゃうよ」と気にかけてくれるようになった。

三人は同じように、『7』のロゴマークが入った半透明の小さなビニール袋を携えている。中身はすぐ近くのコンビニで買った、ガリガリ君だった。

「むぐぐ……あかないよ……」

「出久くん、それじゃアイスがパーンって飛び出しちゃうよ。手も汚れちゃうかも。ほら、貸して?」

「あ、ありがとう瞳巳ちゃん!」

瞳巳には、幼い出久が力任せに包装を開けようとしている姿が危なっかしく見えたらしい。ガリガリ君メロンソーダ味を受けとると、綺麗に包みを開けゴミをきちんとコンビニ袋にしまった。そして透明な冷気を上げる薄緑のアイスを、躊躇いなく出久の口元に持っていった。

「出久くん、あーんして」

「あー……んむ!おいひい〜!」

「弟力50万、か……」
「？」

同い年の彼らは何の躊躇いもなく、年の離れた姉弟じみたやりとりをする。瞳巳はこの一年で、人が変わったように大人びた。記憶喪失と自殺未遂という大事件を経て、彼女は一度死んでしまったのだから。決して誰にも言わないが、勝己はそう考えている。

その日——七月十八日は四十度に迫る酷暑になると、早朝のニュースで言っていた。実際、今日は酷い暑さだ。アスファルトからはじめじめと湿気を含んだ熱が立ち上り、三人の小さな体を包んでいた。アイスを買ひ、冷房の効いたコンビニから外に出た瞬間などは、肺に取り込む空気の温度差に体がついていけず、咳き込んでしまった程だった。

しかし、秘密基地は違う。ここに暑苦しいアスファルトはなく、あるのは剥き出しの土と何本もの古い大木、陽光を浴びてきらきら光る白い玉砂利だけだ。

草木生い茂る神社の裏手は日陰になっていて、とても涼しい。冷えたアイスを食べているのだから、なおさら。

勝己は蝉の大合唱を聞きながらガリガリ君のソーダ味を開け、地べたに座った。それに倣い二人もアイスをかじりながら座り込み、持ってきた手提げの中身を取り出す。

三人でアイスを食べ、まっさらなノートを広げ、いつもどおり「秘密の定例会議」をした。しやくしやくとガリガリ君をかじりながら、色鉛筆でオールマイイトに似たヒーロースーツを描いたりする。

「……あれ？えっ、ええ——!？」

その最中、めつたに大声を出さない瞳巳が声を張り上げた。大人びた彼女にしては珍しいことに、勝己と出久はそろって手元を狂わせ、鉛筆の先を折ってしまった。

「び……つくりませんかブス！なんだよ!？」

「だ、だってカツカツ君……!？」

「その無駄にバリエーションある呼び名やめろって何つつ千回言ったらわかんだよ！」

「ごめんねカツキーヌ」

「ぷふっ……!」

「クソデク!てめエもこっさり笑ってんのバレてっからな!」

当時は瞳巳の自由すぎるあだ名に反発し、いちいち噛みついていった。だが中学校に上がる頃には無駄な努力と悟り、もう考えるのをやめた。

——ともかく。珍しく大声を出した瞳巳は、食べ終わったガリガリくんレモン味の棒を、出久と勝己の眼前に掲げた。

「ほら見て!」

「なにもみえない」

「近すぎて見えねえよアホ」

瞳巳の腕を退けて、未だレモンと砂糖の甘い香りが残る木の棒を確認する。そこには、焦げ茶色の文字で『あたり』と書かれていた。

出久と勝己は途端に目を輝かせ、わあっと歓声をあげた。

「すっげー!当たり前なんて初めて見た!」

「私も、人生で初めて……!」

「わあ〜!これっってもう一個もらえる……っつてコト!」

「そうだね、買ったお店に行かなきゃ!あ、お姉ちゃんたちにも写真撮って見せよ」

瞳巳は蛇の瞳孔を細めて嬉しげに笑みながら、神社にある水道を借りてアイスの棒を洗う。管理者の男を骨抜きにしたので、瞳巳は水道でも何でも使い放題であった。

彼女は同い年とは思えないくらいしつかりしていて、大人たちに好かれる為の立ち回りも上手い。おまけに自身の顔立ちが整っていることも理解して利用するのだから、始末に負えないワガママ娘だ。『ちよーかつこいいヒーローになる』とか言っているが、コレでは無理だろう」と、勝己はいつも鼻で笑っている。

瞳巳は洗った棒をハンカチで丁寧に拭き取ると、キッズ携帯で『当たり』の写真を撮り、小学一年生とは思えない手慣れた操作で姉たちにLINEを送った。

雄英から電車で帰る途中だったのだろう。返信は五秒もしないう

ちに返ってきた。双子の次女は、テンションが高くハートまみれの蛇のスタンプを。長女は、おじさん構文一步手前の妹溺愛長文を送ってきた。

二人は、十歳近く年が離れた末妹をとても可愛がっている。溢れんばかりの愛情が全面に表れたメツセージだった。

「よっしや、今日の秘密会議は終了！もう一回コンビニ行くぞてめえらー！」

「お——！」

それぞれにアイスの棒、オールマイトフィギュア、なんかいい感じの木の棒を天高く掲げ、意気揚々と目的地へ向かおうとする。だが、梅雨の空はそんな三人の笑顔とは正反対に、不意に不機嫌に臍を曲げた。

「……雨だ」

急激に暗くなった空を見上げ、出久が呟く。ぽつりぽつりと降る雨は、次第に勢いを増していく。とっさに神社の軒先に避難したはいのもの、何となく、この雨は長引きそうだと思った。

やがて雷まで鳴り始めて、出久が不安げな顔で俯いた。何度も光る空に、今にも泣き出しそうに唇を噛んでいる。勝己も「爆破」という個性の関係上、雨が嫌いだ。「弱虫デク」と罵倒しながら、地面を叩く水をじっと見つめ、シャツの裾を握り締めていた。

「しょうがないな。二人とも、お姉さんがこれ貸してあげる」

得意気な声が聞こえ、二人は真ん中に立つ少女に目を向ける。彼女はデフォルメされたミッドナイトが描かれた手提げ（写真だと性的すぎて女兒向けでないのでミニキャラのイラスト）から、二本の折り畳み傘を取り出した。

「はい、どうぞ。降水確率二十%だったけど、持ってきてよかったあ。お姉ちゃんたちの借りてるから、丁寧に扱ってよ？」

「……？コースイカクリツってなんだよ？っーかそれ、二本しかねえじゃん」

「あたしのは壊れちゃってて、家にこれしかなかったの」

「えっじゃあ……僕たちに貸して、瞳曰ちゃんはどうするの？」

「走って帰るから大丈夫。あたしは雨が好きだし、雷だつて怖くないもん！」

「はあ!? オイ待てよ、」

伸ばされた勝己の手をすり抜け、瞳巳は軒先から雨の中に飛び出した。二人に傘を押し付けると、元々足が速い彼女は引き留める間もなく背中を向け、去っていく。神社に敷かれた玉砂利を踏みしめる軽やかな音が、やけに耳に残った。

去り際、雷に心細く震え涙ぐむ幼なじみに「これで元気出してよ、未来のオールナイト!」と何かを握らせた。花柄の清潔なハンカチにくるまれたそれは、ガリガリ君の当たり棒だった。

結局その日、勝己と出久は濡れずに帰宅することができた。あさつてまでには濡れた傘を乾かして返し、瞳巳とその姉に礼を言おうと思っていた。

けれど爆豪家の双子に傘を返すことは、できなかった。コンビニに行つて出久が受け取った当たり棒を交換し、三人でガリガリ君を食べることも、できなかつた。

二日後、七月二十日。蝉が殊更にうるさく喚いていた。空の青は一点の曇りもなく澄んで、冗談みたいによく晴れた日だった。年の離れた面倒見の良いとこ達は、物言わぬ石になった。瞳巳の精神は崩壊し、二度目の死を迎えた。

あれから、瞳巳はミッドナイトの口調や行動を真似、〃雄英のヒーロー科に入る〃という、姉たちが果たせなかつた夢に固執するようになった。今までにも増して、理想のヒーローへの執着を燃やした。少しも似合わない重苦しい目隠しをし、〃瞳巳〃を閉じ込め、ヴィランですらない化物と自らを蔑んだ。

自分の心を殺し、姉の夢を背負い、両親への懺悔に生き、ミッドナイトを模倣し、家族で揃いの黄金を隠す。それは最早、瞳巳とは呼べない誰かだった。

あの日、走り去る彼女を無理矢理にでも引き留めていれば、何かが変わつただろうか。瞳巳は「雨が好き」だと言っていた。幼い日は、それを信じていた。だが本当は雨で体温が下がるのも、長い髪や何より

大切な白い花の髪飾りが濡れるのも嫌なのだ、最近になって知った。彼女はどうしようもないワガママ娘で、七面倒くさい格好だった。

「勝手に走るな」と怒り、嫌いな雨に濡れてでも追いかければ、夏の惨劇は起きなかつたのだろうか。無理矢理にでも手を掴んでいれば、瞳巳は今も生きていたのだろうか。 “知らない誰か” になんてならなかつたのだろうか。

走馬灯じみた、記憶のフラッシュバックが終わる。

そして、現実。『救助訓練』などという退屈な授業が始まるはずだった、USJ。

「瞳巳！手を——！！」

「大丈夫だよ勝己！あたしは一人でも戦えるから！」

少女は黒い霧に飲まれ、消えていった。伸ばした手は、いつも届かない。

「爆豪瞳巳は何者か」なんて、本当はどうでもよかつた。あの夏の日、秘密基地で『あたり』を引いてはしゃいでいた瞳巳が、強がつて傘を差し出した家族が本物なら、それでよかつた。それだけで、手を伸ばす理由は充分だった。

黒い靄が晴れた先、待ち受けていたのは十数人のヴィランたちだった。彼らは一様に気味の悪い薄笑いを浮かべ、私の頭から爪先まで、値踏みするように舐めあげる。

その内の一人が、下卑た笑声混じりに言った。

「オイオイ、たつたの一人かあ!? エリート気取りのクソガキどもを好きになだけぶつ殺せるって聞いたから来たのによお！」

「しかもボス、こいつ弱っちそうな女子っすよ！」

「あーあ。これじゃ一瞬で死んじゃうなあ？」

ボスと呼ばれた集団のまとめ役らしき男の発言に、全員が大袈裟に

腹を抱えて笑った。私もまたミッドナイトの仕草を思い浮かべ、品良く口元に指をあてて微笑む。

「まあ。こんなに大勢で美少女を囲んで……何が始まるのかしら？わくわくお楽しみ会？」

「あ？何が始まるか、だつてえ？そりゃあ、生まれてきたことを後悔するほど楽しいお遊びさ！」

「……え？」

「ギャハハ！運が悪かったなあお嬢ちゃん！かわいそうに、まだ状況が飲み込めてねーのかな？そんなぽかんとした顔で、」

「え？ごめんなさい、雨が強すぎて全然聞こえない！その二人、何て言ったの!?もう一回お願い〜！」

「俺はあー！』生まれてきたことを後悔させてやるぜゲへへ』つて言つたー！」

「こっちはー！『ギャハハ！運が悪かったなあお嬢ちゃん』的なセリフ！今度は聞こえたかー!？」

「オーケー、ありがとう！」

「よかった、聞こえた！」

「やったなー！」

私が飛ばされたのは、暴風・大雨ゾーンだった。ドームの中には都市を模した高層ビルが立ち並び、本物さながらに整備された道路や信号機がある。

私はちやうど横断歩道の中央、白線の上に立っていた。十数人のヴィランたちはそれを包囲し、どこにも抜け道はない。

ざあざあとノイズのような音を立て、大雨が降っている。風はさほど感じない。濡れそぼった黒髪は、肌には張りついたまま靡きもしない。だが、大雨・「暴風」ゾーンと銘打っている以上、いずれは災害級の風が吹いてくることだろう。

「雨、嫌いなんだけどなあ」

目隠し越しにドームの天井を見上げた。今日の天気は朝から快晴だったが、作り物の空はどんよりと薄暗く、外界から隔絶された空間となっていた。蛇のピット器官を駆使して気配を探る。「潜んでい

る者”を含め、ヴィランは全部で十三人いるようだ。

十五歳の少女一人対十三人の男たち。突如飛ばされた私と、準備万端で待ち受けていた彼ら。どちらが有利かは一目瞭然、まさに絶体絶命の状況だった。現に彼らはすでに勝利を確信し、余裕の表情で唇を歪めている。

『運が悪い』『生まれてきたことを後悔』……か」

濡れた唇でヴィランの言葉を復唱するが、雨粒が地面を叩く音と雷鳴でかき消されたのだろう。彼らは俯いて何事か呟く少女を見て、怯えていると判断したらしい。

「そろそろ遊ぼうや」

リーダー格の男が手を上げ、合図を出した。追従するヴィランたちは「待ちくたびれたぜ」と涎を垂らさんばかりに喜悦を滲ませた。

輪の中心に佇む私めがけ、一斉に飛びかかる十一人のヴィランたち。ある者は柔らかな肉を切り刻もうと、鋭いナイフを握り。ある者は個性を発動し、容赦なく苦痛を与えようとしている。

爆豪瞳巳が操れる蛇は、二匹だけ。襲い来る十一人になど、勝てるはずがない。私はここでたった一人、誰にも知られず死んでいく。

「あーあ。運が良かった」

こんなところに飛ばされたのが、私だけでよかった。

協力してヴィランに打ち勝ち水難ゾーンを切り抜けた出久たちは、腰までを水に浸しながら、セントラル広場の様子を窺っていた。

「相澤先生……敵を多く引き付けてくれているわ」

「な、ならーその間にこのまま水辺に沿って出入口を目指そうぜ！」

「ケロ……そうね。下手に飛び出しても足手まといになるかもしれないし、私もそれが今できる最善だと思うわ。緑谷ちゃんは……、どうかしたの?」

「あ……な、何でもないよ蛙吹さつ……つゆちゃん！」

「頑張ってくれてるのね」

蛙吹が相澤先生とヴィランとの戦闘を冷静に見つめ、峰田はこれ以上の戦いを避けようと、涙目で出入口を指差している。二人の会話を聞きながら、出久は幼なじみ二人の行方を考えていた。

爆豪瞳巳のほうは、まず大丈夫だろう。どこに飛ばされたかは分からないが、生徒に宛てがわれた敵が先程自分たちに向かってきたようなただのチンピラなら、何人いようが問題ない。

彼女は幼い頃からプロヒーローの手ほどきを受けていた。もう一人の幼なじみと同じくらい身体能力が高く、頭も良かった。

勝てそうな相手なら、戦う。実力が及ばない、あるいは個性の相性が悪い相手なら、隙を作り出して逃走する。訓練され、同年代より戦闘慣れした彼女なら、どうしても立ち回れるはずだ。

いつも自分の手を引いてくれた瞳巳の強さを、出久は信頼していた。

もう一方の幼なじみは——と、彼に思いを馳せた瞬間、聞き慣れた爆発音が反響した。出久たちがいる『水難ゾーン』の対岸、『倒壊ゾーン』からだった。三人はセントラル広場の向こうに目をやる。

「この音、かっちゃん【爆破】だ……!」

「お前の幼なじみ、強すぎん? ならう系主人公か何か?」

燃え落ちる建物を見つめる峰田が半目でドン引きするのも、無理はない。花火が打ち上がるときのあの、心臓を打つような重い爆発音。そして、ヴィランと思わしき数人の男女の悲鳴。

先週の対人戦闘訓練のときとは、訳が違う。建物への被害はおろか、自らへの反動も考慮しない、本気の爆撃だった。それを何十も乱発し、辛うじて建っていた倒壊ゾーンのビルは黒煙を上げ、文字通り倒壊していく。

「強えーな爆豪!」「あちらは余裕みたいね」と、二人は安堵する。だが、出久だけは違っていた。

「駄目だ、かっちゃん……!」

倒壊ゾーンを抜け、煙の向こうから勝己が姿を現した。彼は余裕なく敷地を見回し、目的の人物がいなことを瞬時に判断する。遠目からでもわかるほど憔悴しきった勝己は掌からの爆炎を推進力に加速

し、隣接する『土砂ゾーン』へと飛び込んでいった。爆破の衝撃に堪えきれず破れた掌からの出血が、辺りに飛び散っていた。

出久は知っている。目の前でいところを失った勝己の傷の深さを。その心的外傷がもたらした、『これ以上家族を失いたくない』『自分が弱かったから瞳巳が、その姉が、両親の心が死んだ』という自責の念を知っている。彼は、いとこの一家が崩壊したのは自分の「弱さ」のせいだと思っている。

水難ゾーンの隣、暴風・大雨ゾーンから、耳を劈く絶叫が木霊した。出久は、他のエリアとは違い密閉された天蓋の区画を見上げた。

「……瞳巳ちゃん？」

黒に覆われたドームの内側で、雷鳴が轟いた。

暴風・大雨ゾーンでは、飽きもせず作り物の雨が降り続けている。

「殺つちまえー！」

集団の長の合図で、十一人の男たちが一齐に飛びかかった。少女の肉体を切り刻もうと、ナイフが迫る。異形型ヴィランの拳が襲い来る。

「わるい子たちだわ。躰が必要ね」

瞳巳は場違いに微笑みながら、雨で濡れそぼった黒髪を揺らめかせる。ボスと呼ばれる男は、余裕ぶったエリート気取りのガキが肉塊に成り果てるさまを見届けてやろう、と下品に唇を歪めていた。

だが、瞬きひとつの間に盤上は塗り替えられる。

「牢黒・レタイキユレト網目錦蛇」

黒。

ただ、黒一色だった。瞬きをして目蓋を開けた男の視界には——
空を揺蕩う無数の大蛇の群れ。

優に十数メートルはある不気味な網目模様の蛇たちは少女の艶やかな髪から咲き、それらが十一人のヴィランたちを一人残らず宙吊りに捕らえていた。

少女の柔肌に届いた刃は一つもない。彼女は横断歩道の白線の上に立ったまま、微動だにしていない。鬱々と雨が降りしきる薄暗い暴風・大雨ゾーンに、彼女は悪夢のように存在していた。

髪から伸びるおぞましい大蛇の群れに「メドゥーサ」と絶望の眩きを洩らしたのは、誰だったろうか。

「あ、え……？」

ぬめる鱗に巻きとられ、囚人の如く動きを封じられた手下の男たちは、突如浮き上がり反転した世界に間の抜けた声を洩らす。地上約十メートル——二階建ての家程の高さから宙吊りにされた彼らも、それを見上げるボスも、何が起こったか理解していなかった。いつの間にか音もなく巻き付いていた大蛇を、誰も目で追えなかった。

そして、これから何が起こるか理解する間もなかった。

「……あ？あえ、いい痛、ぎや、いつアぐ——」

「よかった。あの子たちにこんな所見られなくて」

ワニをも絞め殺す大蛇にとって、人間に巻き付き全身の骨を折ることなど容易かった。

捕らえられた者たちは両腕の骨から折られ、凶器を握っていた掌はだらりと力なく開いた。ナイフや鈍器は宙吊りにされた上空から、虚しくアスファルトに転がっていった。彼らの手足は奇妙な方向に捻じ曲がり、肺を圧迫され悲鳴も出せず、痛みのあまり個性を使うこともできない。

「ボ、ス………たつ、たす、け………！」

「っ………！」

蹂躪される仲間たちの押し殺された絶叫を聞き、彼らのボスは我に返った。

ボスと呼ばれる異形型の男は、窃盗団の長だった。ここにいる彼らの殆どは、【髪を一センチ伸ばせる】だとか毒にも薬にもならない個性持ちの者、あるいは爬虫類、虫など人間に生理的嫌悪を与える見た目の異形型だ。表社会から「何の役にも立たないゴミ個性」「ヴィランみたい醜い見た目」と嘲笑され続けた人間たちだ。

男がボスとして窃盗団を立ち上げて、一年。愉快な毎日だった。理

解者たちと過ごす日々は、最低な人生で最高に楽しかった。

恐怖に支配されかけていた男の双眸に、強い決意の光が宿る。

「てめえ——俺の仲間を離せ!!」

ボスは「個性：スタンガン」を発動し、右腕を武器に変え、少女目掛けて突進した。そこに手を差し伸べるように、ドーム内の突風が背中を押す。追い風を受けた目にも止まらぬ疾走と、電気を纏い鋭く突き出される拳。加えて、自らが圧倒的有利な体格差。

どんな物でも盗んできた。警察なんか敵ではなかった。そこらの地方ヒーローだって、殴り殺してやったことがある。いつだってこの力で、切り抜けてきた。

それが、こんな温室育ちの子供に負けるはずがない。何の苦しみも知らずのうのと生きてきたであろう、こんな少女に……!

「死ねオラアツ!」

「遅い。ここにあの人が居たら、鞭で引っぱたかれてるわね」

少女は殺意を持って頭部を狙った必殺の一撃を退屈そうに見切り、首を僅かに逸らすという最低限の動きでゆらりと躲した。そして電気を纏っていない上腕を掴み、足払いを仕掛ける。

「それに。こんなか弱い美少女に向かって死ねだなんて、躰がなっていないわ。『伏せ』」

「ツガギヤ」

「いい子ね」

細身の少女は自分の体重の数倍はあろうかという大男の体勢を片足で崩し、無防備な腹に鋭い膝蹴りを入れる。痛みに呻く暇すら与えず後頭部をわし掴み、流れるように地に叩き付ける。

硬いアスファルトに容赦なく顔面を叩きつけられ、男の歯が何本も折れた。半開きの口と打ち付けた鼻から滴る赤い血が雨と混ざり、鮮やかに広がっていく。

瞳目は深窓の令嬢然として楚々と佇み、快も不快もなくそれを見下ろしていた。

「あの子達も睡さんも誰もいないし、丁度いいわ。せっかくだし、新技の実験をしましょうか。……『ヒーローらしくない技だ!絵面が惨す

ぎて人気が出ない!』ってカインに怒られそうだけど」

瞳巳が意識を集中させると、黒蛇の網目模様は一変。黄褐色の鎖柄に姿を変えた。それと同時にニシキヘビ系特有の凄まじい締め付けが緩み、拘束されていた十一人は人形のようになすがままに落下していく。肉がアスファルトに叩きつけられる嫌な音と、気を失った手下たちの低い呻き声は、吹き荒れ始めた暴風にもかき消せなかった。

「ふぎ、けんな……!よくも俺の仲間を!!」

その鈍い音を聞き、痛みに呻くばかりだったボスがよろめきながら立ち上がり、再び攻撃を仕掛ける。

少女はまたしても一步も動かずに男の鋭い右腕——スタンガンを受け流した。そして同時に黄褐色の蛇を操作し、よろけて無防備になった男の首筋に歯を立てた。

「っ……!?!」

男は首筋をおさえて一瞬怯むが、すぐに「軽く噛まれたただけだ」と安堵した。

十数メートルもあつた無数の大蛇は消え、少女の髪から伸びるのは、全長二メートルもない蛇が一匹のみ。今の攻撃を見る限り、噛まれたら少し痛い程度だ。先程の大蛇の群れならともかく、今ならば勝機はある。敵が最後の一人となり、油断しているのだろう。

男はふらつきながら臨戦体勢をとり、右腕に紫電を纏わせた。スタンガンの個性は強力で、一撃でも当たれば行動不能にできる。何度やられたって、怯まずに撃ち込み続ければきつと届く。諦めなければきつと——

「溶血・【?鎖蛇毒】」

少女が何を呟いたのか、男にはわからなかった。

気が付けば、立っていたはずの男は地面にうつ伏せに横たわっていた。右手の個性は男の意思に反して解除され、生身の肌に戻っている。すぐ近く、あるいは遙か遠くから、耳障りな獣の絶叫が聞こえた。

噛まれた首筋から、身体中が燃えるように熱い。食道、肺、胃袋、心臓が異変を叫び、小刻みに蠕動する。間抜けに開きっぱなしの口から吐瀉物と唾液が垂れ流しになり、アスファルトを汚していく。

「毒が回った瞬間、個性が解除されている……？臓器に深刻な損傷がある場合、個性発動より生命維持が優先されるのかしら？それとも、毒は個性因子にも作用するってこと？……うーん参考になったわ、ありがとう」

「！？——！！！」

「ふふ、どう？地獄にも昇る心地でしょう？」

悲鳴とも呼べない、獣の咆哮。それが自身の喉から発されたものであると理解したときには、手遅れだった。

アスファルトに叩きつけられて傷ついた手足。歯が抜けてはずたになった口内。そして噛まれた首筋——人体で最も太い血管が通る部位から、出血が止まらない。通常なら一、二滴の血が出るだけのかすり傷からでさえ、壊れた蛇口のように止めどなく血が溢れ出る。成人男性の三倍以上の体軀をした異形型の男でなければ、失血によるショックですぐに気を失っていただろう。

頭から爪先までを巡る赤血球が破壊し尽くされる、悪夢のような——いや、悪夢そのものの生き地獄。全身の血管がとろける激痛に、男は狂ったように地面をのたうち回った。男が動く度、雨混じりの血だまりが水音を立て、飛沫が飛び散った。

吹き付ける暴風や雨粒すら、傷口を抉る凶器に感じる痛み。酸鼻を極める責め苦に泣き喚く男にはもう、再び立ち上がる意思すらない。瞳已はついに白線の上から一步も動かず、十二人のヴィランに勝利した。

「いい子ねラッセル」

「……♪……♪」

活躍を労うよう黄褐色の鱗をこしょこしょと撫でると、猛毒の蛇は主の頬に擦り寄り、嬉しげに身を揺らした。

——ラッセルクサリヘビ。強力な溶血毒を持つこの蛇の体格は、先程のニシキヘビと比べて遥かに劣る。だからこそ、「この程度の蛇ごとき、大したことはない」と男も油断した。

だが、「インド四大毒蛇」に数えられるラッセルクサリヘビの恐ろしさは、ニシキヘビのような体格を活かした力技ではない。

クサリヘビ科の毒は牙を通して生物の体内に入ると、赤血球を破壊。そしてプロテアーゼ（蛋白質分解酵素）の作用によりフィブリン（血液凝固を司る蛋白質）を分解。血液凝固を妨げ、血管の細胞を攻撃することで出血を止まらなくする猛毒だ。

身体中を巡る血液に強引に作用する毒のため、全身に激しい痛みが伴う。血清を打って助かったとしても、臓器の変性など、重い後遺症が伴う場合が多い。

日本において毒蛇といえば主にマムシかヤマカガシの二種類で、しかも人間の生活圏でこれらに遭遇する機会はほとんどない。故に、男は毒蛇の危険性を軽く見ていた。仮に毒を打ち込まれても、異形型で丈夫な自身なら問題ないと侮っていた。

「た、たす、たすけて」

そんな男は今、裂けた喉から血を溢し、叫ぶ気力すらなくし、恥も外聞もなく嗚咽混じりに命乞いをしている。血だまりで泳ぐ様子を見下ろし、瞳巳は無感動に爬虫類の瞳孔を細め、唇を開いた。

「目を見たらすぐにわかる。あなた、人を殺したことがあるのね」

「……！」

「その人が『助けて』って言ったとき、あなたはそうしてあげたの？……どうせ仲良しの仲間たちと一緒に笑いながらいたぶって殺したんでしょう？さつきあたしにしようとしてたみたいに」

雨に濡れそぼった髪がざわめき、鎖柄の黄褐色から元の黒髪へと戻る。蛇たちの黄金の瞳が一斉に男を見つめる。

瞳巳は思い返していた。生前、ナイフで惨殺される自分と親友を見ているだけだった、窓の向こうの傍観者たち。七歳の夏は出久と勝己と共に、子供の肉を食らうヴィランに殺されかけた。その時も彼らは「きつとヒーローか、誰か、来てくれる」と言い、公園の外から見ているだけだった。

「誰かって誰？どうして誰も私に手を伸ばしてくれなかったの？どうし——ううん、駄目だよ。睡さんはこんなこと言わない。瞳巳ちゃんとお姉ちゃんたちの理想のヒーローは、こんなんじゃないもん……こんなのパパとママの自慢の娘じゃない……あれ？でもそれじゃあ

——私ってなんだっけ？」

虚空を見つめてぶつぶつと怨嗟を呟き自問自答を繰り返す少女に、男は戦慄した。

十一人もの人間を人形のように軽く扱い、残虐な致死毒を実験感覚で打ち込む。この女は、狂っている。

「バケモノ……！」

「うん、そうだね。私もあなたと同じだよ！」

男の言葉に瞳已は異様に幼げな声で笑い、大きく頷いた。無垢に口元を緩め止まぬ落雷に両の眼を煌めかせ、少女は世界に挑むよう、閉ざされた天蓋を見上げた。

「あなたも私も観客気取りの一般人も、みんな化物だ。人間じゃない。そんな奴らを守る為に睡さんが死ぬ未来なんて、間違ってる。そんなふざけた筋書き……認めないから」

この世界に“人間”は数人しかいない。姉たちと両親、睡さん、出久とそのお母さん、勝己と両親、そして命を投げ出して私を救おうとした英雄^{親友}。

それ以外に貸し出す傘はない。爆豪瞳已はヒーローもヴィランも降り続く雨も、みんな纏めて大嫌いだ。

暴風・大雨ゾーンを早足で歩き、出入口に到着する。

武装した多数のヴィランへの正当防衛とはいえ、さすがに殺してしまふのはヒーロー科としてまずいので、男に打ち込んだ毒には血清を与えた。骨を折って無力化した者たちは、全員呼吸をしているか確認した。

彼らは痛みには堪え切れず気絶してしまっただが、数十分後には目覚めるだろう。もっとも、目覚めた頃には雄英の教師陣や警察も駆けつけ、タルタロス行きだろうが。

「さて。火災ゾーンを見に行く前に……」

十二人のヴィランたちは倒した。だが、あと一人残っている。ピツ

ト器官を使って探知し、十三人目の存在にはずっと気付いていた。

「いるんでしよう？出てきなさい」

本物のUSJの如く広すぎる敷地を歩き、暴風・大雨ゾーン唯一の出入口にたどり着いた私は、明滅する壊れかけの自販機に向けて仁王立ちし、語りかける。蛇の目を通して、その裏側に潜む誰かの存在は最初からわかっていた。

一、二、三秒。「そこに居るのはわかっているから出てきなさい」という警告に、相手は反応しない。ならば、実力行使あるのみ。私は髪から一匹の蛇を伸ばし、自販機の裏から最後のヴィランを引き摺り出した。

「……………え？」

「……………つ☆!？」

こんな死角に潜むとは、不意討ちを狙ったヴィランに違いない。そうたかを括って乱暴に扱い、宙に浮かせた少年。それは——。

16. 爆豪瞳巳とSAN値、手遅れ（USJ編③）

【??・原点^{オリジン}】

四月八日、その日について私が思い出すことはない。少女の掌の生温い摂氏27度、500m1のペットボトルを伝う水滴の数。少年のような笑顔が弾けた瞬間の唇の角度さえ、思い描くまでもなく目蓋の内側だ。

忘れられないのなら、それは思い出しにはならない。私が彼女を思い出す日は、永遠に訪れない。

「これは私の好きな漫画の受け売りなんだけどね。——のそれは、呪いじゃなくて『個性』だと思うの。あなただけの力なんだよ。私はその個性ごと、——が大大大好きだよ！」

高校入学の朝、地獄と化した電車の中で。冷たい凶器に何度も身体を貫かれながら、私は考えている。あの春の日に孤独に死ぬはずだった自分は、あの子に一体何を返せるだろうか。

別の世界に生まれ変わり、姿形も声も変わってしまった大好きな女の子。純朴さをかなぐり捨て、蛇のような眼差しをするようになってしまったあの子。

私の^{ヒーロー}大好きな親友に、何を遺してやれるだろうか。

設立から百余年を数える静岡の中学校は、校門から校舎、体育館に至るまで、古ぼけてひどく陰気臭かった。春の陽光を真正面から浴びて、紅白の花飾りや横断幕で精一杯粧し込んだ晴れ姿でさえそう見えるのだから、日の届かない校舎裏などは言うまでもない。

私は桜の花弁の残骸が散らばる地面に、土汚れも構わず座り込んだ。ほとんど崩れ落ちるように校舎裏の冷たい地べたに尻をつき、両膝に顔をうずめてセーラー服のプリーツを握り締めた。

体育館からは、新入生への祝辞を読み上げる校長の声や、ありがたい校歌、強弱も技巧も何も無い平坦なピアノ伴奏が響いている。

「眩暈がするので保健室に」と偽って逃げるように後にしたそこでは、

相変わらず退屈な入学式が続いているようだ。

「どうして、あたしがこんな所に」

思わず口をついて出た言葉は、情けなく震えていた。

一度弱音を吐き出してしまえば、もう堪えられなかった。真新しい制服のスカートに濃色の染みがいくつも広がっていく。

——父が首を吊ったのは、今年の一月だった。

私の父は、それなりに規模の大きい会社の社長だった。しかし度重なる不運で数年前から業績が悪化し、坂を転がり落ちるようになり、呆気なく倒産。

父は「責任を取る」と言って、私と母に手書きの簡素な遺言を残して死んだ。自宅の天井にぶら下がっていたのは、鮮やかな橙色のナイロンロープだった。まだ裕福なとき、家族で山にキャンプに出掛けた際に使ったものだった。

私はそれを購入したときの父と母の笑顔、会話の内容や声の調子、店を流れていたBGM、通りすがった青年が着ていたTシャツの英文まで、余すところなく記憶している。更に言えば、キャンプ場で使用した8kgの薪のそれぞれの木目や特徴すら、寸分の狂いなく描き起こせる。

父の死から今日までの約三ヶ月は、酷い生活だった。

ろくに給料も支払えず路頭に迷わせたかつての社員たちは、残された私たち母子に罵声を浴びせ、なけなしの生活費をむしりとり行ってた。彼らもまた、生きるために必死だったのだろう。

そんな生活に堪えきれず、東京での高い家賃も払えず、静岡の僻地へ半ば夜逃げ同然に転居した。

引越先は、静岡のK町という縁もゆかりもない田舎だった。

そこかしこに林とも森ともつかない緑が広がり、時折、朽ちかけたあばら家がぽつんと野ざらしになっている。ビル群や高層マンションなどは当然一つもなく、遙か隣町まで何の障害物もなく見渡せた。

いかにも土地を持て余しているさまは、東京では有り得ない光景だった。母子で借りた木造の古アパートの裏には小高い丘があり、みかんやレモンなどの果樹園が見える。特に行く気もないが、天気がい

い日にそこに登れば、遠くの海が見えるそうだ。

小型の車と自転車がやつとすれ違える狭さの、曲がりくねった畦道。『レトロ』という程の風情もなくただただ古く寂れた民宿、稼働しているのかも分からない小さな工場が立ち並ぶ街並み。日用品の買い物すら不便な田舎だった。

誰も私たちを知らないこの地で、再スタートを切る筈だった。しかし共に温室育ちの私たち母子は、世間の厳しさを知らなかった。

それなりに名の知れた社長である父の自殺は、全国ニュースで取り上げられていたらしい。昼のニュース番組のコメンテーターは父の死について、「借金苦から逃れるための、卑怯な自殺。元従業員への責任も果たさず、無責任だ」と非難していたそうだ。

もちろんその発言は問題だとされたが、コメンテーターの意見に同調する者は少なからず存在したのだろう。残された私たち母子には、「無責任な男の妻子」という哀れみと嘲笑の粘着質な視線が常に付き纏うことになった。

お嬢様育ちの母は日を追うごとにおかしくなっていたが、無理もない。噂話が娯楽の田舎で、私たちという「落ちぶれた金持ち」は、格好の餌食だった。

やがて母は「どこに居ても人に見られている！」と怯えて家に閉じこもり、給料の安い内職以外できなくなった。

こうなっては、その日の生活費を賄うだけで精一杯だった。小学校を卒業したばかりの私は生き延びる為、必死だった。自死という考えはなく、むしろ死を何より恐れていた。網膜に焼き付いた父の最期の表情が、死がいかにかに苦痛かを如実に物語っていたのだから。

「――あれがニュースでやってた、例の『――社』の娘さん？すっかり落ちぶれちゃって、可哀想にねえ」

「あつ、見て！あの娘さん、値引きシールの野菜をカゴに入れたわよ。ふふ、可哀想に。そんなに貧乏なのね」

「可哀想だけど……でも今までのいいところの社長令嬢として、ふんぞり返って生活してたんでしょ？金持ちなんて皆そういう性悪に決まってるって。そう思うと何か……いい気味じゃない？」

「たしかに。あの子って美人だけど目付きが冷たいし、笑ってる所なんか見たこともないしね。そういうえば例の『病氣』の噂も、本当らしいわよ。何だか不気味だわあ」

「嫌だ、うちの子と友達になっちゃったらどうしよう。四月からその中学校に入るんでしょ？」

自らが手を下すことなく、有名人や金持ちが転落した。低い所、自分の所まで引きずり降ろせた。落ちぶれて、不幸になった。人の不幸は蜜の味。ざまあみろ。いい気味だ。

そんなふう喜びや快感を覚える仄暗い心理を、『シャーデンフロイデ』というらしい。余程の聖人でない限りどんな人間の心にも宿る、心の暗部だ。

どれだけ転落しようが、酷い言葉を吐かれようが——極論、目の前に肉親の死体がぶら下がっていいようが。大抵の場合、人は生きていける。人は辛い記憶を無意識の領域にしまい込み、忘れてしまえる。忙しない日々の中でゆつくりと記憶は色褪せ、やがて傷は癒えていく。時折ふと「そんな辛い事もあったな」と眉をしかめては、また次の朝には記憶の隅の小箱に追いやられる。その程度のかさぶたとなっていく。

人は、すべての記憶を抱えながら生きていけない。忘却とは、救いであり許しである。しかし、私には——。

「あ、あのー」

——大丈夫？

ふいに降ってきた声に、鬱々と沈みかけた意識を引き戻す。

同年代くらいの少女の声だった。生徒はまだ体育館で入学式の最中のはずだが——先生に言われて私を連れ戻しに来たのだろうか。「保健室に行く」などと言った癖に校舎裏にいるのを咎められるのだろうか。

いずれにせよ、こんな泣き顔は誰にも見せたくない。見せられない。私は校舎裏の壁に預けた背中を強ばらせ、泣き通しで乱れた呼吸を整えた。そして熱い目蓋を膝に押し当て、涙声がばれないよう平静

を装い、数メートル先の少女を見もせずに返答した。

「あたしは別に平気よ。何でもないから、放っておいて」

「で、でも……先生に眩暈がするって言ってたじゃん。それにこんな寒い所にうずくまってるし……大丈夫には見えない、よ？だからその」

「……平気って言うてるでしょ？どっか行つて」

「う……えっとお……あ、そうだ！元気なさそうって思ったから、その自販機で飲み物買ったの！静岡限定のレモンジュース！ここら辺はみかんだけじゃなくレモンも有名なの。東京から引越してきたなら、見たことないでしょ？あげる！」

「は？いらなすぎる……」

「そんなあ……私の120円が……」

少女は私の鋭い語調に怯みながらも、言葉を投げ掛ける。どうやら彼女は一人で入学式を抜ける私を心配して、ここまでついてきたらしい。

お節介にも程がある。感情的になっていた私は、つい棘のある物言いをしてしまう。

「あんた今、『東京から……』って言ったわね。ってことはあたしの事情、知ってるんでしょ。あんたもどうせあたしのこと、可哀想な奴って見下してるんだ。今だって、泣き顔を笑いにきたんでしょ？」

「そ、そんなじゃないよ！私はただ、——さんの顔色が悪いなって思つて……一人で行かせるのは心配だなんて……美味しいもの飲んだら、少しは元気になるかなって……」

苛立った。少女の幼く的外れな気遣いに。不躰な言葉を投げかけても立ち去ろうとしない能天気さ、無神経さに。

私はせぐり上げる怒りに堪えきれなくなり、気付けば顔を起こしていた。誰にもぶつけれなかった激情を、無関係な少女に押し付けていた。涙と鼻水でぐちゃぐちゃの顔を醜く歪め、心優しい少女を最大限に傷付ける言葉を意図的に選び、吼えていた。

「うるさい……うるつさいのよ！なに？なんなの？人の不幸につけ込んで、お優しい聖人気取り!?『こいつは皆に虐められてる可哀想な

奴だから、たすけて、あげろ。』って!？」

「ち、ちが……!私、そんなつもりじゃ」

「違わないわよ!善人面して見下さないで!やめて、あたしをそんな目で見ないで……!あたし、何にもしてないのに……!なんで、なんでこんな酷い所に……!」

耳の裏で激しい鼓動が脈打っている。

これは怒号なのか、悲鳴なのか。何を言っているのか、誰に言っているのか、自分でさえわからない。こんなに大声を出したのは、生まれて初めてだった。

息を切らし、言葉の勢いと共に荒々しく立ち上がって大股で距離を詰める。鮮やかな檸檬色のペットボトルを持った少女の頼りない両肩をわし掴み、校舎裏の黴の生えた壁に押し付ける。

そうして、聖人氣取りの少女が最も傷つくであろう言葉のナイフでとどめを刺した。

「あたし、あんたみたいなヒーロー気取り……大っ嫌い」

「……っ!」

私の視界はぼろぼろと零れるとめどない涙でぼやけ、少女がどんな表情をしていたかは見えなかった。しかし掴んだ肩が大きく震え、苦しげに呼吸を詰めたのだけはわかった。

数瞬の重苦しい沈黙。私が息を切らししゃくりあげる音だけが響く、日の差さない陰鬱な校舎裏。

互いに身じろぎも出来ない緊迫した空気を破ったのは、砂利を踏みしめるいくつかの足音と教師たちの話し声だった。

「こつちから女子生徒の大声が聞こえたぞ!」

「保健室に行くって言ったきりの、——さんでしようか?」

「まったく、入学式からサボりとは……!蛙の子は蛙だな。見つけたらクラス全員の前で叱り飛ばしてやる!」

「とにかく、見に行ってみましょう!」

私は自らの決定的な「終わり」を確信して脱力し、少女の肩を掴んでいた手を離した。

もうすぐここに、私を探しに教師たちが来てしまう。目の前の少女

は、私に暴力を振るわれた、暴言を吐かれたと涙ながらに事実を打ち明けるだろう。私はクラス全員の前に引きずり出され、「噂通りのいけ好かない女」として、涙と鼻水でぐちゃぐちゃの顔を晒すのだ。無関係の少女に散々な行いをしたのだから、当然の報いだ。

いよいよ私は町にも、家にも、学校にも居場所がなくなるのだろう。ふと、父の最期を思った。あれは安らかとはほど遠い、苦痛に満ちた死に顔だった。

あれを忘れられない私は、死を何より恐れていた。だが——もう、いいかなと思った。だって、これ以上生きていたって何になるだろうか。

「……つかれた」

仄暗い嘲笑も侮蔑の視線も、何もかも忘れられないまま生きていく。呪いのようなこの異能を抱えて、地を這いずるように生きていく。そんな人生に何の意味があるだろうか？

「……ごめん。ごめんね。いきなり怒鳴ってごめん。怖かったわよね。もう二度と会うことはないから、忘れて。さようなら」

セーラー服の袖で目を擦り、少女に背を向けて校門に向かう。

やるべきことは決まっていた。早くホームセンターに行き、なるべく丈夫な紐を買い、最善の行動をしなくては——。

「待って」

ふらふらと歩み去ろうとする私の手に、冷たく濡れた感触が触れた。突然の冷気に思わずびくりと跳ねて、反射的に右手を見下ろす。すると、そこには——。

「レモン、ジュース……？」

「あげる。持って」

「いや、は？何？いらな」

「——あげる！」

「あっはい、うん……？」

押し退けようと腕を突っ張るも、謎の圧力に負けてペットボトルを持たされる。

混乱しながら、私は初めて少女の顔を見つめた。ありがちな、ごく

平凡な容貌の十二歳だった。彼女は涙の筋が残る頬に幼いえくぼを刻み、歯を見せて笑った。

「よし、逃げよう！」

「わ、わっ……!!？」

「早く走らなきゃ、センサーに追い付かれちゃうよー！」

「ちよ、待って……！」

彼女はペットボトルを持たせたのと逆、私の左手をとり、何の脈絡もなく「走って！」と引つ張った。戸惑い目を白黒させる私の力なく震える掌を強く握り、駆け出した。

「離さないでね！」

「あ——」

私はただ、彼女に急ぎ立てられるように足を動かした。光の届かない校舎裏から一步、踏み出す。もうずっと、薄暗く黴臭いところに居たからだろうか。柔く全身を包む午前の光がやけに眩しく思え、両目を細めた。

手を引かれるまま足を交互に動かし、息を弾ませながら彼女の背を見つめた。春の乾いた強風に互いの髪を靡かせ、数十メートル先の校門を目指す。照りつける陽射しと桜吹雪に何度も瞬きを繰り返しながら、上擦った声音で問うた。

「——ねえ！あたしたちどこに行くの？」

「んー？えつとねー！」

彼女は走りながら半身を捻ってこちらを振り返った。少女は少年のように悪戯っぽく眉を吊り上げ、遠くの丘に見える黄色と橙の群れを指差した。

「あそこの、レモンとみかんの果樹園まで！あれね、うちの家族で育てるんだ！」

ああそうか、なるほど。妙にレモンを推してくると思ったら、そういうことか。

私は転げるように走りながら小さく吹き出し、片手のレモンジュースを改めて見下ろした。瑞々しい黄色の液体は、私の動きに合わせて生き生きと跳ね回っている。

私は自らの口角が緩んでいくのを自覚しながら、強風に掻き消されまいと声を張り上げた。

「ねえあんた、名前は？」

「私？私ほね、——っっていうんだ！」

開かれたままの門を軽やかに越え、のどかな田園風景を横目に私たちは駆けていく。

「忘れたくない」

——私には忘却という、人間に必要な機能が備わっていない。生まれつきそうだった。

謂れのない嘲笑も声を殺した噂話も何もかも、過去になることはない。濃い橙色のナイロンロープも、それをカゴに入れる父と母の笑顔も、血走った母の眼差しも、天井で揺れる絶望も。父の口角から零れるあぶくの数すら、思い返すまでもなく目前に上映し、一、二、三、と指折り数えて答えられる。

そんな呪われた異能を持つ存在が、「忘れたくない」と心から思えた。それがどれだけ得難い奇跡か。共に笑いあつた瞬間を何度再生し、指でなぞり愛おしんだか。どす黒い記憶を吹き飛ばし、日だまり色に塗り替えてくれたか。彼女は知らないだろう。

あの春の日に、私は本当に酷いことを言ってしまった。それなのに何故、手を引いてくれたのか。あまつさえ、一番の友になどなってくれたのか。怖くはなかったのだろうか。

知り合ってから一年後に恐る恐る問うと、彼女はきよとんと数度瞬きを繰り返したあと、事も無げに答えた。

「いきなりキレられたんだもん。怖かったし、掴まれた肩もめっちゃ痛かったよ。でも……」

「でもっ？」

「——のほうが、ずうつと痛そうな顔してたから。そんな顔さらたら『普通』、放っておけないじゃん。何とかしなきゃって思うのが『普通』じゃん？」

「……………」

言葉を失った。照れ笑いをしながら語る素朴な少女の普通は、決し

て普通ではない。それはどんな言葉でも言い表せない、どんなに沢山の宝石にも替えられない尊く美しいことなのだ、彼女は知りもしないのだ。

——高校入学の朝、地獄と化した電車の中で。冷たい凶器に何度も身体を貫かれながら、あたしは考えている。あの日孤独に死ぬはずだった自分は、あの子に一体何を返せるだろうか。

あたしのヒーローに、何を遺してやれるだろうか。

「振り返らないで。走ってよ、ヒカリ！あたしのヒーロー！」

別の世界に生まれ変わり、姿形も声も変わってしまった大好きな女の子。純朴さをかなぐり捨て、蛇のような眼差しをするようになってしまったあの子。

それでもあたしたちは今も、ずうっと一番の親友だ。あんたの為に、何だつてしてみせる。世界だって捻じ曲げてみせよう。理由なら既に、一生分もらっている。

今もずっと愛している。

【???
オリジン
・原点】

「いるんでしよう？出てきなさい」

十二人のヴィランは既に倒し、この一帯は無傷で制圧した。

本物のUSJの如く広すぎる敷地を歩き、『暴風・大雨ゾーン』唯一の出入口にたどり着いた私は、明滅する壊れかけの自販機に向けて仁王立ちし、語りかける。蛇の目を通して、その裏側に潜む誰かの存在は最初からわかっていた。

一、二、三秒。「そこに居るのはわかっているから出てきなさい」という警告に、相手は反応しない。ならば、実力行使あるのみ。私は髪か

ら一匹の蛇を伸ばし、自販機の裏から最後の、十三人目のヴィランを引き摺り出した。

「優しくしてあげようと思ったのに、残念。言うことを聞けない悪い子には躰が必要ね。縛り上げなさい、【ハンド・バイパー捕縛蛇】」

こんな死角に潜むとは、不意討ちを狙ったヴィランに違いない。そうたかを括って乱暴に扱い、宙に浮かせた少年。それは――。

「――青山くん!？」

「ひ、ヒトミーヌ……?」

まさかのクラスメイトに、私は慌てて黒蛇の拘束を解いた。自販機の裏から引き摺り出されたのは、怯えきった顔の青山優雅だった。

『蛇の第三の目』とも呼ばれるピット器官は、赤外線熱で生物の存在を感知できる。この目があれば、相手が物陰や室内に隠れていると関係なく、居場所は蛇を通して私の脳内と視覚に直接伝えられる。

(ファミチキください)(この蛇くん、脳内に直接チキンの映像を!?)みたいな奇妙な感覚に、はじめは戸惑ったものだ。

以前、出久に「熱反応だけじゃなく黒板の文字とかも見えてるの?」と興味津々で聞かれたが、それも問題ない。髪に咲いた蛇を通して、普通の両目と同じように見えている。そうでなければこんな目隠しをして生活してられない。すぐ刺されてすぐ死ぬ。もう死んだことあるけど。

視力測定をしたところ、蛇くんの視力は1.5あった。蛇くん二匹にじゃれつかれて苦笑する出久の表情も、よく見えていた。

しかし私の個性の扱いはまだ未熟で、〃そこに人間が隠れている〃ことは赤外線探知できても、対象の距離が遠ざかるほど脳に伝わるファミチキ映像がぼやけ、それが具体的に誰かまで見分けられない。

ファミチキなのか唐揚げクンなのか、或いはからあげ棒なのか。正確な輪郭を捉えられず、寝起きの視界のように曖昧な熱反応だけが見えている、といった状態だ。

記憶した体温反応、例えばミッドナイトや出久や勝己なら、300メートル圏内であれば大勢の中から識別できる。あとはオールマイ

トなど規格外の熱量の人間もわかる。それ以外だと、A組なら尾白、常闇、障子などの明らかな身体的特徴がある異形型だ。

つまり、仮に麗日と蛙吹が300メートル先に隣合って並んでいるとして、私にはどちらがどちらか判断できないということだ。遠い所に「女性が二人いる」ことだけが視えている。

……いや、もしかしたら耳郎と八百万の組み合わせなら、特徴で見分けられ——この話はやめようか。

とにかく、今の私は目と鼻の先のクラスメイトとヴィランの区別すらついていなかった。通常ならこの距離まで近付けばわかつたはずなのに、先程までの戦闘で気が昂り、明らかに冷静さを欠いていた。

林間学校では索敵の技能向上を課題に訓練した方がいいかもしれないと、胸中でため息をつく。

驚きに鳴る心臓を落ち着けながら、彼を見下ろした。

薄暗い『暴風・大雨ゾーン』でも更に暗い、壊れた自販機の裏側という死角。そんな場所に青山優雅は身を隠していた。

潜んでいる場所に不意を突こうとするヴィランかとはばかり思っていたので、つい威圧的な言葉を吐いてしまった。それどころか、一瞬とはいえ乱暴に蛇で拘束し、宙吊りにしてしまった。「躰が必要ね(暗黒微笑)」とか言ってしまった。死。

「あ、あのー……大丈夫？」

「ごめんなさい、立てるかしら？」と謝罪しつつ彼に手を伸ばすが、青山は出会い頭に私のあだ名を呟いたきり、無反応だった。尻餅をつき、西洋の甲冑のようなコスチュームが雨に打たれて金属音を立てても、彼は俯いたままだ。

あれ？と首を傾げる。青山だったら、ここぞとばかりに「野蛮☆」とか「育ちが悪い☆」とかボロクソに言うと思っていたのに。

彼に合わせてしゃがみこみ、「青山くん？」となるべく柔らかく声をかける。猫かぶり、大事。ミッドナイトの為にクラス信用、大事。すると彼はようやく、寒さで変色しきった唇を開いた。

「……僕は飛ばされてからずっと、ここに隠れていたんだ」

「そう。こんな寒くて暗いところに飛ばされて、お互い災難だったわ

ね。……それで？」

「姿は見えなかったけど……誰か他の生徒もここに飛ばされてきたのは、ドーム中央からの叫び声と戦う音でわかった。で、でも……！」
すぐ近くにヴィランがたくさんいると思うと、怖くて堪らなかった。足が竦んでここから動けなかった。死にたくなかった。ごめん、なさい。

「キミひとりに戦わせて、僕はずつとここに隠れていたんだ。卑怯だろう？」

青山は声を震わせながら、絞り出すように言う。なんとも悲壮で哀れみを誘う面持ちだ。だがその言葉は果たして真実か。

目隠し下の爬虫類の瞳孔を酷薄に細め、情を排して思考する。

13号先生が設計したこのUSJには六つのエリアがあり、それぞれ面積は本物のテーマパークさながらに広い。出入口付近のここからドーム中央、私たちが戦っていた場所までも、それなりの距離がある。

加えて、視界を遮るこの雨風だ。私とヴィランが交戦する音は風に乗って僅かに聞こえても、*“どんな惨劇が起こっていたのか”*は見られていないはずだ。

「怖くて動けなかった」というのも、ヒーロー志望とはいえ高校生になりたての子供なら妥当な理由だろう。

だが、もし青山が内通者だったら？「動けなかった」ではなく、「動かなかった」だったら？嘘をつき、ヴィランに怯える小心者の演技をして——平和の象徴殺しの片棒を担いでいるとしたら？

そういえば私は真つ先に黒霧に転移させられたが、ヴィランたちは生徒が現れる位置を知っていたかのように、輪になって待ち構えていた。黒霧はあらかじめ「このあたりに生徒を送ります」と伝えていたのだろう。

黒霧（強キャラに見えて割とドジるし学生にも油断を突かれがち）は、青山を敵から遠い安全圏——人目につきにくい、出入口付近の壊れた自販機裏に飛ばした。

単なる個性の制御ミス（ドジっ子）か？それとも意図的に、彼を人

目につかない場所に配置したのか？探知系個性がなければまず見つけられない物陰に隠して、「オールマイト殺し」が無事完遂されるまで待機させていた？

——内通者は、消す。ある程度まで原作通りに泳がせ、ミッドナイトを確実に救う道筋が整い次第、石にして砕いて海に撒く。

まだ見ぬ裏切り者は、A組に対して何食わぬ顔で友人を演じながらAFOに雄英側の情報を売り、ミッドナイトが死ぬ一因を作り出した。死んでも誰も悲しまない、卑怯者のクズだ。出久と勝己にだって、いつ牙を剥くかわからない。

私が読んだ三十二巻までの原作では誰が内通者か明かされないままだったが、早く炙りださなくてはならない。

遅くとも超常解放戦線との戦いまでには裏切り者を見つけなくては、私がギガントマキアたちの戦場に乱入してミッドナイトの死を回避できても、完全な救済とは言えない。

だって、彼女は誰より生徒思いで美しい英雄だ。彼女は戦いが続く限りいつだって最前線に立ち、誰かを守る為に命を使ってしまうだろう。

ヒーロー側の情報を流す裏切り者が一番近くにいるのでは、何度だって同じことの繰り返しだ。裏切り者によって作戦やヒーローの配置はことごとく丸裸にされ、また私の大切な人たちが傷付き、死んでいく。幼なじみたちとミッドナイトの生を脅かす者には、タルタロスという監獄すら生温い。完全にこの世から排除しなければ。

ある程度まで原作をなぞって雄英で力をつけた後、いずれはこの『メドゥーサ』を使い——全ての元凶AFOをも抹殺してみせる。運命とやらの横つ面を蹴り飛ばして、私は勝利する。

守って勝つ。たとえその過程でA組の誰かが犠牲になろうと、化物と蔑まれようと、愛する数人の人間を守り抜く。そんな使命感だけが、崩壊寸前の爆豪瞳巳の精神を辛うじて支えていた。

目の前の青山に視線を戻す。

彼がこの安全圏にいるのはたしかに怪しい。しかし裏切り者であ

ると決めつけるには、まだ根拠が弱い。黒霧（ドジっ子）の転移ミスの可能性を捨てきれない。

原作でもクラスでたった一人だけ居場所を明かさず、ヴィランと交戦していない様子だった青山は疑わしい。

だが彼は林間合宿で、ヴィラン連合の手からクラスメイトを救う描写があった。勝己と常闇が攫われそうになったとき、Mr. コンプレスに攻撃をして明確に妨害している。もし彼が内通者なら、ヴィラン連合にとって都合の悪い行動はとらなかったはずだ。

「とりあえず、グレーかな……」

私の思考をよそに、青山は言葉を続ける。誰かに向けてではない、独り言じみた呟きだった。

「ひ、悲鳴が何度も聞こえて……何が起こってるんだろう、クラスの誰かがやられてるんじゃないって……」

「……そう、それは怖かったわね。でももう心配ないわ。あたしは無事だから」

その悲鳴の元凶、ここにいます。安心してください、人生二回目転生者特有の強キヤラムーブで全員骨バッキバキのけちよんけちよんの再起不能にしました。そう言おうと思っただが、逆に怯えられそうなのでやめておいた。

恐怖の為か小刻みに震える体にも言葉にも、嘘はないように思える。だが、念の為油断はしないようにしておく。

脚を折り畳んで三角座りをしながら、彼はまた口を開いた。私を助けなかった事実が余程後ろめたいのか、一度も目を合わせない。

「君はその……大丈夫だったのかい？あの獣みたいな悲鳴は一体……もしかしてヴィランは全員君が倒し、」

「まさか！あたしこの前の演習でも砂藤くんに負けちゃったし、そんなに強くなかったでしょう？何人もの敵を無傷で倒すなんて、できっこないわ」

「え？じゃあどうやってここに……」

「ヴィランたちのあの声はそう……お楽しみ会！お楽しみ会のビンゴで一等のPS5が当たらなかったから、悔しがってただけよ。あたし

も飛び入り参加したけど、戦闘なんかしなかったわ。話せばわかる
ヴィランもいるものね」

「いや、でも」

「あたし何もしてないわ。あの人たちはビンゴのあと音楽の方向性の
違いで喧嘩しちやつて、同士討ちだったわ。あたし何もしてないわ」
「ええ……」と納得していない青山に、私は自らが潔白だと示すよう両
手を広げてみせた。

「ほら、その証拠にあたしには傷ひとつ付いてないでしょう？」

座り込んだままの青山を見下ろし、「ほら見て」と促す。彼は言葉に
つられるように恐る恐る顔を上げ、私の足元から肩まで目線を上に
持っていく——息を詰めた。

「……ヒトミーヌ、それ」
「え？」

青山は今日始めて、私を直視した。濡れた金髪の間から覗く青紫
の双眸を揺らし、唇を僅かに開いた。その焦点はある一箇所に着いて
いる。

何だろうと彼の視線をなぞると、私の左肩にたどり着く。雨を受け
て薄まってはいるが、戦闘服のフリルを汚すよう、三、四センチ程度
の赤い染みが滲んでいた。

私はどこも怪我をしていないので、うっかり跳ねてしまったヴィラ
ンの返り血で間違いない。出血毒を使った際にも付着したのだら
う。

髪の毛の二匹の蛇くんたちにも見えなかったのか、それぞれ「はわわ気
づかなかった」「ごめんなさいご主人様」と言わんばかりの表情であ
る。

ただの返り血と言えば済むのだが、先程はぐらかしてしまった手
前、なんともやりにくい。というか「大丈夫、返り血！私は無傷！天
下無双・爆豪瞳巳！」とか正直に言うのは、それはそれで瞳巳ちゃん
の今後のイメージ的によろしくない。

「あーこれは……あの……」

「……これ以上の言い訳はいいよ、ヒトミーヌ。もうわかったから」

目を泳がせて言い淀んでいると、青山くんは戦闘服の懐から、装飾が施された銀色のナイフを取り出した。

瞬間、私の頭から爪先まで、一気に緊張が走り抜ける。彼が切りかかってきてもいつでも迎撃できるよう、雨に濡れた黒蛇をゆらめかせる。

「そんな物騒なものを取り出してどうしたの？青山くん」
「……………」

青山は答えない。彼は思い詰めた面持ちで磨き抜かれたナイフを見つめると、煌びやかなマントを脱ぎ捨て——その布地に刃を立てた。

「…………君は優しい嘘をつくんだね」

「え？青山くん、何を、」

「っ、ビンゴ大会なんて嘘をついて！やっぱり戦ってたじゃないか！怪我までして、ひとりきりで戦ってたんじゃないか…………！」

青山は、返り血を怪我だと勘違いしている。私がヴィランに囲まれ、必死の思いで立ち向かってできた傷だと思っている。

彼はマントを無造作に切り裂き、包帯として私の左肩に巻いてくれた。動く度煌めくそれは彼のこだわりのデザインであり、お気に入りだと知っていた。

「…………ありがとう」

そして疑ってごめんささい、と誰にも聞こえないよう胸中で呟いた。

青山は体温を奪われて蒼白になった唇で言葉を紡ぐ。包帯を巻いた肩を見る両目からは、大雨のように涙が零れ落ちていた。

「ごめん…………！何も出来なくてごめん…………！君だって怖かっただろうに、痛かっただろうに…………！」

「何も出来なくなかないわ。青山くんの手当のお陰で、全然痛くなかったもの」

「でも、でも……………」

「実はさっきまで、昔の嫌なこと思い出してちよつと不安定になっていたの。そのせいで青山くんとヴィランの区別もつかなかったんだけ

ど……でもね、青山くんがたすけてくれたから。元気出てきたよ」

ほらね、元気！と彼の目の前でくるりと一回転し、濡れた蛇をうねうねと活発に動かして見せる。ミッドナイトの慈愛に満ちた表情を模倣し、微笑みかける。

それを見上げた青山は頬に大粒の涙を光らせたまま、生まれて初めて呼吸をするようにぽかんと口を開いた。

「咎めないのかい？普通は文句くらい言うだろう？卑怯者とか、ヒーロー失格とか……」

「いいえ、身を潜めたあなたの判断は正しいわ。向こうは頭数を揃えて、電波を妨害して、周到に準備した上であたしたちを殺しに来てるのよ？たった十五歳で入学したばかりの子供に、何ができるっていうの？おかしいのはむしろ——」

おかしいのは、堂々と立ち向かえるA組の面々だ。さすがにそんなことを口にするのは憚られて、黙りこんだ。

けれど、そうだろう。戦うしかない状況とはいえ、戦闘訓練もろくに受けていない子供が殺意をもった相手の前に飛び出していくなんて、命知らずすぎる。それは勇氣ではなく、無謀だ。

「自分が死ぬわけがない」という根拠のない自信や「主人公意識」は、振りかざされる凶器の前では何の意味も成さない。人の命は冗談みたいな軽く失われるし、ナイフで身体中を抉られる痛みは、きつと百年先も忘れられない。

不自然に言葉を切ってしまった私は、誤魔化すように明るく続けた。

「辛いこととばかり向き合っても仕方ないわ。良いほうに考えましょう？『たくさん訓練して次こそは戦おう☆』とか『隠れててよかった☆生きてママとパパに会える！』とか」

「……それ、まさか僕の真似のつもり？」

「そうよ、あたし物真似は得意なの。百点満点の完成度でしょう？」

「赤点☆」

青山はようやく、ぎこちなく目を細めて笑った。

そうして、私の背後に広がる『暴風・大雨ゾーン』を見上げた。一

瞬、暗いドーム内に雷鳴が走り、眩しいほどに私たちを照らした。

「そう、だね。生きていなくちゃね。僕はパパンとママンの助けになりたくて、ここに来たんだから」

「え？青山くんってご両親の為にヒーロー目指してるの？あたしと似てるわ」

「……僕は両親がしてくれたみたいに、人に優しくしたかったんだ」
体温を奪う雨ですっかり衰弱した青山の体に、私は切り裂かれたマントを巻き付ける。

原作だとあともう少しでオールマイトや先生方が到着し、USJを制圧するはず。寒くて心細いだろうが、それまではここに居たほうが安全だ。

とりあえず体温を維持するため、糖分補給を……と思い、青山にヴェリタースオリジナルを手渡した。彼の冷えきった手をとって金色の包みを贈ると、「こういう庶民的な飴は初めて食べるよ」と言ってくしゃりと表情を緩めた。

ついでに自分のぶんも一粒取り出し、口の中に入れる。

「メルシー☆」

「ひひへ、ほーいはひまひて（いいえ、どういたしまして）」

「食べ物を口にしながら喋っちゃダメってママんに教わらなかった？」

「ほほあつたわ！（教わったわ）」

「ダメだこれ☆」

普段は食べ物を口にしながら喋るなんて行儀の悪い事はしないが、彼を笑わせようと態とおどけて振る舞った。

「君は優しいね」

「……？普通でしよう？辛そうな人がいたら、誰だっpegこうするわ」
「普通、そういうのは『うわ面倒臭い☆誰か助けてやりなよ』って思っ
て目を逸らすと思うんだけど」

ふと、青山がもたれ掛かる壊れた自販機を見上げた。昔、今の状況と似たようなことがあった気がする。誰かが泣いていて———どうにかしなきゃと思って、けれど何をしていいかわからず、必死でなけ

なしの小銭でお気に入りのジュースを買って——何故か笑いながら手を繋いで、遠くの黄色い果樹園まで走って——お揃いのセーラー服がひらひら靡いて——あれ？でもその女の子って——、「誰だっけ？」

青山に背を向けて出入り口の扉に手をかけながら、首を傾げる。

まあ、思い出せないなら取るに足らない記憶なのだろう。もしくは、最初から存在しない夢か何かだ。

「ずっと一緒にいようね、サクラ」

「馬鹿ね。あたしたちにそんな約束必要ないでしょ、ヒカリ」

「~~~~♪」

鼻歌を歌いながら、『暴風・大雨ゾーン』を出る。クラスメイトの行動を監視すべく、原作でほぼ描かれなかった『火災ゾーン』を目指して駆ける。

雨は嫌いだった。爬虫類の特性を持つ体にとって、冷えは天敵だから。大好きなミッドナイトから貰った花のピン留めが、濡れてしまうから。

でも今は、不思議と気分がいい。

嬉しかった。お気に入りの衣装を引き裂いてまで私の怪我——実際に返り血だが——を心配してくれたことが、とても嬉しかった。

青山が裏切り者でない証拠はまだない。今回の転移位置は、やはり怪しい。だが少なくとも彼は、目の前の惨劇から目を逸らして私を見殺しにした一般人たちとは違う。

自らの手が血で汚れることも厭わず、煌びやかなマントで大袈裟なくらいぐるぐると肩を巻いてくれた。「僕のせいで」と大粒の涙をこぼしていた。

外に飛び出す前、青山は「危険だから君もここに隠れていなよ」と

びしよ濡れの全身を震わせて言った。けれど私は首を横に振った。

「お隣の水難ゾーンは大丈夫そうだから、あたしはその先の火災ゾーンを見に……いいえ、助けに行く。他の子たちもきつと戦ってるはずだから」

「……、気を付けて」

「メルシー！」

そうして私は曇天を抜け、薄暗いドームを出てUSJを走る。敷地内は本物の遊園地のように広く、今いる暴風・大雨ゾーンから“見える”のは隣の水難ゾーン全体、向かい側は噴水があるセントラル広場くらいだ。あとは倒壊、土砂ゾーンも半分くらい把握できた。それ以上は遠すぎて感知できない。

セントラル広場を見ると、相澤先生と脳無が戦闘中だった。

もうすぐ相澤先生が窮地に立たされ、それを救おうと出久が動く。しかしオールマイト用に調整された“ショック吸収”を持つ脳無に全く歯が立たず、絶体絶命——という場面でようやくオールマイトが登場し、轟、勝己ら生徒の活躍もあつて形勢逆転。

……というのが、USJ編の筋書きだ。今のところ、その通りに進んでいるらしい。私の今回の目的は、その裏でおかしな動きをする生徒、つまり内通者を探すことだ。地道な現場確認、ヨシ！

あの付近を通つては交戦中の相澤先生、死柄木たちの目に触れてしまうので、隣の水難ゾーンを大きく外側に迂回して火災ゾーンを目指そう。そこから反時計回りに山岳、土砂ゾーンと巡り、怪しい動きをする生徒がいなか監視しよう。

そう考え、水難ゾーンと火災ゾーンの中間に辿り着いたとき——
迫る気配に思わず足を止めた。

「は……？」

上空から流星の如き速度で、高温を発する橙色の熱反応が迫る。私の名を叫ぶ声がある。私は蛇越しの視界から見える鮮烈な色を呆然と見つめていた。

「なんで、ここに。原作と違う」

USJ編での勝己には、厄介なワープゲートの黒霧を押さえ、オー

ルマイトの窮地を救うという役割がある。

本編でのメインステージは、ずつと向こう側だ。本来なら彼がこんな所にいるなんて有り得ない。倒壊ゾーンを出て、切島と行動を共にしているはずだ。

勝己はこことは真逆のセントラル広場で黒霧、脳無、死柄木と対峙しなければならぬ。そうしなければ——最悪、オールマイトが本当に死んでしまう。

口田甲司の代わりに私というイレギュラーが存在しても、今のところ大きな筋書きは変わっていない。多少の脱線があっても、何故か物語は正しい方向に収束していく。いつそ不気味なくらいに。

だが、いくら原作の修正力ともいえる力が働いているとはいえ、それがどこまで有効なのかもわからない。

着地してこちらに駆け寄る勝己は、雨でずぶ濡れになった私の全身を、返り血が染み込んだ肩口のマントを見て瞠目した。何か言おうとして言葉を飲み込み、平常を装った嘲り声で罵倒した。

「モブヴィラン如きにやられるなんぞ、ざまあねーな雑魚蛇！雑魚は雑魚らしく、そこら辺の隅で飴でも舐めながら震えてろや。ついでに退学しろ」

勝己はブチ切れながら戦闘服のポケットからヴェリタースオリジナルを取り出し、節分の豆のように私の顔面目掛けて投げつけた。

普段なら「優己」wwwwww（※優しい勝己の意）と腹を抱えて笑うシユールな絵面も、今は笑えない。物語を大きく変えかねない想定外の行動に、何とか受け止めた飴玉を握り締めた。

「なんで……ここに……切島くんは……オールマイトはまだ来てない？でもここからセントラル広場までは距離が……今こんな所に居たら勝己が乱入するタイミングが……」

「あ？クソナードの真似ヤメロや。オイ、はよこつち来い。倒壊ゾーンの敵共は全員ブツ殺したから、あそこなら避難できんだろ」

ゆらりと伸ばされる勝己の手は、個性の酷使で負傷したのだろう。分厚い掌の皮が剥け、爆炎の影響か、痛々しく黒ずんでいる。

私は一歩後ずさり、伸ばされた傷だらけの手を拒否する。

「……勝己、カツキアヌ・リーブスくん？こんなところで何してるの？
今一番危険なのは、増援を呼んだり逃走経路にもなる『黒いモヤの男』
だわ。可愛いところ心配なのはわかるけど、冷静になりましょう
？あたしに構ってる場合じゃないわ。ほら、向こうに戻って相澤セン
セーたちを助けて——」

「うるっせえな指図すんなクソ蛇！あとあの露出ババアの話し方真似
すんじゃないって何度言ったらわかんないド低脳爬虫類！」

「あ？？露出ババア？それってあなたの感想ですよね？……って、今
そんなコントしてる場合じゃないよ！早く相澤センサーのどこ行っ
てよ。勝己がいなきやオールマ——皆が危ないんだって！あたし
が他のゾーンの子達に加勢して周って、勝己が先生たちを助ける。あ
たしじゃあのモヤみたいな人と手がいつぱいの人には勝てなそうだ
けど、あなたなら戦えるよね？ねえそれが最善策でしょ？頭がいい勝
己なら、それが一番だってわかるでしょう？」

「加勢？策？ハッ、馬鹿かてめエは！雑魚相手にそんな怪我までして
やがる雑魚以下のクソ雑魚が！頭の出来も俺以下の低脳が！余計な
口出して出しやばるんじゃないやねえ、足手まといだから引っ込んでろっ
ンだカスが！」

「何でいちいち噛み付くかな？あたしは一人でも戦えるくらい強く
なったし、大丈夫だよ！授業ならともかくこんな非常事態に言い争う
なんて、『爆豪勝己らしくない』よ……！なんで冷静になれないの
！」

筋書きから外れていく流れを修正しなくては、と気がかりが急ぐ。
ふざけている場合ではない。本当に早くしないと、勝己の参戦が間
に合わず出久やオールマイトが死ぬ可能性がある。

私を安全な場所に、と再び差し伸べられた手を振り払うと、勝己は
一瞬、酷く傷付いた被害者のような顔をした。

そして次の瞬間——そんな表情に狼狽えた私の胸倉を掴み、地面
に向けて引き摺り倒した。胸元の装飾を引きちぎらんばかりに掴ん
で馬乗りになり、耳の数ミリ横に拳を叩きつけてコンクリートを爆破
した。

強かに打ち付けた後頭部が、痺れるように鈍く痛む。巻き込まれた数本の黒髪が燃え落ち、焦げ臭いタンパク質の匂いが鼻を突く。

呆然と見上げたその瞳には、煮えたぎる怒りがごうごうと燃え盛っていた。

「てめエは——あの日を忘れたのかよ」

お前の姉であり、俺のいとこ二人が死んだ日を。全てを狂わせたあの夏の日を、忘れたのか。

怒りを押し殺し問う勝己に、熱を持った脳がずっと冷えていく。そうして理解した。彼は私の死を恐れて、ずっとあちこちを探していたのだ。これ以上家族を失うことに恐怖して、掌をぼろぼろにして飛び回っていた。

彼は家族を失う痛みを知っている。だから、安全な場所に避難しろとしつこく言う。「お前はヒーローに向いていない」「クソザコ個性」と毎日のように罵り、学校を辞めさせようとする。

「あいつらは死んだ。てめエがあいつらの夢を引き継いでヒーローになろうが、カンケーねえ。意味がねえ。死人の夢なんざ捨てて、普通に生きる。ずっと精神病院にいる父親と母親だってもう、」

「勝己。それ以上は怒るよ」

最近はもう、親友との思い出すら擦り切れてきている。元々頭と記憶力が悪い凡人の私は、彼女とどこでどんな風に出会ったかすら、思い出せない。元の世界の両親の顔も分からなくなってしまった。

そんな私に残った、たしかかな愛情の記憶。それが『爆豪家』の日々だ。

漫画の世界に順応する度に本当の家族を、元の世界での記憶を取り零していく私にとって、家族と呼べる存在はもう彼らしかいなかった。

過保護な父と、優しい母と、ヒーローを夢見る姉二人。何もかも失った私は、あの美しい日々とミッドナイトの情けに縋って生きるしかない。

「ちよーかつこいいヒーローになって、睡さんたちを救う」「家族への償いを考える」以外、生きる意味がない。生きていい理由がない。

「俺たちの家族はもう死んでんだ。終わってんだよ。いい加減現実見ろや！あの“石像”を戻す為にてめエの人生かけるとか、うちのババアもオヤジも誰も望んじやいねえんだよ……!!」

勝己は何も知らない。私が殺した人は姉たちと死刑囚のヴィランの三人だと思っている。あれは不幸な事故だったし、ヴィランはどうせ死刑囚だった。たった一度の過ちなものだから、まだやり直せると純粹に信じている。

だが、違うのだ。私が殺したのは——“五人”だ。親友、瞳巳ちゃん、死刑囚だったヴィラン、姉二人。

もうやり直せない。私の人生は初めから終わっている。勝己がこんなにも必死に救いたいと思う本物の爆豪瞳巳は、とっくの昔に死んでいる。今の私は、彼女の皮を被った偽物だ。瞳巳ちゃんの問題は、六歳の誕生日に私が異世界からやってきたことで消えてしまった。

瞳巳ちゃんの名を騙り、姉たちの夢を継ぎ、ミッドナイトの真似事をする。前の世界の幸福な記憶は日に日に薄れていく。

“私”の記憶がすべて抜け落ちたとして、目の前の少年の瞳に映る少女は、一体誰になるのだろうか。

「ねえ勝己、私が誰に見える？可愛くて虫も殺せない瞳巳ちゃんに見える？」

「……は？クソブタ蛇以外の誰に見えるってんだよ」

「そっかあ。でもね私、もう殆ど化物だと思ってる。だってさっきのヴィランたちに“何をしても”、何とも思わなかった。嘘について誰かになりきるのも、慣れてきちゃった」

「……」

『あれは事故だった』って睡さんも言うけどね。お姉ちゃんやあの水のヴィランへの罪悪感まで忘れてたら、私は今度こそ戻れない。本当に人を殺すだけの化物に落ちる。わかるかな？わかんないよね」

ホームビデオを何度も巻き戻して学習した瞳巳ちゃんの微笑で、人差し指を唇にあてる。

「あ、今の話はみんなにはひみつだよ！」

黒い目隠しの下の、家族でお揃いの黄金色を三日月に歪めた。

「大丈夫。どんなに落ちても勝己たちは絶対守るよ。私の言う通りにすれば、誰も死なずにすむからね。だから——逆らわないで」

「——お前、誰だ」

勝己は理解出来ないおぞましい生き物を見つけてしまったように瞠目した。揺らぐ炎の瞳が呆然と、私を見下ろしている。

【次回】

「イカレ飴女ブツ潰す」

「やってみろよ泣き虫ブツツン野郎」

「唐揚げ」

「脳無虐待やめろ」

「死柄木くんて休み時間誰とも喋らないで俯いてノートに変な落書きしてるのに脳無とドラクエの話になると急に早口になるね」